

# 龍門に登る

みーごれん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

そして彼らは、セカイに反旗を翻す。

藍染惣右介や、その周囲の人々が何を想い、志したかという話。本編に繋がる空想、考察が主です。藍染惣右介という名前のオリジナルになっっている節があるため、苦手な方はブラウザバックしてください。(2022/9/20 追記)

# 目次

鱗に照る木漏れ日のように

第一話	生き残ったモノ	1
第二話	目指すバシヨ	15
第三話	穏やかなヒビ	24
第四話	揺れるマナザシ	38
第五話	学び舎にノゾム	57
第六話	潜むカゲ	79
第七話	因果はメグル	94
来る変化は波紋のように		
第八話	交錯するセカイ・前編	111
第九話	交錯するセカイ・後編	

124

第十話 過(よぎ)るクロ・前編

138

第十一話	過るクロ・後編	161
第十二話	黒白のカイコウ	176
第十三話	動き出すハグルマ	198
第十四話	白きカゲ	210
第十五話	波及するドウヨウ	239
第十六話	嵐のマエに	252
響く軍靴は激流のように		
第十七話	騒乱のゼンジツ	275
第十八話	長いヨル・前編	303
第十九話	長いヨル・後編	320

第二十話	錯綜するオモワク	—	339
第二十一話	後悔のサキで	—	349
第二十二話	失ったミライ	—	367
第二十三話	加熱するセンカ	—	386
人物設定	—	—	405
第二十四話	歪むキンコウ	—	411
第二十五話	戦乱のシヨウシヤ	—	430

鱗に照る木漏れ日のように

第一話 生き残ったモノ

S I D E ・ D

「ここが今日からオツレの家ウチイ〜♪ お庭を散策、してみよかア〜♪」

俗に言う死覇装を身に纏い、いい大人が歌いながらスキップしている。短い黒髪は、彼自身が切ったのか適当に切られており、長さが揃っていない。目は少々厳ついが、鼻歌を歌っていることも相まってそれ程怖い雰囲気ではなく、どちらかというを見ていて和む空気が漂う。

因みに彼の様な装束を纏った、一般に死神と呼ばれる存在は瀟靈廷と呼ばれる靈王のお膝元で生活している。

だが彼は、死神であるにも関わらず流魂街——瀟靈廷をぐるりと取り囲んだ貧民街——に居を構えた。

理由は簡単だ。彼はここの出身だった。

「んっん〜♪ ふんふんツブファッ!」

………こけた。

足元に落ちていた何かに躓いて、彼は派手に転んだ。

「いつ痛エなく、も〜！ 何だよ？ 石？」

彼が視線を足元に向けると、立方体の木箱の様なモノが地面に埋まっていた。その角が丁度彼の足に引つ掛かったらしい。

そこでふと彼は眉を顰めた。

——地面に木箱が埋まつてるって、どう考えたっておかしいだろ。

思い立ったが吉日だ。彼は早速それを掘り返した。

それは三寸（約十cm）ほどの小さな木箱だった。一見するとただの箱。

だが、僅かに……ほんの僅かに靈力の様なモノを感じた。

（う〜ん……何だろう、これ？ 明らかに自然物じゃないよな。相談……した方がいいよな？）

彼はひとりで頷くと、引っ越し荷物の片付けもままならないままに、相談に乗ってくれそうな人物の所に駆け出した。

大声で何事か喚きながら駆け込んできた男を一瞥すると、その家の女主人は迷惑そうに舌打ちした。長く青い髪を高いところで括り、細めの目を一層鋭くして眉を顰める。

「で、ナニコレ？」

「ですから、庭で拾ったんですよ！ 埋まっていたのを不審に思って掘り出してみたら、何か靈力籠ってるし。余計なことする前にセンセのところに持ってきた方が良くないかなって思いました」

「フン、そうかね。靈力……確かに微かだが感じるね。お前の見立て通り自然物じゃない」

「はい。何だと思えますか」

フム、と彼女は顎に手を当てた。人差し指は立っており、頬を一定のリズムで叩いている。

「コノ感じ……古い封印の術のように感じられるね。掛けられたのも大分前のようにだよ。モウ殆ど消えかけてる。チョットお前の斬魄刀で斬ってごらんよ」

「ええっ?! 嫌ですよ! そんな得体の知れないモノ……大体センセ、"封印の術"って言いましたよね? そんな簡単に破って良いモンなんですか?! 中身とか、なんかヤバイモノが入ってるんじゃない?」

「贅力で破れるほど薄れた術も破れない内容物が危険なものかね」

「うぐ……オレの斬魄刀に何かあったらどうしてくれるんですか!」

「ドウもしないに決まってるだろう? どうせもう何十年も始解できてない浅打なんて、在って無いようなモンだろ」

「酷い! 流石にそれは酷過ぎるっ!」

結局、彼はその立方体を斬ることになった。

上段に構え、振り下ろす。

何があっても良いように、警戒は怠らない。

立方体に斬魄刀が当たる直前、見えない球体の様なモノに阻まれて刀が弾かれた。

「ホウ! あれ程靈力が薄れていても粘るかね! オイ、もうちよつとちゃんと斬るんだよ!」

「はいはい」

きちんと靈力を練ってもう一度。

こういうの苦手なんだけどなあ………

今度は割とあっさり斬れた、と思つた次の瞬間――

カッ

閃光



と共に漏れ出た新たな、しかしかなり揺れた霊圧。

二人が立方体のあつた方を見ると其処には……

「——！！」

一太刀負つた幼児が横たわっていた。

駆け寄つて、頬を叩く。

身体は揺らさぬように。

「おい、聞こえるか？　おい！」

反応がない。

頬を触つた感じではまだ温かつたから、死んではいない筈だ。

胸に耳を当てると、弱くはあるが鼓動が聞こえた。呼吸もしている。

「センセ！　まだ生きています！」

「一体ナニモノだろうね？　興味があるよ。死なせないさ」

「そんな言い方して……でもお願いします！　僕まだ回道とか使えないんで」

「鬼道サエ三十番台までしか使えないお前にソクナもの期待してないよ。下がつてろ」

「酷い……」

若干涙目になりながらも彼は退いた。

回道で生じた緑色の光を浴びて顔を擧めた幼児を見て、彼はセンスの反対側に回るとその手をそつと握つてやった。

「頑張れ！ 生きるんだ！」

現世で言う所の五歳にも満たないような子供に一体何があつたのか？

これは明らかに故意にこの子を斬ろうとした傷だ。

こんなことをしでかした下衆に会つたら、後悔してもしきれないくらいポコポコにしてやる、と彼は誓つた。

「父さま？ なにかあつたのですか？」

「——、急いでここから逃げるんだ！ 私は遅れてちゃんと合流する。母様と一緒に走りなさい」

「父さま？」

「男子なら、泣き言を言わず母様を護れるな？　ちゃんと逃げるんだぞ」  
おのこ

結局それが、父さまを見た最後だった。

「——、いいですか、これから行く先で名を名乗るよう言われたら、下の名前だけを答えるのです。決して姓を名乗ってははいけませんよ」

「なぜですか？」

「なんでもです。姓はここに捨てていきます」

母さま、何でそんなに悲しそうなのですか？

それ程お辛いなら、そんなことをなさらなければいいのに……

「とう、さま……か、あさま……」

頬を伝う暖かいものを感じて目を覚ました。

「ここは……何処だろうか？」

首を横に捻ると、見知らぬ男が寝台らしき台に突っ伏していた。

「んん……むにゃ?」

目が合った。

その男の目が、驚愕のために覚醒していくのが分かる。

「……お、おとおお起きたア! やった! 良かった! 良かった! まあお前さん、身体はまだ痛むか?」

からだ?

どこも痛くないし変なところもない。

首を横に振る。

「そうかそうか! お前、自分の名前は分かるか?」

母さまの顔が浮かんだ。

「……………惣右介」

「惣右介! いくい名前だ! 何でここにいいのかとか、元々何処にいたのかとかは分かるか?」

「あなたは、だれですか?」

「あ、しまった! ごめんごめん、オレの方が先に名乗らないといけなかったな! オレの名前は——」

彼はニカツとこちらに微笑んだ。

「竜太郎！ 藍染竜太郎だ！ しがない平死神をやつてる。よろしく、惣右介！」

「センセセンセセンセ〜！」

ドタドタ竜太郎が向かいの戸に駆け込もうとすると、それがいきなり開いて拳骨が真つ直ぐ彼の顔面に向かつてきた。

彼はそれを持ち前の運動神経で躲した。彼女が不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「フン、マタ躲した。それくらい聞こえているよ、バカ者」

「すみません！ 起きました！」

「——何だつて？！」

センセは珍しく急ぎ足で惣右介の病室に向かった。

「ヤイ、小僧！」

「惣右介ですよ。起きたばかりなんですから静かにしてあげてください」

「お前がソレを言うかね」

「返す言葉もない！ アハハ！ あ、惣右介、こちらはお前の傷の手当てをしてくださいつた涅マソラ先生クロツチ！ オレはセンセセンセつて呼んでる。ここいらの医者をやつてくださいつた

る凄い方だぞ！」

矢継ぎ早な竜太郎の言葉に惣右介は目を丸くしていたが、すぐに彼は両手をついて丁寧にお辞儀をした。

「この度は、怪我の治療をしていただいたとの事。大変有り難きことに存じます」

「フン、要らんよそんなもの。あの身なりから分かっていたことだが、お前やはり貴族の出身かね。どういう状況でああなったのか教えてくれるかね？」

「どういう……？」

首を傾げた惣右介を見て、センセは大人気もなく溜め息をついた。

「覚えていないのかね？ つまらん」

「とか言いつつあまり残念そうではありませんね」

「……言っただろう？ アレには相当古い術が長期間掛かっていた。中に入っていたモノに大なり小なり影響が有るのは当たり前だよ」

それより、とセンセは竜太郎を睨んだ。

「コノ小僧をどうするつもりかね？ ワタシは面倒ごとはゴメンだよ」

「ン……惣右介、家がどこかとも覚えていないのか？」

コクリ、と惣右介。

「じゃあ、色々上手く回るまではウチに置いてきますよ。親御さんが見つかったらお返

しする方向でいいんじゃないですか？」

「ナンデ他人事なんだね？ まあいい。誘拐犯に間違われても知らんよ？」

「ま、うまくやりますよ」

竜太郎が不敵に微笑んだ直後、地鳴りのような音が響いた。

音のした方——惣右介が座っている方を向くと、彼は顔を真っ赤にしてお腹を押さえていた。茹蛸の様な惣右介を見て、竜太郎が顔を綻ばせる。

「アハハハハハ！ 忘れてた！ そりゃあ腹減るよな！ お前って下手するとオレより靈力有るみたいだし。ちょっと待ってる、何か買ってくるよ」

竜太郎が部屋を出ると同時にセンチも部屋を出た。

「アノ傷……」

センチが呟いた。

真剣そのものだ。

「アレは確かに、斬魄刀で斬られた傷だった。つまり、アノ小僧を斬ったのは死神って事だね」

「……！」

「クレグレモ気を付けることだよ。アンナ小僧を殺そうとするなんて、只事じゃない。  
真面マトモじゃないね」

竜太郎の瞳に殺気が宿った。あんなに小さな子供に刃を向ける——向けられる者が自分の同族にいたという事実には怒りを隠せない。

「バカ者、落ち着かないか。お前程度の霊圧でも、普通の魂魄には圧に感じるんだよ。コノ辺りで暮らすならソウイウコトも考えろ」

「——ハイ、センセ」

そう言いつつ微塵も小さくならない竜太郎の霊圧を感じて、センセは彼に拳骨をかました。

見知らぬ部屋に一人残された惣右介は、そわそわと周りを見渡した。

変な二オイがする。寝台は粗末だし、部屋も狭くて貧相だ。

前暮らしていた家は、この何十倍もあつた。あそこは一体何処にあつたんだろう？

「父さま、母さま、何処にいらつしやるのですか……う？」

うっかり涙が出そうになるのを、彼は健気に堪えた。

『男子たるもの、簡単に涙を流してはならん！ 分かつたな？』

父さまの教えだ。

こんなの、寂しくなんかない。



俯いていたら、急に抱きしめられる感覚がした。

「な……」

驚いて顔を上げると、頬にじよりツとした感触。鬚だろうか？

きつく、けれど決して苦しくないように、竜太郎が惣右介の体を包んでいた。

「こんなに震えて……一人にしてごめんな。いきなり独りぼっちじゃあ不安だよな。も

う大丈夫だ、惣右介」

「そんな……ことは、あり、ませ……う、ううっ……うわああん！」

ああ、父さま、ごめんなさい。

どうしても、涙が止まらないのです。

どうしようもなく、溢れてしまうのです——

「心配すんな。お前がとーちゃんかーちゃんに会えるまで、オレと一緒に居てやるから  
っ」

竜太郎は「泣くな」とは言わなかった。

込み上げてきたこの気持ちを知っているほど、惣右介はまだ大人ではなかった。

余りに幼く、余りに無力な少年だった。

「今日からお前が本当の家に帰るまで、お前の名前は——」

惣右介の感情の高ぶりが収まってきたころ、竜太郎はそつと言った。

「——藍染惣右介だ。苗字はオレとお揃いだぞ。オレのことはにーちゃんみたいに思っ  
てくれていい。言いたいことは何でも言えよ?」

「ま、平隊員の死神に出来ることってそんなにねえけど!」と言つて竜太郎は豪快に  
笑つた。

その時、竜太郎が食事にと何故か持つて帰つてきて食べさせてくれた豆腐の味に勝る  
ものを、惣右介はこの先知らない。

ええ、ええ、もうお気付きでしょう。

これは、全ての始まりの物語。

鯉たちが、龍門を目指すまでの物語——

## 第二話 目指すバシヨ

## SIDE・D

食事を終えて惣右介が人心地着いたのを見て、竜太郎はセンセにニヤリと笑みを飛ばした。彼女の方はと言うと知らん顔ですましている。

——十五分前

「……デ、何で豆腐なんだね？」

「え、美味しいでしょう、豆腐。腹に溜まるし、胃もびつくりしない。何より美味しい！」  
「お前の好物ツテだけだろう。モット何か、甘味でも買って行っておやりよ。ガキはそういうの好きだろう」

「経験則ですか？ 彼はそういうの好きって印象ないですけど」

「チツ……アレは私にもよく分からんよ」

センセには息子が一人いる。今は霊術院に通っていて、そのまま死神になるらしい。

ちよつと変わった子供だとは思う。でもそれはセンセにも言えることで、実験大好き、解剖大好きの似た者親子だ。だからてつきり彼はセンセを継いで医者になるか、は

たまた研究者になるかと思つていたのに、靈術院に行きたいと言ひ出した時には意外だった。

まあその理由——死神の方がより膨大で詳細な様々な資料を閲覧できる——を聞いて納得したが。

「マユリ君、元気でやつてますかねえ？」

「アレは自分に興味があること以外には興味が全くない。それでも今まで三年何とかなつてるんだ、大丈夫つて事なんだろうよ」

「いやいや、センセみたいにご飯抜いてるかもなあ……………」

「二日ほど抜いたところで死にはしないんだ。お前にトヤカク言われる筋合いないね」

「言いましたね？ そんな食事に無頓着なヒトに惣右介の食事に関するあれこれを言われる筋合いありません！」

「フン、勝手にしたまえ。泣いてしまつても知らんよ」

——そして今に至る。

惣右介は豆腐を見て一瞬きよんとしていたが、すぐに一心不乱に食べ始めた。

あつという間に食べ終わると、「ごちそうさまでした」と丁寧に頭を下げた。

竜太郎の笑みは、「ほら、泣かなかつたでしょう？ 大正解だったじゃないですか」というものだったのだが、それは惣右介の知るところではない。

“大”正解かは兎も角、惣右介が落ち着いたのは事実だった。

「サテ、小僧。お前今、どの程度の事は分かっているんだね？」

口調はきついが、センセなりに優しく言っているつもりなのだろう。頑張って笑顔を作ろうとして表情が引き攣っている。

「ええと……その、自分の名前とかは分かるんですけど、あとは分かりません……ごめんなさい……」

センセの表情を見て硬直しながら惣右介は言った。センセが詰問しているように見えたのだろう。こわごわと惣右介は答えた。でも、と彼は続けた。

「でも、ここが『流魂街』だって事は分かります。それも、結構治安がいいですよね？」

「ホウ、どうしてそう思うんだね？」

「だって、前暮らしていた家よりもずっとここは貧相ですから。私が貴族かどうかとかは分かりませんが、あそこに比べたら、此処はそういう所なのかなって思ってたんです。それにマソラさん、私のことを見て『貴族か』とお聞きになったでしょう？ 態々訊かれたって事はここにそういう人がいないという事で、それならここは流魂街なのかなと思いました。それに竜太郎さん、食べ物や物をすぐに手に入れて戻っていらつしやいました。ここを出て行かれるとき『何か買ってくる』と仰っていたでしょう？ こんなに短い時間で帰って来られるところに食べ物や物を売っているとこがあるっていうことは、

それなりに安定したところなのかな、と思つたんです」

それを聞いてセンセは目を細めた。

「フム、お前、年のわりに頭が良いんだね。ココが貧相だと言つたことについては目を瞑つてやろう。ダガ、貴族の住まい——瀨霊廷には死神だつてゐる。貴族か死神かつて質問だつたかもしれないがどうかね？ 加えて、暮らしていないというだけで貴族に使える侍従だつて瀨霊廷にはゐる。モット言えば、立地だつてここが偶々豆腐屋のすぐ近くだつたという事は考えないのかね？」

あ、と惣右介は目を見開いた。

「確かに、そういう事もありますね……ごめんなさい」

「惣右介、謝る必要ないぞ？ センセは別に怒つてゐるわけじゃない。子供に対する接し方が分からないだけだ。センセも、意地悪しないでください」

「ソナモノしてないよ。小僧、思考は甘いがお前の予想は合つてゐるよ。ここは西流魂街五地区、〈巫部〉<sup>カシナキ</sup>。流魂街の中でも最上位に位置するバシヨだね。付いておいで」

そう言うのとセンセはサツサと部屋を出た。惣右介が慌ててそれに付いて行く。

竜太郎もそれに続いた。

「見えるかね？」

器用に屋根の上に乗つたセンセと惣右介が、瀨霊廷の方を向いた。ここからだ、ギ

リギリその中央にある懺罪宮の端が見えるくらいだろう。だが、惣右介の身長ではどうだか……

「いいえ、見えません……」

「……オイ、ボーつとしてないで上がってこないか！ 小僧を肩車してやるんだよ」

「オレですか？ もう、センセがやればいいのに……」

竜太郎がぼやくと、鋭い視線が刺さった。口を閉じ、彼もまた屋根に上る。成人男性も乗っちゃって、この屋根は保つのだろうか。怖すぎる。

惣右介を肩車してやると、どうやらもう少し見えたらしい。

「わあっ！」

「見えたヨウだね。あそこが瀟霊廷、貴族と死神という選ばれた魂魄だけが住まう場所だよ。通行証なしに我々はいれない」

「そう……なんですか……竜太郎さんも？」

「オレは入れる。一応死神だからな」

竜太郎が答えると、センセに拳骨で殴られた。

痛い！ というか危なっ！！ というような文句を言おうとしてセンセを見ると、センセの顔は激おこだった。

その意味はすぐに分かった。

「じゃあ、私も中に連れて行って下さい！」

惣右介の、あまりにも嬉しそうなその声に胸が痛む。

『——暫くは様子を見た方が良い』

センセが言っていた。

『小僧を取り巻く状況が分からないままに一緒に瀟靈廷などに親探しに行ってみろ、下手をするとお前諸共消されるよ』

必死に自身を瀟靈廷に連れて行くよう訴える惣右介を見て竜太郎はセンセに助けを求めたが、我関せずといった風にそっぽを向かれた。センセのいじわる……いや、自業自得だけでも。

「……………駄目だ」

「何故ですか?! あそこに父さまたちがいらつしやるかもしれないのです! 探しに行きたいですー!」

「許可が下りているのがオレだけだからだ。弟代わりだからと言って許可が下りるわけじゃない」

本当かと言われるとそうだとは言えない。暮らすことは出来ないにしても、一日だけ流魂街の家族を招く、というようなことは一部の死神なら可能ではあった。家族同然の、となると微妙なところだし、竜太郎はそもそも許可を降ろしてもらえないような立場



ではなかったから、嘘ではないのだが。

しかしそんなことは言い訳に過ぎないと、竜太郎だってわかっている。

惣右介が苦し気に顔を歪めたのが、その顔を見なくても分かった。

声にならない嗚咽が頭上から聞こえる。

「では、どう探せばいいのですか……」

震える声に応えたのはセンセだった。

「死神にでもナレばいい」

「……………え？」「センセ!!」

「小僧には多少なりとも霊力がある。霊術院に通つて、死神になって、堂々と門扉をくぐるがいいよ。マダ大分先になるだろうがね」

食つて掛かろうとした竜太郎をセンセは目で制した。

「どうかね？ 知らねばならぬことはコレが教えるだろうよ」

「ちよ、勉強は無理ですつて！ オレは身体能力だけが取り柄なんですから！ 戦闘し

か教えられませんから！」

「チツ。興が乗つたら座学は教えてやってもいい」

「「本当ですか!!」」

「嘘を言うもんかね。興が乗つたらだよ。小僧は存外バカではないようだからね」

一転して嬉しそうになった惣右介は、大きな声で言った。

「はい！ マソラさん、竜太郎さん、お願いします！」

頭を下げた惣右介のせいで肩車していた竜太郎が体勢を崩し、屋根の上から落ちかけたのは良い思い出だ。

疲れが出たのか眠ってしまった惣右介を背負いながら、竜太郎は厳しい眼光でセンチに向き直った。

「センチ、どういうおつもりですか？ あそこは——漣霊廷は、惣右介を殺そうとした奴がいるかもしれない、というか十中八九いる所なんですよ？」

それを聞いて彼女はやれやれと首を横に振った。

「バカ者、霊圧を抑えろと言っているだろう？ まったく……ジャアお前はずっと小僧をそのままにしておくつもりかね？」

「それは……「ナラ」——！」

「いざれ通らねばならん道だよ。スグニ死神になるわけじゃないんだ。それまでに、あの程度の事は分かるだろうよ。少なくとも、成長した本人が歩いていても大丈夫か否かクライはね」

「センセの表情も暗い。まだ何も分からないのだから、当然と言えば当然だ。この懸念は惣右介の前で晒さぬようにしましょう、と二人はそれぞれ思った。」

## 第三話 穏やかなヒビ

S I D E ・ D

ビツ

風切り音で惣右介は目を覚ました。

与えられた寝台の側にある窓からのぞくと、着物を上半身脱いで刀を振るっている竜太郎がいた。

暫くすると竜太郎も惣右介に気付いてそれを止めると、スマンスマンと部屋に戻って来た。彼は笑うと目元が下がる。黙っていると厳つい印象だが、笑顔はとても柔らかい。ヒトを見掛けで判断してはいけないのだ。

「起こしちゃったか？ ごめんな」

「いいえ！ そんな事ありません！」

「アハハ！ 敬語とか要らないぞ？ オレはお前の兄貴分になったんだからな。井戸の場所とかいろいろ教えてやる。付いておいで」

小さな家だったからあつという間に回り終えると、朝食を出してもらった。

白米、豆腐の味噌汁、焼き魚。

質素だが、小さな惣右介には十分な量だった。

それに、彼にとって暖かいものを食べるのは初めてのことで新鮮だった。

以前は毒見などで直ぐには食べさせてもらえなかったから……

「ごちそうさまでした」

「お粗末様でした。美味そうに食ってくれるとこっちも嬉しいよ。あんまちゃんとした食事出せね〜けど我慢してな？」

「ちゃんとしてないなんてことないです！ 美味しかったです！」

「アハハ！ ありがと、惣右介」

竜太郎が大きな手で惣右介の頭を「ごしごし」と撫でる。

父さまはもう少し手が小さくて、撫でるときはこんなに力が強くなかった。

けれど、竜太郎の撫で方は嫌じゃなかった。彼のもまた、優しく惣右介の心に染み入ったから……

「さてと、何から始めるのが良いのかなあ……」

竜太郎が首を捻る。

惣右介に戦闘を教える件について、彼はあまり深く考えていなかったらしい。

「よし、まあ、まずはどの程度どんなことが出来るのかを見せてもらおうとするかな。惣右

介、腕立て伏せやってみてくれ」

「腕立て伏せ?」

「なんだろう、それ? 腕を伸ばして寝ころべばいいのかな。それで何か分かるんだろうか?」

今度は惣右介が首を捻ると、竜太郎の目が見開かれた。

「腕立て伏せを知らない、だと……!! なんてことだ……」

余りの反応に惣右介は不安になった。

何か不味い事を言ってしまっただろうか? 驚くような事を言ってしまったのか?

「(ズ)、(ズ)めんなさい……」

「いや、大丈夫だ。そうだった、お前は貴族出身だったな。知らないのは当たり前だ。腕立て伏せってのはこうやる鍛錬のことだ」

両手を地面について、肘を曲げることを繰り返す。

それだけのことだが、身体を真っ直ぐに保ったり、上手く腕の筋肉を使うというのは難しい。

惣右介はすぐにへばってしまった。

だが、竜太郎は満足げだ。

「凄いぞ、惣右介! お前くらいの年頃でそこまで出来る奴はいないんじゃないか?」

やっぱり基本的な体の強度が違うのかな」

何度も頷く彼を見て、惣右介は照れた。こんなに真つ直ぐ自分の目を見て、素直に話をしてくれるのは両親くらいなものだったから、不慣れなソレに心が躍る。

その後もいくつか体力試しを行った。

どれも竜太郎に褒められたから、本当はお世辞なんじゃないかとも思ったが、どうやら違つたらしい。竜太郎がそんなことを言えるほど器用な性格じゃないのも何となくわかつていたことであるし。

「最初の内は体力づくりが主になるだろうが、割と早いうちに剣術や白打も教えられるかもしれないな」

そう言つて彼は笑つた。

マソラの家までの地図を惣右介に握らせると、程なく彼は出仕して行つた。

惣右介がマソラの家に着くと、彼女は大きく溜め息をついた。

「ココは託児所じゃ無いんだけどね……」

邪魔をしないなら、とマソラは惣右介を置いてくれた。

惣右介の方を見ることなく何やら手に持った瓶を振ったり、中に何かを入れたりして弄っている。黙ってそれを見ていたら、マソラの方が沈黙に耐えかねたのか手はそのままで口だけを惣右介の為に動かしてくれた。

「ヤツは何て言ってたんだね？」

「ええと、他の同い年の子供より膂力が有ると言われました」

「ホウ……アノ運動バカが言うのなら間違いないだろうね。大したモノだよ」

「う、運動バカって……」

オロオロする惣右介を無視してマソラは続けた。

「体力ナシテあるに越したことはないよ。アレはあり過ぎて喧しいがね。私には無くて困ったモノだよ」

そう言いながらマソラがその場に崩れ落ちる様に倒れた。華奢な体が、思っていたよりも軽い音を立てて地面に向かった。

——なんて冷静に分析できるほど、惣右介は冷めていない。

「……………え？ マソラさん!!」

「——」

「え、何ですか！ どうしたんですか!!」

駆け寄ると、悔しそうにマソラが眉を顰めた。



「小僧、棚の上の瓶は割れていないね？」

「割れてませんけど……」

「ナラ、いい……」

がつくりと彼女の力が抜けた。

「マソラさん、マソラさん!!」

「……………ぐう」

「……………へ？」

途端にマソラが大きくいびきを書き始めた。目の下に大きなクマが有るのが分かる。どうやら寝不足だっただけらしいと分かかって惣右介は胸を撫で下ろした。

マソラに近くにあった毛布を掛け、一層暇になってそつと部屋を見回した。初めて来たときよりも、今の方がずつと色々なものが置いてあるのが分かる。自覚している以上にあの時は呆つとしていたらしい。

元の位置から動かさないように見て回っていると、奥の方に刀で斬られたような形で壊れた木箱が置いてあった。見た事の無い箱であるはずなのに、何処か懐かしい感じがした。

そつと近づいてみると、惣右介が惹かれたのはそれが発する何かだと分かった。涙が出そうになるほど懐かしいこの感じは、紛れもなく――

「勝手に歩きマワルんじゃないよ」

「!!」

振り返ると、重そうな眼を不機嫌そうに開いたマソラが立っていた。

「危険な薬品などもアルんだから、許可なく触らないことだね」

貴重なものがあるからとかいう理由よりも惣右介を心配して出てきたその言葉に、怒られているのに彼は少し嬉しかった。紅くなった頬を見られぬように僅かに顔を伏せて、惣右介はその木箱を指差した。

「すみません……あの、この箱は触っても良いものですか？」

「……………何でだね？」

「とても懐かしい雰囲気です。——母さまといるときの様な感じがするんです」

「ホウ、小僧にはそれほど微弱な霊圧が誰のモノか分かるのかね」

興味深そうにマソラが腕を組んだ。聞き慣れない言葉に惣右介も反応した。

「“れいあつ”って何ですか？」

「霊圧とは、私や小僧のヨウに霊的濃度の高い魂魄が発する圧のことだね。ここらに住む魂魄より私の方が存在感の様なモノが大きいだろう？ それが霊圧と言うヤツだよ」

「成程！ だから私たちはご飯を食べなければならないのですね」

「ソウイウコトだね。霊圧も、ソレに準ずる力たる霊力も無尽蔵じゃない。面倒ではあるが、食事も休養もとらねばナランわけだよ」

「あはは！ マソラさん、分かっていらつしやるのに寝不足だったんですか？ きちんと休んでくださいね」

「ウルサイよ」

ぎろりと惣右介を睨む瞳に力が籠る。だがそれに微かに笑みが含まれているらしかったのを感じた惣右介は微笑んだ。

その様子を見てマソラはため息を吐くと、

「付いておいで、小僧。今日の座学はソウいう基本中の基本からだよ」

と言ってサツサと引つ込んでいった。置いていかれまいと惣右介も小走りにその部屋を出た。

小僧、もとい惣右介が躊躇うことなく自分の方に付いてきたのを感じてマソラはホッと一息ついた。

あの木箱から上手い事注意を逸らせたらしい。

アレはまだ彼には言わない方が良いだろう。

アノ中に自分がいたという事実には彼がどう思うか分からない。

加えて木箱自体もどういふものかまだ分かっていないのだ。下手に接触させる利点はない。

(マ、ソレももうじき分かることだがね。霊圧の痕跡を分析をするだけで数日かかるとは思わなかったよ)

調べ甲斐のある対象がある喜びにマソラが口の端を歪める様に笑ったのは、惣右介の位置からは見えていない。

マソラの家の戸が荒々しく開く。

戸を開いた竜太郎は息を切らしており、仕事が終わるなり大急ぎで帰ってきたことが見て取れた。見ては取れたが、マソラの眉は跳ね上がる。

「センセ、惣右介をお迎えに上がりま、した……あれ？」

(バカ、静かにしたまえよ！ さつき眠ったところなんだからね)

(す、すみません……………)

長椅子に横になって安らかに寝息を立てている惣右介には毛布が掛けられていた。それを見て竜太郎がくすりと笑う。やはりセンセは優しい。

竜太郎の様子を見てセンセは彼を睨んできたが、気にしない。

「ソレデ、ドウだったね」

「……言われた通り、直近ではなく二十年前、更にはそれ以前の資料を三十年分ほど遡りました。流石にそれ以上は時間的にきつくてまだなんですけど……しかし貴族に関する未解決の失踪事件どころか『惣右介』という名さえ出ではきませんでした」

「フム、成程」

センセはゆつくりとした足取りで奥にある小瓶を取つてくると、それを竜太郎に見せた。

「お前、コレが何色に見えるかね？」

「青……いえ、藍色です」

「コレの原液は赤色なのだよ」

「そうなんですか。綺麗な色ですね」

竜太郎が小瓶を覗き込みながら言うと、センセはわざとらしく顔を顰めた。

「……………ソウだった。お前は頭が足りないんだったね。小僧と話した後だとイライラするよ」

「酷……」

……ん？

センセ今、暗に惣右介を褒めた？

意地っ張りで素直じゃないセンセは他人の事を褒めない。自分のことだって、自嘲することもないが評価しているところも見たことが無いのだ。だから遠回しではあるが、竜太郎を貶しただけに聞こえるその言葉……あれで反対に惣右介の頭が切れるとセンセが評価していることが分かった。そういえば、会ってすぐにも褒めてたような気がする。意外な事実に驚いていると、センセは面倒くさそうに口を動かした。

「コレは試薬ナノだよ。霊圧の質によって色が変化する時間が変わる。質つてのはこの場合、濃度やら量やらじゃないよ。元の霊圧からドレダケ変質したか、つまり霊圧の劣化に反応するんだね」

「はあ……？」

「そして今回、この試薬と小僧の封じられていた木箱の欠片を反応させた」

「!!」

竜太郎が興奮して地面を踏みしめ直した直後、惣右介が寝返りを打った。思わず二人は硬直する。当の惣右介はというと、何事もなかったかのように再び寝息を立て始めた。二人はホッと息を吐くと、身体を弛緩させる。同時にセンセが声を抑えつつ睨み殺

しそんな勢いで竜太郎を見た。

「……………フウ、小僧が起きたらどうするんだね！ 静かにしていたまえよ！」

「スミマセン！」

「マツタク……………それで、今回の反応速度だが——異常に遅いのだよ」

深刻そうな顔のマソラとは対照的に、竜太郎は呑気なままだった。

だってよく分かんないんだもん。

「この薬は、反応した霊圧が過去のモノであればあるほど反応速度が遅い。ツマリ、バカでも分かる様に言えば、この木箱に術が施されたのは予想以上に前だったということだよ」

「具体的にはどのくらいですか？」

「そうだね……………実はコレはまだ反応過程なのだよ。ココから更に黒くなることを考えれば、千年は優に超えるだろうね」

「……………は？」

「尤もな反応だね。私も試薬の方がオカシクなったのかと思つたよ。仮説は二つ。千年以上前の術の掛かった木箱に小僧が取り込まれる形で封印に掛かった、つまり小僧はそれ以降の人物である。もしくは、小僧は千年以上前の人物で、直接封じられた。どちらにせよ興味深いね」

顎に手を当てて人差し指で頬を叩くマソラのクセが出ています。何か考え事をしていてる時のものだ。愉快そうに彼女は笑っているが、竜太郎にはもう一杯一杯だった。頭が破裂しそうだ。

せんねん？

専念、先年——え、千年？

いやいやいや……

「そしてさらに興味深いことにね」

マソラの視線が惣右介に流れた。

「アノ木箱からは小僧の母親の霊圧を感じたそうだよ」

「——それって……」

「ああ。アレに小僧を封じたのは、十中八九その母親だよ」

「!!」

千年以上も続く術を掛けられるほどの腕を持った者などそうそう居ない。それこそ、鬼道やそれに付随する術のスペシャリストたちが集う鬼道衆の長、大鬼道長であつても出来るかどうか……いや、詳しいことは知らないが。

「……………小僧は目を覚ました時、姓を名乗らなかつたのだったね」

「はい。惣右介だと、それだけでした」



「フム。口止めでもされてイタのかね？ 少なくとも、一介の死神や貴族でスラ出来るような規模と精度の術じゃない。ソレナリの姓を持っていてもおかしくない家の出のハズなのだがね」

——だが二人とも、直接それを惣右介に訊こうとは思わなかった。何があつたのか分からぬ今、それを聞くことが彼を傷つけるかもしれないからだ。この聡明な少年は、尋ねればもしかしたら話してくれるかもしれない。だが、その心に傷をつけてまで急ぐことではなかった。

「時間はアル。急いては事を仕損じるトモ言うし、焦らず行くしかないね」  
そつと言つた彼女に、竜太郎は首肯した。

## 第四話 揺れるマナザシ

S I D E ・ D

刀が振り上げられる。

自分よりずっと大きな相手の斬撃を躲せるほど、彼に速さはなかった。

この黒い衣装は――

ザンツ……

熱 痛 苦 辛

目の前の赤色が増えるほど、その四つが大きくなっていく。母さまが駆けてくる。自分を斬った男は、母さまを止めようとはしなかった。

震える手で抱えられる。冷たく、透けるように白い手が彼の頬をなぞった。

「惣右介ツ!! しつかりなさい!!」

「諦めんか。可哀相にのう、しかしこれも掟じゃ」

「嫌です! 惣右介、あなたは生きるのです!!」

かあ、さ、ま……? ?

「必ず、生き延びるのですよ。生きていてくれれば、それだけで私たちの喜びなのだから」

「まさか、お主……止めんか！ それは禁術！ そんな事をすればお主まで手に掛けねばならんようになる!!」

「構うものですか。——〈時間停止〉」

そこから先の記憶は、墨を零したように真っ黒に、途絶えてしまっている。

「——、そ——け！ おいつ！ しっかりしろ、惣右介！」

鬼気迫る顔、という奴だ。竜太郎がそういう顔で自分を見降ろしていた。肩を掴んで揺すっていたのか、ちよつと右肩のあたりが痛い。

「竜たろ、さん……………」

「どうした？ ひどくうなされていたぞ？」

「昔の、夢を見て…………」

竜太郎はひどく驚いた風だった。何にどう驚いたのかは分からなかったが……

段々冴えてきた意識を裂いて、惣右介は頬のあたりに纏まった髪を摘まん。汗をか

いていたのだろう。髪が顔に張り付いて気持ち悪い。

起き上がろうとすると、竜太郎が背を押して補助してくれた。礼を言おうとすると、その前に湯呑みを差し出された。

「ほら、さつき汲んできた井戸水。冷たいから、ゆっくり飲むんだぞ」

「ありがとうございます」

惣右介は水を飲みながら、やはりあれは自身の過去なのだということを確信した。

自分は殺されそうになっていて、あの時、もしかしたら、母さまも……

小さな溜息が出そうになるのを無言で嘔み殺すと、竜太郎が心配そうに惣右介を覗き込んだ。

「真つ青じゃないか。そんなに怖い夢だったのか」

「……………えっと、その……………」

「——いいよ、無理に話そうとしなくて。誰だつて胸に仕舞っておきたいことの一つや二つはある。でも、背負い過ぎるな。ちよつとずつで良いから、分けてくれよな」

今度は、いつぞやのように力強くではなく、そつと惣右介の頭を撫でてくれた。

聴いてほしい。でも、言いたくない。

我儘だ。分かつてる。でも、それでいいと、彼は言ってくれた。

「は……………い……………」

「ン。今日はセンスのとこまで送つてつてやるよ。ごめんな、今日はどうしても討伐任務に行かなきゃならないんだ」

フルフルと首を横に振る。

そこまでしてもらつては申し訳が立たない。

でも、送つてくれなくても大丈夫だと笑えるほど彼は気丈でもなかつた。

そういうことを知つてか知らずか、竜太郎は惣右介を優しく抱きしめてくれた。

乱れた呼吸音がして目が覚めた。

隣で寝ている惣右介が脂汗を垂らしながら讒言うわごとを言っている。

「なんで……………はい……………う、う……………」

彼がこの家に来てから、何度も彼は罵されてきた。いつもはそれもうやむやなまま、少しずつ小さくなっていった。

いつも、頭撫でてやつたり汗拭いてやつたりした方が良いのか迷う。結局いつも、起こしちゃ悪いってことでそのままにしとくんだが……

けど今日は勝手が違った。

二、三口をもごもご言わせるように話していたそれは、急にはつきりしたものになつ

た。

「い、たい！……かあさまっ——痛、です……こんな……」

小さな手が宙を仰ぐ。

体が仰け反る。

「惣右介？」

「駄目、ですっ………にげて、かあ、さまッ！」

「それは夢だ！ 起きろ、惣右介！ おいっ！ しっかりしろ、惣右介！」

惣右介の目が大きく開いた。肩で息をしている。

瞳だけが竜太郎を捉えた。

「竜たろ、さん………」

「どうした？ ひどくうなされていたぞ？」

「昔の、夢を見て……」

驚いた。

惣右介が怖い夢を見ていたことは明らかだ。それも、もしかしたら母親が死にかけるような場面だったのかもしれない。

それを彼は受け止め、存外冷静な口調で言つてのけたことに竜太郎は驚いた。

顔色が悪いから動揺していることはしているのだろうが、これ程小さな少年にしては

大人び過ぎてゐる。

——色々抱え込み過ぎちまうタイプか？

黙り込んだ惣右介を見て、それもそうかと思ひ直した。

なんだかんだ言つて彼と竜太郎が苦楽を共にしてきたのはほんの数週間なのだから。

そんな事をホイホイ話してもらへるほど、惣右介に心を開いて貰へているとは思ひ辛かつた。敬語外れないし。

「背負い過ぎるな。ちよつとずつで良いから、分けてくれよな」

今日はいつてもより、そつと頭を撫でた。

今にも碎け散りそうな少年を、壊してしまわぬように。

で、マソラ宅前。

「じゃあ、惣右介、行つてくるな」

「行つてらっしゃい、竜太郎さん」

「マツタク、いつもいつも……」

センセの嘆息ももう何度目だろうか？

何だかんだで惣右介のことを氣に入っているようだから心配はいらないだろうが、問題は惣右介の方だ。

何か、胸騒ぎがする……………

竜太郎は走りながら顔を歪めると、加速する脚に力を込めた。

今日の座学は、虚という存在についてだった。

いつも竜太郎が戦っている相手がそれらしい。

虚とは、心を失って堕ちた魂の慣れの果て。

死神によって尸魂界に送り損ねられた魂たちが、他の魂魄を喰らい始めるがために死神によって打ち倒され、その罪を雪がれる。

傲慢だ、と惣右介は思った。

死神の失態によって心を失った魂魄に、何の罪がある？

他の魂を喰らう事？ そんなの、そうさせた死神だって同罪じゃないか。

罪を雪ぐ？

ナニサマだよ、ソレ。

「——い、聞いているのかね？ 私の授業中に意識を飛ばすとは良い度胸だよ、小僧」

「はっ！」

ゴチンツ



火花が目の前を真つ白に染める。

この細腕のどこにそんな力が有るのか……

「~~~~~!!」

「フン、次に呆つとしたら拳骨一発じゃ済まさんよ。じゃ、教本の次、読ンデみなさい」

「……………マソラ先生」

「何だね？」

「私は、死神になるべきなのでしようか……？」

「知らんよ、ソナモノ」

心底どうでもよさそうに言われて、惣右介は顔を上げた。腹も立たないくらい清々しく一蹴された。マソラの方はというと、愉快そうに片眉を上げて惣右介の方を見降ろしている。

「何だね、ソノ目は？ ソナ事、誰かに言われて決めるようなことかね？ 自身の手で親を探すならそれが一番確実つてだけで、無理になる必要なんて無いだろうよ」

「ごもつとも。」

自分で決めたことだというのをすっかり失念していた。でも——

今度は思いがけず、スルリと言葉が喉を通った。

「……………私を斬ったのは、死神かもしれないのです」

「——ナニ？」

「今朝、夢で見たんです。竜太郎さんがいつも着ている服を着た人物が私に斬りかかってくる夢……もし死神になったら、あのヒトにこれから会うかもしれないって思ったたら……」

ふ、と彼女の噴き出す声が聞こえた。

マソラが大声で笑うのは珍しい。

「あゝっはっは！ コイツはケツサクだね。モウ怖気づいたのかね？ 結構結構、ならそうだとサツサと竜太郎ヤに言っておやりよ。ヤツはそうと分かってたってお前の親を探すくらいなんだからね。アレが死ぬのは勝手だが、無駄死にはなるべくしてほしくないからね」

「“分かってたって”……？」

「ソウとも！ アレは小僧が負った刀傷が死神によるものだど既に知っているよ。私が治療したんだ、気付かないはずないだろう？」

「——！！」

「ヤレヤレ、とんだ腰抜けだね、小僧。マ、恥じることはない。お前には学者の才能があるから、後で恩はいくらでも返せるだろうからね」

惣右介はマソラの言を最後まで聞くことなくその小屋を飛び出した。

胸に渦巻いていたのは、驚き、悲しみ、悔しき、寂しき――

（あんな死神、怖いものか！ 私だけで、母さまたちを見つけてやる！）  
彼は真つ直ぐに、瀨霊廷へ駆けていった。

あつという間に戸を開いて出て行つた小僧の背を目で追うと、マソラは大きく溜め息をついた。

出るなら出るで、チャンと戸を閉めて行きたまえよ……

「マツタク、だからガキは苦手なんだよ。サツサと連れ戻すとするかね」

教本を机に置いてマソラが立ち上がると、開いていた戸から近所に住む女性が駆け込んできた。尋常ではない量の汗をかいている。

「先生！ ウチの旦那が倒れたんです！ 診てやって下さいませんか!!」

「……………オヤ、チョット不味いかね？」

その言葉を言葉通りに捕らえた女性の顔が蒼白になったのは言うまでもない。

（小僧……マサカ、門を突つ切ろうなんて馬鹿な真似はしないでらうね……あそこは少々マズイよ）

焦燥に駆られながら、取り敢えずマソラは女性にすぐ行くと伝えて用意を始めた。

流魂街から線を引いたように急に街並みが変わっているところがある。

あれが、瀨靈廷——母さまがいらっしゃるところ……

全速力で走る。あと一步で入れる、という所で目の前に壁が落ちてきた。

「白昼堂々、通行証も無しにここを通ろうとするなんて、オラを嘗めてんだべか、小僧？」  
壁の前には、およそ人の大きさとは思えない大男が立ちふさがった。

彼が着ているのもまた、竜太郎と同じ黒い着物だった。その姿に惣右介は数瞬怯んだが、気が立っている惣右介は引かなかった。

「嘗めてなんかない！でもここを通してよ！」

「駄目だ。オラはここ白道門の門番だべ？どおしても通りたいなら、オラを倒すしかねえ。だがこの<sup>ジダンボウ</sup>丹坊、この任に就いてから負けたことねえんだ。オメエじゃ無理だべ」

「無礼者！相手と戦わずして分かったような口をきくな！」

「……………確かにそうだべ。後悔すんじやねえぞ、小僧。いや、侵入者ア！」

自分に斧が振り上げられる。その姿が夢と重なった。

足がすくんで動けない。  
どうしよう

おの が――

ガキイイインン……………

鈍<sup>にぶ</sup>い金属音。

力強い手。

生暖かい液体。

「……………」

惣右介は最初、何が起きたのか分からなかった。  
気が付いたら、自分は誰かの腕の中に居た。

その誰かは――

「竜、太郎さん……………」

「ばか、なに、やってんだ」

力なく笑つた彼は、目だけで惣右介の方を向いた。

片目は滴つた彼自身の血のせいで閉じられており、その筋から落ちた紅い雫が惣右介の頬を生暖かく染めていく。

「竜太郎さんつ、ち、血が……………そんなに、でて…………」

竜太郎は、☒丹坊の斧をその小さな斬魄刀で受け止めていた。

逃がし切れなかった力が彼の肉を裂き、骨を砕いた。

☒丹坊が斧を上へ離す。

同時に竜太郎が片膝をつき、斬魄刀を杖代わりに片手で身体を支える。フラフラの筈なのに、竜太郎は惣右介を放そうとしなかった。荒い息で切れ切れに彼は口を開いた。

「だい、じよぶだ。ハハ、センセに、また、診てもらわなきや、な」

ふわりと竜太郎が笑うのと同時に、☒丹坊が凄じい剣幕で上から声を出す。

「竜太郎、オメエ、侵入者を庇い立てするべか？ だったら容赦せんぞ？」

「ちが、う」

「何がだべ？ オラの斧を受けきつたのはオメエが初めてだ！ 言い訳くれえ聞いてや

んど」

「こいつは、オレの、弟分、なんだ。オレに、会いにきて、くれようと、したんだよ。侵入者、じゃ、ない」

尚も流れ続ける血に再び惣右介はすくんでしまった。どうすれば良いのか、思考が止まる。

その恐怖は、突然鳴り響いたサイレンのような音で吹き飛ばされた。何が起きているのか分からないままに身構えて竜太郎の着物の端を掴む。

「な、何の音……！！」

「あく、こりゃあ……」

苦笑して竜太郎が見上げた先を惣右介も見ると——丹坊が号泣していた。

「——え？ 何で？」

「丹坊、いい奴、なんだ。今の、きいて、きつと、かんど、して……」  
ぐらりと竜太郎の体が揺れた。

「竜太郎さん！」

「オラが悪かっただ！ 理由も聞かねえでこんな優しいちびっ子に怪我させようとしちまっただ。オラはいつてえなんてことを……」

「丹坊、だいじよぶ、だから、も少し、静かに、して。バレルの、マズイ」

「何が不味いのですか?」

門の方から、一人の女性が歩いてくる。

彼女は黒い着物の上からも一枚白いものを羽織っていた。その人物を見て、丹坊と竜太郎が同時に目を剥いた。

「う、卯の花隊長だべか?! なしてこげんとこさおられる?」

「偶々討伐任務の方々の手当てを近くで行う予定だったものですから。その傷だらけの貴方、所属とお名前は?」

柔和そうに微笑んだ彼女を見て、惣右介の背筋が震えた。

何か嫌な感じがした。

竜太郎の着物の裾を掴む手に力が籠る。

竜太郎の方はというと、強張った表情で惣右介を強く後ろに引いて彼の後ろへ隠すように構えた。

「五番隊、無席、藍染、竜太郎、です」

「出撃任務に出ていらっしやった方ですね? 大変な傷を負ったようですね」

「……………」

「さぞ厄介な虚だったのでしょう。治療しますから中へ。弟さん、付き添って下さってありますがとう。でも、今度から門に近づき過ぎてはいけませんよ? また瀨霊壁が誤作動



してしまいますから」

「……………」

見逃してくれる、という事だろうか？

ちよつと無理があるとは思うが、変なことになるよりずっとマシだ。

二人はそこで分かれて、一方は救護詰め所へ、もう一方は暫くしてからマソラの所へ、それぞれ保護された。

——勿論惣右介の脳天にマソラから落ちた拳骨は、一つや二つではなかった。

「つたく、心配させやがって……」

竜太郎は、二週間ほどで帰ってきた。ピンピンしていたのにホツとしたが、それでも惣右介は真つ先に頭を下げた。

「竜太郎さん、ごめんなさい！ 私が余計なことをしたせいで、あんな大怪我させてしまった……」

惣右介が震えているのを見た竜太郎は、一つ溜息をつくと再び口を開いた。

「——本当に反省してるなら、一つ、オレの願いを聞いてくれるか、惣右介?」

「はい!」

「じゃあ今から敬語はなしだ。オレのことも兄貴と呼んでくれ」

「……………えと、二つあるんですが」

「纏めて、弟みたいに接してほしい! どうだ!」

比喩ではなく惣右介は目を丸くした。

竜太郎の方は歯を見せてニツカリ笑っている。

自分に与えられるべきは罰の筈だ。それなのに、ちつとも惣右介に不都合なことが無い。

「……………そんなことで、いいんですか? だって——」

「いくの! ほら、敬語になってる!」

「あ……………そんなことで、いいの? ——兄上」

言ってみて、結構これは恥ずかしいかもしれないと思いなおした。頬が仄かに熱を帯びる。俯きがちに竜太郎を見上げると、彼は満足げだった。喜んでもらえるなら、これくらい訳ない、と惣右介は照れ隠しに微笑んだ。竜太郎の方も、どこかこそばゆい、という感じだ。

「あつ、あにうえ……いや、そんな仰々しくなくていいって。兄さんとかそんな感じで」  
「はい、じゃなくて……うん！」

「……………ま、急にじゃなくて良いから、ゆつくり自然にな。へへ、いいねえ、家族って感じがして！ 改めてよろしく、惣右介！」

苦笑した竜太郎は、わちやわちやツと惣右介の頭を撫でた。

竜太郎の膝枕で寝てしまった惣右介の頭を撫でていると、マソラが部屋に入ってきてた。竜太郎たちが話している間、診察だ何だと理由を付けて家を空けていてくれたのだ。

「御迷惑をお掛けしました、センセ」

「フン。今回は私にも非がある。お前が謝ることはナイよ。それで、向こうの反応は？」  
チラチラと彼女の視線が揺れる。意地を張って惣右介の方を見ないようになっているようだ。竜太郎の代わりに惣右介を叱ってくれたセンセは、相当彼にきつく当たっていたらしかつた。その収め処を見計らっているのだろう。

「特に何もありませんでした。惣右介の外見は一部では囁かれたようですが、何か調書を取りに来たりなんなりということはありませんでしたよ。卯の花隊長が庇って下

さったんです」

「ホウ？ マア、そういう反応だったなら一先ずは安心だね」

「はい……………」

惣右介の命を狙っていたものが干渉してこないということは、今のところは喜ぶべきことだ。だから竜太郎の表情が晴れないのは別の理由からだった。

「追手がこないのは大歓迎です。でも同時に、親も動かないというのは…………」

「バカだね」

「酷い！ 何ですか！」

肩に掛かった青い髪の毛の束を面倒そうに払うと、目を細めた彼女は溜息を吐いた。

「動かないのか動けないのか分からんだろうよ。そう暗い顔をしてると小僧に勘付かれるよ」

「う……………気を付けます」

結論を出すのはまだ早い、とセンチは言った。

そして彼女は惣右介を見た。

その瞳は、母が子を見つめるときこんな風なのだろうなと竜太郎に思わせるような、見てるこつちがむず痒くなるような温かい光を宿していた。

## 第五話 学び舎にノゾム

SIDE・D

「駄目だよ兄さん、其処には——」

上手い事竜太郎を誘導できた惣右介は、笑みを零しながら彼に急接近した。手にある木刀を再度握り直す。

案の定、石に足をとられた竜太郎が体勢を崩した。

「——!!」

「石があるんだ!」

態勢が整う前に勝負に出る。

刀を振り下ろすと、竜太郎は器用に体を捻ってそれを躲した。躲されるとは思っていなかったせいで、惣右介の判断が一瞬鈍る。

竜太郎はその隙に、そのまま右肩を地面に着けて両手で体を支えながら両足をめ一杯回転させた。

振り下ろした直後だった木刀を持っていた惣右介の手が蹴り飛ばされる。

カラン………

軽い音と共に木刀が転がる。

木刀に手を伸ばそうとする間に起き上がった竜太郎が惣右介の首元に木刀を突き付けた。

「はい、勝負あり〜!」

「今度こそ勝つたと思つたのに……」

嘆息した惣右介は、ふと顔を上げた。

そのすぐ近くには、二人の鍛錬を見守つてくれていたマソラが手ごろな岩に腰掛けている。見守つてくれてた、なんて言うとう先生はふてくされてしまうから、口に出しはしないのだが……

「ソレの身体能力を嘗めたらいかんよ。マ、小僧なら身体能力以外は嘗めてるくらいがハンデになるかね?」

「酷い!」

木刀を降ろした竜太郎が手に付いた砂を叩きながら尚もマソラに抗議している。

「鬼道だつて勝つてますよ!」

「小僧は霊術院で初めて習うに等しいからね。教える側がポンコツだと生徒は可哀相だよ」

「そ、それは……」

「私が教えた回道の習得具合から見て、お前を抜くのに半月と掛からんよ」

「なん……だと……」

「おつむ頭の具合もお前とは訳が違う。小僧がどこまでできるか楽しみだね」

「……」

「マソラ先生、どうかもうその辺で……」

褒められすぎて恥ずかしいのと落ち込んだ竜太郎が気の毒になったので、惣右介は何とも言えない表情で彼を止めた。

真央霊術院——死神を目指す素養の有る者達を教育する学舎——に惣右介が通うことを許される通達が届いて今日で一週間。明日からは寮生活になり、これから暫くはそう簡単には家に帰って来られなくなる。

必要なこととはいえ、寂しさに顔色が曇った。

加えて……

「どうした？ 顔色が悪いようだが……」

竜太郎が心配そうに首を傾げた。気恥ずかしいながらも、やはり気になるので聞いてみる。

「……実は、少し悩んでいることがあって」

「悩み？ ナンだね。言つてごらんよ」

マソラ先生の方は面白そうに頬杖をついている。

えつと、大したことじゃないんですが……

「……………みが」

「みが？」

惣右介は、そつと視線を逸らしながら小声で言った。

「僕の髪が明るい色なのが、その、浮いてしまわないかと思つて……」

「……………ソレは私に喧嘩を売つているのかね？」

息子にも遺伝された真つ青な髪のマソラはゴキゴキと拳を鳴らしながら首を傾けた。見慣れ過ぎて失念していただけなのだが、弁明をする前に惣右介の頭は彼女に叩かれた。

——惣右介は茶髪だ。焦げ茶に近いとはいへ、黒髪人口が大半を占めるこの辺りでは既に彼は目立っていた。見た目で変に悪目立ちして勉強に支障をきたしたくない、というのが彼の意図したところだったのだが、マソラにはそうは取られなかつたらしい。

現に、会つたことはないが彼の息子も青い髪で霊術院を出ているのだから、それほど心配はいらないのだろうか……

「まあまあ、センセ！ 惣右介に悪気があつたわけでも無いでしょうし、その辺にしてお



いてやってください！」

「フン、見た目など識別記号の一種でしかないのだから、気にスルマデモないだろう」「いや、センセ、気にしてるから惣右介を叩いたんじゃ——」

竜太郎の頭にも拳骨が落ちるのに秒と掛からなかった。

思っても言わなくて良いことは山ほどあるのだ。

### 翌朝

いつも通りの朝食を済ませ、竜太郎と惣右介は家を出た。

竜太郎にとってはいつものことなのだろうが、惣右介は昔一度無断で飛び出したつきり瀨霊廷には近づいていない。

しかしそれも今日まで。惣右介の懐に入っている薄い紙切れ一枚で、分厚い壁の向こう——瀨霊廷に入ることが出来る。

惣右介に与えられたのは、「仮通行許可証」だ。

死神となるための勉強に励むため、廷内にある真央霊術院に通うために発行されたも

ので、これを通せばいつぞやのように瀨霊壁が降りてくることも門番に斧を振り下ろされることもない。

「オウ、竜太郎！ 今日も早いだなあ！ おつ、後ろのソイツはもしかして……」

「ああ！ あの時のオレの弟だよ！ 大きくなつただろ！」

「はっはっはあ！ オラから見ればどつつにしろ豆粒みてえだべ！ ンども、もうそんなに時間が経つてたんだなあ……」

感慨深そうに目を細めた丹坊は、自分のことのように嬉しそうだ。今は、兄さんも「兄」よりかは「父親」の様な雰囲気で惣右介の頭を撫でた。

「だな！ さ、惣右介、許可証見せて」

「はい！ 〴〵ですが、お願いします、丹坊さん！」

「さん付けなんてこつぱずかしいから要らねえよ！ 丹坊で良いべ！ ン、確かに許可証だ。通行を許可する!!」

「ありがとうございます！」

あつさりに入った瀨霊廷は、やはりあの時外からのぞいたままだった。

漆喰の壁、瓦造りの屋根がひたすら続いている。地面だつて見渡す限り石畳になつていて、綺麗に舗装されていた。門や塀なんて立派なものを見るのなんて初めてで、興奮

した。余程それが顔に出ていたのだろう。竜太郎はクスクス笑って、どこか懐かしそうに遠くを見た。

「凄いやな。オレも初めて入った時驚いたもんだ。でも、惣右介のホントの家もそうだったんじゃないのか？」

「どうかな……家を外から見た事なんて無かったから分からないよ」

「そっか。ま、気長に行こう。時間はたくさんあるんだからさ」

「……………うん」

ワシワシツと竜太郎が惣右介の頭を撫でた。

元々癖のある彼の髪が更に乱れたが、いつものことだったのでそう気にしなかった。

あつという間に霊術院前に着いた。

既に沢山の生徒が集まっており、入学という行事の熱に浮かされたような雰囲気が漂っている。これからは、知り合いの居ない中で集団生活を送って行かねばならないのだ。好奇心で胸が高鳴るけど、不安だっけと同じくらいある。ここで竜太郎と別れるのは、ちよつと寂しかったり……

それを知ってか知らずか、竜太郎は櫛を入れるかのように惣右介の肩を叩いた。

「じゃあ、程々に頑張つて来い！」

「ちゃんと頑張るよ。マソラ先生には一番を取つたら特別授業をしてもらえつて約束なんだ」

「うへえ……勉強の先に勉強か……考えられん」

苦い薬を嘗めた時の様な顔をした竜太郎を見て、惣右介が苦笑する。

「兄さんはもつと勉強しないと駄目だよ？ 座学に限らず、あらゆることから学ぶべきことはあるんだから」

「分かつてるつて……ああ、そうだ、忘れるところだった」

そう言つて竜太郎は「ごそごそ」と懐を漁つて、小包を一つ惣右介に渡した。突然の小包に面食らう。

「何、これ」

「開けてみる」

桃と鸚緑という小洒落た色使いの和紙を開くと、黒塗りの木箱が現れた。本体をしっかりと押さえつつ蓋を開くと、綿が敷かれているのがちらりと目に入った。その中に鎮座していたのは、黒縁の――

「……眼鏡？」

首を傾げつつ竜太郎に視線を戻すと、彼は人差し指を天高く掲げて誇らしげに、  
「そ。伊達だけだな。オレの独断と偏見により選んだ、真面目書生眼鏡だッ！」

——と言いつつ放った。

「……ええつと？」

意味不明な言葉に惣右介が戸惑っていると、竜太郎が咳ばらいを一つしてもごもごと  
言った。

「ほら、昨日、髪で悪目立ちするかもつて言つてただろ？ ソレ掛けてれば髪より眼鏡に  
目が行くし、第一印象から真面目になる！ 惣右介は元々まじめだから、それくらい  
やつて大丈夫かなと………思つた、わけだ。にゆ、入学祝つて事で、持つていつてく  
れ。じゃあ、頑張れよ」

自分で言つてて恥ずかしくなつてきたのか、僅かに顔を赤らめながら彼はそう言う  
と歩き出した。

「兄さん！」

「ン？」

ちよつと歩いた先で竜太郎を呼び止める。

彼は律儀に止まつてこつちを向いてくれた。

「ありがとう！ ちゃんと着けるよ、真面目書生眼鏡！」

「いや、その名前はやっぱ無しで頼む!!」

顔を真っ赤にして掌で覆った彼は、もう一方の腕をブンブンと振った。

余程恥ずかしかつたらしく、その後すぐに去って行ってしまった。

いい感じに緊張の解れた惣右介は、そつとその眼鏡を取り出して掛けた。

初めて眼鏡を掛けたこの違和感は、入学のドタバタで忘れ去られた。

その後竜太郎の目論見通り惣右介に真面目なイメージが着いたのを聞いて彼が喜んだのは、まだ先の話だ。

「よし、では今日は初級中の初級、〃破道の一、衝〃から入るぞ！ 威力は弱いが使い勝手がいい。力を抜いてやってみるんだ。今後、段々と込める霊圧を上げて行けばいい。では第一班、前へ！」

鬼道の初めての授業だ。教本にある通り詠唱し、霊圧を形作る。

回道と基本は同じだとマソラ先生は仰っていた。

的から大分離れた位置に着く。

「これは感覚をまず掴んでもらうためのものだ。真つ直ぐ飛ばすことを第一目標にする。込める霊圧は一割ほどで良い。では、始めッ！」

人差し指と中指を揃えて前に出す。

込める霊圧は一割……………

「炎 水 地 空 陰陽引き合い 混沌と為し 静謐惑いて 牙の在処を見よ——破道の一、衝！」

目の前に用意されていた的が吹き飛んだ。

良い感じだ。今度はもう少し霊圧を込めてみても良いかもしれない。

「馬鹿者！ 霊圧は一割で良いと言っただろう！」

先生の怒声が響く。

誰かが暴発でもさせたのだろうか？

先生の方を向くと、その怒りは自分に向けられていた。

「藍染！ 鬼道は暴発の危険が有るのだ！ 指示に逆らうな」

「先生！ 確かに僕は指示通りにやりました！ 一割の霊圧でしょう？」

他の面子の的を見る。

そもそもの当たっていない者が殆どだったが、当たっている者でも僅かに焦げ跡が

分かるかどうかくらいのもので、的が吹き飛んだものなど彼くらいだった。

惣右介が絶句したのを見て先生はヤレヤレと首を振ると、窘める様に惣右介の肩を二、三叩いた。

「——張り切るのは分かるが、その位にしておけ。今日は初めてだから罰は与えんが、次同じことをやったら容赦せんぞ？ 分かったな」

「……はい。申し訳ありません……」

どういう事だろうか。

確かに自分は一割ほど……いや、ほんの少しそれに上乗せして霊圧を込めたはずだ。そのほんの少しの差で、あそこまで威力が変わるものなのだろうか？

——多分違う。

もしかしたら、僕の霊圧は……高いのかもしれない。それも、異常に。だとしたら、それを先生に話して分かって貰えるだろうか？

………あの様子だと、少なくとも今の先生には理解してもらえないだろう。だったら、取るべき行動は二つに一つだ。

違う先生に相談するか、事実を隠して回りに合わせるか。

取り敢えずは二つ目にしておこう。もし新たに相談した先生にも受け入れられなかったとき、今の先生と気ままずくなるのは得策じゃない。



そつと溜息を吐いて、惣右介は授業の列の最後尾に並んだ。

その後の授業も、惣右介には退屈の二文字しかなかった。

座学は、マソラのソレに遠く及ばない。

ココの授業は点か、良くても線でしか教えてくれない。つまり、情報の関連性がない。内容に深みがない。

彼女の授業は、一つの話題に対していくつも線が張り巡らされ、それが面となり、立体となり、重層的に教えてくれた。

『モノゴトの一点に捉われてはいけないよ。一つの情報から十なんてケチクサイこと言わず、百でも千でも千でも考えうるだけ新たな情報を引き出すんだね』

独学で学んだ方が余程効率的で深く学べるだろう。

そう思えるほど、霊術院の授業は単調で面白味が無かった。

それは白打や歩法の授業に関しても言えることだった。

教官の動きは、竜太郎のソレと比べるべくもない。

型にはまった単調で隙だらけの構え、定石ばかりの攻め口、効率の悪い体の動き……

正直、つまらなかった。

こんなにつまらないことのために髪のことや人間関係を考えて悩んでいたのが馬鹿らしいくらいだった。

……早く、終わったら良いのに。

勿論そんな事、おくびにも出しはしないのだが。

「ねえねえ、藍染君ってやっぱり凄いねえ！」

初めての試験が終わった後、同じ一組の女生徒が興奮気味に言った。

彼女は確か、次席だった——

「そんなこと無いよ。松方さんだって優秀じゃないか」

「ムム！ 総合で三十以上差を付けられると皮肉にしか聞こえないよ……」

全教科満点という霊術院始まって以来の点数を弾き出してから、ただでさえ浮いていた自分が一層異質なのだと理解した。

先に優秀な先生に教えを乞うていたからかと思つた時もあったが、上位貴族にも結構

な人数でお抱えの家庭教師を雇っていた人も多くて惣右介は苦しんだ。端的に言えば、流魂街出身の下民に圧倒的な差を着けられたことを嫉まれた。

正直、回りに合わせて手を抜くよりもこちらの相手をする方が余程面倒だった。物がよくなくなるようになったのが始まりで、終いには呼びだされて何人かにタコ殴りにされた。陰湿なことに、腹や胸といった外に傷が見えないようなところばかり。

やつかむのは貴族ばかりだったからこちらから下手に手も出せなかった。

その一方で、中位貴族以下の素直な生徒は惣右介に教えを請いに来るようになった。

座学、体術双方に秀で、また指導も上手いということで、稀に上回生も足を運んだ。

其処で惣右介は新しいことを学んだ。

如何に相手を怒らせないようにあしらうか、如何に話したら物事を正確に伝えられるか、誰にも好意を持たれるにはどう接したらいいのか。

学び舎とはよく言ったものだ。

新たに学ぶことが出来たのは歓迎すべきことなのか、それは惣右介にもよく分からな  
い。

ただ、試験から一か月後に先生から飛び級の打診があった時は、割と素直に嬉しかった。

飛び級の試験はあっさりと通った。一回生からいきなり六回生へ飛び級と言われた時は拍子抜けさえした。

『こんなことは霊術院始まって以来じゃないか？ 藍染、励めよ！』

『そうだなあ。飛び級の制度があ頃あつたら、現浮竹隊長、京楽隊長もこれくらいの方覚だったと儂は思うな』

『期待してるぞ！』

「ありがとうございます。精進いたします」

他の一回生より少々早いのが、と斬魄刀“浅打”を渡された。

——つまらない。

六回生になつてもそれは変わらなかつた。

誰も惣右介には敵わなかつた。

だが、伊達に一回生でやつかみを受けてはいない。

程々に優秀で程々に上位に食い込む位置に成績を留めた。

ただ、実習だけは飛び級しても何ともならなかったので一回生と同行させられた。

「あつ、藍染君！ 久しぶり！ 六回生はどう？」

「大変だよ。一回生と同じにはいかないね」

「やっぱりそうだよね。完璧超人の貴方でもそうだと聞いて安心したわ」

そのようなことを口々に言われた。

どうやら自分は嘘も上手くなっていたらしい。

何だかいけないことをし続けている気持ちになつて辛い。

『——だつたら壊しちゃえばいい。アンタにはその力が有るだろう？』

籠つた声が脳内に響いた。

気味の悪い声だ。

それが出来たら苦勞しないと惣右介は首を振つた。

「一回生、集合！」

魂葬の実習。

一回生の後半から始まるコレは、六回生が複数の魂魄を守護する演習も兼ねている。

境界が張られているから守護もなにも無いのだが、現世への渡航という未知に浮かれ気

味な一回生を纏めるのは別の意味で大変そうだ。

「二人二名ずつ行え。霊が苦しむから力むなよ。では三人ずつ、前へ！」

六回生のリーダー格がそういった時、通信機に異常が伝えられた。

『井岡！ 三時の方向に巨大虚ヒュージホロウが現れた！ 一体だが、応援が来るまで時間が掛かるらしい。俺らが引きつけて時間を稼ぐから、警護が手薄になる』

「分かった。無理するなよ」

『応！ 倒すつもりなんてねえから安心しな』

順番が後の方の惣右介は霊圧知覚を最大限広げて三時の方向に集中した。

虚に対応しているのは三人。

二人は良い動きをしている。だが後の一人が足を引つ張っているのが分かる。虚に気を取られ過ぎて連携が取れていない。

こういう緊急事態はその人物の実力が顕著に表れる。学校の成績の様な整った環境のモノではなく、本当の実力が。

その内に応援の死神たちがやって来た。

——彼らの力は凄まじかった。あつという間に巨大虚を屠ってしまった。

竜太郎を見ているような興奮を久しぶりに味わった。

“彼らの中に入れて、きっと自分は実力を抑えなくていい”

その傲慢ともいえる思考を出来ることが、惣右介には嬉しかった。

——瀨靈廷・五番隊隊舎にて

「ほお、竜太郎、オマエの弟分が護廷隊に？」

「はい！ 優秀ですよ！ 飛び級して一年で入隊できそうなんです!!」

「そら楽しみやな。ほんなら、『藍染』が二人いてややこしくなることはあらへんな」

「え、何ですか？」

「優秀ならオマエよりずっと多う功績<sup>おほ</sup>上げて、席官入りでもなんでもするやろ？ 席次

持ちの方とそうや無い方やったら、わかりやすいやんか」

「酷い！ でも有り得る！」

そう言いながらも、上司の言に満更でもなさそうに竜太郎は笑うのだった。

そんな会話があつたことを惣右介は知らない。

或る晩、惣右介が目を開くと、其処はいつも母が自分を救おうとする記憶にある絶壁だった。

いつもと違ったのは、其処に自分以外が居らず、自分の姿が現在の年齢であるという事だった。

周りを見ても、ヒトの気配一つしない。

「……………ここは？ ……夢？」

『ん、ま、そんなところかな。いらつしやうい！』

後ろから声がして振り返る。

其処には、男とも女とも分らない人影がしやがみながら惣右介の方を向いていた。性別が分からない、というより最早、顔自体が分からなかった。何故ならそのヒトが面を被っていたからだ。向かって右側に丸が一つと大きさの違う四角が三つ、片眼から涙を流すかのように縦に並んだ模様をしていた。着ているものは無地で紺の男物の浴衣なのに、帯は紅く美しい金糸を施された女物。雪駄を履いているのに、片手には扇子が握られている。緩く後ろに束ねられた長い黒髪が、風に揺られて踊っていた。

「誰だ、君は……………いや、この声、先日の……………」

『初対面の相手に第一声がソレえ？ 躰がなつてないなあ』

仮面で響いて、性別が一層分からない。いや、性別どころか、相手の核の様なモノが



伝わってこない。掴み処の無い、気味の悪い声だ。

「あ、ああ、済まない。僕は藍染惣右介というんだ。君の名前も教えてくれないか？」

『……………違う、ちがう、チガウ！　ゼーんぜん分かってないなあ。こんなんで私の主は大丈夫かねえ？』

僕のことを「主」と言ったのか？

……………ということのままか、この仮面をかぶったのが――

「僕の、斬魄刀？」

『あ、一個正解イ！　うんうん、頭が回るのは良いことだよ。流石、一回目から私の姿が見えてるだけはある。でも後二つ、アンタは致命的に分かってなくい』

「分かってない？　何がだよ、はつきり教えてくれ」

莫迦にしたような口調にムツとしながら言うど、仮面の下でヤツが笑った。

『クツクツク！　その調子だよ！　私はアンタ、アンタは私。私の扱いはアンタが一番わかっているでしょ？　物事ははつきりさせたい性質タチなんだよ。そんな腰の低い主人は要らないって事さ』

「……………二つ目は？」

『アンタの、な・ま・え』

「――!!」

思わぬ指摘に胃が縮む。言葉に詰まった惣右介を見て、目の前の仮面が愉快そうに揺れた。

『ククッ！ 知<sup>ち</sup>つて<sup>つ</sup>るよ。言<sup>い</sup>つちやダメなんだよね？ でもさア、アンタの魂の一部たる私にまで偽名<sup>そんなこと</sup>を騙<sup>ま</sup>られちゃったら、イラつと来るって分かつてくれるよねえエ？ さ、今日はここまで。また遊びにおいでよ！ 今度はホントの名前でね』

ばちん

ヤツが指を弾いたのが分かった。

その直後、意識は学生寮の自室に戻された。

「——アレが、僕の斬魄刀……」

声を、姿を思い出して、そして思った。

嫌いだ。

それが初めから、今も続くアイツへの感想。

## 第六話 潜むカゲ

SIDE・D

久しぶりの休みに、惣右介は竜太郎の家に帰つて来た。

先日発表された配属の報告もかねて家に着くと、竜太郎と共にマソラもそこで惣右介を待つていた。

「遅かったな！ お帰り、惣右介」

「ごめん。ただいま、兄さん、マソラ先生」

「フン、少しはマシになつたかね」

相変わらずの二人を見て頬が緩む。

こんな安心感は、やはりここでしか味わえない。

草履を脱いで座布団に座る前に、「待ちきれない」といった面持ちの竜太郎が身を乗り出した。マソラの方も、ちよつと落ち着き無げに視線を惣右介に向けている。

「配属、もう決まつたんだろ？ 何処だった？」

「席官入りしたかね？ ン？」

「マソラ先生、流石にいきなりそれは無理ですよ」

苦笑しながら惣右介が言うと、マソラは不敵に口の端を上げて片肘をついて頭を支えた。

「無理なことは言わんよ」

「……ありがとうございます。配属は、一番隊です」

「!!」

はにかみながら小さな声で言った惣右介の一言に、二人の目が驚愕で大きく見開かれた。

「——ナルホド、席官入りできないわけだよ」

「はい! 一番隊に新人が抜擢されるなんて何年ぶりでしょうか、センセ」

「私よりお前の方が詳しいダロウに。よく知らんが、トンと聞かんよ」

「やっぱり! 同じ隊じゃないのは寂しいが、流石はオレの自慢の弟だ!」

口々に褒める二人の言葉がこそばゆい。

でも確かに、回りの面子が揃いも揃って驚いていた。

教師も、生徒も、一様に驚いていた。

『一番隊って……:……:ほぼ護廷隊内でしか人事異動が無いんじゃないか? それも、エリート出世街道の……』

『ああ。下位席官になるより一番隊に入る方が榮譽なことだつていう死神もいるくらい  
の所だ』

『何で首席卒業の奴じゃなくアイツなんだよ？ 確かに成績は良いけどさ』

『凄いいけど、いきなりそこじゃ可哀そうじゃない？ 入つてからが大変そう』

そういうのはもう慣れた。

別を選んでのは自分じゃないのにこうも言われるのは、どうしようもないことだ。理  
不尽は嫌だけど仕方ない。

本当は竜太郎のいる五番隊がよかった。一応願書もそう提出していた。……まあ、新  
入隊員の希望が最優先されるなどとは思つていなかったが。

「ありがとうございます。でも、これからが大変ですね」

「そうだな。一番隊は新入隊員扱きとか有るのかな……ま、程々に覚悟しとけよ？ 結  
構目の敵にされそうだからな」

「うん。分かつてる」

「焦ラズやることだよ」

「はい！」

それまでニコニコしていた竜太郎がふと表情を暗めた。何かを思い出したような変

化の仕方だった。

「兄さん、どうしたの？」

「……………ああ、いや、惣右介にはそろそろ言っておいた方が良いと思ってな」

「何を？」

「——お前が、オレらの前に現れた時の話だ」

「事の始まりは、一つの木箱だった。家の庭に埋まっていたのに躓いてな？ 不審に思っ  
て掘り返したら霊力が籠っていた。センセに相談して、割って中身を確かめてみたら……  
惣右介が現れたんだ」

「木箱？」

「コレだよ」

それはいつだったか、母の霊圧を感じた木箱だった。

「その時お前は、大怪我を負っていた。斬魄刀により一太刀負わされてたんだ。それは  
知ってるだろ」

「うん。夢に見るよ。僕が斬られた時の夢」

さらりと流した言葉に竜太郎は一層顔を曇らせた。惣右介からしたらいつものことなので大して気にはしていないのだが、失言だったかなと少し俯いた。

「……………ン。そしてどうやら、惣右介が斬られたのは大昔のことらしいんだ」

「……………え？」

「正確なこととは分からないが、二千年ホド前らしいんだよ」

惣右介の思考が凍る。

だつて意味が分からない。

二千、年……………？

フリーズした惣右介から視線を逸らして、マソラが続ける。

「トウゼンの反応だよ。私だつて意味が分からん。もしムリヤリ辻褃を合わせるなら、小僧には時間停止と木箱へ封じる術が二千年もの間掛けられてイタということだね」

「時間、停止」

「そうだよ。禁術とされるほど高度で、危険で、扱えるものが希少な術だね。ソナ物を二千年にもわたつて維持できる術者に小僧は術を掛けられたつてコトだよ。正直言つてソナ奴は化け物だね」

「ちよつと待つてください！」

惣右介は頭を抱えた。

「その木箱からは、母の靈圧しか感じません！ それってつまり——」

「ソウ、恐らく小僧の母親がソノ術者だよ」

「な……………」

動揺しながらも、惣右介はいつもの夢を思い出ししていた。確かに夢の最後で母はいつも「時間停止」と呟いていた。

「小僧の傷をその場で治せナイ程差し迫った何かがあったんだろうよ。そして隠ソウとして木箱に封じた。何とかコトを逃れたソレは、竜太郎このバカに見つけられるまで放置サレていたということだね」

「差し迫った何か……………」

「ああ。だが惣右介、一先ずは安心しろ。今はもうその追手らしきものは出ていない。目下最大の問題は、お前の家族だ。だから——」

竜太郎が深く深く息を吸い込んだ。

「惣右介の両親の名を……………できれば姓も教えてほしい。——彼らを探すために」

竜太郎の顔が歪んだ。優しい彼のことだ、きつと惣右介がずっと姓を黙っていたことに理由があると察して深く問わずにいてくれていたのだろう。

そういう心遣いを久しぶりに感じて、惣右介は微笑んだ。この一年で触れ得なかったそういう暖かいものに頬が緩む。



「うん。いいよ。まず、父の名は……」

父の笑顔を思い浮かべた次の瞬間、惣右介の胸を支配したのは安堵感ではなかった。むしろその逆、焦燥感。

「あ、れ……………?」

おかしい。

だって、そんな筈はない。

「どうした、具合が悪くなっちゃったか?」

きつと自分の顔は蒼白なのだろう。竜太郎もまた真っ青になってこちらを覗いている。

「兄さん……………」

「何だ?」

「思い……………出せないんだ……………両親の名前も、姓も……………知らないなんてはずなのに……………」

呼吸が乱れる。苦しい。絶対になくならないと思っていたものがいつの間にか自分の手から消えている焦燥感に心が付いて行かない。

「ソレが普通だよ」

マソラがさらりと言い放った言葉が、惣右介の混乱の波を少しずつ整えていく。

「言つただらう？ 時間停止は高度で危険な術だと。二千年もの長きにわたりその中に居たんだ、何らかの障害が出てオカシクない。寧ろ記憶障害に留まったのが奇跡とも言えるよ」

自覚できてよかつたじゃないかね、と彼女は言つた。

「マ、記憶が戻つた時にでもコノ続きをすればいいよ。ドウセ死神になつて暫くは忙しくてソナ暇ないんだからね」

「そうですね。惣右介ならあつという間に慣れそうですけど」

「当り前だね。お前の『暫く』と一緒にするんじゃないよ」

「酷い！」

二人の会話を聞いて、惣右介は落ち着きを取り戻した。

『思い出した時にでも』、とマソラが言つたということは、記憶は戻る可能性が有るということだ。再び微笑んだ彼を見て、竜太郎もまた笑つてくれた。

惣右介が席を離れてから、竜太郎はマソラに向き直つた。

「センセ、さ『五分ごぶだね』……え？」

「五分は本当に〈時間停止〉の影響。だが残りの五分は意図的な記憶操作の線が高いよ」

「!! ……なんか、おかしくありませんか」

眉を寄せて視線を下げた竜太郎の方を、マソラの切れ長の目から瞳が覗く。

「何が言いたいんだね？」

「いえ、やり過ぎじゃないかって思うんです。口止めの上に記憶を弄るなんて……そこまでしたら、逆に”この子には何かあるんだぞ”って言ってるようなものじゃないですか。わざわざ探ってくれて言ってるようなものだと思いますか」

「木箱に封じられていた時点でイマサラだと思いがね……シカシ、お前にしては良い線だよ。そして、そこから考えられる可能性は二つ。多少疑われるより小僧を追っている奴らにその名を聞かれる方がマズイか、元々小僧の存在を無かったことにしたいのか」

そう言つて彼女は瞼を閉じた。

「存在を？」

「そうだよ。どちらにせよ厄介事つて事だね。マ、二千年も消息不明だったんじゃないもう時効だろうよ。それでもなお小僧の記憶が戻ってないってコトは、余程術者は——小僧の母親は小僧を護りたかつたんだね」

そう言つて再び目を開いたセンチの顔はとても穏やかで、そういう事は惣右介の前で言えばいいのにと竜太郎は思った。何の為に惣右介が居ない隙にこの話をしているのかなんで、とつづくに竜太郎の頭から落っこちている。

目を開くと、見覚えのある断崖。

顔を上げると、幾何学模様の面が首を傾げながらこちらを見ている。

『やあ、先日ぶり、我が主』

「……ああ」

会いたくもないのに、何故精神世界へ引き込まれるのか。……嫌がらせか？ 多分斬魄刀の方だって、惣右介が斬魄刀を嫌っているのを分かっているだろう。

それが余りにあからさまに態度に出ていたのか、斬魄刀が肩を竦めた。

『おやま、そんなに不機嫌にならなくてもいいじゃないか。傷つくなく！』

「傷ついているようには見えないが」

『そんな事無いよオ！ 私の心は涙で一杯さ』

袖を目の辺りに添えているが、声の調子は全くと言っていいほど泣いていない。

「……同情してほしいなら、その仮面を外して表情を見せたらどうだ。僕には隠し事を

するなと言っておきながら、そちらは顔を隠すのか」

『私はこれが顔みたいなもんだから仕方ないさ。私のチカラをよく表していると思わないかい？ 何にでもなれるし、その実何でもない。ククツ、道化そのものだろう？』

「チカラ……教えてもいなくせに同意を求めめるのか」

『おっと、そうだったね。でもきつと、まだ聞こえないさ。私の名も、力も。アンタはそれを聞くための鍵が何処にあるのか分かってないんだからさ』

「始解の条件、か。どうすればいいんだ」

『——自覚することだ。アンタは一体どんな奴だい？』

不覚にも言葉が出てこない。

さつきは感じなかった眩暈を感じてしやがみ込む。地面が揺れているのか、自分が揺れているのか分からない。

「僕、は……過去に何かがあつて、逃れて、此処に居る。自分の起源なんて覚えてないんだ。それを思い出さなきゃならないって事か？」

『分かってないねえ。私が言ってるのはそんな上つ面な事じゃない。其の皮を剥ぎ、肉を削ぎ、骨を砕いて神経を裂いたその奥……今のアンタを動かす根源は何だつて聞いてんのさ。——もお時間だ。じゃあね、我が主。急ぎなよ？ ……もう、失いたくはないだろう？』

思わず顔を上げて斬魄刀の方を見る。

「ちよつと待て、君は知っているのか!! 僕の——」  
手を伸ばすが、間に合わない。

—— ぱちん

惣右介が勢いよく起き上がると、隣の布団に寝ていた竜太郎が目を擦った。

「んあ? ……どした、惣右介」

まだ夢うつつの様で、竜太郎はいつにもまして緩んだ表情だ。半分開いた目をこちらに向けた彼が僅かに首を傾げた。

『もう、失いたくはないだろう?』

斬魄刀の言葉が耳に残響する。

「今、ちよつと嫌な夢を見て」

—— もしかしたら、僕の両親は、もう、本当に……

「ユメ?」

「うん。斬ば——」

——言つて、いいのか？

言つたとして、兄さんは何と云うだろうか。

——怖い。

何がかは分からない。

でも、聞きたくない。

兄さんが、先生が、僕の言つたことで示す反応を見るのが……怖い。

困らせてしまっただけなんじゃないか。

悲しい思いをさせてしまっただけなんじゃないか。

「……」

「ン？」

それは、嫌だ。

分からないことを言つて、そうなるのは嫌だな。

「——何でもない。起こしてゴメン、兄さん。明日も早いんだから、もう寝て良いよ」

「んんん……」

重そうな脛を二、三度瞬かせた竜太郎は目を閉じた。

口をむにやむにやと動かしている。

微笑を湛えた惣右介が布団に入り直した時、隣の竜太郎が眠そうに呟いた。

「惣右介、おまえはやさしい子だ。ヒト一倍かんがえすぎる子だ。でもな、オレやせんせにはムリしなくていいんだ。つらかったら「ツライ、たすけて」って言っていいいんだ。わすれんな」

竜太郎が片腕を布団から出した。

いつもより覚束おぼつかないその手は何度か惣右介の頭上を空振りながら彼の髪を揺らした。やつと辿り着いた竜太郎の手は、力の入りきらないまま惣右介の頭を二、三度撫でると、そのまま枕元で動かなくなった。竜太郎の寝息が規則的になつていく。

「……ありがとう、兄さん。でもやつぱり、まだ分からないことを言い立てるのは違うと思つたんだ」

（——でも、色んな事が分つたら、思い出せたら、聞いてほしいことが色々あるんだ。その時に、聞いてくれる？）

口に出掛かった言葉を呑み込む。

喉に重しがあるみたいな、嫌な感じがする。

口は動くのに、声を出すための声帯が震えない。

溜息を吐いて目を閉じると、竜太郎がさつきより一層覚束ない声で言った。

「……いいって、ことよ……むにゃ……」

まさか返事が返ってくるとは思わなかつた惣右介は思わず笑みを零した。イマイチ



ずれた回答なのは、寝言だったせいかわトウトしていたせいなのかは分からない。でも、竜太郎たちに拾われてからずっと胸につつかえる様にあつた何かが少し小さくなつたのを感じた。

「おやすみ、兄さん。——いい夢を」

その日、惣右介は夢も見ないくらい熟睡した。

過去の夢を見なかった、初めての夜だった。

## 第七話 因果はメグル

S I D E ・ D

「これで隊舎内の案内は終了だ。不明な点があれば独断せず、回りに指示を仰ぐこと。良いな？」

「はい。承知しました」

「これからの時間は昼休憩ですよね！」

「そうだ……つて、誰だ貴様!!」

唐突に顔を出した男に、説明係が後ろへ一歩引いた。惣右介はというと、よく見知ったその顔に驚きの声を漏らす。

「——兄さん!!」

「おつす、惣右介! あ、ども、初めまして。惣右介の兄の、五番隊所属・藍染竜太郎です! 惣右介借りてつていいですか?」

入隊してすぐ、入隊に際するあれこれの説明がひと段落して出来た空き時間に竜太郎がやって来た。どういう勘の精度をしているのか、丁度休みになった途端現れたのには

驚いたが、自分の隊長に合わせたいと言ってくれた時は嬉しかった。

「えらく達筆な字で書かれた」五番隊執務室の札が下がった部屋の前に竜太郎は立つと、戸を叩くこともせず勢いよく開いた。そんな事をマソラの家でやったら容赦無く拳骨が飛んでくる。竜太郎が隊舎でこうだからマソラはいつも青筋を浮かべる羽目になっていたんだなと苦笑しながら、一礼して惣右介も竜太郎に続いた。

「隊長！　こいつが惣右介です！　一番隊所属と相成りました！」

「初めまして、藍染惣右介です。宜しくお願ひします」

惣右介が頭を下げると、無精髭を生やした気のいいおじさんと言った風な五番隊長・志波寒鴉シバカンアが豪快に笑った。

「あつはつはア！　おう、よろしく！　何だ何だ？　竜太郎の弟っていうからもつと脳筋っぽいのを想像してたんだが違ったな。いかにも女子が好きそうな感じだ」  
「御冗談を。それに義兄弟ですから似てないのは当たり前です」

——五大家族の一角・志波家の本家の次男で、招かれて隊長となったと話に聞いていた。「大貴族の道楽だろう」とか「気を遣う下々の気持ちも考えてほしい」とか色々

学院で言われていたが、やはり悪意ある流布は役に立たないかと再確認した。

「ちよつと待て、惣右介!! 脳筋” ってのは否定してくれねえのか!!」

「先生にも言われていることじゃないか。それに、そういう所も含めて兄さんの良いところだよ」

「うぐ……」

照れた竜太郎を見て、寒鴉が不敵に笑う。

「ほほう、竜太郎が丸め込まれてやがる。真子にぶつけたら面白そうだな」

「平子副隊長にですか? 止めた方がいいんじゃないや……ってか隊長、副隊長は何処に?」

「ああ、アイツなら今頃オレを探して八番隊舎に行ってるんじゃないやねえかな」

「え?」

何故、隊長と行動を共にすべき副隊長が単身八番隊に?

寒鴉の曖昧な言い方も引つ掛かる。

惣右介たちが首を傾げていると、寒鴉は「へっ」という感じに舌を出した。

「溜まつてる仕事を真子に押し付けたら、般若みたいな顔して追いかけてきたから撒いてきたんだ。オレよく京楽先輩と一緒にサボってるから、そっちに探しに行つたみたいだな」

得心いったらしい竜太郎が、頭が痛そうにコメカミ蟀谷を抑えた。

「……………隊長、今週何時間仕事しました？」

「ン？ そりや毎日定時までだぞ？ 隊長なんて来てりやそんだけで仕事みたいなもんだろ」

「言い方変えます。何時間書類仕事しましたか」

「……………さあ？」

カラカラ笑う寒鴉に、キレ気味に竜太郎が喚いた。

突然の展開に、惣右介は苦笑しかない。

やれやれ、と溜息を吐いて、寒鴉に隠してそつと手を動かした。呼び出し音を切るのを忘れない。

「『さあ？』じゃないですよ！ 副隊長く！ 隊長はここですよ！ 副隊長おう！」

「はっはっは〜！ 八番隊舎までそんな声が聞こえるわけ『今何処や、竜太郎？』…………え」

恐々とした顔で寒鴉が惣右介の方に目を向けると、惣右介が通信機の電源を入れて受話器を竜太郎たちの方へ向けていた。

「あの、惣右介君、それ、まさか…………」

「サアツと寒鴉の顔色が悪くなったのを意にも介さず、竜太郎が真っ直ぐに声を出した。

「副隊長、五番隊執務室です！」

「竜太郎、ちよ、ま」

『ほオ、そおんなどここに居らはつたんですか、志波隊長？——大人しゅう其処で待つとれこの阿呆ンだルアアアアアア!!』

「ヒイツ!!」 竜太郎、後任せ「させるかあツ！」うおおおオ、馬鹿力アアアア！」

がっしり寒鴉の腰のあたりを掴んだ竜太郎はもがく彼を放すまいと必死の形相だ。苦笑しながらそれを見て居た惣右介は溜息を吐いた。

「いい大人が何をしているんですか……雷鳴の馬車 糸車の間隙 光もて此を六に別つ——縛道の六十一、六杖光牢！」

六筋の光が寒鴉を捉える。

その鬼道に寒鴉が目を見開いた。

「う、動けねえ……オレが……？」

「詠唱有りの六十番台ですよ？ 動かれたら自信無くなります」

「……………」

驚きに顔を染めた寒鴉が再度口を開こうとした瞬間、蹴破られた扉が騒々しい音を立てた。一同の目がそちらへ向く。怒髪天を衝くといった形相の金髪の死神がゆつくりと寒鴉を見る。

「何や俺に言う事有りますやんな、隊長？」

「し、真子……ごか、誤解だ！ 話を——」

「問答無用!!」

蹴り飛ばされた寒鴉を見ながら、何がどう誤解なのかを説明する様を見てみたかったのだが、これから始まるであろう地獄の折檻のことを想うと惣右介は自分が場違いなのを自覚した。そつと竜太郎に目配せして部屋を出る。

「僕はそろそろお暇するよ。紹介してくれてありがとう、兄さん。……面白ひト達だね」

「グダグダになつちまつて悪かつたな……いいよ、無理に褒めなくて。五番隊員が一番分かつてんだから」

「そんな事無いよ。席次持ちでもない僕や兄さんにあれだけ気軽に話させてくれる方なんてそういないんじゃないかな。僕はここの雰囲気好きだよ」

そう惣右介が言うと、竜太郎は照れながらも「まあな」と笑った。

竜太郎たちが自分を助けることなく部屋を出たのを目の端で捉えた寒鴉は、心中涙を

流しながら真子の説教を聞き流していた。

すると惣右介が帰ったのだろう、自分を拘束していた六杖光牢が弾けて消えた。

「お、消えた」

「んなつ、早速逃げ出そうとすんな！ 縛道の六十三、鎖条鎖縛！」

押さえつけられた状態だったため縛道に縛られはしたが、体は動く。真子を蹴飛ばして窓から出ようとして、紐の様なモノに引っ張られて背中側にひっくり返った。

「ツ痛エー！」

「阿呆か！ 何でわざわざ鎖条鎖縛にした思うてんねん。アンタが大抵の縛道なら足だけでも動かして逃げようからやろ！」

真子は鎖条鎖縛を放ち切ることなく、その端を手で持つて寒鴉を繋いでいた。曲芸をする猿と猿使いの図である。そんな情けない状況に悪びれることなく、真子が二の句を継ぐよりも早く寒鴉が口を開いた。

「そうなんだよな」

「何がやねん」

「いや、副隊長の真子が放った縛道だって、オレが全く動けないなんてことは今までなかった。なのに……」

一番隊とは言え無席の……



詠唱有りとは言え六十番台の……

そんな惣右介の鬼道が完全に自分の動きを止めた。

その事実に関心が躍る。

だが、そんなことが副隊長に伝わるわけではない。楽しそうな寒鴉を見て、一層真子が怒りを増長させた。

「何の沈黙やねん……もしかしてアレか？ 俺の事まだ弄り足りへんか？ それはどういう報いを受けるんかまだ分かつたらんのやつたら……」

「違う違う違う、違います！ 有望な新人がいたら嬉しいもんだろ？」

「新人？ もしかしてさっきの茶髪？」

「そ。竜太郎の弟だつてさ」

「ああ、あれが。何やもつと筋骨隆々なん想像してましたわ」

「DA・YO・NA☆」

真子が視線を寒鴉から少し上げた瞬間、風を切る音がして真子が鎖条鎖縛の先を見ると、其処には既に寒鴉の姿は無かった。有るのは唯黒い布切れ一枚。

それはいつだったか、遊びに来……じゃなくて邪魔しに来……でもなくて査察に来た四楓院家の当主がやっていた高等歩法——隠密歩法“四楓”の参・空蟬。

「どんだけ仕事やりたないねん!! もオ追うんもしょうもなアなつてもオたやないか

……」  
がつくり肩を落とした真子が、結局他数名の席官と共にその仕事を片付けたのはいつものことだ。

一番隊まで送ると竜太郎が言ってくれてから暫くすると、とある人影を見つけて竜太郎はぶんぶんと手を振った。

「おい！ マ ユリ く〜ん！」

が、一瞬立ち止まった其の人影はそれを無視してサツサと歩いて行ってしまった。

真つ黒なペイントが目元に塗ってあるようで、表情が読み取りにくい。

「ほほう、無視か！ いくい度胸だ！」

そう言うや否や、竜太郎が走り出した。

（——速い！）

思ったのは惣右介だけではなかったようで、マユリと呼ばれた彼は何やら焦った様子で（そぞ）そ荷物を探っている。

「つつかまくえたツフウツ!!」

竜太郎が追いつく間際にマユリが円筒を彼に向け、何かを射出した。

「どうやら……網らしい。見事に身体をからめとられた竜太郎を見降ろして、”マユリ”と呼ばれた人物が露骨に顔を顰めた。

「いつもいつも何なんダネ、君ハ!! 用もないのに話しかけてこないでくれるカネ?

迷惑だと言っている筈ダヨ!!」

「うわ、なんだこれ、粘着質っ! 取れない! 惣右介っ、助けてくれ〜!」

「何やってるんだ……」

駆け寄って網を外す手伝いをする。本当に粘着質で、余程竜太郎を近寄せたくなかったことが伺えた。

それを見て帰ろうとする彼に、竜太郎はめげずに話しかける。

「待った待った、用なら有るって! こちら、オレの自慢の弟分の藍染惣右介だ。紹介しておく! 惣右介の方も、こちらは涅マユリくん。センセの御息だ」

「フン、興味ないね」「マソラ先生の! 似てないですね」

「これは化粧ダヨ!」

不機嫌そうに歩いて行くマユリをそれ以上竜太郎は深追いしなかった。

「ああなったら意地でも無視してくるからな。それでもちよっかい掛けてみたことがあ

るんだが、そしたらヒツドイ報復にあつて……退き時つて大事だよな」

「報復つて？」

「聞きたいか？」

「ああ、そういう感じなんだ……何とうか——」

惣右介と竜太郎は顔を見合わせると、一言。

「親子だねえ」

機嫌の悪い時のマソラを思い出して二人は苦笑した。

いつもの絶壁。

いつもの面子。

『ヤッホー！ 存外早く来たんだね。私はアンタに嫌われてると思つてた』  
「その通りだよ。僕は君が嫌いだ」

竜太郎に連れられて五番隊の隊長に会った翌日、惣右介は竜太郎に内緒で執務室を訪れていた。話の内容的に、相談するのは気まずかったからだ。

その日も、偶々寒鴉は居た。

「——フムフム。つまり、だ。」斬魄刀がうざくて始解できる気がしない」つて事だな？」

「色々解釈が雑過ぎませんか……いえ、その通りと言えばその通りなんです」

斬魄刀との“対話”と“同調”によつてのみ、始解と呼ばれる斬魄刀の解放が行える。始解が出来れば、斬魄刀が真に持つ力を振るうことが出来、戦闘力が飛躍的に上がるのだ。ただし始解が出来るのは一握りの才覚のある限られた死神だけ。そして、竜太郎は始解できないタイプの死神だった。

その竜太郎に、“対話”過程の話をするのは気が引けた。加えて一番隊では、始解云々以前に色々仕事で迷惑をかけていることが多くて、相談できずにいた。いい機会なので、寒鴉に訊いてみようと思つたわけだ。

「可笑<sup>おか</sup>しな話だな。斬魄刀つてのは、性格に色々あれど、主に対しては協力的な奴ばっかりだつて印象だ。ああ、これはオレの経験則な。——だから、主を煽<sup>あまつ</sup>つて、剩<sup>ま</sup>え嫌われるなんて話は聞いたことねえ。死神側だつて、自分の魂を移したものが斬魄刀なんだ。親近感やら情やらが沸くことはあつても、完全な敵意が沸くつてのは変わつてるとしか

言いようがねえ。同じ魂なんだ。喧嘩程度ならまだしも、敵意を向けるつてのには抵抗があつてしかるべき……そこんどこはどうだ、惣右介君？」

考えたことも無かつた問いに、僅かに考えて答えを出す。

「抵抗……は、無いですね。声を聞くだけで嫌です」

「おオ、正直だな……ふむ、そうか。ン〜、惣右介君の斬魄刀が、オレが生きてきた中で唯一の例外つてんなら話は別だが……オレも結構な年イ生きてるからな。そうは考えにくい」

「と、言いますと」

寒鴉が片眉を上げ、挑戦的な顔で身を乗り出した。

「つまりだ、惣右介君の斬魄刀は、わざと君に嫌われるようにふるまってるんじやねえかつてこつた」

「わざと、ですか？ 何の為にでしょうか？」

「そんな事オレに訊かれても分かんねえよ。分からねえことは当人に直接訊く、これに限る」

「う……はい、分かりました……相談に乗ってくださいつてありがとうございました」

「いいつて事よ。——ハハハッ！ よつぽど嫌いなんだな、ソイツの事。まあ、無理に聞くことはねえ。じっくりやるこつたな」

そう言われたら、やるしかないじゃないか。

——そういうわけで、現在、惣右介は刃禪を組んで斬魄刀との対話に臨んでいた。

『ふーん？ いいの、そんな風に言っちゃってさ？ 私はアンタの魂の一部。私の否定

はそのままアンタの否定に繋がるんだよ？』

クスクスと笑っている声が仮面に響いている。

——冷静に、冷静に……

「いいよ。僕の嫌いな僕が君だったってだけだろう」

『辛辣ウー！ でもそんなんじゃないやあ、』 対話』は兎も角』 同調』なんて無理じゃない？

「屈服」過程ならすんなり行っちゃいそうだけど。ま、そんな事させないけど』

挑発だ。無理に乗ることはない。

この感じだと、わざと嫌われるようにしているとは思えないのだが……

「無理かどうかはやってみないと分からない。仕方ないさ」

『ふーん……駄目だなア。駄目駄目。私の力はまだアンタには貸せない』

「……………何故」

『アンタの瞳には意思がない。私の力はそういうヤツには使いこなせない。どんなに強力な牙も、か弱い兎ちゃんが持ってたって意味無いのと同じ道理さ』

「それはそれは、始解した時が楽しみだ」

『そうだね。できればね? ……でも、そんな時が来ればいいな。自分で言うのもなんだけど、結構綺麗な名前なんだ、私。呼んでほしいなア……』

その声が遠のく。そう言えば、訊きたいことを聞くのをすっかり忘れていたことを思い出す。

けれど、いつもと違う雰囲気言葉が詰まって、言い合いはうやむやのまま終わった。

## S I D E ・ Q

「おめでどう、サクシユウ咲秋」

「あつ、そーちゃんじゃん! ありがとう〜!」

“ 咲秋 ” と呼ばれた男性が、呼んだ男性の方へと駆け寄った。相変わらずにこやかな彼に、普段仏頂面な “ そーちゃん ” が苦笑した。



「存外、紋付袴が様になっているな。ただでさえ童顔で、今は顔も緩み過ぎだというのに」

「貫禄つてヤツだよ！　それで、どうだいそーちゃん！　彼女の白無垢は！」

「美しいな。結ムスほどではないが」

「おお……それって僕どう反応したらいいの?！」

「存分に迷うがいい。いい気味だ」

珍しく笑みを零した“そーちゃん”がクスクス肩を揺らす。その二人に歩み寄る女性性が一人。

「あなた、あまり兄様を御引き留めにならないでくださいませ。兄様は今日の主役なのですから。兄様も、新婦を待たせてはいけませんよ?」

「分かっているって！　ちょこつとだけ！　結も来てくれてありがとう！」

「当然です。ではあなた、兄様とのお話が御済みになりましたら、席に戻っていらつしやつてくださいませ。私は先に戻っております」

「分かった」

彼女の背を見送った咲秋が、今度は口角を上げた。

「ふふ、〃旦那様あなた〃、か。いいねえ新婚。初々しいねえ」

「お前も今日からそうだろう。あまりふざけているようだと、また文句を言われるぞ」

「じー様方の言う事なんか気にすること無いよ。それに、彼らに僕らへ口出しする権利は元々ないんだからさ〜」

「そうとも言えんぞ。もう聞いているだろう？——佐伯家のことだ」

“そーちゃん”の顔が影を孕む。咲秋の方も、僅かに真剣な表情になった。

「ああ……禅ちゃんのことか。確かに良くない前兆だよ。でも彼以外、当主候補がいなかったのも事実。違う？」

「……奴はまだ浅薄だ。下手に力のある子供は厄介極まる。不穏な動きなど、数を上げればキリが無いほどになってきているしな。傀儡とまでは言わんが、爺連中の意向が大分入っているのは確かだろう」

「厄介なことだねエ……一応ちよこちよこ手は回してるんだけど、そ「咲秋様〜？ 咲秋様は何処にいらっしやいますか〜?!」——おっと、これ以上はまた今度。こんな時期だからこそ、楽しんで行つて！」

ひらひらと手を振りながら咲秋が駆けだした。残された彼は一つ息を吐くと、妻の待つ席へと歩み始めた——

来る変化は波紋のように

## 第八話 交錯するセカイ・前編

### S I D E ・ D

惣右介が一番隊員となつてから十年。

彼はその勤勉さと資質から異例の速さで昇進し、現在十席を冠する程になっていた。

やっかみなどが無いとは言えなかつたが、一度実戦で彼の姿を見ればそういう者達の口は閉じた。

始解もしないままに虚を屠るその姿に、隊の内外を問わず先達は負けられないと鍛錬に励み、後進は彼に憧れる者も多かつた。

現在惣右介は執務室に呼びだされ、惣右介は七席の先輩と共に執務室に向かつている。

執務室の中には総隊長兼一番隊長、山本元柳斎重國が待っていた。

「よう来た。今から五時間の後、二人には自身の班を率いて現世に虚討伐に行つてほし

いのじゃ」

「はっ！」——しかし、何故二班なのでしょいか」

現世は通常、人間五万人に死神一人の割合で現世に配備されるのが常だ。それが二班の計十二名で同じ場所に向かえというのだ。何か厄介なことがあると勘ぐってしまうのは仕方のないことだった。

それは総隊長も同感だったようで、眉一つ動かさずに惣右介の問いに答えた。

「ちと数が多いようでのう。加えてあそこには……いや、何でもない。少々危険が伴うようでのう、お主らを筆頭に発つてほしいのじゃ」

「……承知いたしました。任務地は何処プラスでしょうか」

「——重霊地、空座町。恐らく整もプラス多く居るじやろう。魂葬も出来るだけ行ってほしい」  
「承知」

一礼して、二人は各々準備を始めた。

——場所は移って、重霊地・空座町

『藍染十席！ 伍ノ肆拾陸番にて虚の群れを発見いたしました！』

「ありがとう。そちらに急ぐよ。皆が集まるまで待機しておいてくれ」

通信機から部下の声がして惣右介は答えた。

思っていたよりもずっと虚の数が少なかったため少数ずつに分かれて警戒していたところ、群れていたらしい。道理で見かけないわけだ。瞬歩を行いながら、霊圧知覚を研ぎ澄ます。報告の通り群れた虚を感じして、惣右介はふと違和感を覚えた。

（——この距離でははつきりわからないが、少し虚が集まり過ぎじゃないか？ 嫌な予感がする……）

追従する二人を千切らぬよう加減しながら、それでも出来る限りの速力で惣右介は走った。

惣右介の小班が駆け付けると、残りの部下どころか虚の姿形も見えない。

霊圧の痕跡は有るが、随分薄いため移動しているようだ。

（移動したという連絡は無かった筈だ。……連絡が、無かった）

最悪の展開が頭を過る。その動揺を他に気取られぬよう、彼はゆっくりと深呼吸をした。

「藍染十席、如何なさいますか」

「取り敢えず周囲を警戒しておいてくれ。僕はもう一度連絡を取ってみるよ。——神崎君、応答できるかい？ 現在地と状況の報告をしてくれ」

『ザザ……あい……ザ……』

「神崎君？ 機器の故障なら予備を——」

部下の声が聞こえて安心したのも束の間、虚の様な霊圧が膨れ上がった。

限りなく虚に近いのに、何処かそれより濁ったような……

今まで感じた事の無い霊圧だった。

それに紛れて分かりにくいのが、近くに彼の部下の——それもかなり弱った——霊圧を感知した。他にも複数の変わった霊圧を感じる。

「総員、戦闘態勢！ 今現在増大中の霊圧を発している虚の下へ向かう！」

「はい！」

後の二人も表情を引き締めると、再び最大速力で目的地へと走った。

残りの三名の班員は道の真ん中に固まって倒れていた。

罨を警戒して周りの霊圧を探るが、何かがいる気配はない。先程の変わった霊圧はここから少し離れた位置にある。即座にそう判断して部下に駆け寄る。

「皆、無事か?」

「あい、ぜ……つせき……」

「神崎君! 酷い怪我じゃないか……これは虚によるものじゃないね? 一体誰に……」

彼らの傷は殆どが斬り傷だったが、虚の持つ刃物より鋭く、されど死神の斬魄刀の切り口より鈍い。

惣右介の問いに神崎は力なく首を横に振った。

「もうし、つけ、ありま、ん」

「構わない。救護部隊を要請するから、もう安心するんだ。休んでいてくれ」

「十席! 四番隊は二十分後に到着の予定だそうです!」

「? 橋七席の班はもうじき合流できるそうです!」

連絡を取つてくれていた二人に領いた直後、? 橋七席他五名が合流した。

「藍染! これは一体どういうことだ?」

「不明です。虚が確認できなかつたため少数で索敵中、その内の一班がその群れを発見。合流した時には既にこの状態でした。襲撃者は不明です」

「うむう……奥にあるあの霊圧は？」

「不明です。確認しようにも動けませんでした」

「不明ばかりではないか！ ……ま、今言っても仕方あるまい。ならば藍染、無事な班員二名を連れてあの虚の方を頼めるか。索敵優先で無理をせず、人手がいるなら呼ぶんじゃ」

「はっ！」

不思議な気配の近くまで来る。連れてきた後の二名も緊張した面持ちで後ろに控えていた。

そつと惣右介が覗くと、虚と思しき化け物が道の真ん中に立っていた。その放射状に人間が倒れている。この人数を保護しながら戦闘を行うには、人手が足りないかもしれない。断じた惣右介が後ろの二人に振り向くことなく指示を出した。

「——田中君は？ 橋七席に状況説明と応援要請、四宮君は僕に続いて周りに倒れている人間の安否確認及び安全確保！ いいね？」



「はい！」

牛の様な仮面をかぶった化け物が片腕を掲げた。

倒れている人間を襲うつもりらしい。咄嗟に飛び出しそれを斬魄刀で受ける。

「くッ！」

重い一撃。

先程から感じていた違和感がここに来て一層明白になる。

「はああっ！」

腕を撥ね退け、敵を正面から見据える。

その顔を見て惣右介は目を見開いた。

『アアン？ 何だ、テメエ……死神！ はっはあ、オレアついでるぜえ！ ちょっと力が

有ってもコイツらはたかが人間。死神の魂の旨さには敵わねえ！』

「お前は一体……虚ホトリ、なのか……？」

後方から牛のように見えていた仮面は三分の一ほどしか在らず、面の無い部分からはその卑しい笑みが惣右介に向けられていた。

『ククク……さあ、何だろうなあ？ 少なくとも、オメエみたいな若え奴が見てきたよう

な雑魚共とは比較になんねえ、よっ！』

再び振り下ろされた腕は先程の威力を遥かに凌駕していた。咄嗟に後ろで倒れてい

る人間を抱えて飛び上がる。

『他人の心配たア余裕だなあ、オイ?』

「——縛道の三十、嘴突三閃!」

『「キドウ」って奴か? しかも三十? 効かねえよ、ンなもんはよお!』

惣右介から放たれた金色の鳥嘴を虚もどきが腕で払おうとした。しかし鬼道はその腕に打ち碎かれること無くそれを地面に磔にした。

『何だと?! 前喰らった死神は六十とかでも飴みてえに柔やわかったぞ!!』

「僕の霊力は他の死神より少し多いみたいなんだ」

気絶していた人を遠くで降ろした惣右介は瞬歩で化け物の首元に立ちなおした。斬魄刀をそつとその首筋に当てると、化け物がゴクリとつばを飲み込む音が妙に大きく聞こえる。

「答えてくれ。お前は一体ナニモノだ?」

『答えれば見逃すのか?』

「……僕は死神だ。人間や死神を喰らうモノを見逃すことは出来ない。でも——どうせ斬られるなら、苦痛の無い方が良いだろう?」

眉間に皺を寄せながら惣右介が言うと、鳩が豆鉄砲を食ったような顔をした化け物は数秒の後、さも愉快そうに笑った。

『あつはつはア！　ンダよ、中身は鼈甲飴みてえな奴だなア？　自分を襲つた奴に同情

するたア甘え。でもいいいぜ、教えてやるよ。オレは「破面」——虚の仮面を捨て、死神

の領域へ足を踏み入れたモノ。虚から進化した存在だ!!』

「虚から進化!!　大虚メノスの様なモノか?」

『いんや。あれは何処まで行つても虚の一種でしかねえ。あんなのと一緒にすんなよ』

嘲笑した破面は体の力を抜いた。

『オラ、信じる信じないはオメエの自由だが、やるならさつきとしろよ』

「!——ああ。『白伏』」

白伏によつて意識を失つた破面の喉元を掻き切る。

苦痛は無い筈だ。

だが無抵抗になつた相手の命を刈り取るこのやり方は、惣右介は好きではなかつた。

「藍染十席!」

斬魄刀を直し、昇華していく破面を見つめて突つ立つていた惣右介に向かつて、四宮が駆け寄つた。倒れていた人たちの安否確認が終わつたのだろう。

「もう終わったんですか」

「うん。四宮君、彼らの様子はどうだい?」

「はい。全員酷く消耗していますが、命に別状は有りません。ですが……………」

戸惑った様子の四宮に惣右介は首を傾げた。

「どうしたんだい？」

「いえ、なんと言いますか、状況だけ見ると、恐らく彼らは虚に襲われたのではなく虚を襲っていたのではないかと思われれます」

咄嗟に周囲を見渡して状況を頭に入れ直す。

それを見ると、確かに一方的に人間たちが襲われていたわけではないのが分かった。

破面を中心に放射状に入っている抉られたような跡が、破面からの打撃にしては深く、鋭いものが多い。しかもそれらは破面に近づくほど深く抉られていた。つまり、何か鬼道の様なモノで四方から破面を狙ったかのような状況になっているのだ。

「人間が、虚に立ち向かっていた……………」——そんなモノ、教本くらいでしか見たことが無い。確か、名は……………」

惣右介が顎に手を添えて考えを巡らそうとした時、伝令心機が高らかに鳴り響いた。

「はい。こちら藍染。どなたですか」

『十席！こちら田中です。？橋七席と合流できたは良いのですが、こちらにも虚が多数発生いたしましたして応援どころではなくなりました。申し訳ありません』

「大丈夫、こちらは片付いたから。僕らもすぐにこちらへ向かうよ」

『承知しました。宜しくお願ひします!』

「通話を切るなり四宮と駆け出した惣右介は地面に残った痕を見た。それは神崎たちの傷跡によく似ていた。

合流する頃には虚は大分片付いていた。

戦闘の中心から少し離れた位置で、虚に人間が襲われかけているのが目に入る。四宮をそのまま応援に行かせると、惣右介は一人そちらに刀を振り上げた。

『グオオオオオ……』

惣右介に斬られた虚が昇華していく。

襲われかけていた人の方を向くと、その人は惣右介に反応した。

因果の鎖の痕跡はない。霊圧もあるようだし、視える人間だったらしい。

「大丈夫ですか? お怪我はありませんか?」

惣右介が手を差し出すと、その人は躊躇いながら手を出しかけた。すると――

「ッ!!」

その人の顔が横に殴られた。

「なっ!」

驚いて顔を上げると、一人の男性がさっきの女性を足蹴にしていた。

「この役立たずが! 撒き餌程度で集まって来た雑魚虚に後れを取ったばかりか、よりにもよって死神に横槍を入れられるとは……………」

「もうし、わけ、ありません……………」

「謝つてすむものですか! この恥知らずが!!」

その男が足を大きく振り下ろそうとしたのに咄嗟に割つて入り、惣右介が女性を担いで瞬歩で遠のく。男の眉が引き攣った。

「死神ですか……………我々のことに首を突っ込まないでいただきたい」

「我々? 無抵抗な女性に暴力を振るっていい集団が現世にあったとは知らなかったな」

「その反応、どうやら本当にご存知無い様だ。万死に値する無知ですよ」  
吐いて捨てる様に言ったその言葉と共に、男が手首の装飾品を出した。

それが光ったと思つた瞬間、青く光る弓の形になった。

教本でしか見た事の無いソレは——

「滅却師!」

「おや、多少はモノを知っていたようですね。今更意味のないことですが」

男は冷たく、しかし奥底ではギラギラと輝いた瞳で矢を番えると、放った。こちらには先程の女性もまだいるというのに！

防御系の鬼道を唱える時間はない。

（間に合うか!!）

手が斬魄刀へ延びる。

青い光が迫る。

威力

速度

距離

駄目だ、間に合わない！

せめて、彼女だけでも――

バチインツ……………

## 第九話 交錯するセカイ・後編

青い光が至近距離から真つ直ぐに惣右介の方へ飛んでくる。

咄嗟に斬魄刀を抜こうと体が動くが、間に合わない。

そう思つて女性を庇おうとした瞬間――

バチンツ……

何かがぶつかり合うような大きな音がして、目の前で矢が弾け飛んだ。小さな光が流星の如く刹那の尾を引いて舞う。

惣右介は、呆然としながらいつの間にか止めていた息を吐いて、斬魄刀の柄に手を掛けた。

今、何が起きた？

この男は何をしたんだ!!

次弾に備えて惣右介は距離を取つて構えた。しかしそれを気に掛ける素振りも無く、滅却師が惣右介のずっと後ろを睨みつけた。

「貴方……石田ですか!!」

「久しいな、センジロウ 禅治郎」



後ろから声がして振り向くと、同じように弓を構えた男が立っていた。

老齢と錯覚するほど白く短い髪と、反対に墨を流した様な黒く鋭い瞳。よくよく見ると、佇まいや肌から、聞こえた声の通りかなり若いことが分かった。

不動の構えの彼に、先程の滅却師が声を荒めた。

「何のつもりです?! その女はわが家が始末をつけます」

「物騒だな。何があつた」

「質問しているのはこちらですよ! 弓を降ろしなさい!」

この様子だと、“禅治郎”と呼ばれた滅却師クインシーの放つた矢を、“石田”がピンポイントで狙い撃ちして相殺したらしい。惣右介たちを置き去りにして、二人の会話が進んでいく。

「佐伯家当主・佐伯禅治郎サイキゼンジロウが直々に手を下さねばならないようなことをその女がしたとは思えん。無益な殺生を目の前でされると寝覚めが悪い。それにお前、その死神ごと滅すつもりだったな? 軽拳は慎んでもらおう。あまり度が過ぎると、我々も看過できん」

「ツ~~~~! ……帰ります。片桐、貴女はもう二度と私の前に姿を現す必要ありませんから」

「そんな……御方様!」

女性の悲痛な叫びに耳も貸さず、「佐伯」は消えた。

あれは死神で言う所の瞬歩の様なモノだろうか？

あの速力だと、席官にも目で追えない者も居るだろう。それに全力ではなさそうだったし……

項垂れる片桐と呼ばれた女性に掛ける言葉を失っていると、石田が惣右介たちの方へ歩いてきた。

「災難だったな。何があった？」

「僕が彼女を虚ホロウから護ったら、矢を射られたんです」

「成程な。——片桐、と言ったか。お前、混血統滅却師ゲミシュト・クインシーだな？」

「は……い……」

呆然と彼女が答えたのを一瞥して、彼は惣右介に視線を向けた。

「死神、今回はお前にも非がある。滅却師の戦いに手を出すということはその誇りに手を出すという事だ。それを我々は許さない。禅治郎アサヒは少々短気すぎるがな」

「しかし——」

「分かっている。滅却師の思想は死神には理解しがたいだろう？ 私とて死神のソレに對してそうだ。だが、敢えて言うなら救った相手も悪かった」

「それは、どういう……？」

「この女は混血統滅却師だ。簡単に言うなら雑兵の類。純血統滅却師エヒト・クインシーを救っていたらそれはそれで面倒だったかもしれないが、それがあの佐伯家に連なるモノだったから尚、運がなかった。奴らは敗北とは死と同義と信じて戦場に赴いている。誇りを汚され、刺あまつきえ長らえたとなれば、一生その汚名は消えん。現にこの女は路頭に迷った」

佐伯が去つてから微動だにしない片桐が目の端に映る。

薄々分かつていた事実を石田に言われて、喉の奥が渴いていくのを感じる。

痛い、苦しい、声が出ない。

ならばどうすれば良かったのか？

見殺しにでもすればよかったのか？

惣右介の瞳が揺れたのを見て、石田は目を細めた。相変わらず無表情のままだ。

「お前はまだ青いな。綺麗ごとだけでは戦場で死ぬ」

「ソレの何が悪い！ 死神は全ての魂魄に対して平等でなくてはならない。僕に君らの誇りなど分らない。だが、護りたい思いが有るのは同じだ。それが僕にはこうすることだったというだけだ！」

「ほう。ならばその片桐という女、どうするつもりだ？」

「ッ……………」

惣右介が言葉に詰まったのを見て、彼が弓を引いた。

今度は咄嗟に詠唱できた。

「縛道の三十九、円開扇！」

重い衝撃が円開扇から伝わる。直に食らうのはマズイ。

次発が来る前に再び彼女を抱えて移動する。

取り敢えず、？橋七席の下へ——

「仲間の下へ、か。その先は？」

頭上から声があった。咄嗟に右方向へ飛ぶ。

土煙と共に、地面が抉られた。

立ち止まる暇もなく、雨の様な連撃が惣右介たちを襲った。

「戸魂ソウルソサエテイ界にでも連れて行くつもりか？」

「違う！」

そうだ。僕では真に彼女を救えない。

イチかバチか——

刹那の間隙に彼女を置き、少し離れた。斬魄刀を鞘に納めたまま片腕を前に構える。

「赤火砲！」

「鈍い」

惣右介から放たれた火球は真っ直ぐに石田へと飛んだ。されどその先に既に彼は居

ない。

先程の“佐伯”のように一瞬で移動した石田が惣右介の隣で矢を番える瞬間。

「破道の四、白雷！」

「!!」

弦の一点に狙いを絞って白雷を放つ。

さっきの滅却師もそうだった。彼らの高速歩法は速いが、見えない程じゃない。だから、相手が反応できない近さと早さで攻撃すれば必ず当たる。それに、恐らく――

白雷に靈子を崩されて、一瞬彼の弓が乱れた。

「六杖光牢!!」

六筋の光で、完全に彼の動きが止まる。

背後で微かな気配の揺らぎを感じた。

そう、それでいい。

どうかそのまま――

「はあああッ！」

「……ほう」

斬魄刀を抜き、上段の構えから斬りかかる惣右介に石田は抵抗しなかった。

刀が振り下ろされる瞬間、惣右介は僅かに体をずらした。

元々心臓が合った場所——体をずらしたため今は肩だが——に正確に矢が向かう。惣右介の肩に当たって進路がずれた青い光が、彼の眉の上の肉を僅かに削いだ。

「わ……私はまだ、戦えますッ！　ですからどうか……御方様……」

震える声で片桐が言う。

石田の六杖光牢が解ける。

惣右介が肩と頭から弾ける様に血を散らしながら倒れた。

惣右介と目が合った石田は、視線を逸らすと無言で彼女に近づいた。

「良い腕だ、片桐」

「……………」

「お前を捨てるのは、禅治郎も見る目がない。うちへ来ると良い。石田家当主として、私がお前を迎えよう」

「!! ——あ、ありがとうございます！　命を賭してお仕えいたします！」

片桐から距離を取り、息を荒めながらも意識を繋ぐ惣右介の隣に石田が立った。惣右介を見降ろしながら石田が眉を顰める。

「貴様の掌の上か？ 死神」

「……貴方も、そうするつもりだった、でしょう？」

片桐は、死神に己の無力を証明されたがゆえに古巣を追放された。

ならば、それを現時点で払拭すればいい。——手取り早いのは、死神をこの場で倒すことだ。

それに、これは賭けの面が大きかったが、石田は片桐を殺すつもりはないはずだという考えは正しかったらしい。でなければ、それなりに地位があるらしい佐伯に歯向かってまで、彼女を助けたりはしなかっただろう。さっきの戦闘だって、彼は全く本気で闘ってはいなかった。佐伯より近い位置から放たれた矢を円闌扇で防げたのも、白雷で正確に弓を狙えたのも、彼が手を抜いていたからの筈だ。

だから惣右介は、わざと大降りに、大げさに、派手に立ち回り片桐に自分を狙わせた。

彼女は死神を倒す実力が有る役立たずなどではないと彼女自身が信じ、行動できれば、彼女の未来が開けるはず、と。

一歩間違えば死んでいたが、下手に石田と戦っても同じことだ。

「……………これで片桐は戦線に復帰できる。死神に対する負い目もかなり払拭できただろう。確かに私は彼女を拾うつもりだった。お前をどうするかだけが問題だったが、自身を犠牲にしてまで行動するとはな」

「あのとき、察してくれて、よかったです」

六杖光牢で彼を封じた時、下手に抵抗されれば片桐からの一撃を上手く躲せなかった。もしかしたら、片桐が完全に戦意を喪失していて最後まで斬魄刀を振り下ろしていた時、怪我をさせたかもしれないなかった。

「ふん。押し付けるとは図々しい。だが、悪くない。ただの甘ちゃんではないようだな。名は何という?」

「護廷十三隊、一番隊第十席・藍染惣右介です」

「石田宗弦ソウケン、滅却師だ。死神は好かんが——藍染、お前は気に入った」

「それは、どうも……………」

回道の光を胸に当てながら惣右介は苦笑した。

お節介でこんな傷を負うとは。後で始末書ものだ。

取り敢えずの回復が終わって惣右介が立ち上がると、宗弦に向き直った。

「何だかんだで貴方も甘いです。……………こんなことして大丈夫なんですか? 佐伯に楯突いたりして」

「構わん。元々あそこは犬猿の仲なのだ。そういうことは分からずにそこまで体を張ったのか」

「……………」



「知らんのなら良い。いずれ……知ることになる」

苦渋に満ちた宗弦の顔の意味を、惣右介はその言の通りすぐに知ることになる――

任務終了時の集合地点に着くと、神崎たちは既に四番隊によつて尸魂界へと搬送されており、惣右介の班の四宮と田中、そして責任者の？橋七席が待機していた。七席は惣右介の顔を見るなり安堵の表情を浮かべ、それを引き締めながら惣右介を叱責した。

「藍染ン！ 集合時刻を大幅に過ぎておる！ 何をしておつた、バツカ者オ！」

「申し訳ありません！ 一時戦闘不能に陥り、回復に努めておりました！」

「戦闘不能!? 何があつた」

惣右介は逡巡して、掻い摘んでそれまでの経緯を述べた。

虚に襲われていた人間を一名救助。滅却師だった彼女の主人と接触し、戦闘になったが別の滅却師の介入によつて軽傷で済んだ、と。

個人名は出さない。無いとは思うが、もし調査などをされたら霊子構造で片桐が惣右介を傷つけたことがバレてしまう。片桐が今度は死神に狙われるなんて笑えない状況

にはしたくなかった。ケガをしたのは茶番のせいだが、そこはお茶に濁した。

「滅却師に！ そういうことは逐一報告せい！ して、その名は聞かなんだか」

「はい。申し訳ありません……」

「そうか……貴様を助けたものの方もか？」

先輩のその言い方には、石田への敬意が含まれていた。

命を救う、その重みを知っているヒトの言い方だった。

「……いえ、その人の名は——石田宗弦と言うそうです」

「何だと?!!」

思わぬ食いつきに惣右介はちよつと引いた。

「御存知なのですか」

「知っているも何も、滅却師の“共存派”筆頭ではないか!! 成程、藍染、運が良かった

な」

「共存派、ですか」

「ああ。お主も耳にしたことぐらいあるう？ 現在死神と滅却師は協議を重ねておる。

最近奴らの活動が活発になって来よつてのう……虚の減少に歯止めがかからんだ」

死神が虚を倒すという行為は則ち、斬魄刀によって罪を清め、再び輪廻の輪の中にその堕ちていた魂を戻すという行為だ。対して滅却師の行う討伐という行為は、その魂魄

の消滅を意味する。少数ならば尸魂界側から現世へ送り出す魂魄の量を微調整すればいいだけだ。しかしその数が一定数を超えると、現世と尸魂界に存在する魂魄の数のバランスが崩れ、最悪の場合世界諸共崩壊するとされている。

滅却師が増えてきたせいなのか、はたまた別の何かが起因しているのか、滅却師はここ何年かで一層虚討伐<sup>その行為</sup>を加速させているのだそうだ。止めるよう死神側から何度も接触しているのだが、相手は聞く耳を持たない状況が続いていた。

「ここらに限らず、特に死神との共存に積極的な一派を纏めているのが先程の石田宗弦率いる石田家と、黒崎咲秋<sup>サクシユウ</sup>率いる黒崎家だ。対してこちらの言い分を聞かない滅却師は——数がこつちの方が圧倒的だからな、一人を挙げるなら佐伯禅治郎率いる佐伯家なのだ。佐伯の方は血の気の多い奴が多くてのう……協議にならんのだよ」

そういうことか、と惣右介は一人納得した。

石田と佐伯のあの態度の違い、石田の言葉に今更ながら合点がいった。

「ああ、そうじゃ」

七席が思い出したように惣右介に視線を戻した。

「仕方のなかったこととはいえ、始末書は覚悟しておけよ？　最近は滅却師に対して死神も敏感じゃからの」

「……………はこ」

惣右介はがつくりと肩を落とした。

その夜、彼は夢を見た。

過去の記憶だろうソレは珍しく、いつもの様な悪夢ではない。ただ、不思議なことに、自分の体の動きが少し不自然だった。

顔を上げると、目に映るのは幸福そうな両親の笑顔。

『ああ、惣右介——運な——うね、貴方。こ——みならず、——にまで——許され——て……』

『ここので——れるのは初———そうだよ。———ことだ！』

聞こえない。

確かにその会話を聞いた記憶はあるのに、何か靄が掛かったように大切なところが思いつかない。

(両親の顔がいつもとは全然違う……そうだ、確かに御二人はよく笑っていらつしやつ

た……ような気がする。何故今日はこんな夢を見たんだろう？　こんな幸せな夢が見られたんだ、今日の任務での疲れも吹き飛んでしまうな）

微睡まじろみながらその記憶を見続けていると、彼が毛嫌いしている声が耳元で響く。

『ふむ、思い出すにはまだ早いかなぁ……いいよ、我が主。私は気が長い方なんだ。ゆっくりじいっくりその時を待つとしよう』

微かに笑みを含んだその言葉で彼は飛び起きた。心臓が跳ねる。冷や汗が吹きだす。震える手で寝巻の胸元を握りしめ、暴れる息を落ち着かせる。

（何を動揺しているんだ、僕は……どうせ斬魄刀アイツの嫌がらせだろう？　僕を煽って楽しんでるだけだ、きつと……）

折角のいい気持ちだが台無しだと強く目を閉じ眉を寄せた。

暫くして落ち着いてからも耳に纏わりつく彼の斬魄刀の言葉のせいで、結局その後惣右介は眠りにつくことが出来なかった。

## 第十話 過（よぎ）るクロ・前編

S I D E ・ D

現世任務から数日後、惣右介は総隊長に呼びだされた。

そんなに先日の件が不味かっただろうかと不安になりながらも執務室の戸を叩く。

「十席の藍染惣右介です。招集に応じ、馳せ参じました」

「うむ。入りなさい」

「はっ。失礼します」

押して開く形の戸に軽く力を籠める。

音もなく開いたそれを潜り、右を向けば……

「おはようございます。山本総隊長」

「お早う。早くからすまんのう。さ、ここへ」

「はい」

肌がチリチリと焦がされる様な錯覚さえ覚える威圧感を放って、総隊長がそこに居た。表情はいつも通りだが、もしかしたらかなり苛ついている……かもしれない。

「滅却師クインシーと接触したそうじゃのう?」

「はい」

「一名は、かの石田宗弦だったそうじゃな。彼奴きゃつのことはよう分からぬが、お主はどのよ  
うな人物と見た?」

「理知的な人物かと。死神と滅却師双方に関して思考し、何が最善かを選択しようとし  
ているように見受けられました。戦闘力も高いと思われます」

ちらりと総隊長の瞳が惣右介を覗いた。

「ふむ……して、藍染よ。お主に弓を引いた滅却師の名は何じゃ?」

「ですから、分かりま「藍染。大事なことじゃ」——理由をお伺いしてもよろしいでしよ  
うか」

殺気がじりじりと肺を焼く。呼吸するのが苦しい。脂汗が滲む。

最後の発言は前言の撤回に等しかったが、状況の理解が先だと惣右介は判断した。

——総隊長が何故それほどまでに荒れているのが理解できない。

話の流れからして、滅却師関係なことは明白だ。けれど先日 of 件に関しては惣右介  
は、怪我をしたとは言え軽傷だったと報告してあるし、任務中結局他に問題は無かった  
筈だ。神崎たちの怪我が問題なのだとしたら当人たちがこの場に居ないのは不自然。  
とするなら、彼の心中を脅かしているのは何かこれに関わった別の何かか?

沈黙した惣右介と入れ替わる様に、総隊長が口を開く。

「石田宗弦は、“共存派”だけあつて死神に敵意は無いように思える。されど、呼び掛けでも協議の場に姿を現したことが無いのじゃ。その真意が読めぬ。じゃから、顔を見知ったお主を遣いとし、彼奴を協議の場に引きずり出してほしいのじゃ。できることなら、共存に反対する意見の滅却師も交えてのう。彼奴がその気になれば、敵対派の頭目、佐伯禅治郎を引きずり出せるじやろうと踏んだ。しかし、もしお主に弓を引いたのがそ奴に連なる者じやつた場合、それは叶わぬ。どうじゃ?」

よりにもよつて、だ。

“佐伯家に連なるモノ”どころか、“頭首本人に射られました”など言えるはずがない。まさか総隊長も、そんな事になつていたとは思わないだろう。ここはぼかしておくに限る。

「……残念ながら」

「そうか。相分かつた。では話した通り、石田宗弦にのみでよい。数日の後、協議を申し入れに現世へ発つてくれるか、藍染」

「拜命いたします。——出立前に一つ、お伺いしてもよろしいでしょうか」

「何じゃ?」

総隊長が首を傾げた。



未だに息苦しきは消えない。

「総隊長は、何故それほどお怒りでいらつしやるのですか」

「……！ ……何でもない些末事じやよ。お主に対してではない」

「では、“石田宗弦”に対してですか？ それとも“滅却師”でしょうか」

「一つと言うたぞ。任務に戻るのじや」

「……………はい。若輩者の無礼をお許しください。——失礼いたしました」

扉が閉まると同時に胸を撫で下ろす。

どうやら総隊長は……………

——滅却師を良く思っていないらしい…………

戸が閉まると同時に、一番隊副隊長・佐々木部長次郎が青い顔をしてこちらに駆け寄って来た。

「ノ字齋殿……」

「安心せい、長次郎。お主に対しても怒つとらんよ。儂が考えておつたのは先日の報告の件じゃ」

その一言で長次郎の顔色が変わった。

「——合点が行き申した。しかし……」

長次郎が今度は悔しそうに顔を歪めた。何に悔しがっているのかなどすぐにはわかる。

「そう気を落とすな。儂が心中穏やかでなかつたのは気付かない方が普通じゃよ。現にお主でさえ気付いておらんんだからな。恐らく藍染は儂の霊圧の僅かな乱れを感じたんじゃないろう。お主でも気づづかん程小さなものう」

「それ程の霊圧知覚をあの者が持っているの仰るのですか!？」

「応。あ奴は飛びぬけて才覚のある死神じゃからの。長次郎もうかうかしておれぬやもしれぬぞ?」

「うかうかなどしておりません!」

ムキになってそう言った長次郎がその後どれほど熱弁したかは割愛させていただく。

長次郎の主張があらかた終わった後、再び執務室の戸が開いた。

……それはそれは勢いよく。

「重国イ！ 邪魔するぞオ！」「ちよ、千曉さん！ チアキ ノックくらいしなないと！」

荒々しく戸が開き、二人の人物が入ってきた。

褐色の肌に黒髪の壮年の男性と、白い肌に薄い色素の髪の女性だ。

「千曉に哀か。久しいのう」

「ン。老けたの、重国」「お久しぶりです、元柳斎殿」

尚も横柄ともとれる態度をしているのが、戸を開けた男性——四楓院千曉だ。しほういんちあき 正一位の五大貴族の一角にして、靈王からある役目を負った一族だ。

もう一人は、浦原哀。うらはらあい その役目に関わるもう一つの一族の長である。

「話は聞いておる。靈王宮へ発つのはいつじや？」

「ここからとんぼ返りじやよ。志波を待たせとる。つたく、祭事の度に呼びだされるこつちの身にもなれつちゆうんじや」

「まあまあ千曉さん、祭事が多いということとはそれだけ尸魂界が平和だという事じやありませんか。子供たちの世がそうであるのは何よりですよ」

「チツ……」

四楓院家が負う役目とは、ソウル・ソサエティ “天賜兵装番”——天から授かりし宝具とされる特殊な道具の管理、封印——だ。その祭事の裏方を務めてきたのが浦原家——護廷十三隊に例え

て言う所の鬼道衆に当たる役割——になる。

因みに志波というのは五大貴族の一角で、異次元にある霊王宮へ専用の輸送機を打ち上げる役割を担っている。

千暁の娘と哀の息子は護廷十三隊に入隊しており、二人とも二番隊に務めていたはずだ。既に二人とも席官ではなかっただろうか。

「わざわざすまんのう。じゃが、時間が詰まってもここに寄ったということは、何か用が有ったんじゃないろう?」

「応。夜一と喜助を連れて行くぞ」

「霊王宮にか?」

「はい。彼らは我々の後継者です故、霊王様と王族特務の面々に顔合わせを同時に行う所存です。二人は今どちらに?」

千暁が要件を述べてから書類を繰っていた長次郎が、哀の問いに答える様におずおずと言った。

「四楓院夜一四席は現在、遠征中です。浦原喜助七席は特に命が出ている様子は無いのですが……」

「何じゃと?! あ奴の方が必要じゃろうが! ほんに猫みたいなやつじゃ! 居らんでよいときばかり目に入りおって……」

「千曉さん、今回ばかりは事前に申し出ていかなかった我々の落ち度ですよ。仕方がありません、喜助だけでも連れて行きましょう」

声を荒めた千曉の背を、哀がそつと撫でた。ヘラツと笑う彼女を、千曉が腹立たし気に睨む。

「哀！ お主さては、こうなると薄々勘付いておつたな!!」

「まあ、貴方のことですから、連絡はしていらつしやらないだろうとは思っていました」

「哀、貴様ああ!!」

「顎が痛い!!」

哀が千曉の突きで吹っ飛ばされたのを見て、まだまだ代替わりは早そうだと重国は思った。

因みに、二人はこの日結局自分の子供に会うことは出来なかった。

隠密機動あるある——任務内容の漏洩を防ぐための偽装だ。

密命を下した当の本人（千曉）が忘れていたのだから、どうしようもない。

彼にとっては取るに足らぬ、注意すら裂かぬほどの些事だったのだが、それはほんの少し後に書くことである。

(この本もだ……滅却師に関する記述のある本自体少ないのに、その内容も似たり寄ったり。彼らの詳しい力や上下関係、歴史や組織構成が知りたいのに……)

惣右介は隊舎にある資料室に来ていた。

現世に出入する前準備ということもあるが、何より総隊長の態度が気になった。

・滅却師は退魔の眷属で人間の希少種。周囲にある霊子を取り込み、矢として放つ能力を持つ。

・約八百年前に尸魂界に侵攻し敗北した。

・始祖及び敵の大将の名は“ユーハバツハ”。深手を負うも逃走。しかし霊圧はその後消失が確認されている。

このくらいのことしか出てこない。

八百年前と言うと、丁度護廷十三隊が設置されたころだ。総隊長が滅却師を嫌っていた理由はそこにあるのかもしれない。だが、それにしても怒りの鋭さが尋常ではなかった。

(滅却師、か。あの時の戦闘で得られる情報もあるかな……)

目を閉じて集中し、記憶を呼び起こす。

そういえばあの時、技の威力のわりに霊圧を感じづらかった。

あれがもしもつと激しい戦闘中だったら、気付けただろうか？

チリッ

言いようのない感覚が惣右介の全身を包んだ。

何か思い出せそうなものか思い出せない不快感がする。

(何だ？ …………… そういえば、石田さんと佐伯の霊圧の感じ……………どこかで知っていたような……………?)

気持ち悪い。

あと一歩何かが足りない。

思い出せ、あの感じ……………

「ぼあ」

「!!!」

「おっぷッ」

集中しすぎて見えていなかった現実いきなり引き戻され、顔の真横に来ていた何かを惣右介は咄嗟に殴った。

スローモーションで地面と抱き合ったのは――

「兄さん!!」

「おう、惣右介、ひさしぶり……………」

力なく腕を持ち上げた竜太郎は、殴られた頬を派手に腫らして首を擡げた。しかし程なく、力尽きてがっくりと脱力した。

「ごめん、兄さん！ しっかりしてくれ〜!!」

竜太郎の顔は顔の腫れに反して驚くほど安らかだったと惣右介は後に語った。

「全く……一体どれ程強く殴ったらこんなに腫れるんですか!？」

「面目ない。本当に面目ない……」

四番隊に竜太郎を担ぎこんだ惣右介は、有無を言わさず怒られた。当たり前だ。竜太郎の顔はパンパンだった。

「はいこれ、替えの氷と水、あと布巾です。優しく触ってあげて下さいね。一応治療は終わりましたけど、まだ痛い筈ですから」

「ハイ」

しょんぼりと俯いた惣右介に、対応してくれた四番隊員が言い過ぎたと思ったのかやや語気を柔らめて言った。

「ま、まあ、十一番隊に比べればこの程度の怪我は大したことありませんよ。下級救護班



の私でも治療できるくらいですから」

「下級……？　そうなんですか？　これ程手際も精度も良いのにですか？」

「！……そう言っていたら、治療した甲斐があります」

「いえ、あの、お世辞とかではなく本当に！　僕に回道のあれこれを教えて下さった方が治したみたい綺麗に治ってます！　きつと相当鍛錬なさっているのでしょうか？」

惣右介が尋ねると、彼は俯きがちに言った。

「幾ら鍛錬したって、実戦で処置できなければ意味が無いんです。私はいつも一步踏み出せない。卯の花隊長にも言われたんです。もつと自信を持って、と……」

卯の花、という名に惣右介はピクリと反応した。

確かその人はずっと前、竜太郎が惣右介のせいで大怪我を負った時に助けてくれたヒトだ。だが、何故か惣右介はあのヒトが苦手だった。何か、殺伐とした嫌な感じがしたのを覚えている。

思考が飛んだのはほんの一瞬のことで、惣右介はすぐに口を開いた。

「一步踏み出せないのは、きつと何かを失うのが怖いから……じゃないでしょうか。それが今まで築いてきた自信だったり、もしかしたら自他の命だったり様々でしょうが、その恐怖の根源を特定することが出来たら——それを失わないようにどうすればいいのかが分る筈です。どうすればいいのかが分れば、それを実行することは今よりずっと

楽になると僕は思いますが」

その隊員が、俯いていた顔を上げた。

惣右介は構わず続ける。

「自信を持つことは大事です。でも、皆が皆最初からそれを持てるわけじゃない。失敗して、乗り越えてを繰り返してやっと得られるものです。それでもなお、恐怖が完全に消えることはないと思います。だって失敗することは、成功することよりずっと経験を育みますが、同時に何かを僕らから奪ってしまうことが多いですから。でもそれって逆に言えば、恐怖しているってことは何か失うものがまだ在るって事で、つまりそれはとても幸福なことなんじゃないでしょうか？ 僕からすれば、自信しかなくて、恐怖が無いなんでヒトが居たら……そのヒトはきつと寂しいヒトなんだって思うと思います。多分そのヒトには——何も無い」

そこまで一気に言ってから、目の前の青年が呆然としているのに気が付いた。

業務を止めさせてまでするような話ではなかったと、頭が真っ白になる。

「あつ！ すみません、偉そうに長々と話してしまつて……まだ業務中ですよね、本当に、あの、すみません！」

「……………いいえ」

彼は唇をキュッと引き締めると惣右介に頭を下げた。

「勇氣が出ました。確かに私は、ただ漠然と恐怖してたんだと思います」  
彼は頭を上げ、惣右介を真つ直ぐに見据えた。

「私は四番隊無席、山田清之介といます。貴方の名を伺っても宜しいでしょうか」  
「一番隊十席、藍染惣右介です」

「藍染殿、本当にありがとうございます！ もう少し頑張ってみようと思います」

「いえ、こちらこそ兄さんの治療を本当にありがとうございます！」

「山田さん！ こっちの治療まだですかア？」

二人が頭を下げた直後、看護師が部屋に入ってきた。

清之介は勢いよく顔を上げると顔を青褪める。

「すつ、すみません！ すぐ向かいます！ 藍染殿、それではこれで私は失礼します」

「こちらこそ呼び止めてしまい申し訳ありません」

互いに苦笑交じりに挨拶を交わし、清之介は慌しく部屋を出て行った。

総合救護詰め所は込み合っていて、四番隊員たちが右往左往している。その理由は――  
――先日の神崎たちと同じで、現世任務中に大怪我を負うものが後を絶たないからだ。虚

との戦闘中に死神が滅却師に襲われる事件が多発しており、日を追うごとに嫌な空気が護廷隊全体を重く覆っていくのを惣右介は感じていた。

さっきの山田という青年だって、そんな状態に憔悴していたのだろう。竜太郎のような馬鹿みたいな怪我をして担ぎ込まれた者に情けを掛ける余裕が無かったのも頷ける。申し訳なく思いながら先程受け取った氷嚢に触ると、ドボンという低い音が聞こえた。氷なら、ガラガラともう少し高い音が鳴る筈だ。

「ああ、氷が殆ど溶けてしまってる……替えを貰わないと」  
「惣右介」

惣右介も部屋を出ようとして呼び止められた。

その声に駆け寄る。

「兄さん！ 目が覚めたんだ！ ごめんね、本当に……」

「いいっていいって。あ、溶けかけでいいからその氷くれるか？」

「うん。まだまだ冷たいから、一応布も当てた方が良くと思う」

「ン。ありがと。……なあ、惣右介」

殆ど水になってしまった氷嚢を頬に当てると、竜太郎は惣右介に視線を投げかけた。その眼は優しく、温かかった。

「お前はちゃんと、怖いか？」

「!! ……起きてたなら言ってくればよかったのに……」

「どうやら先程清之介に言っていた話を竜太郎に聞かれていたらしい。偉そうなことを言ってしまったと自己嫌悪で顔が紅くなる。」

「いや、機を逸したって感じだったからさ。で、どうよ？ 俺はお前の言う事、確かにそうだなって思う」

誤魔化しの無い、真つ直ぐな瞳。

嗚呼、これはちゃんと答えなきやいけないやつだ。

下手糞でも、ゆつくりでも、言葉にしたい。

「……………怖いよ。両親の記憶とか、護廷十三隊でできた仲間とか——あとは、その、兄さんやマソラ先生を失うのは……………どうしようもなく怖い」

「あははっ！ 素直にそう言ってもらえると嬉しいな〜！ ンじゃあ寝るのはこの辺にして、行くか！」

「行くって、何処に？ ああ、マソラ先生の所？」

「あく、そつちもそろそろ顔出した方が良くと思うけど、今日は違う」

竜太郎は起き上がると、ニツカリと笑った。

「お前の一番大事なもんとーちやんとかーちやん探しに行くぞー！」

四番隊を出た惣右介と竜太郎は、思い出したように溜息を吐いた。

惣右介が一番隊に入隊してから、一年目は忙殺されて唯々時が過ぎた。余裕のできてきた二年目以降からは、二人は何度も瀟霊廷を見て回っていた。惣右介は自分の屋敷を外から見たことが無かったから、知った顔は無いか、見た記憶のあるものは無いか、ゆっくりゆっくり巡るしかなかったのだ。だがとうとう前回で一周が終わってしまった。

「つて言つても瀟霊廷も広いからな……今日から二周目、張り切つて行こう！」  
呑気に伸びをした竜太郎に、申し訳なさそうに惣右介が呟いた。

「ごめん、兄さん」

「ン? 何が?」

「こんなに時間取つてもらつてるのに、全然進捗が無くて……入隊してから殆ど家に帰れてないし……」

その言葉に豆鉄砲を喰らつたような顔をした竜太郎は、すぐに意地の悪い顔になって惣右介の頭に火花を散らした。

「~~~~ツ!」

涙目になつた惣右介の蟀谷こめかみに竜太郎が追い打ちを掛けてグリグリと拳骨をめり込ませる。

「おーおー、席官ともなると忙しいな〜？ 憎いねコノヤロー！ 予定揃わなすぎんぞー」

「いたたたた！ ご、ごめ」

竜太郎が拳骨を放してそつと惣右介の頭を撫でた。

「ん、これで俺とセンセの鬱憤は晴れた！ お前を拾ってからだって分からないことだらけだったんだ。もうこりやあオレの日課みたいなものだ！ 家のことだつて、死神になつてから暫く忙しいのは分かつてたことさ。どっちも気にすることじゃねえよ」

ニカツと笑つた彼の顔は、それだけで心が落ち着く。

「——それにオレらはお前が心配してるようなことに怒つたり苛ついたりなんてしてない。どっちかかって言うとなれない環境で体調崩したりしてないかとかそういう心配してた感じだなく！ センセは素直じゃないから言わないと思うけど、あのヒトが一番心配そうだったからまた顔出してくれよな」

「慣れない環境」つて……もう十年だよ？」

「センセはああ見えて心配性なんだよ」

「ああ見えて」は余計だよ、兄さん」

苦笑交じりの笑顔で惣右介も返した。

澗靈廷を練り歩いていると、“そう言えば”と竜太郎が口火を切った。

「聞いたか？ 現世で滅却師と死神が接触して怪我させられる事件が多発してんだってな。最近現世任務行ったんだろ？ どうだった？」

「え、ああ……確かに接触してきたよ。撒き餌とやらで虚を呼び寄せて戦っているらしくて、自然死神も居合わせてしまうみたいだ」

「……怪我、してないか？ 結構酷い目にあつた奴を知ってるから……」  
眉を顰めて心配する竜太郎に、惣右介は笑い掛けた。

「うん。大丈夫だったよ」

軽く俯いた惣右介の頬を竜太郎が掴むや否や、両側へ引つ張った。

「うああああ!! いひやいよ 痛いよ、にいひやん 兄さん!!」

「馬鹿。嘘吐かれる方が心配することだってあんだよ。あんま無茶すんな」

そう言うのと彼は惣右介の頬から手を放してそっぽを向いた。かと思ふとスタスタ歩いてゆく。

「……………ごめん。でももう本当に大丈夫だから」

惣右介がそう言うのと、竜太郎は勢いよく振り返つて惣右介の頭に拳骨を落とした。



「ッ!!」

「やっぱりか! ったく……結果良ければ全て良し」なんてのは結果が良かったから言えることなんだぞ!! それに全て良くなんかねえ! あくく、くそつ、何て言やあいんだ、こういう時……」

右手で自身の顔を覆った竜太郎は長いため息を吐くと、そつとその手を放して惣右介の肩に置いた。

「無事で、良かった……」

俯きながら言ったその声は震えていて、惣右介は初めて竜太郎に誤魔化したことを悔いた。

恐らくもうとつくに本当の両親と過ごしていたより長い時間を竜太郎とマソラと共に過ごしてきて、二人の存在が惣右介の中でずつとずつと大切になって、心配を掛けまといと無理をして……

でもそれは竜太郎たちにも同じ事だったのだ。

「——先生に会いに行こう」

考えるより先に、言葉が出ていた。耳から入り直した情報が、惣右介の頬を綻ばせる。

「……いいのか? 瀨靈廷を見て回る機会なのに」

「うん。僕がそうしたいんだ」

惣右介の言葉に竜太郎が泣き笑いみたいな顔になった。

だが彼はそれをあまり見せようとはせず、さつきより足早に、今度は門の方へ向かつて行つた。

饗庭の町に入つてから半刻ほど歩いた所にその家はある。足繁く人が通うほどマソラはヤブではないため、人の出入りは少ないが、その為人に慣れてしまえば気軽に入れる。そんな場所だつた。

それが今は、何故かピリピリとした空気を孕んでいる。どうやら竜太郎も同じことを思つたようで、血相を変えて硬直していた。

斜向かいの家の影からマソラの家の中の霊圧を探ると、四人ほどがうろついている。しかし幸か不幸かマソラの姿は無いらしいことに一先ず胸を撫で下ろした。

「先生は外出中みたいだ」

「つてことは強盗か？ あの家に取るモンなんて無えと思うけどなあ」

「いや、それにしても様子がおかしい気がする。多分中に入っているのは強盗とかそんな生易しいモノじゃ——」

「一番隊第十席・藍染惣右介殿でいらつしやいますか」

突然聞こえた低い声に振り返る。

マソラの方の方に集中しすぎて背後を取られたことに気付かなかつた。

「ッ！ ……………」

沈黙した二人を前に、黒ずくめでガタイのいいその男は片膝をついた。

「突然失礼いたしました。私は隠密機動第三分隊檻理隊副部隊長、兼、護廷十三隊二番隊第五席・大前田希ノ進と申します。今回の案件の責任者が藍染十席との面会を求めております。御同行願えますか」

その言葉が終わるや否や、蒼白になった顔の竜太郎が惣右介の手を引こうと手を伸ばす。

「惣右介ッ！ ……から離れ「まあまあ、落ち着いて下さいい♪」——！！」

「兄さん！」

瞬歩で現れた新たな黒装束が竜太郎の口と鼻を白い布で覆った。

次の瞬間、力の抜けた竜太郎が虚ろな目になってその男に抱えられた。

「何も取って食おうってんじゃないんですから、お静かに。ハジメマシテ、藍染サ〜ン！ ボクは二番隊第七席・浦原喜助っス。この状況じゃ動揺するなって方が難しいでしょうが落ち着いて、どうか抵抗せずボクらに付いて来ちやあくれませんか？ 手荒な真似

はしたくないんす」

二人の黒装束が惣右介の抵抗に備えて身構える。

——二人、か……

惣右介が竜太郎をそつと見ると、銀色に小さく光るものが目に入った。

それが何かを理解した彼は、数瞬の後、抵抗する選択肢を捨てた。

「分かりました。僕を連れて行ってください」

両手を無造作に降ろし、身体の力を抜く。そんな彼を見て二人は一先ずと言った風に一息つくと、足早に歩きだした。

「ご協力感謝します。此方です」

風に乗って、遠くから、赤ん坊の泣き声が聞こえていた。

## 第十一話 過るクロ・後編

## SIDE・D

時々遠回りをしながらゆっくり、しかし確実に三人は進んでいた。“責任者”らしき大きな霊圧へと少しずつ近づいていくのを、惣右介は感じていた。

先程の状況を思い出して、惣右介は再び手を握りしめる。

“浦原”に担がれた竜太郎の側で銀色に光っていたモノ——あれは、針だった。

細い針が、竜太郎の肌突き付けられていたのが見えた。

最初に思ったのは、毒針かもしれない、という事だった。惣右介が抵抗した瞬間、“浦原”は竜太郎を刺すつもりなのだ。だが、そうでなかったら？

これ見よがしに見える位置にある針は、本当にそんな用途なのだろうか？

あれはもしかしたら、意識を逸らすための小細工なのかもしれない。実は毒針に見せかけた唯の針で、竜太郎が嗅がされたのが毒だったのかもしれない。他にも何か見逃していないだろうか。もしそうなら、抵抗し、針を避けて逃げて竜太郎の命はない。

——そこまで考えて、ふと違和感を覚えた。竜太郎を人質にしたいなら、態々薬品を

嗅がせる必要は有つたのだろうか？ あの瞬間、竜太郎は完全に背後を取られていた。喉元に刃を突き付ければ事足りたはず。今だつて、アレが毒針だろうがそうでなからうが、“抵抗すれば刺す”とでも言えればいい。それをしない理由は何だ？ というか、そこまでして自分を連れて行きたいなら、最初に声など掛ける必要は無かつた。（何だ？ 何が狙いなんだ？）

“浦原”と名乗つた隠密機動の瞳を見て、惣右介はその理由を悟つた。

——試された。

惣右介がそういう判断が出来る類の者かどうかを見られていた。

“人質を取られたうえで冷静に周りを見られるか？”

“即断して行動する短慮さは無いか？”

“無謀な突撃をしないか？”

——寒気がした。

たつた一本の針で、ここまで出来るものなのかと。

“浦原喜助”……怖いヒトだ。

さつき“大前田”は、惣右介に“責任者”に会うよう言つていた。

そこで話す内容を訊くに足るモノかどうか、という事だろうか。

尚も惣右介を連れ行く気が有るのなら、一先ずは合格、という事なんだろう。

——ならば、抵抗することに意味はない。

態々こんな手段を取ってくるような人物なら、いきなり如何こうされることはないだろう。

そして、今に至る。

「大前田です。入ります」

「浦原っス。連れてきましたよん」

マソラの家から少し歩いた所に天幕が張っており、その入り口の両脇に大前田と浦原が控えて布を支えた。中に入る様に促された惣右介は意を決して足を踏み入れた。

「よう来たの。お主が藍染か」

凜と通る声に顔を上げると、緩く足を汲み片肘をついた、褐色の肌に金色の眼をした女性が座っていた。その人物は、護廷隊士なら一度は聞いた事のあるヒトだった。

「四楓院夜一四席……!!」

死神に貴族出身者は多いが、その中にも序列が存在する。

彼女の家は五大貴族と呼ばれ、尸魂界で最高位の正一位の大貴族が一。当主が代々隠

密機動総司令を務め、“天賜兵装番”として特殊な祭具などを護り受け継ぐお家柄だ。彼女自身も家の名に羞じぬ強さを誇り、近々初めての女性当主と成るなど話題に事欠かぬヒトだった。

そんな彼女は最近、何やら中央四十六室の命で、隠密機動と護廷十三隊両方に籍を置いていた。可憐な容姿もその話題性に相俟って、未だに様々な者達の口の端に登る存在である。

兎も角、惣右介が思わず溢したその名を聞いて、彼女は顔を顰めた。

「そうじゃ……うむう、護廷十三隊へ来てから半月ほどしか経つとらんに、もう儂の顔が知れ渡つとるのか。隠密機動がそれでいいもんかのオ……まあ良い、こんなやり方で呼びだしてスマンの、藍染。本来は正式に呼びだすつもりだったんじやが、まさかお主が今日ここに来るとは思わなんでな。許せ」

状況が分からず立ち尽くしていると、夜一の後ろに控えていた黒装束の一人が惣右介の後ろに椅子を置いて座るように促した。素直に従っておく。

「まあ前置きはこの辺にしておくぞ。本題に入らせてもらおう」

入り口を閉じてから惣右介の後ろに控えていた二人が夜一のすぐ前に控えるように片膝をついた。夜一も足を組むのを止め、背筋を伸ばす。

「お主は“地下特別監理棟”なるものを知っておるか？」



惣右介には耳慣れない言葉だった。話の展開が読めないが、正直に答えるより他にない。

「いいえ。しかし言葉から考えるなら……収容所か何かでしょうか」

「うむ。話に聞いていた通り聡い奴じゃ。仕方ないのう……そこは特別檻理の名のもとに行われる、護廷十三隊内部の危険因子を調査・捕縛し、監視下に置くことを目的とした場じゃ」

「——ちよつと待つてください。危険因子が入るんですよね？」

「その通りっス」

夜一が答える前に、その隣の浦原が声を出した。

「そこに収容されるのは、危険かもしれないヒト達っス」

「それって……」

「喜助、お主は黙っておれ。……護廷十三隊は高尚な組織。故に逸脱者など有ってはならない」——中央四十六室共の指示での。そういう者共をそこで飼い殺しにしとるんじゃ」

「夜一サン、そりゃあ流石にぶつちやけすぎですって」

「構わん。あ奴らの指示に従わされるのを儂が嫌つとることはお主も知っておろう？」

——藍染、……までいいかの」

もつと話が見えない上に納得できないことが多々あるが、理解は出来たので惣右介は小さく頷いた。

「うむ。そして今日、そこに一名収監された者がおる。名を——涅マユリ」

「?! マユリさんがですか?! 何故!」

「儂に聞くな。じゃが相当のことをやらかした様じゃのう。通常そこでは行動を制限せんのじゃが、そ奴は足枷をはめるよう指示が出とる」

溜息を吐きながらそういう彼女に、浦原がヘラヘラ笑いながら顔を上げた。

「夜一サン、儂に聞くな」じゃ駄目つスよ! ちゃんと資料に目エ通してないんですか? 温室育ちの四十六室の面々が目を覆いたくなるような、あくんなことやこくんなことをやらかしちやったんスよ」

「何じゃと! お主の言うておることと大差無からう!」

鈍器で殴ったかのような低い音がして、四楓院が拳をゆらし、浦原が目元を押さえて涙目になった。顔面に拳を入れられた浦原を横目で見た大前田が「またか……」といでも言いたげに頭を抱えている。

「目が痛い! いやいや、夜一サンはホントに分かってなかっただけじゃ「まあまあ御二人とも、話を進めましょう」——そつスね」

大前田に促されて浦原がヘラツと笑った。不服そうな夜一も浦原から目を逸らして

惣右介に向き直る。

「兎も角、涅マユリが地下特別管理棟に収容された。これを受けて儂らはここに来た。

——理由は分かるな？」

その瞬間、目の前が真っ赤に染まった。

マユリが護廷十三隊には不要と判断されたとして、貴族でもない親のマソラを護るものは今、あの場には居なかつた。竜太郎は少ない休暇を惣右介に割いてくれていたからだ。

気が付くと、夜一の側に控えていた一人、大前田を組み伏せ、腕を取って締め上げていた。

「落ち着かんか、藍染！」

「まさか貴様ら、先生をツ」

「違いますよオ♪」

緊張感の全く無い声音で浦原はそう言うと、自身の斬魄刀を鞘に入れたまま地面に置いて離れた。そのままの足でゆっくりと惣右介の方に近づく。

「確かにボクらは後処理の為にここに来ました。でもそれは“涅マソラを殺せ”という命じゃないっす。彼女には町民の何名かと一緒に輪廻の輪へと乗っていただけ、転生してもらいました。ま、尸魂界から追い払ったという意味じゃ一緒っすけど」

惣右介の正面に立った浦原は片手を差し出した。

「ウチの五席を放してくれませんか？ ボクらは事を荒立てる気は無いです」

「……………」

「危害を加えていない証拠に、彼女からこれを貴方に預かっています。一目見れば分かると言われたんすけど……………」

そう言つて彼は懐から木箱を取り出した。

それは惣右介が封じられていた、母の名残を感じられる唯一つのものだ。

“マソラの手から彼らにこれが渡っている”、その事実だけでも、浦原たちが惣右介への害意と、その波及で動いていたわけではないことを雄弁に語っていた。

「先生……………」

大前田の拘束を緩めて立ち上がると、浦原がそれを惣右介に手渡した。

「大事な物なんすか？」

「……………はい。とても……………」

俯いて唇を噛んだ惣右介に、浦原の後ろから夜一の声が通った。

「にしても大前田を一瞬で組み伏せるとは、お主中々やるのう！ 一番隊とは言え他隊の十席を遥かに凌駕しておる。一番隊が嫌になったらいつでも二番隊に来ると良い！

歓迎するぞ！」

「まだ夜一サン四席じゃないっスか。そんなこと簡単に約束しちゃ駄目っスよ」

「む……なら隠密機動じゃ！ あそこならもう実質儂が長みたいなもんじやろ」

「それ、千暁サンに言つて大丈夫な奴っスか？」

「う……お主は言わんじやろ？」

「……………藍染サン、実は話には続きがあるんス」

「おい、喜助!! 無視するでない！」

反応に困つていた惣右介に向き直つた浦原は、再び夜一を無視して続けた。

「本来、地下特別管理棟に行つた隊士の関係者には『その人物は脱隊した』と伝えられるんです」

「……………何故、僕にはそうしなかつたんですか」

「ハイ。それは貴方が真実を探る可能性のある人物であり、かつ一番隊の席官だからっス」

「——!!」

思い至つたその過程に目を見開いた惣右介を見て、浦原は薄く笑つた。

「やはり話しておいて正解だつたっス。貴方は頭の切れるヒトだ。切れすぎると言つてもいい。そう、一般隊士程度なら、真実を探られるその行為自体は放置します。ボクらもプロっスから、そうそう暴かれる気は有りませんから。しかし席官クラスともなると

行動の自由度が一気に上がる。それでも普通のやり方じゃあ、地下特別管理棟の存在は知れても内情までは知り得ません。……が、その次の一步を踏み出されるのはマズイ。どうやっても靈法に抵触してしまうんす。そして、特に総隊長率いる一番隊士の、しかも席官が規定違反をするなどあつてはならない。——それが四十六室の意向つス」

やつと話が繋がった。

マユリが収容されたとしても、本来なら“彼は脱退した”と称して放置されるべき案件だったのだろう。

だが、彼の母親であるマソラはあまりに死神に近かった。竜太郎とは殆ど毎日顔を合わせるし、惣右介も時々返ってくる。加えて、惣右介は会ったことが無いが、彼女の夫は四番隊に嘗て務めており、其処での知り合いもあつたらしい。

されば、マユリの“脱退”の不自然さに彼女が気付くのにそう時間はかからない。それでも流魂街の住人の言う事と捨て置けただろう——惣右介が居なければ。

四番隊士との繋がりがどの程度のものなのか惣右介は知らないから分からない。

その人たちがどうするかは置いておくとして、惣右介がマソラの為にマユリを探そうとするのは容易に想像できたことだった。育ての親の息子を探すのに、手段は問わないだろうことも——

邪魔なものは、遠くにやっておけばいい。

五月蠅いモノは、最初から手足を縛って口を閉じさせておけばいい。そういう事なのだろう。

「護廷十三隊は高尚な組織」

それを護るためだけにこれだけのことが日々行われているというのか？

「なんて、く「言うな、藍染」——！」

「くだらない」と吐き捨てようとした惣右介が、夜一に制された。彼女は片眉を上げて腕を組み、溜息を吐くと、惣右介を視線から外した。

「誰が聞いているとも知れぬのじゃ。滅多な事を言うでない。気持ちは分かるがのオ。じゃがここまですればもう分かるの？ 此度のことは全て他言無用・口出し御法度じゃ」

「……兄さ、いえ、藍染竜太郎にはどのようによ？」

「竜太郎？ 誰じゃ」

視線を戻し首を傾げた彼女を見て、浦原が意地の悪そうな笑みをその顔に貼り付けた。

「やっぱり資料読んでないんじゃないっすかあ。しょうがないっすねえ、夜一サンは「何

じゃと!! お主、先程から儂が上司じゃという事を忘」藍染竜太郎サンには涅マユリサンの「脱退」と涅マソラサンの転生を別々に伝えるつもりです。もし我々が伝えるより先に彼に訊かれた場合はそう伝えていただけると助かります」

夜一にぎやいぎやい騒がれながらにこやかに浦原はそう言った。

「そろそろ目が覚める頃だと思えますんで」

天幕から出されるとき、惣右介の耳元で彼はそう言うと言つ込んでいった。

急いでマソラの家だった建物に入ると、思った通り寢室に竜太郎は寝かされていた。駆け寄ると、彼の脛がピクリと動く。ホツと一息ついて、竜太郎を揺すった。

「兄さん?」

「……そー、すけ? ……惣右介ッ!!」

ゴンッ

急に起き上がった竜太郎の頭が、惣右介のものと激突して派手に火花を散らす。二人とも暫く痛みに悶絶してから、竜太郎が勢いづいて口を開いた。



「惣右介ッ！ あの後、何もなかったか!! 何もされなかったか!!」  
「う、うん！ ちょっと説明を受けただけ」

竜太郎の剣幕に気圧されながら彼につられていつもより大きな声で惣右介が答えると、竜太郎は心配そうに首を傾げた。

「説明？ 何のだ？」

「マソラ先生について……先生は転生なさったんだって」

「転生……」

尸魂界と現世は緩やかながら魂魄の行き来が在る。現世からの移動は即ち死後の成仏と呼ばれるものだ。そして尸魂界からの移動は転生と呼ばれ、輪廻の輪に乗ることで現世に生まれ直すことが出来る。だがその転生の資格を持つ流魂街の魂魄は数が多いため、何十年たつても転生できないことなどザラだった。

「そうか……最後に一言ぐらい話しておきたかったな」

視線を下げた彼は、力強く首を横に振ると努めて明るく言った。

「でも、お前に何もなくて良かった。俺はてつきり、お前が連れて行かれちゃうのかと思つて、焦つて……」

連れて行かれはしたのだが、そう言う意味ではないのだろう。

隠密機動とは、尸魂界における諜報や標的の抹消などを行う組織だ。どんな任務がど

れ程の頻度で行われているのか、殆ど情報が巷に回つてこない。それを煙たがった四十  
六室が、隠密機動と護廷十三隊を引つ付けて今より開けた組織にしようとしていたとい  
うのは余談であるが、そんな組織が名指しで自分に用が有るなどと言えば、潔白な身  
上でもたじろぐのが普通だ。

だから、結局惣右介の過去に付いて全く情報が無い今、突然隠密機動に呼びだされ  
ば過去の刺客か何かが再び来たのかと思うのは当然のことだった。

竜太郎が咄嗟にそう判断して惣右介を逃がそうとしてくれたことを嬉しく思いなが  
ら、そんな彼に嘘を吐かねばならぬ惣右介は自身を嫌悪した。

「そういう事は何も無かったよ。これを手渡されたくらいだから」

そう言つて惣右介は懐から先程浦原に渡された木箱を見せた。

竜太郎の目が驚愕に見開かれる。

「これは……そうか、センセ……」

悲しそうな眼をした竜太郎はその顔を見られまいとしたのか惣右介から顔を背けた。

傾いてきた夕陽が辺り一帯を染める。

その美しさは、主無きこの家にも木霊するように家の中を紅で侵した。

いつの日か彼女と共に見たこの景色は、彼女が居なくなっても繰り返すのだと思い知らされた。

それは二人が心の整理を付ける間もなく夜闇へと姿を変え、取り残された二人はただ茫然と立ち尽くすしかなかつた――

## 第十二話 黒白のカイコウ

## SIDE・D

そつとその部屋を覗くと、中にはヒトがおらず閑散としていた。

どうしたものかと立ち止まっていると、この部屋に近づいてくる知った気配の方を感じ、惣右介は体をそちらへ向けた。

「先日は失礼しました、大前田殿」

「ここは二番隊——執務室前の廊下だ。ここへ書類を届けるのを任されたついでに、立ち寄つたのだつた。」

雨樋の上から降りてきた人影は、苦笑しながら惣右介の前に立つた。

「気配も霊圧も完全に消してたと思つたんだがなあ……白打でも負けちまうし、隠居すべきかねえ？」

「意識して抑えても完全に消すなんてことは誰にもできませんよ。それに昨日の今日ですから、僕がちよつと敏感になつてただけです」

「“ちよつと”、なあ？ ま、いいや。素直にそうかと言っておくれ。それで藍染十席、

ウチの隊長に何か用か？」

昨日とは打って変わって気さくに話しかけてきた大前田は齒を見せて笑った。笑うだけでこれ程印象が変わるヒトも珍しい。

マソラの一件を思い出して惣右介は顔を暗めたが、俯きがちに首を横に振った。

「いえ、昨日お話を伺った方ならどなたでも良かったんです」

「ホウ？ 昨日の続きか？」

「いいえ。過ぎた事をどうこう言う気は有りません。全くの別件です」

「話が見えねえな。いいだろう、中に入れよ。俺の茶は不味いぜ？」

不敵に笑ったその顔は次の瞬間引き攣った。

「ちよつと待て、その部屋を覗いて昨日話した面子が居なかつたつて事か？」

「はい。どなたもいらつしやいませんでしたが……」

「……四楓院あんのクツツガキ四席くツ！ 後で書類仕事倍にしてやる!!」

大前田が拳を握りしめ、青筋を浮かべて震えている。

「本来ならここで彼女が仕事をしている筈だったのだな、僕は奔放な上司を持たなくて良かった」、と惣右介は竜太郎の隊長も思い出しながら思った。——そう、あくまで他人事である。

惣右介は大前田に出された煎茶を一口飲んで、先程の言葉は嘘ではなかったと知った。

茶をここまで不味く入れられるヒトは中々いないだろう。何がどうと具体的に言い表せない、独特な味がした。残すのも失礼なので、少しずつ喉に通す。

「見た目に寄らず、アンタ面の皮厚いんだな」

湯呑みを摘まむ様に持った大前田は苦笑しながら言った。

「ええっと……」

「ああ、分かりにくいかもしれないねえが一応褒めてんだぜ？ 隠密機動や二番隊の業務は感情を押し殺して行うモンが多いからな。それでもお世辞にも旨いたアいえねえこの茶を、眉一つ動かさずに飲めるのなんてウチの隊じゃ隊長と喜助くらいなものだ。アンタやっぱ、四楓院四席が言ってたみたいに隠密の才があるかもな」

「ありがとうございます……？」

暗殺や偵察を主任務とするといわれる隠密機動は、正直なところあまり良い印象はない。どう反応して良いか分からず戸惑っていると、大前田は気前よく笑った。本当によく笑う人だ。

「あつはつは！　おうよ！　んで何の用だったんだ？」

「滅却師についての情報を、何でもいいので教えていただきたいんです」

「！……何だと？」

急に陰ったその表情に惣右介は少し怯んだが、それでもなお食い下がった。

「近々現世へ滅却師に協議を申し出に行くんですが、その予備知識を入れておきたいんです。ですが尸魂界の図書はあまりに少ない。古い情報は仕方が無いとして、滅却師との接触が多い今、彼らの現状については隠密機動ならなにがしかの情報を得ていると踏みました」

「むう……確かに最近滅却師の動向を探る任務は間々あるから他隊よりやや詳しいが、交渉材料になるようなもんはそうそう教えられねえぞ？」

「五席の権限で十席へ教えるには、ということですか」

「ま、そうなるな」

機密事項が多いだろうということは最初から分かっていたことだ。それでも構わない旨を伝えると、難しい顔をした大前田は暫く唸った後、“仕方ねえなあ”と口を開いた。

「現在滅却師が二派に分かれているのは知っているな？」

「はい。佐伯家側と石田家・黒崎家側ですよ。実は先日、石田宗弦と接触したんです。

その繋がりですちらに協議を持ちかけるように命じられました」

「そりやまた……珍しいこともあるもんだな。石田宗弦は協議に出ないどころか死神との接触自体避けているらしいんだ。どうやらそれもあつて少数派の彼らは佐伯派と敵対できているんだと」

「? ……どういう意味ですか?」

「詳しいことは分らん。だが死神は相当滅却師から嫌われているんだろうよ。だからこそ俺らは石田宗弦と接触したいわけなんだが」

ズズ、と音を立てて彼は茶を啜った。渋い顔になっているのは茶が不味いせいだけではないのだろう。

「——どうにも俺らへの態度が変なんだよ。『共存』派つて割りに共存しようとしてねえ。話に行つても追い払われるし、虚を横取りされることも無いわけじゃねえ。ま、佐伯ンとここに比べりゃ温厚だし、死神を怪我させることもねえから敵対する気はねえらしいがな」

「そうなんですか……確かに石田さん、『死神は好かん』と仰つてました。でも僕個人に関しては好印象を持つてもらえたみたいです。個人で話す分には話の分かる人だと思いません」

惣右介の言葉に大前田は目を瞬かせながら嘆息した。



「マジで向いてるぜ、オメエ」

「隠密機動にですか？ 御冗談を」

「いやいや、対象に取り入るつてのは簡単じゃねえ。特に気難しい相手つてのはいるもんだ。石田宗弦なんてその中でも別格と言つても過言じゃねえ難易度だぜ」

「あれは偶々ですよ。そういう状況になっただけで」

佐伯に射られ、石田に救われる——

席官とは言え、一隊士の身の丈に余る出来事だったなと惣右介は顔を曇らせた。だがそんな事にはお構いなしで、真面目な顔になった大前田がバツサリ言い切った。

「運も実力の内だ。死線をくぐるときなんてのは大抵運だしな」

“運”なんて言葉を隠密機動も使うんだなと惣右介が内心で驚いていると、考えていたことが分かったのか大前田がバツの悪そうな表情になった。惣右介が何か言う前に、大前田が続ける。

「……それは兎も角だ。石田宗弦と交渉すんなら、ある程度ゴリ押しで行った方が良い。調査してる感じだと、石田はクソ真面目な優等生タイプだ。奴にとつて、行動することて生じる利益か、しないことによる不利益を提示すれば臨機応変に判断してくるだろ。あとな、口論には持ち込まず、畳み掛けた方が良い。俺の印象だと、ゴリ押されてムキになるような性質タチでもねえだろうから、グイグイ行つてみな。ああ、奴は俺らには居留

守をよく使うが、顔見知りならそれもされねえだろ。下手に外で“偶々出くわした風”を装おうとするよりは、家に行った方が良いと思うぜ。多分そうしねえと躲される。――ま、俺らは一回も接触できてねえから参考程度に聞き流してくれ”

ビシィツと親指を立て、ウインクしながら大前田が言った。頼りにして良いのかよく分からない感じになってしまったが、石田に関しては惣右介の印象に近かったため、彼の推察は正鵠を射ているのだろうと思う事にした。

その後も、大前田は石田のみならず、滅却師に関する事実とそこからの推察を惣右介に話してくれた。特に、佐伯の手勢と接触しない範囲を教えて貰えたのは大きかった。「気が変わったらいつでも二番隊ウチに転属チしろよな！ 歓迎するぜ！

再び豪快に笑った彼は惣右介を快く送り出してくれた。

将来有望な死神の影が見えなくなつてから、大前田は溜息を吐いた。

(……いや、やっぱ言わなくて良かったよな)

手には一枚の報告書。

調査対象の写真と名前、性別、簡易な家族構成以外の欄は悉く白い紙。

名を、黒崎咲秋。

石田宗弦と同じく、“共存派”として広く死神に名を知られる人物だ。

しかし、その名を知る死神の中で、彼について名前以外で知っていることがある者は皆無と言つて良かった。

それは大前田にとつても同じことだ。

彼が生きてきた中で、黒崎ほどやりにくい相手はいなかった。

普段、何処で何をしているのか？ 趣向は？ 能力値は？ 弱みは？  
全てが分からない。

何度探つても、一分の間も無く捜査網からすり抜ける気味の悪い男。

（――藍染が会いに行くのは石田だ。よく分かんねー奴を下手に警戒させるよりは、何も知らねえままの方が良いだろう。……ま、今の状況でも“何も分からねえ”事に違いはねえがな……）

結局進展しなかった報告書を握りつぶすと、彼は苦虫を噛み潰したような顔になった。

「何じゃ、大前田？ お主、しかめっ面が似合うのう」

後ろからした声に、ほぼ反射的に掴みかかる。

いや、掴みかかろうとして、今日もすり抜けられた。

伸ばした手の先には、黒髪金目褐色肌の少女が、客が座るための長椅子に悠々と寝そべって挑発的な笑みを浮かべていた。

仕事をサボっていたクソガキ  
四楓院夜一四席である。

「はっはっは！ 鈍いのろのう！ まだまだお主ごときに捕まりはせんア！」

「このクソ上司……仕事しろってんだッ！」

「お主が儂を捕まえられればやってやらんでもないぞ？ 出来るものならのオ！」

「助太刀するつスよ、大前田サン！」

ノリノリな軽い声が再び背後から聞こえた。

これは絶対、四席の幼馴染の浦原喜助だ。あいつがこういう感じの時は、碌なことにならない。

今だって例外じゃない。嫌な予感しかない。

「喜助、莫迦、やめ——」

彼が振り返った直後、すげえ良い笑顔の喜助が大砲の様な物の引き金を引くのが見えた。

は？ それ打つの？ やっぱ莫迦なの？

ボンッ

ビツチャア……

ロケットランチャー的な何かを喜助が発射↓部屋に粘着質な何かが散乱↓夜一ホイ——的な流れを想定してたのかしてなかったのかは最早どうでも良いことだ。

喜助の姿を見た時点で夜一はこの部屋から脱走。

それを見て喜助が追走。

置き去りにされた大前田はべつちやべちやになった書類の山を見渡した。

何かがキレる音がした。

彼は後にそう語った。

“四楓院夜一が来て以来、二番隊から奇声が聞こえることが多くなった”

——唯でさえ謎が多い二番隊に増えた謎は、これだけではない。

理由は、御想像の通りである。

数日後

——現世・空座町——

霊圧知覚を最大限解放して片桐がないことと石田がいることを確認した惣右介は、極々小規模に縛道で石田と音声を繋いだ。

「石田さん、お久しぶりです。僕は藍染です。お話が在って伺いました」

『これは——死神の術か。久しぶりだな、藍染。だが話すことはない。帰れ』

「僕があります。どうしても聞いていただけないなら、門から堂々と戸を叩かせてもらいます」

大前田からに限らず、ここ数日で滅却師内部の小競り合いの話を間々耳にした。“死神と接触しないからこそ、対抗派と渡り合える”——その真意は結局分からなかったが、佐伯とも鉢合わせしていた惣右介が石田家の戸を叩いたら、嫌でも双方の目につくだろう。聡明な彼なら密会を選んでくれるはずだ。

——暴論なのは自覚しているが、ある程度強硬で行った方が良かったらと大前田に言われたこともあるし、ここまでくれば押し通すしかない。

『……脅しのつもりか？ 事前の連絡も無く……随分と礼を失する振る舞いだ。それともこれが死神流か？』

「家にいらっしやる時に直接伺うのが良いと教えていただいたものですから、このよう

な形になってしまいました。非礼はお詫びします。本当に申し訳ありません。されど貴方との接触は総隊長の勅命。どうしても為したかつたところご理解いただきたいのです」

『……………五分待て』

——きつかり五分後、彼は惣右介の前に姿を現した。眉根を寄せて腕を組んでいる。邸宅の裏手に広がる雑木林の——傾いてきた木陰が、踊るように二人の上に降り注いだ。

「……………要件は何だ？」

「護廷十三隊と、石田さん側の滅却師とで協議の場を開きたいと総隊長が仰っています」

「断る」

「即答ですか……………理由をお伺いしたいです」

あまりにもバツサリと断られながらも、惣右介は食い下がった。

死神側に改善すべき点があるなら、知らねばならない。

「先刻君がああやって話しかけてきたのは、聞いていたからじゃないのか？ 対抗派と

我々が対等に在るには死神と関わらぬことが最善だからだ」

「その理由が分かりません。何のための『共存』なのですか！」

「『共存派』とは君たち死神が勝手に言っているだけだ。我々は死神に共存を申し入れ

ているわけではない。佐伯ら一派と敵対しているだけだ」

「! ——それは……どういう意味ですか」

「質問しかしないな、君は。少しは自身で調べたらどうだ」

「出来る限りのことはしてきたつもりです。しかし尸魂界にある書籍などでは情報が足りなさすぎる。何故対抗派が頑なに我々の——必要以上に虚を滅却すべきでないという言を拒絶するか分からないのです。仲間を討たれた憎しみを晴らすために虚を殲滅しているにしては、些か不自然だ。それに、活動が大規模になってから今までの期間が短すぎます」

石田の眉間の皺が苛立たし気に一層深くなる。

(だから言ったのだ。馬鹿者が)

視線を逸らして彼が呟いた。自分に言われたのかと訊き返そうとした惣右介が口を開く前に、石田が視線を戻す。

「……………私が協議に応じないのは、意味が無いからだ。死神に解決できる問題ではない。——話し合いで如何こうなる時勢など、とうに過ぎている」

「それは、い「だよねえ〜!!」——!?!」

一人がこちらへ歩いてくる。声音から男性だと分かるが、雨でもないのに差された蛇の目傘に阻まれて顔が見えない。



「そーちゃんが死神といるなんてビックリだなあ〜！ ナニナニ？ 僕以外にできた友達？ しよーかいしてよお！」

「咲秋……訪問予定は明日だったはずだが」

「別にいーじゃん！ 僕とそーちゃんの仲でしょ？ で、其処の少年はだ〜れ？」

片目が傘の影から惣右介を覗いた。大きめの瞳が細く引き絞られる。

下手な動きをすれば、ノーモーションで殺りに来る雰囲気だ。“サクシユウ”と呼ばれた彼が石田の隣に並ぶ。同時に、くるくると回転させながら彼は傘を閉じた。

大きく黒い瞳に長く後ろで緩く束ねた黒髪。身長は石田よりも少し低く、細身だが痩せ過ぎではない。ニコニコと人当たりの良い笑みを浮かべながらも、片時も惣右介から目を離さない。

石田は溜息を一つ吐いて、彼を窺める様な声音になった。

「藍染惣右介」。先日話した死神だ。サツサとその殺気を仕舞え」

「あくあ！ あの！ うんうん、りよーかいだよ！ 初めまして、そーすけくん！ 僕、黒崎咲秋！ そーちゃんのマブダチです☆」

「死ね」

「ひど〜！ 冗談でもそんな事言っちゃい〜けないんだあ〜！」

緊張感が有るのか無いのか分からない会話を続けている二人とは裏腹に、惣右介は驚

きを隠せずにいた。

黒崎咲秋——共存派筆頭のもう一人だ。

……………想像していた雰囲気とは大分違うが。

「改めまして、護廷十三隊一番隊第十席、藍染惣右介です。お初にお目にかかります、黒崎咲秋殿」

「へへ、一番隊の席官！ 見えない〜！ 若いつていいねえ！ そんで……」

黒崎の姿がブレた。

高速歩法で惣右介の背後に回られる。

持つ者が居なくなり、傘がとんと音を立てて地面に倒れる。

身体をずらし、黒崎から伸びてきた手を掴み返した。

掴まれるとは思っていなかったのだろう。黒崎は大きく目を見開くと、すぐに笑顔になった。

「へえ〜！ 良い動きだ！ 見た目に依らずやるじゃん。弱いな、ふつ……」

やる予定だったのに、赤っ恥だなく！

「ありがとうございます……？」

迷いながらも惣右介が感謝の言葉を口にすると、黒崎は更に目を開いたかと思うと噴き出した。

「ぶつ、あははは！ いーね、気に入ったよ！ そーちゃんが何で君を気に入ったのかが分かった！ 僕のこと、もつと気軽に呼んでいいよ♪」

「はい、黒崎さん」

「むー、固いなー……ま、追々でいーや。ねね、そーちゃん、そーすけくんにならヒントぐらい言つてみていいーんじゃん？」

互いに手を離すと、やや真剣みを帯びた笑みで黒崎は石田に向き直った。

石田の顔が一層険しくなる。

「これは我々の問題だ」

「今月だけで何人死神が負傷した？ そうも言つてられないじゃんか」

「否定はしない。だが、死神が積極的に介入すれば今までの様な小競り合いのレベルでは済まんぞ？ 少なくとも、山本重国が総隊長である内は死神に介入させるべきではない」

「どういう意味ですか？！」

流石にこれは惣右介も口を挟んだ。

沈黙した石田に代わつて黒崎が不敵に笑う。

「そーすけくんは、八百年前の戦いでそちの大将が誰だったか知つてるでしょ？ 滅却師の多くは、彼に対して良い印象無いんだよねえ。いや、この言い方だと語弊がある

かな。滅却師なら、彼に対して大なり小なり敵意がある。彼が出張るとなると、殆どの子が黙つてないだらうなつてこと！」

納得して俯いた惣右介を見ながら、意地の悪い顔になった黒崎が早口に続けた。

「実は今、ここらの滅却師はある使命の下に動いてるんだけど、そのやり方をめぐつて真つ二つに割れてるんだ。僕らと禅ちゃん——じゃ分かんないか、佐伯禅治郎つて言つた方が良いかな。兎に角僕らと彼をそれぞれ筆頭にしてね」

「咲秋！」

「もー、分かつてるつて。あんま言わないから！ 問題は、死神との関係をどうするか？ ——維持と変革のどちらが良いかつて話さ。僕らは維持したほーがいいよねつて思つてるんだよ。それがそーすけくん達死神には協力的だつて映つたみたいだねえ」

石田に睨みつけられても全く反省していない様子で黒崎が謝っている。そんな二人を呆つと見ながら、惣右介は思索に耽つた。

総隊長に介入させたくない

死神に今後関わってくる

噂

確認

佐伯

滅却師

維持と変革

総隊長の苛つき

盲信

誇り

逃走及び消失

眷属

情報から、隠された情報を――

点を、線に。線を、面に。面を、立体に――

マソラから教えて貰った思考法だ。

「……………始祖の、復活？ いや、その後の死神との決戦…………？」

「!!？」

うっかり零した惣右介の思い付きに、二人の剣幕が変わった。

「そーすげくん、何でそう思った？」

「お二人のお話と、総隊長の様子を見てそうかなと思っただんです。思い付きだったんで

すが…………」

「思い付き、かあ……ねえ、総隊長の様子ってヤツを教えてくれない？　どんな感じだった？」

「大分苛ついておられました。特に、滅却師という単語に過敏に反応していらつしやつて」

「ふむふむ、成程ねえ。その認識はちよこつと宜しくないなあ………そーちゃん、これは……」

「……………」

緊迫した雰囲気を一層濃くしたその場は、耐えがたい沈黙に支配された。やがて、石田は大きく溜め息をつくと惣右介に向き直った。

「協議とやらに誘いに来た、と言ったな？　その誘い、やはり受けよう」

「！　——ありがとうございます」

「ただし、公にはするな。この会談が漏れれば、大勢死ぬ事態に発展しかねん」

「分かりました」

「加えて——」

石田は、切れ長の目を一層細めた。

「協議に参加するのは、私と咲秋、君と総隊長のみだ。それ以外の面子ではやらん」

「!?　……それは僕一人では答えかねます」

「構わん。後日結果を貰えればいい。……………恐らくこの要求は通る。それと藍染、今日話したことは、他言無用だ」

「あ、協議に関する報告は総隊長に話さないといけないと思いまーす!」

片手を元氣よく振って咲秋が言った。めんどくさそうに石田はそちらを見て、もう一度惣右介の方を向いた。

「それ以外に決まっているだろう。だが、総隊長以外には決して話すな。君の推測に至っては、総隊長にもだ。いいな?」

「はい」

## SIDE・Q

一礼して去っていった惣右介が居た場所を見たまま、二人は暫く動かなかつた。

「山本元柳齋重國——流石は死神の長つてところだね。現世にもしつかり警戒を怠らない」

「余計なお世話だ。尸魂界にのみ拘かかすつておけばよいものを」

「そーゆーわけにもいかないでしょ。彼らは自称「調整者バランサー」なんだからさ。それに、禪ちゃんはずっと燥はぎ過ぎ、目立ちすぎ! 死神が本腰を入れてくるのは時間の問題

だったさ。今の所は死者が出てないから表面化してないだけでね。だからそーちゃんがこの前禅ちゃん止めてくれたの本当にフラインプレーだったよ！ぐっじよぶ！」

咲秋が親指を立てて決め顔をしているのを無視して、宗弦は声を更に低めた。

「……………それで咲秋、どう思う」

「……………かなりマズイ。それなりに覚悟して臨むべきだろうね」

普段とは打って変わって真剣な咲秋の表情を見て、宗弦が苦し気に瞳を閉じた。

「分かった。——やるだけやってみるしかないな」

「ン。ああくもおく、参っちやうよねえ。さつさと引退して隠居したくい！」

「我々にそのようなモノは存在しないだろう？ まったく……」

「いやいや、うっかり追放にでもなったらあるじゃん☆」

「縁起の悪いことを。余程のことが無ければそんな事にはなるまい」

「まーねー！」

明るく振舞う咲秋の眉根が寄る。

珍しく苦しげな表情に、宗弦が目を見開いた。

「咲秋？」

「……………ねえ、そーちゃん」

「何だ」



次の瞬間、咲秋の表情筋が完全に緩んだ。

「今朝ね——真咲が、僕のこと」おとーしゃま”つて呼んでくれたんだ〜!! 天使は……天使は地上に居たんだッ!」

「まさかそれを語るために来たんじゃないだろうな……」

片手で頭を覆いながら溜息を吐いた宗弦は、咲秋に聞こえるか聞こえないかの声で、  
“言う気が無いなら構わんが……”と呟いて首を軽く横に振ると、咲秋に背を向けた。

尚も話し続けようとする咲秋に、興味無さげに宗弦が歩き出した。彼を追おうと咲秋が駆けだしたのを、宗弦が手で制止する。

「来るのは明日にしておけ。私は今、抜け出して此処に來ている。報告前に他人の口からこの件が漏れるのは不味い」

「真咲が天使なのは周知の事実だよ☆ 真咲に手を出す奴は、僕が全霊を以てブチ殺すし〜!」

「茶化すな。そつちじゃない」

「むう……残念だけど、その通りだねえ……おけ! また明日ねえ〜!」

軽く手を振った咲秋の姿が飛簾脚で消えた。

空は生憎の曇り空で、夕日は見えない。

## 第十三話 動き出すハグルマ

## SIDE・D

ひざ丈ほどの机を挟んで、二人ずつが互いに向かい合つて座っていた。

「よう来てくれた、石田宗弦、黒崎咲秋」

「こちらこそ、山本重国総隊長。こちらの要望を通してくれたこと、感謝する」

石田と総隊長が挨拶を交わした。それだけのことなのに、何故か互いの緊張感が触れられそうなほどに伝わってくる。

山本元柳齋重国総隊長、藍染惣右介一番隊第十席、石田宗弦、そして黒崎咲秋のみがこの空間に存在しており、回りには人影一つない。人影が動けばすぐに察せる現世の小さい丘の上に、薄布で天幕が張られたこの場所が対談の場だった。

滅却師の当主二人のみならず、総隊長とも相席する羽目になってしまった惣右介は、胃が痛い思いでその場にただ坐していた。変な汗が止まらなかつたのは仕方のないことである。

形式的な挨拶が住んだところで、総隊長が重々しく口火を切った。

「さて、早速で悪いのじやが、お主ら二人が協議に応じたのは共存やらなにやらの話の爲では無いのう?」

「ええ。そちらがどの程度知っていて、どの程度干渉してくるつもりなのか知りたい」「随分一方的な物言いじやな。そのようなこと、易々と開示できるわけあるまい」

石田がさらりと要求した。なんだか、らしくない気がする。

兎も角、わざわざそんな風に言わなくても良いのに、と惣右介は冷や冷やししながら思った。黒崎の方を見ると、ヤレヤレという風に石田の肩に手を置いた。

「そーちゃん、その言い方は火に油だつて。相手が総隊長なだけに。あ、これ上手くない? どうよ、そーすけくん!」

総隊長の斬魄刀が炎熱系なことを言っているのだろうか? 分りにくい……

というかこのタイミングで振って来ないでほしかった。どう答えてもこの場を納められる気がしない。

惣右介は若干引き攣った笑みを浮かべながら頷いた。

「そう、ですな……」

「藍染、駄目なら駄目と言うべきだ。咲秋、ここはふざける場じやないぞ」

「分りかつてゐるつて☆ でもそーちゃんつてば余裕無さすぎ! そんな言い方じやア協議にならないよオ」

石田の警告を軽く躲した咲秋は、ふと真剣な表情になつて総隊長に向き直つた。

「総隊長、我々が持つている情報は不確かなものばかりなんです。だからこそ我々と禅ち……じゃなくて佐伯は対立している。そういう意味なんですよ。我々としては、下手にそちらに介入してほしくない。余計な血を流したくない。そういう事が言いたいのです」

「不確かでも構わぬ。情報を開示してはくれんか」

「流石に全ては把握しかねています。それに、変な誤解を招く可能性が有るものもある。先んじてこちらが話すよりは、そちらの情報を訂正していく方が正確かつ迅速かと思ひます」

「……………ふむ、ならばこちらが掴んでいる情報を話そうかのう」

渋々、といった感じで総隊長は口を開いた。

「ここ数年で一気に滅却師の活動が活発になつてきておる。大量の虚を狩り、新たな術や技を開発し、あまつさ剩え死神に危害を加えるようになった。そこで調べてみると、曰く、祖の復活が近い」、曰く、彼の軍に従え、というようなことが囁かれているそうじゃ。これが本当なら、死神として止めぬわけにはいかぬ」

一抹の不安が惣右介の胸に湧き上がっていく。この流れは、マズいのではないか？

黒崎と石田の表情も曇つたままだ。

「……………後者は兎も角、前者は確かに噂になっています。だが余りに現実離れしている。特に一つ目は“祖の力を継ぐ者の生誕”だというものもあります。こちらの方が余程信憑性が高い。しかし、そういう力を我々の陣営は探知できずにいます。加えて噂の出所が全く掴めない。正直に申しますと、ただの噂だろうというのが我々の見解です」

「それにしても、活動している滅却師の数が多すぎるのう？」

「……………それが、後者の噂というか最早スローガンですが、それを出している人物は割れているのです」

そして黒崎は黙り込んだ。だがこれは、殆ど名指したにも等しい行為だった。

「成程のう。佐伯禅治郎じゃな？」

「……………」

沈黙は金というが、今回に限ってはそれに意味はなかった。二人にもそれは分かっているようで、今度は石田が口を開いた。

「禅治郎に関しては我々が話をつける。死神の手出しは不要だ」

「話し合いでどうにかなる問題かの？」

「……………奴は確かに熱狂的なまでに今回の件に執着している。だが奴とて大家の当主。それくらいに分別はある」

“それくらいのもの”、という言葉が引つ掛かる。

それはつまり、死神と真つ向から事を構えることが得策かどうかという事だろうか？  
しかし石田は、“話し合いに意味のない所まで事態は進んでしまっている”というよう  
なことを言っただけではないなかつただろうか？ だとしたら……

「戦うつもりですか……？ ——佐伯たちと……」

「！」

惣右介の言に石田が目を見開いた。

「……聴いな。身内の問題は身内で片を付ける。常識だ」

「お主らでは相手にならんことくらい、重々承知の上なのかの？」

「……………無論だ」

淡々と言つてのけた石田と同様に、黒崎もまた静かに沈黙している。二人の様子を見て、尚も総隊長は口を閉ざさない。

「正直に言つと、お主らの手勢では足止めにもならんぞ」

「分かっていると云っている。だが、止めねばならない。滅却師の血を絶やすような事態だけは避けねばならない。我々が抵抗することで流れを変えられる可能性が有るのなら、行動すべきだ」

石田は覚悟を決めた目をしていた。言葉が続く。

「だから——」

「だから死神は手を出すな」、かのう？　それは了承できぬ」

「何故！」

総隊長は重々しく口を開いた。

協議の場の長机を叩いた石田に対して、黒崎の方は既に諦めの表情を浮かべていた。

「言うたじゃろう？　そなたらでは足止めにもならぬと。避けられぬ戦禍なら、相手の準備が整うまで待つ必要も無し」

「——ッ！」

「そーちゃん、もう仕方ないよ」

黒崎が勢いづいた石田を止めた。

「総隊長サンは、僕らと協議するずっと前からこうするつもりだったみたいだ。——そうでしょう？」

「応。佐伯禅治郎を筆頭に、死神に対して宣戦布告がいつ為されてもおかしくないという情報は既にあつた。今まではお主らの様な希望の芽が有ると手を出せなんだが、ここまでのようじゃ」

「総隊長、しかしそれは……あんまりです！　このような……」

「あちらとも既に何度も協議しておる。それでも応じなんだ。潮時じゃよ」

惣右介も口を挟んだが、一蹴されてしまった。

黒崎が眉間に皺を寄せながらも言う。

「残念ながら佐伯たちは滅却師の大多数です。それを相手になさるといふことは、滅却師そのものを相手になさるといふ事。我々はあなた方と敵対することになります」

「応。分かつておる」

「ちよつと待つてくださいい！」

今度は惣右介が立ち上がった。視線が一気に自分に集まるが、興奮しているせいあまり気にならなかつた。

「黒崎殿方は戦う必要など無い筈でしょう？ 何故我らが刃を交えねばならないのです

か？」

「刃を交える」、か。ふふ、滅却師弓兵に対して面白い言葉を使うね。それはまあいいとして、さつきそーちゃんが言つてたでしよ？ 僕ら滅却師は皆が身内みたいなものなの

さ。禅ちゃん一人で闘わせるわけにはいかないよ。身内を、よそ様の手に掛けさせるわけにはいかないんだ」

黒崎の深淵のように黒く深い瞳を除いた惣右介は、身震いしそうになった。底知れぬ違和感——そうとしか言いようのない不安が彼の胸の内を席卷していた。

自分の理解の及ばぬ何か黒崎の中にある。そんな気がした。



「意見はもう無いね？」

黒崎が立ち上がり、石田と一緒に立たせた。

「僕らはこれで失礼します。もうお会いすることも無いでしょう」

「——咲秋」

「仕方ないよ、そーちゃん。もう誰にも止められない。滅却師を絶やさないと、戦う相手が変わっただけさ。諦めよう。そーちゃんのせいじゃないよ」

「しかし——」

何か言い掛けて石田は止めた。

咲秋が発する気配を察して諦めた様だった。

二人が天幕から出たのに惣右介は続いた。

総隊長は止めなかった。

「石田さん！ 黒崎さん！」

「そーすけくん……ごめんね、こんな結果になっちゃってさ」

愁いを帯びた咲秋の微笑は見るに堪えなかった。

「何で黒崎さんが謝るんですか!?! お辛いのは貴方の方だ!」

「一番重い会に巻き込まんじやったからねエ。結局僕らは何もできなかった。どんな奴だつて、死なないに越したことはない方が多いのに……あのさ、そーすげくん」

「……何ですか」

ふと真剣な顔になつて彼は惣右介に鋭い視線を向けた。

「——気を付けておいて。きつと君は僕らよりずゝツと長生きするだろうから……今回の一件、僕らは何か裏があるんじゃないかなつて思つてるんだ」

「裏、ですか」

黒崎は頷いて、声を潜めた。

「さつき言ったでしょ? 『噂の出所が掴めない』、つて。その一方で、禅ちゃんはとっても積極的なんだよねえ。彼はまだ若いけど、出所のよく分からない噂に傾倒する程軽薄じゃないことは僕らがよく知つているんだ。これは多分ねえ、禅ちゃんを唆した何かがあると思うんだ」

「?! ……まさか、それが死神であると?」

「それはどうかな? ううん、そうだったらまだマシつてやつだね」

「ということは、滅却師の可能性を考えているのですか? そんなこと……」

それはつまり、同族をけしか嗾けて陥れたということだ。佐伯禅治郎という隠れ蓑を体よく

スケープゴートに仕立て上げ、裏で何かを行って――

「禅ちゃんは死神の……特に隊長格の恐ろしさを知らない。死神は精々こんなものだと侮っているんだ。そんな覚悟じゃ、いくら彼でも死ぬ。恐らく総隊長が本気になって護廷十三隊を動かせばあつという間に禅ちゃんたちは全滅だ。そんな混乱状態つていうのは、コソコソ動くにはもってこいって事だね」

咲秋は苦虫を噛み潰したように言った。

「もし、噂が本当なんだとしたら……滅却師の始祖が復活し、軍を為し、死神と戦う力をつけようとしているのなら、今回の一件は目くらましには都合がいいと思わないか、そーすけくん」

惣右介は答えられなかった。

その仮定が事実だとしたら、狂っているとしか思えない。

自身の眷属を売り、その死山血河をもって死神を倒そうとしている？

そんな暴挙が許されていいのか……？

「同情を求めているのではない。勘違いするな。これは警告だ、藍染」

思わず顔を上げて石田の顔を見る。沈黙を貫いていた彼は一瞬黒崎を睨み、それを逸らすと普段から鋭い眼光が一層鋭く惣右介を射抜いた。

「全てでなくともこの仮定が正しかった場合、これから始まる禅治郎たちとの戦いは前

座でしかなくなるということだ。その覚悟を持つて臨むことを薦める」

そう言うのと石田は惣右介の耳元に顔を近づけた。黒崎には聞こえないだろう囁き声だが、惣右介の鼓膜を揺らす。

(手の届く範囲、耳の聞こえる範囲、目に見える範囲にあるモノなどたかが知れている。気をつけろ、藍染。お前が真実に辿り着いた時、その事実を知っておくに越したことはないだろうからな)

「真実……? ——これ以上に、何があるって言うんですか!」

石田は言うだけ言つてその返事もせずにはサッサと引き返していった。黒崎もそれに続いて小走りになりながら、一度だけ振り返つて「じゃーねー!」と手を振った。

惣右介がそれに深々と礼をして返したのを見て彼は悲し気に頷くと、身を翻して石田を追つて行つた。

「——茶番だ」

「まーまー、そう言わず。双方にとつて、これは必要な過程だつたんだからさ——」  
先程とは打つて變つて足取りの軽そうな隣の男を、批難を込めた目でもう一方が見た。

——戦火は、すぐそこに——

## 第十四話 白きカゲ

“頭でつかちの猿”という種族は  
争いに於いて

“言葉”という手段が在りながらも  
屢しばしば“暴力”という手法に訴えるものである

それが愚かだとか議論する気は無い  
何故ならそれらは

見えようが見えまいが

痕跡が残るといふ事実しか

僕に語らないからだ

そして“言葉を得た猿”という種族は

当たり前に在るモノほど

其れを表現する言葉は曖昧だ

例えば 青

例えば 島

例えば 桜

これらの言葉に対して、説明し尽くせる者など殆ど居ない  
何故ならこれらは当たり前に存在し

周囲の人々に共有されているという意識が  
血液に溶けて全身を巡っているからだ

だから争いに於いて

愚かにも自らの“正義”に対する“大義名分”を掲げる者は

自らの“正義”が周囲に理解されておらず

あまりにも希薄であるという事実を

告白しているのである

僕が面白く思うのは

為政者という集団が

悉くこの摩訶不思議な洞窟を掘り進めるのが好きであるという事だ

幾度もその地図を書き直し

地形を確認し

己の位置を見て安心する

そうせずには夜も眠れない

彼らは繊細なのである

そうやって一所懸命に口を動かす彼らは

愛すべき愚昧さで

僕の嗜虐心を駆り立てるのだ

---

僅かに時が触れ戻る。

死神・藍染が滅却師・石田との再会を果たした翌日。

又は、彼らの協議の数日前。



場所は――

S I D E ・ Q

「敬礼止め！ 解散！」

壇上への滅却師<sup>クインシー・クロス</sup>十字奉上を止めた大勢の内、二人がその場に残された。

一切の無駄なく捌<sup>は</sup>けた群衆から取り残された人影に、ブーツを高らかに鳴らして近づ<sup>つ</sup>く者が一人。

「石田宗弦、黒崎咲秋。昨日の報告を」

神経質そうな顔立ちに丸い眼鏡、そして刈り上げた頭の男性が、二人――宗弦と咲秋の前に立ち、後ろで手を組んだ。

「はっ！ 一番隊士が一名、石田家の”<sup>ヴァンハイム</sup>寮”に接触を図つて来ました。接触を拒否しようとしたところ抵抗され、協議の申し出を受けました」

宗弦の頬が強<sup>した</sup>かに叩かれ、彼の身体が吹<sup>た</sup>つ飛んだ。ドツ、という重い音と共に彼が床に転がる。

「そーちゃん!!」

「黙りなさい。そして黒崎咲秋、貴方は何故それに口を出さなかつたのです？」

「死神は総隊長命令で動いていました。殺すのも申し出を拒否するのも得策ではありませんでした！」

今度は咲秋が叩かれたが、既に起き上がっていた宗弦にその身体を受け止められた。その様子に一瞬間を擧めた男は、不機嫌そうに首を傾げた。

「貴方はいつ、そのようなことを独断で決定できるほど偉くなったのですか？  
候補生の分際で」

「申し訳ありません！　しかし——」

「口答えは結構。相応の罰を」その位にしておけ、キルゲ・オピー——団長！！」

「彼らへの罰は私が下す。下がれ」  
暗がりから現れた人物はその長い金髪を揺らしながら颯爽と三人の方へ向かってくる。彼が二人の前に立ったのを見て、二人は急いで再び敬礼を意味する直立不動の構えを取った。

キルゲは尚も食い下がる。

「しかし団長！　貴方様の手を煩わせるようなことでは「聞こえなかったのか？」——  
！」

団長はその整った顔を僅かにキルゲの方へ向けると、目を細めた。

「私は「下がれ」と言ったんだ」

その威圧感に三人は背筋が凍るような感覚を覚えた。キルゲの目に恐怖心が映る。

「も、申し訳ありません！ 失礼いたしました」

そう言うときルゲはそそくさと去って行った。

残された二人は胃が縮む思いで、シュテールリッツダーグランドマスタ星十字騎士団最高位・及び団長——ユーグラム・ハツシユヴァルトが口を開くのを待っていた。ほんの瞬きの時間が何倍にも感ぜられたのは言うまでもない。

団長はキルゲが去ったのを見届けると、口を開いた。

「候補生同士で勝手な争いが起きているそうだな」

「!!」

二人は息を呑んだ。まさかそちらに話が飛ぶとは思ってもみなかったからだ。

「死神と友好関係を結ぶことに意味があるか？」 石田宗弦、黒崎咲秋」

団長の視線が一層鋭くなる。

彼は八百年前、陛下が死神に敗北する様を直に見ているのだから、その嫌悪感は仕方のないことなのだろう。だが、と宗弦は口を開いた。

「お言葉ですが、我々は友好関係を結ぶという意図は有りません。あくまで現状維持すべきだと考えているのです」

「理由は？」

「いずれ互いに血を流す運命ならば、それまではこちらが消耗しないように行動すべきだからです。闇雲に死神に戦いを挑んでもこちらに利することは何一つありません」

「石田宗弦、君には間違いが二つある。まず一つ。来る戦いで血を流すのは死神だけだ。我々が行うのは戦いではなく蹂躪なのだから。そして二つ。今死神と争うことに利なら有る」

団長が口にしたその言葉に咲秋は珍しく顔を歪めた。

「——滅却師は増え過ぎた」

今、滅却師の最高機関にして唯一の軍団・星<sup>シュテルンリッター</sup>十字騎士団は瀨靈廷の影の中に存在する。

滅却師が“見えざる帝国”<sup>ヴァンデンライヒ</sup>と呼称するそれが仇敵<sup>ごんなところ</sup>の根城に在るのは、八百年前死神との大戦で敗れた滅却師がその隠れ場所として、死神の警戒の最も薄いという理由から逃げ込んだからであつた。

その利は大きかつた。

死神は油断したままであるうえ、滅却師が力とする霊子が腐るほど存在する。

そしてこの立地は、彼らに不老のまま陛下——滅却師の始祖たるユーハバツハの復活

を待つことを可能にした。

尸魂界の大多数の魂魄は不老だ。

そして不老でない者との差は何かというと、その身に靈力を宿すか否かということだ。

靈力が身体から湧き出続けるものは常にその身に靈力が通い続ける。そしてそれによつて身体は成長し、古い、死を迎える。有り余る力が身体を良くも悪くも変化させるのだ。

それ即ち、靈力の発生を極端に制限すれば老いが生じていないかと錯覚するほどゆつくりとしか老いなくなるということだ。

そして滅却師は、限られた範囲内——この「見えざる帝国」内であれば靈力発生を極端に制限する術式を編み出すことに成功した。こんな事を実行できたのは、滅却師だったからだろう。死神と滅却師は、戦い方が決定的に違う。

死神は自らの内部靈圧によつて戦う。従つて、自身の靈力を抑えることは自身の無力化に直結する。

対して滅却師が用いるのは自身の周囲にある靈子だ。靈力がどれだけ低かろうと、靈子さえ存在していれば戦うことができる。勿論矢の威力や精度は大きく損なわれるが、その程度で戦闘不能になるものは「見えざる帝国」に存在しない。

とはいえ、この術式も完璧ではない。

第一に、範囲が限られている。影シャッテンの領域レベライヒと呼ばれるこの影の世界でしか、発動できないのだ。第二に、この術式自体が永遠に存在し得るものではない。保もつて千年ということだが、最近でも綻びが生じているという噂を聞く。この術式を維持すること自体難易度の高いことであるという事だ。それこそ、死神との戦いで用いるには実践的でない程に。第三に、一度切れた術式を掛け直すには数十年の歳月が必要であるという事。その間、見えざる帝国内と言えども年を取ることになる。最後に、最近分かった事実として、この結界に馴染み過ぎると、一定時間を領域外で活動すると極端に行動し辛くなるという事だった。停滞に慣れ過ぎた身体が、変化に付いて行けなくなる凶式だ。

不老とは不死と必ずしも同義ではない。

致命傷を負えば死ぬし、怪我をすれば治すのに時が必要になる。

そしてそれは停滞であり、そのままであれば滅却師が増えるということは起こり得ない。では何故ハッシュヴァルトは「増え過ぎた」と言ったのか。

それは滅却師の戦略からだ。

「見えざる帝国」に居ることを許されるのは、選ばれたほんの一握りの滅却師だけ。残りの者達は、或る者は成長し帝国に入れるように力を高め、或る者は帝国に入れぬまま入れる見込みの有る者を育てる。

現世に点在するそう言った滅却師の現世における仮宿は「<sup>ヴァンハイム</sup>寮」と呼ばれ、そこから才有る者が「見えざる帝国」に引き抜かれていく。石田、佐伯、黒崎他、滅却師の家として現世に点在する家々は、「寮」の——ある意味では仮の名でしかない。

禪治郎や宗弦、咲秋はそうやって引き抜かれた者の中でも「候補生<sup>カンゼツ</sup>」と呼ばれる者に当たる。

何の候補か？

——それは「陛下から御力を受け得る實力を持った滅却師である」候補だ。

「見えざる帝国」内にいる滅却師のほんのわずかな者たちは、陛下から滅却師の基本的な力に加えて更に「<sup>シユリフト</sup>聖文字」とそれに因んだ特殊な力が付与されている。陛下の血肉を取り入れ、より深く結びつくことで与えられるその力の凄まじさは、団長と同じ空間にいただけでも分かるほど強く、故に稀少だ。

それに比べれば、候補生と呼ばれ敬われる石田たちも、ここ「見えざる帝国」では<sup>ゾルダート</sup>聖兵と呼ばれる雑兵と変わらない。

「一族の繁栄に勝る喜びなど有りはしないとありますが」

「咲秋がそう言うと、ハツシユヴァルトの視線が刺さった。

「繁栄？　本当にそう思うか？」

ハツシユヴァルトの目が細められる。途端、視線に射竦められた咲秋は足の踏ん張りがきかなくなり片膝をついた。

「無力な雑兵がいくら増えたところで陛下のお力になりはしない。例え アウスヴェーレン 聖別 ” を陛下がなさるにしても、力有るものからでなくては意味がない」

聖別——始祖ユーハバツハのみが行使できる、全ての滅却師の能力の回収及び再分配するチカラだ。滅却師であれば、全ての力は陛下によって循環し、彼の下へ還る。

そしてハツシユヴァルトが指摘した通り、現世の滅却師で最も増加しているのは混血滅却師と呼ばれる者達だ。彼らは元を辿れば純血統と普通の人間若しくは靈能力のある人間との間に生まれた者達で、滅却師としての能力は純血統に大きく劣る。混血統と純血統が態々子を為すことなど有り得なかったから、血の薄まった滅却師が増えてしまっていたのは事実ではあった。

「石田宗弦、例の兵器の計画は進んでいるか」

ハツシユヴァルトは視線だけを宗弦に向けた。

宗弦の姿勢が再び力む。

「はい。ただし、最終段階での弊害が未だに解消できていません。全力を尽くしており



ますが」

「これ以上は無理か。構わない。迅速に量産しろ」

「?! お言葉ですが、あの装身具は個別の力の補佐を目的としたものです！ 使い手の霊圧に合わせず量産などしては、暴発の危険が高まります！」

「構わないといっている。所詮使うのは不出来な者達だ」

「……若輩者の無礼をお許しください。御意にございます」

宗弦は滅却師としての才に恵まれていたが、候補生として推挙されたのはもう一つの理由が大きかった。それは術具の開発だ。頭の固そうな外見とは裏腹に独自の発想と持ち前の技術力で様々なものを作ってきた。

今彼が開発中なのが、周囲の霊子を滅却師に集めやすくする装身具だ。元々は力の使い方が分かっていないがために本領を発揮できない滅却師にそのコツを教えるために作っていたのだが、霊力のブレが一定値以上になると暴発する危険性のあるものになってしまっていた。個々の霊圧に合わせてオーダーメイドすることでその率を大幅に下げたことを計画していたが、そうも言っていられなくなったらしい。

この装身具は並の滅却師が着けるだけでも霊子を収束しやすくなり、大幅に戦闘力が上がるだろう。それを量産しろと言うのだ。

加えて、団長は先程「滅却師は増え過ぎた」と言った。

この二つから考えられることは——

宗弦は先程の咲秋の様に顔を歪めた。

「——貴様ら二人には罰を下すのだったな。では死神との協議に参加し、宣戦布告を行つてくること。それが罰だ。戦力には「寮」の者達を。この意味が分かるな？」

……口減らしだ。

宗弦と咲秋は半ば予想していたハツシユヴァルトの言葉に沈黙した。

幾ら数が多いとは言つても、「寮」の滅却師はその力が「見えざる帝国」の一般兵にも満たないとされているから現世に留まつているのだ。尸魂界を敵に回して勝てるはずもない。

加えて死神との関係の維持を謳つていた二人を戦線のトップに立たせることでその論を黙らせた。彼らが黙れば後は死神を疎ましく思っている派閥ばかりなのだから、現世の滅却師が戦争一色になるのは分かりきった事だった。更に言うなら、この戦争に負けることで二人は敗軍の将となる。派閥を作りこれまでの様に自由に行動することは難しくなるだろう。

そしてこの一手は恐らく、滅却師に対してだけ意味を持つものではない。

今回の戦いによつて、見かけ上滅却師は大きく損なわれる。

八百年前のような戦いは二度と起きないと——その芽はもう摘んだと死神に誤認さ

せられる。これからのことから目を背けさせられる。

「——御心のままに」

「そう案じずとも、戦いが終わるまで二人の幼い子供と妻をここ“見えざる帝国”に退避させることを赦そう」

二人がその意を汲んだことを知ってか、ハッシュユヴァルトは静かにそう言った。

普通ならその情けに涙を流して謝辞を述べるべきなのだろう。しかし二人にはそれが出来なかった。

「……たかだか候補生のためにそのようなことをしていただくわけにはいきません」

「そんな事はない。才有る子らだと聞いている。何か問題か？」

（嘘だ）

二人はそつと目を閉じた。

数千居る軍団を纏める長が、年端もいかぬ子供の才など気に掛けるわけがない。

そして、滅却師でも所詮は人間だ。家族の情に勝るモノなど無い。

恐らくこれは、二人が変な気を起こさないようにするための人質なのだろう。

そうと分かっているとしても、断る選択肢など——

「——有りません」

二人は深々と頭を下げた。

「お心遣いに感謝いたします、軍団長閣下」

集会所から二人が出ると、廊下に二人の人物が立っていた。

二人とも黒髪だが、一人は中華系、もう一人は日系の雰囲気醸し出している。

「蒼都ツツシド、それに——禅治郎……」

宗弦が露骨に嫌そうな顔をしたのに対し、禅治郎は嘲笑を以て、蒼都は無表情のまま宗弦と咲秋を見た。

「二人揃って閣下のお怒りを買うとは。だからあそこで止めをさしておけばよかったのですよ」

「死神と戦うのは滅却師の運命だろう」

禅治郎たちに宗弦が答えようとした直後、咲秋がそれを制した。

宗弦は一瞬咲秋に何か言い掛けて、止めた。不機嫌そうな顔のままそっぽを向いた彼を見て咲秋が微笑む。

「ありがと、そーちゃん。ふふ、折角この四人で集まったんだから、喧嘩は無しにしようよ♡ね、禅ちゃん、トウくん」

この四人、というのは、候補生の内アジア系の血を引いているのがこの四人しかいなかったからだ。四人はそれぞれが得意分野に關して突出していることで候補生内では有名だった。宗弦は前述の通り技工面で、蒼都は独自の体術で、禅治郎は術の使用に關する器用さで、そして咲秋はその類稀な頭脳で。

滅却師同士の人間關係というものは大体が冷めたもので、宗弦と咲秋の様によく一緒に居ることは珍しかった。特に禅治郎と宗弦は相性が良くないのか仲が悪く、しよつちゆう衝突していた。

佐伯禅治郎——彼は、現時点で最後に候補生と為った滅却師だ。

十年ほど前に佐伯家他幾つかの家の重鎮たちに担がれて当主と成った彼のことを、咲秋と宗弦は危惧してきた。

経験の無さ、そして若い故の勢いが危うい青年——二人の予想は的中した。

今までギリギリのバランスを保ってきた虚討伐を加速させ、死神との衝突を増やした。

『禅治郎、これ以上は死神も黙っていないぞ。下手に動き過ぎるべきじゃない』

『は！ だから何だというのですか？ あれ程処理すべき虚ゴミが残っているのは奴らの不

手際でしょう？ 塵掃除を手伝ってやっているのに、感謝されこそすれ文句を言われる

筋合いはありませんよ。ああ、奴らの顔色を窺っている腰抜けには理解できませんか』  
『禅治郎、お前という奴はッ!』

『まーまー! 一度の量が問題なんだよ。禅ちゃんは腕が立つから派手にやりすぎると、死神に目を付けられちゃう。』見えざる帝国』までそれが及ばない保証ある?』  
『無能の集団に何もできはしませんよ』

元々彼を推挙した老害たちは彼のことを扱いやすい駒くらいに思っていたのだろうが、若い連中も禅治郎の思想に賛同する者が後を絶たず、歯止めがかからなくなった。それがこの始末である。

『何故閣下は禅治郎をお止めにならないのだ! 態々危険を冒す意味はないだろう?!』

『……うん』

『咲秋? ——何か思い当ることもあるのか』

『んく……いや、杞憂かなあ』

虚狩りが激しくなってきたころ、咲秋が思索する素振りを見せていたのを思い出す。あれはもしかしたら、今回の閣下の意図を読んでいたのかもしれない。

兎も角、宗弦と禅治郎の衝突をいつもまい具合にいなしてきたのが咲秋だった。

彼は禅治郎たちにも笑顔を向けると、照れたかのように片手を後頭部の方へ持って

いって擦った。

「確かにお叱りは受けちゃったけど、悪い事ばかりでもなかったよオ。一軍を任されちゃった☆」

「何ですって?!」!!」

禅治郎だけでなく蒼都も目を見開いて驚いた。宗弦が大して動じていないのを見てそれが嘘ではないと分かった彼らは再び驚き、禅治郎が咲秋に掴みかかった。

「何故貴様らなどにつ! どういうことですか?!」

「落ち着いてよ、禅ちゃん。これは閣下の決定なんだよ? 何でもクソもないよ!」

「ッ!」

ギラギラと怒りに目を燃やす禅治郎が、咲秋の胸倉を掴む手に込める力を強めた。ギリリ、と制服の繊維が擦れる。

「あははははは! 禅ちゃんなら喜んでくれると思っただけどなく! ——近々、死神との戦争が始まるよ!」

「!!」

傍観を貫いていた蒼都が禅治郎の手を咲秋の胸倉から外した。

「詳しく話せ」

「ン。今度死神側と協議することになってね。そこで宣戦布告することになったんだ。

現世の滅却師でそれに当たれってさ」

蒼都が何か言い掛けたが、それは禅治郎の声にかき消された。

「貴様らなどより私の方が上手くやれるというのに、何故ッ……」

「僕もそく思う☆」

オチャラけたポーズをした咲秋に禅治郎が再び掴みかかろうとしたその時、咲秋のいっつもより少し低い声が響いた。

「だからさあ」

彼の首が少し傾く。

「禅ちゃんも死神と戦えるようにしてあげよっか?」

「! —— どういうことです」

「今度の協議で“禅ちゃんが大将だよ”って死神側に言おうかって話。僕らじゃ正直、正面切って戦うの大変だし、禅ちゃんだってここ暫く溜まってる鬱憤晴らしたくない?」

「……………それは、まあ……………しかし……………閣下の命に背くことになります」

口ではそう言いつつ、顔は正直だ。禅治郎の頬が紅潮し、口元が力んでいる。“参加したい!”と全身から発する様な彼の態度を見て、咲秋がクスリと笑みを零した。

「何でさ? 禅ちゃんには悪いけど一応の主導権はこっちにあるんだよ?」



「宣戦布告が私からになってしまいました」

「あははっ！ なにもこつちから宣戦布告しなければいいだけのことだよ♪ で、どお  
ヴエデス・ドゥ・エス・トゥン・オドゥ・ニヒト  
 ? 是非は如何に？」

幾分か機嫌を直したらしい禅治郎はそれを他の三人に見られまいとそっぽを向いた。

「分かりきったことです」

「だゝめ！ これは一種の契約だよ？ ちゃんとどつちか言つてよ」

「……………是！——当然です」

そう言うつと禅治郎はサツサと向こうへ行つてしまった。

「……………本当に大丈夫なのか？」

暫くしてから蒼都が口を開いた。

咲秋が首を傾げる。

「何が？」

「佐伯が参戦することのお許しはいただいているのか」

「要らないでしょ、そんなの」

「何故」

「だって団長の命は、現世戦力を以て、戦う事。そして年中現世行きバの通行証ス渡されてる僕らはどっちでもあるってこと。現に僕とそーちゃんはその指揮を任されてるわけだよ」

「……………」

沈黙した蒼都が訝し気に咲秋を睨んだ。

困ったように咲秋が笑う。

「何？ 僕、睨まれるの嫌だなあ」

「…………君が理詰めで何かを言うときは大抵何か企んでいるから、それは何だろうと思ってた」

「ヒドツ！ トウくんいつも僕の事そんな風に見てたの!!」

「…………悪い奴ではない……………とは……………一応……………思っている」

「ホントに!! ねえそれトウくん本当にそう思ってる!!」

咲秋が必死に訴えるのを黙って見ていた宗弦はため息を一つ着くと、禅治郎とは反対方向に歩き出した。慌てて咲秋がそれを追う。

「あつ、そーちゃん待って〜！ またね、トウくん！」

「ああ。あまり騒ぐとまた怒られるぞ」

「ン！　ありがとう〜！」

ブンブン腕を振る咲秋を見て蒼都は苦笑した。

食えないが、悪い奴ではないのだ。

……………多分。

蒼都が見えなくなつてから、隣にいる咲秋にだけ聞こえる様に宗弦は呟いた。

「やはりお前は恐ろしい奴だ、咲秋」

「……………ふふ、一応何でか訊いていい？」

ニコニコ笑う咲秋に宗弦は溜息を吐いた。

「さつき、わざと禅治郎を煽つて今度の戦いに引き摺り込んだだろう。あのような言い方をすれば禅治郎が首を突つ込んでくると分かっていたはずだ。奴がお前にあれ程怒っているのを見たのは初めてだった。らしくなかつたな」

「さつすがそーちゃん！　禅ちゃんには黙つててね」

悪びれる様子もない咲秋を怪訝そうに睨んだ宗弦の瞳が警戒を孕む。

「一体何を企んでる？　奴は恐らく場を荒らすぞ。少なくとも私には御しきれん」

「そーちゃんまで酷いなあ……いいんだよ、御す必要なんで無い。存分に暴れてもらうさ〜」

咲秋の笑みが腹黒いものへと一変する。

「事態がどう転ぶか、楽しみだなア♪」

「……奴は死神を甘く見ている。警告に行かなければ下手をすると死ぬぞ」

「その時はその時だよ〜」

その言葉に宗弦は立ち止まった。

ゆつくりと咲秋が振り返る。さも当然の事を言つて、気になどしていない、という風  
に。あまりに自然過ぎるその反応は、静かな衝撃と共に一つの——宗弦には認めがたい  
事実を如実に示していた。

「どくしたの、そーちゃん？」

「奴も——禅治郎も閣下、延いては陛下のものだ。損なうようなことがあつてはなら  
ない。違うか？」

「ンー、禅ちゃんはいんじやないかな」

「〴〵いい〴〵、だと？ どういう「だからさ〜」……何だ？」

咲秋が無表情のまま首を傾げた。

「陛下の未来に禅ちゃんは居ても居なくてもいいこと。居たら戦力になるだろう。

大いにね。彼の戦闘技術は並の候補生の比じゃない。でも、彼はあまりに浅薄だ。煽られればすぐに頭に血が上って思考がお留守になる。折角の才能が台無しも良いところだよ。彼は正直、戦闘が出来ても戦争には参加させちゃいけない部類の人間だ」

宗弦の背筋は凍っていた。

それはハツシユヴァルトに睨まれた時とはまた別種の恐ろしさによるものだ。

「今回彼が生き延びたとして、戦いから何かを学べていれば良し。そうでなかったら……どうしようかな。ま、今考えても仕方ないか。そういう意味だよ」

宗弦は気付くと咲秋の胸倉に掴みかかっていた。高く持ち上げているせいで彼の両足は空中をだらしなく漂っている。

「今日はよく胸倉を掴まれる日だなア……痛いよそーちゃん。放してよオー」

飄々とした咲秋の方を見ることなく、僅かに震える声で絞り出すように口に出す。

「……私は、死んでいい人間など一人もいないと思っっている。例えそれが死神だろうとな」

咲秋……

お前にとつて、禪治郎は、私は、滅却師は――

一体、何なんだ？

「あははッ！ 死神は人間じゃないよ？」

「そうだな」

宗弦はそつと咲秋を降ろした。

「どちらにせよ、死していいモノなどいない。そう思うんだ」

「綺麗事だよ。これから戦争をおつ始めようつて人間の言う事じゃない」

「その通りだ。人が死ねば全ての言論に意味は無い。これは甘えだ。……私も未来には必要ないか？」

真つ直ぐに投げ掛けた視線の先には、同じように見つめ返す深く黒い眼が在った。逸らすことなく、誤魔化すことなく、咲秋が微笑む。

「そーちゃんは必要さ。——僕らの未来に」

嘘偽りの無い言葉——少なくとも宗弦にはそう感じた。

「僕ら」が何を指しているのかを問うても返つてこないことも。

「……陛下の、とは言わないんだな。お前は恐ろしいが、正直な奴だ」

そう言つて苦笑した宗弦はまた歩き出した。

咲秋はその後ろ姿を見ながら、

「ありがと、そーちゃん。……ごめんね」

と彼に聞こえない声で呟いた。

時は戻って協議の直後。

藍染の姿が見えなくなつてすぐ――

「ちよ、ちよつと待つてよそーちゃん！ 歩くの速いつてば！ ねえッ！」

「五月蠅い」

「ひゃあッ！」

裏拳を放つた宗弦の手を咲秋が寸でのところを避けた。

「あ、あつぶないなあ！ 何、そーちゃんもしかして機嫌悪い？」

「……………まさか『協議』と名の付くものに全て虚構の事実を語る羽目になるとは思つてもみなかつたのでな。――茶番だ」

「まーまー、そう言わず。双方にとつて、これは必要な過程だつたんだからさ。それに、上手く事を運ぶにはしようがなかつたんだつてば」

正直に話せることなど無いと理解してはいても、問題しかない会談だった。

ヘラツと咲秋が笑つたのを知つてか知らずか、宗弦は振り返ると咲秋を睨みつけた。

「それだけじゃない。山本重国が指摘していた」噂——お前が流したな？」

「何でそんなこと訊くの？ ちがうよよ！」

「今後に関わる話だ。誤魔化すな」

宗弦の言葉で一瞬咲秋の目から感情が抜け落ちた。だがそれも瞬きの間のことで、すぐに彼は笑顔になった。

「——だったら何？」

「肯定、と取つて良いのか」

「さあ？ そうだったとして、そーちゃんはどうするの？ 閣下に言う？」

試すような視線を咲秋が投げ掛ける。

「……お前の口から肯定されるまでは何もしない。どうせ出所など分からのだろう？」

——だがそうだったとしたら、場合によっては私がお前を殺さねばならん」

「わお、コワイー！」

おどけながらも全く悪びれる様子の無い咲秋に、宗弦は畳み掛けた。

「禪治郎が宣戦布告しようとしている？」 滅却師の始祖が復活しつつある？」

こんな噂が滅却師にとってリスクが高すぎることにくらい、お前には先刻承知の筈だろう



!! いつから……一体何処までがお前の掌の上なんだ?」

「だーかーらー、僕じゃないつてばア〜」

ひらひらと手を振りながらも笑みを崩さない咲秋を無視して宗弦が続ける。

「腑に落ちん事はまだ在る。協議であそこまで嘘を吐いておきながら、何故藍染には警告したんだ? 奴はこれから強くなる。それこそ陛下の道の妨げになるやもしれんほどにな。それはお前だつて分かつていただろう」

「……ふふ、それが分かった上で協力してくれたんだ。良かったの?」

「質問しているのはこちらだぞ。咲秋、お前一体何がしたいんだ?」

咲秋は目を細めると、いつもより低い声を出した。

「僕は……叶えたいんだ」

「何を」

「とつてもとつてもささやかな、僕の一つの願いを」

追求しようとした宗弦に、咲秋は再びいつもの調子になった。

「——今のそーちゃんに言えるのはここままでーす☆」

そう言つて今度は咲秋の方が先んじて歩き出した。

こういう調子になった彼は意地でも話さないで、宗弦は渋々追及を諦めて彼に続いた。

今·の·自·分·に·話·せ·な·い·の·な·ら、  
そ·の·時·が·来·れ·ば·話·す·の·だ·ろ·う·と。

## 第十五話 波及するドウヨウ

## SIDE・D

その日公布された命に動じない者はいなかった。

《滅却師との最後の交渉も失敗に終わった。之を以て護廷十三隊総隊長、山本元柳斎重國は、現世と尸魂界の平衡を崩す存在——彼の滅却師を殲滅することを決定した。本日より二十日の後、滅却師の殲滅戦を開始する。詳細は各隊隊長に通達するものとする。以上——》

八百年前の滅却師との戦い以降、人間を斬るといふ行為をしたことのある死神はいない。掟が有るわけではない。だが行うものが居なかったのは、そもそも人間を斬るといふ発想自体存在していなかったからに他ならない。死して肉体と決別した魂魄こそが死神が取り締まるべき対象であり、基本的に現世に生きるものとの接触は避けられ続けたのだ。

それがこうも直接的な手段によって崩されたのだから、困惑が広がるのは当然と言えた。

「大変なことになつちやつたつスねえ」

「ふん、強情な奴らじゃ。そこまでして意地を貫いて何になる。人間は儂らより脆く、死にやすいんじゃないか？」

「貫きたい思いつてのは、他人には理解できないこともあるって事なんじゃないつスカね」

「やれやれ、物騒なことだ。山じいも重い腰を上げたつて事かなあ」

「元流齋先生……しかしこれは余りにも惨い。いくら世界のためとはいえ……」

「世の為人の為なんてものは所詮意味無いことさ。戦いが起きれば、人が死ねば、もうそれは関わった時点でどっちも間違つてる。難儀だねえ。どっちもが正しいと信じているからこそ戦いが起きるのにさ」

「総隊長……やはり貴方は先の戦いを悔いておられるのですね。——彼を殺し損ねてしまったことを。……しかしこれはその埋め合わせにはなり得ない。まあ貴方のことです。それから、それも承知の上なのでしょうが。今度の私の仕事は癒すこと。それだけです」

「ハッ、結局は人殺しやないか。大層なこと言うたかて本質は変わらん。けったくそ悪いのオ」

「そう騒ぎなや。どうせ俺らは従うしかあらへん。殺らな殺られる、それはどうしようも有らへんことやろが」

「カッコつけとんちやうぞ、ハゲがッ！」

「ガハアッ!!」

「ほう……重国、お主はそう選択したわけじやな」

「殲滅……!! ——やれやれ、四十六室にまた小言を言われるぞ」

「なに、それも形式上のものよ。奴らも滅却師のことは目の上の瘤じやという認識じやからの」

「それもそうか。されど、尸魂界に見放された一族というのも“憐れ”の一言にすぎぬな」

「それを決めるのは当人たちじや。違うかの？」

静霊廷中で物議が醸される。

それはここ一番隊舎も同じことだった。

バタバタと足音を立てて向かつてくるのは、一人の五番隊員――

「――惣右介！」

「……………兄さん……………」

竜太郎が惣右介の部屋の戸を勢いよく開くと、中には顔色の悪い惣右介が居た。

「……………やっぱり本当だったんだな。最後の協議に参加してきたんだって？」

「機密事項なのに何で知ってるの……………」

隊長に教えて貰ったんだ、と竜太郎は俯きがちに言った。

「――辛かったな」

「本当に辛かったのは僕じゃないよ。……………ねえ、兄さん」

「何だ？」

「兄さんは……………斬れる？ 人間を、さ」

十席になろうとも、まだまだ惣右介は青さが抜けてはいない。死神になった理由が家族を探す為だったこともあるが、何よりその実力が大き過ぎたことが理由だった。本人は半分無自覚だが、席官にもなつて今まで自分の班の面子が死んだところを見たことが無いなど惣右介位なものだ。というのも、大概の虚は惣右介よりずっと格下であるが故

に、班員全員が大した怪我もしないで倒せていたのである。

だから彼は、“死”というモノに疎かった。疎いとはつまり知らぬという事。それは彼に、胸中に漠然と広がる不安となつて押し寄せた。

言つてしまえば今の彼は、“人間を”斬ることを憂いているのではない。漠然と“命を奪う行為”に怯えていた。

そんな迷いを宿した惣右介の瞳を、竜太郎は真つ直ぐに見つめ返した。

「斬るさ。死神になりたての頃みたいだ」全部護る“なんて大層なことは言えねえけど、“護る為に戦う”——それは変わらねえ」

「そつか。兄さんらしいよ。僕はまだ……分からないんだ……」

「……………」

二十日という時間は、覚悟を決めるにはあまりに短く、決まっていたモノには助長に過ぎた。

されど時は変わることなく、唯静かに進み続ける——

## SIDE・B

大きな屋敷の居間に二人の男が胡坐をかいて座っている。

一升瓶が開けられており、二人の猪口には少し濡れた跡があった。

瓶の中身の具合から、まだ精々一、二杯しか飲んでいないことが分かる。

しかし二人のうち一人はもうすっかり頬を真っ赤に染めていた。

「乱鴉兄らんあにイ、もオ、参るよオ……」

フラフラと頭を揺らす彼の肩に、もう一人がそつと手を添えた。

「寒鴉、その話はもう五度目だぞ。お二人がいらつしやる前にホラ、お水を飲んで」

「ン………んん？ 味がしなア、いい」

「水だからな。酔い過ぎだ」

「おんやア？ 今日もお出来上がっちゃってるねえ、寒鴉クン！」

「おいおい、大丈夫か？」

新たな声に二人は顔を上げた。

女物の羽織を隊首羽織の上から羽織り、風車の簪を二本差した色男——京楽春水。

白い隊首羽織に掛かる、同じく白く長い髪を肩の下あたりで束ねた好青年——浮竹十



四郎。

「京楽隊長、浮竹隊長、ようこそいらつしやいました！ 弟を止められずすみません」

寒鴉——現在絶賛酔い潰れかけている五番隊長——に水を飲ませながら、もう一人の壮年の男性が申し訳なさそうに頭を下げた。

彼の名は志波乱鴉——寒鴉の兄にあたる人物だ。その顔立ちは寒鴉を思わせるが、しっかりと剃られた髭、整った着物に彼の真面目さと気品が感じられる。

恐縮している乱鴉に京楽と浮竹は苦笑しながら返した。

「いいよお！ しかしまあ乱鴉くんも大変だねえ。手間のかかる弟を持ってさ」

「本人の前で言うのかい？ まったく……俺たちのことは良いんだ。水、もう少し要るかい？」

浮竹が懐から竹筒に入つた水を差し出した。薬用らしいそれを、乱鴉が苦笑交じりに受け取る。

「少しいたできます。ありがとうございます」

「せんばア！ 水は水でもオ、力水を飲みましようよオ！」

入っていない猪口を高らかと上げ、普段より一層大きな声で寒鴉が笑う。ふわふわと引き締まらぬ顔は、三人から怒る気力を根こそぎ失せさせた。寒鴉の隣に座りながら、京楽が小さい子供を宥める様な声で語り掛ける。

「駄ア―目ツ！ 話くらいなら聞いてあげるからさア！ さつき乱鴉クンが言つてた〃  
五度も話した話〃 っつのは何なんだい？」

「……………」

「う？」

「ううううつ……聴いてくれます？ 〈ゆる〉が俺の言う事聞いてくんないんですよ〃  
！」

〈ゆる〉とは、寒鴉の斬魄刀の渾名だ。

「ナルホドねえ。確かに、可愛い刀のためとはいえ振り回されるこちらは堪ったもん  
じゃないよねえ」

寒鴉の斬魄刀の能力は、〃指定した空間内を斬魄刀のその時の気分で支配する〃とい  
うものだ。どのように支配されるかは、敵はおろか主たる寒鴉にすら発動前に知る由も  
ない。

この性質は京楽の斬魄刀〈花天狂骨〉に似ている。この能力は〃子供の遊びを現実に  
すること〃なのだが、発動時に使える遊びの種類もルールも斬魄刀の気分次第。

二者に共通しているのは、使い方次第で自身が自身の能力によつて一発ケーオーされ  
る可能性が有るということだ。さればこそ日頃から斬魄刀との対話を心掛け、良好な関  
係を築いているのだが……

「そおでしよう!! この前なんて、急に周りの音が聞こえなくなつたんですよ!! 絶エツ対この前寄席で見た演目の、耳の聞こえない主人公にへゅー」が感情移入したんですよ……」

「感情移入」か……寒鴉の斬魄刀は、斬魄刀に心があるつて事の最たるものだな。大切な能力の一つだと俺は思うぞ」

「浮竹先輩は他人事だからそんな事言えるんですよ……」  
「それは仕方ないだろう……」

苦笑した浮竹の隊長羽織の裾を引っ張るものがある。浮竹が視線をそちらに受けると、乱鴉によく似た小さな生き物がにっこりと笑い掛けた。

「浮竹おじさま! いらつしやいませ!」

「お邪魔しているよ、海燕君! ……しかし、その「おじさま」つていうのはいい加減止めてくれないかな……」おにいさん」とか……」

複雑そうに海燕の頭を撫でる浮竹を見て、乱鴉は慌て、寒鴉は爆笑した。

「海燕! 浮竹隊長に失礼だろう!」

「あはははは! そりゃそーだ! 海燕からすれば先輩、オッサンもいいところですもんね〜!」

「寒鴉! そこは海燕を怒るところだぞ!!」

二人が騒いでいるのを意に介さず、海燕がトテトテと京楽の方へ走った。

「京楽おじさまもいらつしやいませ！」

「ウン、久しぶり海燕クン！ いや、可愛いねえ！ 食べちゃいたいくらいだよ」

顔をだらしなく綻ばせた京楽の頬を海燕が両側からつねって引つ張った。

「ありやいや、痛いよ〜」

「このくらいで痛がるようでは、僕がお腹の中で暴れたときおじさま泣いてしまいますよー！」

パツと手を放して弾けんばかりに笑う彼の身体がひよいと持ち上げられた。ジタバタと動く海燕の後ろで、乱鴉が眉根を寄せている。

「海燕、いい加減にしろ！ 失礼にも程がある！」

「いいよー、乱鴉クン！ こりや大きな一寸法師だよ。この子はまた君より寒鴉クンに似たねえ。顔っていうか性格が」

志波乱鴉、寒鴉の兄弟の内、乱鴉のみが婚姻していた。そして彼には息子が一人——名を志波海燕と言ひ、ご覧の通りの暴れん坊である。

そして、命がもう一つ産まれようとしていた。

乱鴉の妻の腹は、臨月を迎えつつある。

海燕が動き回らぬよう胡坐の中に納めて、乱鴉が再び腰を据えた。

「性別とかはまだ分からないのかい？」

「はい。其ればかりは生まれてみなくては分かりません」

「名前は決まっているのか？」

乱鴉に抱えられた海燕に菓子を渡しながら浮竹も会話に加わった。貰った菓子を口に含んで機嫌を更に良くした海燕が足をばたつかせる。その様子を見て乱鴉は目を細めると、その大きく柔らかな手で海燕の頭を撫でた。

「はい。『空鶴』と……」空を優雅に掛ける一羽の様に在れ」と弟がつけてくれました」

「『空鶴』！　なんか仙人みたいな名前だねえ。でもとても綺麗な名だ」

「そうだな。しかしこの名は女子だった時には少々厳つくはないかい？　寒鴉、其処の所は考えて——」

「いるのか？」と浮竹が訊こうと振り返って脱力した。何故なら寒鴉はどうに酔いつぶれ、安らかに寝息を立てていたからだ。

乱鴉の腕から解放された海燕が寒鴉の下へ駆け寄る。

「叔父さま！　そんなことでは、ヒラコさまにまた『かいしよーなし』と言われてしまいますよー！」

「平子君は何て言葉をこんな子供に教えているんだ……」

苦笑を通り過ぎて生暖かい笑みが寒鴉に注がれた時、地獄蝶がひらひらと三羽部屋に入ってきた。

「地獄蝶？ 一体何の伝令だ？」

浮竹がその白い腕に蝶を止まらせた。京楽もそれに続く。

二人の目はその数秒後、大きく見開かれることになる。

「やれやれ、物騒なことだ。山じいも重い腰を上げたつて事かなあ」

「元流齋先生……しかしこれは余りにも惨い。いくら世界のためとはいえ……」

「世の為人の為なんてものは所詮意味無いことさ。戦いが起きれば、人が死ねば、もうそれは関わった時点でどっちも間違つてる。難儀だねえ。どっちもが正しいと信じているからこそ戦いが起きるのにさ」

目付きの険しくなった二人の氣に当てられて、海燕が乱鴉の足元に駆け寄り、しがみついた。乱鴉の顔色も影を帯びている。

「……………何があつたのですか」

「大きな戦争が始まるみたいだ。悪いね、乱鴉クン。寒鴉クンを借りていくよ。きつとすぐに隊首会が招集される」

「危険な戦いなのですか」

「……御免よ、乱鴉クン。戦いなんてものは危険なものでないことなど無いんだ。それ

が戦いである限りは、ね」

拳を握りしめた乱鴉は、寒鴉を背負った京楽と浮竹に深々と頭を下げた。

「こんなだらしない弟ですが、どうかよろしくお願いします」

「そんなに心配しなさんな！ 大丈夫、寒鴉クンは普段こんなんでも戦場では一騎当千

！ すつごいんだよぉ〜！」

「だらしないことは否定しないのか……まあでも、京楽の言うことも一理ある。寒鴉ならまたいつも通りにフラッと帰ってくるさ！ 海燕君も心配しないで！」

いつも通りの笑顔で乱鴉に返した二人は、門を出ると瞬歩を使ったのかその姿が掻き消えた。

残された乱鴉と海燕は、言い知れぬ不安を抱えたまま立ち尽くすことしかできなかつた。

## 第十六話 嵐のマエに

白い羽織を着た十三名が、沈黙したまま状況が動くのを待つていた。

ただ一人腰掛けていた一の字を背負う死神が立ち上がる。

「事は決した！ 皆に伝令で伝えた通り本日より二十日の後、滅却師の殲滅戦を開始する」

彼は——山本元柳齋重國は、ゆっくりとその面々を見回した。

或る者は辛そうに。

或る者はいつも通りに。

また或る者は面倒そうに。

この事態に各々が折り合いをつけるのに割いている時間はない。

「此度、現世にて指揮を執ってもらうのは、五番隊隊長・志波寒鴉、八番隊隊長・京楽春水、そして十三番隊隊長・浮竹十四郎じゃ」

室内の空気が一層緊張を大きくした。

八百年——

数万の歴史を有する尸魂界から見れば、ほんの一瞬と言えるような時間。それがこの



護廷十三隊の歴史だ。されどその存在は、瀨靈廷や、延いては尸魂界において、より歴史の長い——例えば中央四十六室の様な——組織と同等か、もしくはそれ以上に大きい。

その理由はたった一つ。

圧倒的な武力を有しているからである。

霊力と斬魄刀を駆使し、現世で言う所の“人外”の戦いをする者達——死神。彼らの殆どは、護廷十三隊・隠密機動・鬼道衆のいずれかに所属する。

祭事や戦闘の補佐である後方支援に徹する鬼道衆に戦闘力はほぼ無い。同胞に対する刑の執行や虚への尖兵を行う隠密機動においては、第一分隊“刑軍”が高い戦闘力を有した粒揃いの兵たちを有しているが、その数は護廷十三隊に比する迄も無い程に劣る。

後方支援である四番隊を除き、戦闘に特化した実働部隊——それが護廷十三隊だ。六千もの死神を統括・運用し、瀨靈廷の守護や虚の討伐、現世で人間の命を守るといった仕事を一手に引き受けるこの組織がどれ程の力を有するのかは想像に難くないことだろう。そんな組織の最上位十三名、それが護廷十三隊隊長という存在だ。

「総隊長、それ程の規模で動かれるという事ですか!」

十三番隊長・浮竹十四郎が声を上げた。

「確かに、ちよつと大規模すぎやしませんかねえ？ 特殊な力があるとはいえ相手は人間。それ程の戦力をぶつける意味があるのかい？」

十二番隊隊長・曳舟桐生ひきふねきりおもそれに同調する。

それ程までに隊長三名の動員は信じがたいことだった。下手をすれば一隊丸々を圧倒するチカラを隊長一人で有しているとさえ囁かれる、死神人外の中の隊長化物。余程の事が無い限り、同一の任務で隊長を二人以上派遣することは有り得ない。いや、する必要は無いと言った方が正しいだろう。下級大虚ギリアン——所謂、虚の上位種——を廻り殺せるような存在を二人以上も投入せねばならぬような案件など、そう易々と起きてたまるかという話である。

「たかが人間と侮るなんて珍しいねえ、お二人さん？」

愉快そうに八番隊隊長・京楽春水は首を傾げた。

それに浮竹は強く反発した。

「そうは言っていないだろう！！」

「同じことさ。〃それ程の規模〃つてヤツは一体何を基準にして言っただい？ 滅却師に関しては山じいが一番分かつてる、そうじゃない？ それに口を挟むなんて軽率だよ。桐生ちゃんも慎みなね」

「——そうだな、お前の言う通りだ。すまない、京楽。申し訳ありません、総隊長」

「わかったよ……話を遮ってすみません、総隊長」

二人の反省に総隊長は一つ頷きで返すと、杖で床を叩いた。

「加えて各隊の伝令業務を二番隊、救護に四番隊、予備の戦力として一番隊を各四分の一派遣する。異論のある者は居るかのう？」

沈黙をもって答えた十二名に総隊長は頷いた。

「うむ。隊の編成は追って沙汰する。これにて解散じゃ」

隊首室を出た五番隊隊長・志波寒鴉は、立ち止まるなり大きなため息を吐いた。それを見越していたかのように後ろから喜色ばんだ声が聞こえた。

「おんやア、寒鴉クン！ それは何の溜め息かな？」

八番隊隊長・京楽春水が上に羽織った女物の着物をはためかせながら片手を上げた。後ろには副隊長の松方凜（リョウ）と十三番隊隊長・浮竹十四郎が続く。

「折角いい気分だったのに、酔いが冷めちゃったんですよ。飲み直す気分にもなれやしないでしょう？」

「まだ飲むつもりだったのか？ 程々にしないと体を壊すぞ、寒鴉」

「そうですねよ志波隊長。貴方お酒弱いんですから。あ、浮竹隊長、ついでに京楽隊長にも言つてやつてください！」 職務中に飲むな” って！」

「僕は飲んでも、ちやあんとその後には仕事しててでしよく？ 寒鴉クンみたいに酔いつぶれるわけじゃないんだからいいじゃない」

「良くない！ 良くないですよ！ 席について筆だけ動かすことを”仕事” って言いませんよ!! 訂正しなきゃならない書類が多すぎるんです！ 素面<sup>シツ</sup>に見えて実は酔つてるんですか、隊長！」

そう言うとき凛は京楽の首根っこを掴んでずるずると引きずつて行つた。ワタワタと暴れる京楽の両腕が空しく空を切る。

「ちよつと、凛クン!! 大丈夫だつて、歩けるから〜！」

「駄目です！ そうやつて真面目そうにしてる時が一番脱走してるんですから！ 今日こそは残業して仕事を片付けて行つてもらいます！」

「勘弁してよオ〜！」

グダグダで去つていく二人を苦笑しながら見送つた浮竹と寒鴉は、暫くして深いため息を吐いた。双方ともこれから始まる戦いを憂いてのモノであるのだが、その本質は全く違つた。

あくまでも戦いを避け、無用な殺生を行いたくない浮竹。対して、怠惰一直線な寒鴉。

「サボりたい……」

「相変わらずだな。しかし絶対に元柳齋先生の前でそれを言うんじゃないぞ？ 拳骨と

説教を喰らうのはきついからな」

「どつちもどつちで勘弁っス」

「ええこと聞いたわ」

“びゃり!!”と情けない声を挙げた寒鴉が恐々とした顔で振り返ると、腕組みして仁王立ちした死神が立っていた。

彼は派手な金髪を腰のあたりまで伸ばしている。しかしストレートな筈の其れは、彼の放つ殺気と怒気の為か重力に反して浮き上がって見えた。

組織に所属する者というのは、理不尽と常に戦わねばならぬものである。上司は部下を選べても、部下は上司を選べない。上司が例えば脱走癖があり、仕事をせず、それを何かと押し付けてくるどうしようもない仕様だったとしても、部下は涙と血反吐を呑んで耐えねばならぬのである。

だがそれはあくまで一般論。例外というモノは存在する。この場に於いては、上司である寒鴉と部下である彼——五番隊副隊長・平子真子の立ち位置は逆と言っても良かった。まるで塵<sup>コホ</sup>でも見るかのような虚ろな瞳で真子が寒鴉を見つめている。

「し、真子……」

「総隊長に告げ口されとうなかつたら隊長、アンタも仕事に戻ってもらえます？　なんや飲み会て訳分らん理由で休まれると部下がアンタのケツ拭わなあかんねんど、コラ  
 ！！」

「アフンツ！！」

直属の上司にラリアットをかましてそのまま寒鴉の首を絞める様に抱えた真子は浮竹の方を向いて会釈した。

締め上げられている寒鴉が高速で真子の腕をタップして降参を示しているのだが、真子の方は完全にそれを無視する構えだ。

一般的な上司と部下ならこんな光景は有り得ないだろう。そういう関係の認知が甘い寒鴉だからこそ真子がこういう形で憂さ晴らししても咎めることはないのだが、元凶が寒鴉であるだけに真子は複雑である。

「スンマセン、浮竹隊長。お話切つてもオて……隊長連れて帰つてええですか」

「ああ、構わないよ。……折檻も程々にね」

「こん人はこれぐらいや足らへん思いますよ。ウチの隊長、甘やかしたらつけ上がるんは浮竹隊長たちの方がよオ分かつとるんちやいます？」

「うーん……それでも、程々にね」

話しながらも寒鴉を締め落とそうとしている真子に浮竹が苦笑する。それを見て真

子はニヤリと不敵に笑いながら去っていった。

「副官、か……」

前任の副隊長が引退してから、浮竹のいる十三番隊の副隊長は欠員となっていた。暫くそこが空位であるのは、元々病弱で臥せりがちな浮竹が率いている分副隊長の責任と負担が大きく並の隊士では務められないのも理由であるが、一番の理由は浮竹の性格からであった。

他者に思いやりが深い分感傷的になりやすい彼は、副隊長が引退したからとすぐに切り替えられずにいた。

「元々皆で仕事を分担する体系が出来ているから何とかなっているけれど、やっぱり負担が掛かってしまうよなあ。もういつそのこと、乱鴉君みたいな子が来てくれたらいいのに……」

志波家当主として公務を一人で仕切る寒鴉の兄・乱鴉は相当優秀だ。彼は家で一杯一杯だろうが、彼のような人材が自隊にいればと思うのは浮竹だけではない。

実際、勧誘は幾度か行われたが、浮竹の時は“浮竹隊長は私を過労死させたいのですか？”と黒い笑みと共にやんわり断られた。浮竹家もまた貴族であるが、下級であるうえに数多い兄妹たちが家を護ってくれているため、家の業務というものを彼自身がやったことは殆ど無い。その為、浮竹は乱鴉の事を同情できても共感できないのが残念

でならなかった。貴族には貴族なりの苦勞と仕事を抱えているのだろう。志波ほどの大貴族ともなれば猶更だ。

——今度乱鴉君に、差し入れお菓子を持って行かなくちやな。

そういえばさっきの真子の瞳は、当時の乱鴉そっくりだったなと浮竹はふわつと思いつつ、彼もまた自隊の方へ歩みを進めるのだった。

某邸宅にて——

流水の如く奔る筆が、ピタリとその動きを止めた。ほぼ反射的に持ち上げられた筆先が生き物の尾のように静かに垂れる。

「ツくちツ！」

「父さま、なぜですか？」

「いや、悪寒はしないからだのクシヤミかな。心配してくれてありがとう、海燕」

「どういたしまして！ ……もしかしたら、誰かが父さまのこと噂してるのではないですか？」

「まさか！ そんな冗談みたいなこと中々起きるものじゃないよ」

……という会話があつたりなかつたり。



## SIDE・Q

「お帰りなさいませ、あなた。……………何かあったのですか」

心配そうに首を傾げた妻に、彼はどこか柔らかい表情になった。

「ああ、少し。客間を用意させてくれ」

「承知いたしました。しかし何故客間を？——あら」

彼女は彼の後ろに居る人物を見て、委細承知したという風に礼をした。

その視線の先には、宗弦の後ろで、眠っている愛娘を抱いて破顔した咲秋がひらひらと片手を振っている。

「兄様、いらつしやいませ。今日は御嬢さんもご一緒なんですネ」

「ウン！ 久しぶり、結ゆい〜！ いつも真咲を可愛がつてくれてありがとねえ〜！」

「勿体無いお言葉でございます」

“少々お待ちください”と言つて彼女——石田結ゆいは召使に客間を整えるよう命じに

行つた。

キツチリと着こなされた藍色に薄桃の桜の花弁を散らした着物が、流れる様に優雅な仕草で廊下を進んでいく。その後ろ姿を見ながら、既に相当だらしない顔になつていた咲秋の表情筋が一層緩む。

「やっぱ結は可愛いな〜！ 何でこんな堅物と結婚したんだろ」

「何でもなにも、私と結との婚姻を結んだのは黒崎家当主のお前だろ。というか我らに恋愛結婚など無いだろう。現にお前とてそうだったはずだが」

「そんな寂しーこと言わないでよお……でもでも、僕らは結局はデレデレになつたでしよ？」

咲秋は、第一に娘、次に嫁、その次に妹に弱い。こう書くと女に弱いのかと訊かれそうだが、実を言うとそうでもない。黒崎邸にも女性は多く居るし、候補生にも多くは無いが、気の強い女性がちらほらいる。だが、彼女らに対しては紳士的でこそあれ、弱いというほど言いなりというわけでもない。再度誤解を生む書き方をしてしまったが、別に咲秋は妹らの尻に敷かれてはいるわけではない。咲秋とて何だかんだ譲らない所はつきり言うし、そもそも彼女たちは芯は強いが我儘を通すような女性ではないという事だけはつきりさせておく。

兎も角、そんなこんなで大家の当主としてあるまじき顔の緩み方をしている咲秋の顔

に裏拳を一発沈めるのが宗弦の常なのであるが、今日に限っては疲れからそれをせず、大きく眉を寄せただけであった。

「僕ら」ではなくお前単体だろう。見ているこっちが恥ずかしいくらいだった」

「そうだったの？ そーちゃんって恥ずかしがつてるのとか分かりにく過ぎだよお。全然気づかなかった！」

「恥ずかしいって事は否定しないんだな」

宗弦が露骨に溜息を吐くと、結がクスクスと華のある笑顔で歩いてきた。

「準備が整いました。お待ちせして申し訳ありません」

「そんなことないよー！ さっすがそーちゃん家、準備はいつでも万端って事だね」

「客間とはそういうものだろう」

再び溜息をついた宗弦は結が自分を見て微笑んだことに反応して視線を逸らした。こういう話の後だと、変に意識してしまう。

その様子を見て咲秋がニヤニヤ笑った。

二人を客間へと案内した結が部屋を出ようとするのを宗弦が制した。

「おまえに話がある。座ってくれ」

その真剣な表情に結はその胸が不安に満たされていくのを感じた。

もし……もし、自分の頭にちらと過つた言葉を宗弦が口にしたら、自分はどうかってしまうだろうか。取り乱し、無様を晒してしまうだろうか。

「何でございましょうか……？」

おずおずと聞いたその言葉にうなずくと、宗弦が口を動かした。

もしもに体が備えるように両の掌をきつく結ぶ。

「これから、死神との大きな戦いが始まる」

「……………はい」

驚いて返事をするのが遅れてしまった。

思わず「そんなことか」と零こぼしそうになったのを表に出すことなく、表情を動かさぬよう努めた。

嗚呼、良かった。

てつきり離縁を申し付けられるのかと思った。

夫婦仲は良くも悪くもない、平凡な家庭だと結は思っている。自分たちの存在そのものを平凡とするかどうかはさておき、滅却師の純血を絶やさぬように用意された相手に、互いに特筆すべき不満もなく上手くやれている。しかし最近、何だかわからないが

胸の動悸が大きくなるが多くなつた。宗弦が自分を呼ぶ度、話をする度、自分の胸は心地良く高鳴るのだ。

けれど今日のものは違つた。動機と共に感じた不快感に押しつぶされそうな気持ちになる。

先程だつて、宗弦と咲秋の会話に思わず笑つてしまつた後、宗弦に目を逸らされてしまった。それだけのこと。たつたそれだけのこと、今まで幾らでも有つたはずなのに、自分の胸は警鐘のように大きな音を立てた。

「驚いたな。そこまで動揺しないとは」

宗弦の声で我に返る。驚いたというよりは結の反応が興味深そうに彼女を窺う彼に、結は不敵に微笑んだ。

「ふふふ、女の噂話を馬鹿にしてはいけませんのよ。その位死神との関係が悪化していること、それを御二人が正そうとしていらつしやつたこと、全て存じております。……非常に残念です」

“人の口に戸は立てられぬ”とはよく言つたものだ。どこそこの家がいついつに出陣したとか、誰々の弱味は何だとか、ひよつとすると機密事項なのではと思うような話がツルツルと女中間の井戸端会議で話されていたりする。一度不安になつて咲秋に尋ねたところ、

『まあ、ある程度は仕方ないよお〜♪ 黒崎ウチやそーちゃん家では、ホントにヤバイ情報は分けてるし、何なら色々混ぜて情報ウチを流してたりするし〜。あ、これ内緒ね!』

とのこと。咲秋がそう言うのなら大丈夫なのだろうと割り切った彼女は、現在節度を弁えつつその内容を家の女中から伝え聞いている。そうして噂話や与太話を耳に入れていると、嫌でも彼女の夫と兄の話は拳がった。

当然の如く良い噂など殆ど無く、〃奴らは死神に迎合せんとする腰抜けだ。考え方が古すぎる〃という悪意を剥き出しにした流布が多かった。

——何も、知らないくせに。

そんな瞋恚を包み隠して、彼女はいつも彼らに思いを馳せていた。二人は何も間違った事を言っていない。きつと事実無根の噂など、早々に聞こえなくなるだろう、と。

しかし叶わなかった——敵わなかった。其処に悲しみは在れど失望など有ろうはずもない。そしてこうなってしまった以上、彼女のすべきことは決まりきっていた。

二人共の力に、と言えるほど彼女は自身の實力を奮ってはいない。けれどせめて、自身が添い遂げると決めた人が、少しでも安らかであるために彼を支える。静かに、けれど確かに、彼女は腹を括った。

結の瞳が強い熱を帯びたのを感じた宗弦は哀し気に頷くと、再び口を開いた。

「すまない。——そして今回、星十字騎士団ハッシュバクト团长から我ら二人がその大将となるよう命

じられた」

「！——酷なことを為さる方……」

他の家に比べれば、結と宗弦との夫婦生活は一瞬と言えるほど短い。それでも彼女は宗弦が殺生の類を忌み嫌っていることをよく承知していた。彼の気持ちを考えると、胸が締め付けられる思いだ。

「っ！」「?!」

思わずこぼした涙に、結のみならず宗弦も驚いた。というか彼の方が余程動揺していて、“普段は冷静沈着な彼のそんな姿は初めて見たかもしれない”と落ち着いていくのが結自身で分かった。

「いや、状況から考えるなら、これ以上の手はないほど素晴らしい一手だ。私でもそうする、筈だ。何の不思議も「ふふ」——?!」

知らぬ間に込み上げた結の笑みに、宗弦の双眸が大きく開かれる。

嗚呼、何て深くて綺麗な色。

黒く、そして純粹な色。

——あまり見つめては、はしたないかしら……

そう思いなおした彼女は、僅かに頬を染めて口元を手で隠した。

「取り乱してしまって申し訳ありません。私のことはよいのです。あなたが無事でさえ

いて下されば、それだけで……」

「甘ーいー！」

笑みを含んだその声に、互いに見つめ合っていた宗弦と結は肩を揺らした。

結は驚きを以て、宗弦は気まずそうに咲秋の方を見ると、彼はニマニマといたずらつ子のように笑って二人の方を覗いている。

「咲秋……」

「なーにが、”見ているこつちが恥ずかしいくらいだった”さ。甘い、あんまアーい！  
何、僕の場合違い感凄くない？」

「す、すま」

「あーく、真咲が寝ててよかった！ こんな情景真咲にはまだ早すぎるもんなー！  
年齢層上がっっちゃうよ、まったく」

「だから『スマン』と言おうとしたんだろう！ 最後まで話を聞け！」

顔をやや赤らめて咲秋といい合う彼はいつもの彼より少し幼くて、そのせいかは分からないけれど息子——竜弦——と共にいる時とはまた違う、けれどどこか似通った温かい気持ちを感じてまた微笑んだ。



拗<sup>す</sup>ねているのか、擲<sup>から</sup>擲<sup>か</sup>つているのかわからない。咲秋との口論がひと段落して、宗弦はホウと一息ついた。

肝心なことをまだ結に伝えられてはいないのだ。

「今回の戦いは滅却師と死神が全面戦争をすることになる。現世戦力総出で当たれどのお達しだ」

結の顔がやや引き攣つたのが分かった。

そう。この戦いで「見えざる帝国」からの軍派遣は無い。

「彼<sup>か</sup>のお方は、あなたに死ねと仰っているのですか」

凜としたその声に魅せられる。

時偶垣間見える彼女の気丈さに引つ張られぬよう、宗弦はゆっくりと首を振った。

「そうではない。なにも全滅してまで戦えとは仰らなかつた」

「しかしそれでも圧倒的に不利です！ 現世戦力と護廷十三隊では、あまりに……」

そこまで言ってから結は青褪めて頭を下げた。

「申し訳ありません！ 差し出がましいことを申しました。あなたと兄様が斃たれるのです。そのようなこと——」

「構わない。私達もそれはよく分かっている。だが案ずることはない。この戦いで我々

「が求めることは勝利ではないのだから」

そつと頭を上げてこちらを上目遣いに見た結の瞳が悲しみに染まる。

「なら、一体何を求めるといふのですか。あなたをそれ程苦しめる目的とは何なのですか」

心臓が跳ねる。

それ程自分の顔は分かりやすかつたのだろうか。

いや、咲秋が分かりにくいというほどだ。自分はかなり表情が分かりにくい方  
のハズ。

——本当に、彼女は自分をよく見ている。

宗弦が殺生を嫌う事、今の彼が迷っていること、他にも恐らく色々な事を悟らせてしまっているのだろう。彼女は聡い人だ。そして毅い人だ。だからこそ、頼ってしま  
う。任せつきりになってしまう。

「……………機密事項だ。それを伝えることは出来ない」

「そう……………ですか……………お日取りは如何様いかように？」

「今日より二十日の後だそうだ」

「分かりました。私も支度を整えます」

「——その必要は無い」

「……………え？」

僅かな涙に濡れて赤らんだ結の瞳が揺れる。

艶やかな艶を孕んだ其れはガラス細工のように澄んでいて、脆く砕けそうだ。

「団長閣下の計らいで、この戦いが終わるまで妻子を『見えざる帝国』に連れ行くことを赦していただいた。おまえは竜弦を連れて『見えざる帝国』に身を置きなさい」

「そんな！ わたくしも共に戦わせてください！」

「駄目だよ〜♪」

結の必死の懇願を、咲秋は呑気な声を出して一蹴した。宗弦は咲秋を睨んだが、彼は一向に気にする素振りも見せずに口を回す。

「大将の妻子ってゆーのは、その存在そのものが敵にとって利用価値の在るモノだ。結達は敵には格好の狙い目って訳。そーゆーのは隠すのが定石だよ☆」

「なら竜弦だけをお預けください！ わたくしも——」

「結だけなんだ」

咲秋の真剣な声音に結が肩を揺らす。

結の気持ちを考えてと発言できない自分の卑怯さを恥じながら、それでも尚、宗弦は口を噤んでいた。

「『見えざる帝国』は戦闘要員しかいない。か弱い子供を一人置いて行けると思う？」

「ッ……ですが……」

「それは真咲にも言えることだ。結、どうか二人と共に『見えざる帝国』に渡り、二人を護つてやつてくれないかい？ こんなことを頼めるのは君しかいないんだ」

そう言うのと咲秋は結に頭を下げた。

「頼む」

咲秋の妻は数年前に他界した。元々体の弱いヒトだったが、真咲を生んだことがきっかけとなつて一層体調を崩し、とうとう亡くなつたのだ。今は育ての親代わりに、召使の混血滅却師に彼女の教育を任せているらしいが、そういった者達は『見えざる帝国』には連れて行けない。

「——顔をお上げください、黒崎様」

結は淡々とそう言うのと、咲秋が顔を上げきるのを待つてはつきりと言つた。

「分かりました。責任を持つて二人を護ると誓いましょう。ですから御二方、必ず私に預けたものを受け取りに戻つていらつしやるとお誓いくださいませ」

一息にそう言うのと彼女は二人を見つめた。

次に発言すべきだと理解のおくれた二人の男は、期せずして同じことを同じ時に述べた。

「必ず」

たったの一言。

しかしそれを聞いた結は泣き顔とも笑顔ともとれる不思議な顔をした。その顔は今まで見たいつの彼女よりも儂げで、そして美しかった。

「いやあ、やばかった。妹じゃなかったらクラツときてたね。そーちゃん、ちゃんと手綱握つとかないと駄目だよ？ ほっといたら、結をほつとかない奴なんて五万と居るよ」

「余計なお世話だ」

「どーかなー？ ま、結の方は大丈夫そうか。そーちゃんも大概だけど……」

「何の話をしている？」

「さあ？ ふふ、なんだ、自覚が無いのは二人ともか。いやあ、じれつたいねエ！ ムズムズしちゃうよお」

帰り道、咲秋がいつも以上にニヤニヤしながら帰って行ったのを宗弦は白い目で見送った。

それは、動乱の前の、ささやかな幸せの日のこと。

響く軍靴は激流のように

## 第十七話 騒乱のゼンジツ

「矩型穿界門、準備完了いたしました」

「ありがとうございます。そんじゃあ皆——」

女物の羽織が翻る。

八の字を冠した隊長羽織に笠を被った死神——京楽春水が、後ろに待機していた隊士たちに振り返った。

「——ちよつくら行くとしますか」

その言葉が言い終わるや、京楽の後ろの門が開く。

通常の穿界門とは異なり何十人もの隊士が一気に入れる横幅を持ったそれが、まるで不気味な口のように彼らの前に広がった。

「壯観、つてヤツだねえ。じゃ、浮竹、寒鴉クン、行くよ」

「ああ」「うっす！」

三人が穿界門に飛び込んだのを皮切りに、千強の隊士たちがその門へと吸い込まれて

行つた——

三人の隊長と二人の副官が地図を覗き込む。

それに補足する形で一人の隊士が話を終えた。

「そんなじゃあ、この三つが敵の拠点つて事かい？」

「はい、それでほぼ間違ひありません。あちらは拠点も大将も隠す気が無いようです」

「ふむ、誘っているのかな？」

「その可能性もあります」

二番隊の偵察報告を受けて、八番隊隊長・京楽春水が眉を寄せて唸つた。それに五番隊長・志波寒鴉と十三番隊隊長・浮竹十四郎が返す。

「とはいつても、あちらさんの気が変わらないうちに相性のいい相手と戦うつてのが最善でしょ」

「そうだな。大前田君、敵戦力の詳しい情報は有るかい？」

浮竹に問われて大前田は頷くと、地図にある三地点のうちの1つを指さした。

「この中央地点を陣取っているのが佐伯禅治郎です。戦力単体で見ると筆頭とみてま



ず間違いありません。死神との接触が多かったためデータはよくあるのですが、どれも彼が本気で闘っているモノではないため戦力は未知数です。……というより、大将となっている三名はいずれも力の底を見せていません。特に黒崎咲秋に関しては、我々は弓を構える姿すら捉えることは出来ませんでした」

「厄介だねえ、どうも。まあでも、相手の力量が分からないのはあつちも同じ。気張らず行くしかないね」

「そうだな……だが、黒崎咲秋という男は本当に大将なのかい？ 戦わない者が大将だとは思えないが……」

浮竹が不思議そうにそう言うと、大前田がはつきりとした口調で言った。

「それは、まず間違いなく」

「何故？」

「滅却師は完全な実力至上主義です。一家の当主を名乗るだけでも相当な力を持っている証。加えて、彼と石田宗弦二人が共存派だったからこそ敵対派と対峙できていたのです」

大前田曰く、石田宗弦の実力は一目瞭然である。その彼と並んで派閥を築けるということも黒崎咲秋の実力が高いことの証左だが、さればこそ圧倒的な数の利の有った佐伯派を牽制できていた。佐伯禪治郎に従う滅却師たちが下手に手出しできない程の実力

と、それに伴う権力を持つ二人が佐伯と対立していたからこそ、危うげながらも二勢力が均衡し、睨みあっていたのだ。頭数だけが戦況を左右するならば、黒崎たちに勝ち目など無かった、と。

「成程ねえ」

頷いた京楽はヘラツと笑って寒鴉の方を向いた。その表情に寒鴉が嫌そうな顔をす  
る。

「寒鴉クン！」

「絶エツ対、イヤです！」

「まだ何も言っていないじゃないの」

「どうせ俺に黒崎と戦えつてんでしょ？ イ・ヤ・で・す！ そういう面倒くさいのは京

楽先輩が担当してくださいよ」

「先輩は労わつとくもんだよ？ それに面倒くさい者同士気が合うかもしれないじゃない  
い」

「それを言うなら貴方が一番適任ですよ！ 後輩弄り、ダメ、ゼツタイ」

目を細めた京楽を見て気まずそうに口を噤んだ寒鴉は、盤上から視線を逸らした。

それを見ておずおずと京楽の副官、松方凜が京楽の袖を引く。

「京楽隊長、志波隊長があそこまで仰るなら、無理になさることはないではありません

か？ 隊士たちの戦意にも関わります」

「いいんだよ。寒鴉クンは何で僕がここまで言うのか分かってるだろうからね」

「申し訳ありません。浅薄な私にもわかる様に言っていただけですか」

「そんなにへりくだらなくても大丈夫だよ！ なに、単純に黒崎クンの相手を出来るのが寒鴉クンしかないってだけの話さ」

目を丸くした凜に諭すような口調で京楽は続けた。

「凜クンは僕らの斬魄刀の能力を知ってるだろう？ この三人はどうも決定打に欠ける。浮竹の能力は滅却師に関してはおもすごく相性がいいから、確実に落とすなら石田クンに当てる。浮竹を佐伯クンに当てないのは、決定打に最も欠けるからだ。僕らの中で強いていうなら一番その手札のある僕が総大将である佐伯を討つ。となると最大の不確定要素を請け負えるのは寒鴉クンだけってことになる」

「そこまで言うてもろとんのやから、シャキツとして返事の一つもせんかい、このボケナス！」

「イタイ！」

静かな室内に平子の声と寒鴉の悲鳴が響いた。後ろからの衝撃で寒鴉がよろめく。

寒鴉の後ろに控えていた平子の片脚が空中でぴったりと止まっているのを見なくとも、彼が寒鴉に喝を入れたのだらうことは容易に想像できた。

「ごねたかて京楽隊長が意見曲げるタイプじゃないんは分かりきつとることやろが。それにコンヒトはアンタの実力信頼して任せてくれとるんやろ？　しやあつたら頭下げて礼の一つも言うんが大人の対応っちゅう奴や。反論あつたら言うてみい！」

仁王立ちした平子を、やや低くなつた姿勢から見上げていた寒鴉は大きく溜め息をつく。

「はア……無い。無いです」

「……で？」

「京楽先輩の案に従います。任せていただいた分、きっちり仕事します」

「で？」

「まあまあ真子クン、いいよ、ありがとう！　浮竹も良いかい？」

「ああ。其れで行こう」

一同が頷いたのを確認すると、京楽はふわりと笑つた。

「そんじやあついでに、預かつてる三隊の配分の話をしようか」

「ああ、一、二、四番隊ですか。それぞれ等分して受け持つんじやないんですか？」

「いいや。一番隊の半分は本丸を攻める八番隊に同行してもらおうと思つてる。四番隊も同様だ。残りを浮竹と寒鴉クンが受け持つてもらおう」

凜の問いに京楽が答える。

自隊の面子だけでも制圧には十分な人員だ。されど万一の為に連れて来た隊員達であるならば、激戦・乱戦が予想される位置を厚くするのは何もおかしな点の無い案だ。賛同した寒鴉と浮竹が無言で頷く。しかし浮竹が、はた、という風に首を傾げた。

「それは構わないが、二番隊はどうするんだ？」

「あそこは諜報が主だからね。自由にやってもらおうと思ってるんだけど……どうかな、大前田くん？」

「その方が良いと思います。斥候要員は今回少ないですから」

今回、二番隊の指揮を執っているのは大前田ではないのだが、彼は指示を仰ぐことなく首肯した。恐らく彼は、今回の指揮官からその件を一任されてきたのだろう。

大まかな話がまとまったところで、「では」と凜が口を開いた。

「細かい配分はどうするんですか？」

「それはそれぞれの班長さんたちと要相談だねえ」

「ほんならオレが呼んできますわ。ちよお待っといってください」

「その必要はございません」

新たな声の方に全員が向くと、初老の男性が軽く頭を下げて入ってきた。

「失礼いたします」

「これはこれは……沖牙さん!!」

入ってきたのは、一番隊第三席・沖牙源志郎だった。今回遠征してきた一番隊を纏めている人物だ。いつもはフラフラとした口調の京楽が敬語になっているのは、副隊長の佐々木部長次郎程ではないにしろ、彼もまた総隊長と共に護廷十三隊を作ってきた傑物だからだ。隊長である京楽と三席の沖牙で地位の差こそあれ、立場というものはそう簡単に揺るがない。彼はそういう、背筋の自然と伸びるような空気を纏った男だった。

「はい。僭越ながら、戦闘力などを考慮したうえで此度の面子を六つの分隊に分けさせていただきました。今のお話の通りになさるなら、その内の一つを半分に割ればよろしいかと」

「流石、仕事が早い。では沖牙さん、その采配はお任せします。各隊の拠点で合流しましょう」

「御意」

きびきびとした歩調で去っていく沖牙を見ながら、はてさて四番隊はどうしようかと苦笑する京楽だった。

テーブルの上に地図を広げ、三人の男がそれを見降ろしていた。

話しているのは二人——咲秋と禪治郎が殆どで、宗弦は押し黙っていた。

「陣はどう敷くんですか」

「ン、戦力のメインは中央に置くのが王道でしょ。禪ちゃんが真ん中で、僕とそーちゃんが両側を締める。但し、それぞれのトップは屋敷に待機。前線に出ちやダメだよ」

主戦力、と咲秋に言われて気を良くしたのか、普段より禪治郎が落ち着いている。分  
かりやすい奴だ、と宗弦は横目で見ながら思った。

スン、と鼻を鳴らして空気を取り込むと、乾いた大気が僅かに咽喉を焦がす。雨は降  
りそうにないなと窓の外を見、彼は再び視線を咲秋達に向けた。

「指揮系統はどうします?」

「僕ら三人は通信機で互いにやり取りするけど、後は現場指揮に任せるよ。臨機応変!」

「? ……貴方、どうかしたのですか」

「え、何で?」

禪治郎が咲秋を怪訝そうに見る。

「行き当たりばったりとは、貴方らしくありません。揚げ足取りが十八番の貴方が」  
「褒めてる? いや、まあこの際どつちでもいいけどさ……今回は仕方ないんだよ」

「何故?」

禅治郎の問いに口を尖らせた咲秋は、眉を寄せて視線を下げた。駄々っ子のような表情だが、いい大人がやる事ではないなと宗弦は内心溜息を吐いた。

「——情報が足りなさすぎる。如何せん準備期間が短すぎた。作戦つてのは敵の情報から対策を練らないと立てようがないんだ。だから今回は、相手に僕らの情報を隠さない」

「!!」「なっ!! そんな事をしては……」

狼狽した二人を見て、ヘラヘラと笑つて咲秋が片手を振つた。

「まあまあ、取り敢えず聞いてよ。僕らと違つて死神側はある程度の情報は持つてる筈だ。ま、僕らが現世に居る間だけの上っ面だけだね。とすれば、あちらさんにとつて有利な組み合わせにしようとしてくるだろう。今回現世に来る隊長は五、八、十三番隊。可能な限り集めた情報で考えるなら、禅ちゃんには八番隊長・京楽春水、そーちゃんには十三番隊長・浮竹十四郎が来るだろうね。どっちも厄介な相手だ。だけど、来る相手が分かつていれば対処も出来る。下手にアドリブを入れるよりも、計画的に行き当たりばったりになる方が余程有利に戦える」

そう言うと、咲秋は薄い紙の束を取り出した。資料なのだろうが、その文字量に時間の無さが顕著に表れていた。

「——だから、今回は下手な小細工無しで行こう。大丈夫、禅ちゃんたちの地力があれば



不利な組み合わせでも何とかなるよ。僕が保証する」

そう発破をかけた咲秋は、その資料を見せながら対する隊長格のデータを説明した。  
——無いよりはマシ、という程度だったが……

宗弦と禪治郎は共に黙って聞いていたが、咲秋は宗弦と目が合うと困ったように肩を竦めた。なんだその、嘘じゃないよ！ ホントだよ☆ みたいな反応は。別に疑ってなどいない。

「……いくつか、渡しておく」

咲秋の話が終わったことを確認した宗弦は、重い口を開いた。懐から数枚の紙切れを取り出す。親指と人差し指の間に挟んだ其れを後の二人の前に差し出した。

「これは？」

「『現霊紙鏡』——ここに名を書いたものの霊圧の状態を再現するよう作った紙だ」

「えーつと、つまりどういう事？」

咲秋がわざとらしく首を傾げる。禪治郎にも分かるように補足説明しろとも言いあげた。言われなくても分かっている。

「これに名を書いたものが死ねば、この紙もまた消失するよう作ってある」

「！……成程ね。確かにこれは有った方が良い」

“見えざる帝国”の滅却師にとって、霊圧とは感知できなくて当たり前のものだ。こ

れは何も、靈圧探知能力が低いとかそういう意味ではない。寧ろ、靈力に優れた者はその探知にも優れているのが普通だ。だが、“見えざる帝国”内とはつまり靈力を極端に制限した環境。滅却師同士の靈圧など、視界内でも探知できるか怪しいほど微かになっている。その中で長年過ごしてきた滅却師は、死神や虚といった異種の靈圧には反応できても同族には疎いのではないかと考えた。つまり、“同志の靈圧が消えた”事を“異常事態”と認知できない可能性があるのでないかと。ただでさえ乱戦が予想されるのだ。だからそれを防ぐため、視覚的に異常事態を告げるものを作った。それがこの紙だ——そう説明すると、禅治郎がテーブルを荒々しく叩いた。

「黒崎！ こいつは我々が死ぬやもしれぬと言っているのですよ!!」

「“かもしれない”は“かもしれない”だよ。それに、大将の死亡を知るのが遅れると一団丸々壊滅なんて簡単に起こる。有るに越したことないと思わない?」

「しかし?……」

禅治郎が言葉に詰まったのを見計らって、咲秋が紙を受け取った。

「これに名前書けばいいんだよね?」

「ああ。この墨を使ってくれ」

「あいあいさー♪ こーゆー時の為に、ちやんと字は練習してるよ〜!」

「いいからサツサと書け。禅治郎、これはお前の分だ。——そして、これは私の分の紙

だ。もう名も書いてある。渡しておく」

差し出された墨汁と三枚の紙を、渋々、と言った風に禅治郎が受け取った。

「縁起の悪い話です」

零れ落ちた一言。

禅治郎からしてみれば何の気なしに言った言葉なのだろうが、宗弦からしてみれば思わぬ言葉だった。

自分のすぐ隣に“超”の付く現実主義の友が居るからだろうが、宗弦も大概な現実主義者だ。縁起というモノをあまり気にしていない彼は、屋敷の者が用意したあれこれを目の端に映してようやく、“嗚呼、今日はそんな日だったな”と思いつくくらいしかしてこなかった。妻と為った結が来てからはそれも幾分かマシになったが（というのも、妻との接し方に悩んだ末に、そういう形式的なものから入った方がやりやすいだろうという結局現実的な思考に至った末の行動ではあるのだが）、それでもそういった祭事事に興味の無い彼に結はこっそり頬を膨らませている。

話が若干逸れたが、人とは突き詰めると主観でしか考えられない生き物だ。だから戦いに生きる禅治郎もまた自分と似た思考回路だろうと勝手に思い込んでいた宗弦は、先程の禅治郎と同じく思わず言葉を零した。

「……意外だな」

「何がですか」

「禅治郎が『縁起』などを担ぐとは思っていなかった。実力に物を言わせる性質だとばかり思っていた」

「失敬な。節句は桃も欠かさず行いますし、戦前の儀式も忘れたことはありません。常識でしょう」

「……ふ」

宗弦が不意に笑みを零すと、後の二人が驚いた。

鳩が豆鉄砲を食らったような顔だ。

それ程驚くこともあるまい、と不思議に思っていると、禅治郎が露骨に眉を顰めた。

「急に何です、気味が悪い」

「気味が悪いとは、酷い言い草だな。いや、すまない。桃の節句を行うお前を想像したら愉快な画になったものだから」

桃の節句とは即ち女子の健やかな成長を願う行事だ。俗に言う雛祭りというやつで、何段もの段差の上に婚礼の式を模した人形たちを飾る。娘どころか妻すらいない禅治郎がそれを行う必要があるのかは問うまいが、多くの人形を前に酒でも洒落込む若い男の姿は中々愉快的な図である。

クスクス宗弦が笑っていると、先程の言葉に同意するように咲秋が右手を軽く上げ

た。

「あ、それ分かる！ 禅ちゃんがお雛さん並べてる画とか……ぶふっ！ 似合わないにも程があるんだけど!!」

「貴様らッ！ 余程私を怒らせたらしいですね……」

「そうじゃない」よく」

宗弦と咲秋は互いを一瞬見た後、咲秋が苦笑しながら続けた。

「『禅ちゃんの意外な一面見た』って感じ！ そーゆーの、お互い言ったり訊いたりしてなかったからさ」

「……なら黒崎、前々から訊きたいことがあったんですが」

咲秋の弁明に暫く目を丸くしていた禅治郎は、バツが悪そうに一つ咳をして再度口を開いた。

「え、何、急に……」

「貴方、時々物凄く息を切らしている時がありましたよね。まるで何かに追われていたかのように……あれは結局何だったんです？」

確かに、咲秋と待ち合わせなどをすると時たまそういうことがあった。普段は時間に正確な彼が遅れてくるときは、必ず十分以上の遅刻と息切れ、動悸がセットになっている。理由を訊いてもはぐらかされるから宗弦は訊くのを諦めていたが、あまり彼と話し

てこなかった禅治郎はこの機に訊いてしまおうとしたのだろう。

咲秋は数瞬目を瞬かせると、吐き捨てる様に一言。

「ストーカー」

「……は？」

よく意味が解らず二人が首を傾げていると、咲秋は渋々といった風に顔を僅かに顰めた。

「長生きしているとモノ好きが引つ付けてくるんだよ。あ、犯人は分かっているから心配はいらないんだけどね」

「長生き……黒崎、貴方一体幾つなんです？」

「さあね〜？ そーゆーのつてき、謎な方が面白いでしょ？」

咲秋はいつものようにヘラヘラ笑っているが、笑い方が僅かに先程と変化した。先程と違い、今は目の奥が冷めている。こういう笑い方をするときは、そのポーカーフェイスで隠せない程その場の何かを包み隠したときらしい。咲秋と結構長い付き合いになるが、宗弦がそれを分かるようになったのは存外最近のことだ。それ程分かりにくい変化だった。

……咲秋は、自分を探られるのを嫌悪している。

誰にでもその気は有るが、咲秋のは何か理由が有るような、そんな気がした。

訊いても答えないだろうから、訊くことは出来ずにいる。猶も追求しようとした禅治郎の前に片手を出して制する。

「……禅治郎、その辺でいいだろう？ 加えて、閣下からの命にあつた通り出来得る限りの装身具を作っておいた。だが、各隊二十程しかない。人選をよく考えてくれ」

「おつけー！ 具体的にどーゆー人選？」

「それは自分で使つてみて判断してくれ。二人には、専用のがある。そろそろ陣に届いている筈だ」

「分かった！ ——じゃあ、ここから先は各個敵を撃破！ 殲滅したら禅ちゃんのところに合流つてことで。いいかな？」

「分かった」「了解です」

「これ以上用がないなら」と禅治郎はさっさとその場を去つていった。

「禅ちゃんせつかちだなア……別にいいけど！」

咲秋も部屋を出ようとして、振り返る。

「そーちゃんは出ないの？」

「……お前には、これを渡しておく」

宗弦の手には、手のひらと同じ大きさで、銀色、円形の金属が乗っていた。中は空洞

で、靈子に関する物質は含まれていない様だ。

咲秋の浮かべる疑問符に答える様に、宗弦は渋々ながら口を開いた。

「……まだ試作品だが、それは死神の特定の波長の靈子を巻き込んで結合を阻害する。純血統の滅却師なら、詠唱は要らん。阻害したい術中に翳せば発動する」

「ふむふむ、つまり、『正解対策』って事で良いのかな？」

大した説明もしていないのにしつかり正解を弾き出す咲秋に内心肝を冷やししながら、宗弦は顔に出さぬよう深く息を吐いて視線を咲秋から逸らした。

死神の主要な戦闘法の一つ——斬術。

斬魄刀、と呼ばれる特殊な日本刀を用いるそれは、剣術を軸とした戦い方でありながら、その本質は純粹な剣術とは言い難い。己の魂を刀に映しこみ、己の魂の力を現実に引き出して各々の力で闘う——その媒介が斬魄刀だ。写し取られた力が反映された斬魄刀は、純粹に攻撃力の上がるモノ、刀以外の形状となるモノ、特殊な能力が付加されるモノ、又はその混合と多様。この多様過ぎる力を、全体の一部の数ではあるが死神たちは使ってくる。また宗弦の知る限り、斬魄刀というものは二段階変化するものがあるのだとか。一段階目の変化を“始解”、二段階目を“正解”と呼び、解放されるほど使用者が振るう力は絶大となる。

幸いなのはそもそも解放出来る者が少ないという事だが、一度解放されてしまうとそ



の対処は面倒だ。加えて、最も警戒すべきは更にその上位の解放——卍解を扱える者、つまりは隊長という存在だった。始解した時点で所有者の霊圧が数倍になるというのに、卍解をすると更にその五倍から十倍へと跳ね上がる。正直に言えば勘弁してほしかった。始解に対処する程度なら候補生ならば訳無いだろうが、それ以上は実際に対面してみなければ分からない。

だから彼は念の為、別件用につけていた試作品をこっそり研究室から持ってきていた。実践を見越して作ってはいしたが、まさかこんなに早く試行する事になるとは思っていなかったが……

“卍解対策”——咲秋の言う通りだ。

死神の戦いとは、その内から生じる霊力を用いて行うもの。斬術の場合は自身の霊力を斬魄刀と共有することで生じさせている。だが一気に十倍などに霊力が増幅されれば、余剰分が漏れ出るのは道理だ。その靈子の動きを阻害すれば、斬魄刀との霊力共有が上手くいかずその威力を削げる。そして靈子の動きを掌握するのは、外部に漂う靈子を扱って戦う滅却師の十八番。機構さえ整えば、それを形にすることなど宗弦には造作も無かった。

現在咲秋の掌に収まっている円環は、試作の二十三代目。七割という高い制限率と、翳すだけで卍解という巨大な霊力の流れを阻害できると言う利便性を兼ね備えた、現時

点での最高傑作だ。

——という説明は全部省略して、宗弦は咲秋の言に対して首肯した。

「……………そうだ。制限できるのは最大でも七割程度だろうがな」

「何で僕だけに渡したの？」

「……………」

「当ててあげよつか」

「要らん」

不敵に笑った咲秋が余計なことを口走る前に無視を決め込もうと思っていた宗弦だったが、ペロツと言つてしまいそうな咲秋を宗弦は睨みつけた。だがその甲斐無く、相変わらずヘラヘラ笑つて咲秋が口を開いた。

「閣下にこの存在を知られたくなかつたんでしょ？」

「五月蠅いぞ」

「あ、凶星？ やつたね！」

「黙れ」

「ねえねえ、これつて“相手の靈子を巻き込んで阻害する”んだよねえ？ 阻害するだけ？」

ブチイツ、という音と共に、咲秋の髪が一束宗弦に引き千切られた。

あまりに唐突で無慈悲な出来事に咲秋は一瞬表情を凍らせると、すぐに仰向けにひっくり返った。

「GYAOOOOOAAA!!!」

地獄の窯に入れられた亡者の様な声を出しながら患部を押さえて咲秋が転げまわっている。

——腹立たしいまでに凶星だった。

宗弦は我ながら子供のようだと思いつつ、それを誤魔化すために咲秋に当たらずはいられなかったのだ。

手に残った髪の毛の束をぞんざいに投げ捨てて、右に左に転がる咲秋を宗弦が足で止める。

「お前の予想通り、〃だけ〃ではない。このままいけば、な。今はまだ阻害のみだ」

「ううっ……そーちゃん酷いよー……痛い、いや、熱い？ 毛根が死んじゃう……」

「毛根と共に死ぬ」

「やめて?! そんな死因絶対ヤダ!!」

軽く咲秋を蹴った宗弦は、床に横たわる咲秋を放置してその場を離れた。

宗弦が消えた方を見ながら咲秋が呟く。

「やっぱり君は甘いね。敵に情けなんか掛けるもんじゃないのにさ」

「今はまだ阻害のみ」ということは、これからそれ以上のことが出来る可能性は大いにあるってことだ。具体的に言うなら、「正解を阻害するのではなく奪い、それを用いることが出来る」、とかね。

きつと君は、いずれ来る戦いに於いて、死神の戦意を挫いて降伏勧告をするためにこれを作つたんだらう。

でも先日、閣下がどこまでも死神を蹂躪するつもりであることを知って、これの存在を報告するのを躊躇つた。——「正解を失つた死神たちが閣下たちから逃れて生き延びるビジョンが見えなくなつちやつたんだよね？」

——皮肉、つてやつだね。

君が作るものはいつだつて誰かの為のモノで、それが使われるときはいつだつて誰かが傷ついてしまうんだ。

人を救うための作品が、人から奪う凶器になつてしまう。

それでも手を止めない君は何処までも愚かでいじらしく、そして——美しい。

「そんな君だからこそ、僕は——託したいと思つたんだ」

周りに誰も居ないと分かっているからこそ、彼はどこか祈るような口調で囁いた。

ゆつくりと閉じた瞼の裏に映るのは、不機嫌そうな友の顔。

勝手だと君は言うだろう。

でも……でもね、僕には――

焼き付いてしまいそうなその影を消すかのように、彼は再び瞼を開いた。その瞳には、いつものように冗談じみた笑みの欠片も在りはしない。起き上がり、窓の外へ目を向ける。

――もう、耐えられない。

細めた目の先には、代わり映えしない、雲一つない青空が覗いていた。

足元をふと見降ろした寒鴉が足を止めた。

と、京楽が思うや否や、寒鴉はしやがみ込んで手元をごそごそしだした。

「寒鴉クン？ どおしたの？」

「あ、先輩！ いえね、この花、おりようが言つてたやつかなって思ったんですよ」

寒鴉の手元には、彼の掌にそれぞれのものが収まってしまふほどの丈の植物が収まって

いた。丸をベースにしたハート型の、青く、萼近くのみが黄色く薄い花卉。それが五枚付いた花が枝分かれした茎に咲いている。

「りようちゃんが？」

「ええ。確かこんな感じの花を探していたんですよ」

志波家の女中に、りようという者が居る。

決して若いわけではないが可憐で明るく、魅力ある女性だ。京楽は二言三言しか話したことはないが、それでもナンパ紛いのことをしかけたことがある。

その時、思いの外きつい口調で寒鴉が咎めたのを昨日のことのように思い出した。

そつと慈しむようにその花を手折った寒鴉の横顔を眺めながら、京楽は苦笑を禁じ得なかつた。

——分かりやすいねえ……

彼の表情は、ただの女中を思い出している顔ではない。一人の男の顔だった。

「近所には咲いてないのかい？」

「そうらしいんです。『なら、種を取り寄せればいい』と言ったんですが、『志波ほどの大家で取り寄せていただくような花ではございません』と断られてしまつて。それくらいのこと、気にする必要ないんですけどね」

笑みを漏らした彼の顔は、兄や甥と居るときとはまた違う優しい顔をしていた。柔ら

かな笑みに、意地悪く京楽が口の端を上げる。

「その花、彼女にあげるのかい？ きつと喜ぶよお！」

「んなツ！ だつ、ダメですよそんなツ！ 鼻肩しては……」

頬を染めて言葉を詰まらせまくった寒鴉に畳み掛ける様に京楽が続ける。

「いいじゃない、引つ付いちやえば。お互い想い合つてるのバレバレなんだし。気付いてないのなんて乱鴉クンくらいなんじゃないの？」

一層紅潮した寒鴉の頬は、京楽の最後の一言を聞いて静かに色味を戻していった。

「……おりようがどう思っているかは兎も角、オレみたいにいっつ死ぬか分からないような奴へ嫁ぐなんて勿体ないですよ。彼女なら嫁ぎ先は幾らでも有ります。それに先輩も聞いてらっしやるでしょ。オレがそういう理由で貴族間の縁組から距離を置かれてること」

確かに、そういう話は貴族間で広がっていた。狭い世界だ。婚姻やら何やらで家を盛り立てることしか頭のない連中は、そういう情報に飛びつきやすい。だが——  
「嘘は関心しないなあ。逆でしょ？」

次男とはいえ、寒鴉は五大貴族の直系。本人がどんなに望もうと、下女との婚姻など結べるはずもない。

死神だからとかそんなことは自分の気持ちを紛らわせるための言い訳だと、本人が一

番よく分かつている筈だ。

そして「想い人と叶わぬ位なら、いつそ誰とも添わぬ方が良い」——京楽の目の前に居るのは、そういう男なのだ。

大胆で純粋なれど、不器用。

だからこそ京楽は、そんな彼にもう少し自由に生きる道を示したかった。

厳しい冬を耐え抜く彼の黒鳥のように、少しでも後悔無く、力強く生きていける様に

「先輩には分かりませんよ」

寒鴉の低い声が響く。

「無理を押し通したとして、彼女にどれだけの負担が掛かることか！ 志波家での居場所だつて無くなつてしまふかもしれない。死神を辞めて護ろうにも、オレはたかが次男坊です！ オレには彼女も、彼女の笑顔も護れる自信が無い……その程度の男なんです」

寒鴉の手に力が籠る。握りしめられた花が、力なく折れてしまった。

「なにも、そこまで思いつめたことしなくても良いのさ」

京楽は努めて軽い口調でそう言った。ポンポンと寒鴉の頭を叩くと、僅かに驚いた顔で彼が京楽を見上げた。どこからともなく吹いた風が、二人の羽織をひらひらと揺ら



す。

「君の覚悟をとやかく言うつもりは無いよ。でもね、もうちよつと肩の力を抜いていいんだ。それこそ花を贈るくらいの事、誰も咎めやしないよ」

微笑んだ京楽の顔を、鳩が豆鉄砲喰らったような顔で寒鴉が見つめた。強張った顔が、少しずつ弛緩していく。

「そう、ですか……？　——じゃあ先輩！」

京楽が首を傾げている隙に、寒鴉はテキパキとした手つきで、けれど丁寧にもう一つその花を懐から取り出した懐紙で挟んだ。どこから出したのか尻紐でその紙を結び、それを京楽に差し出した。

「これ、持つてもらえませんか？　生花のままじゃ、おりように渡すまでに萎れちゃうんで押し花で！」

「どうせなら君が持つてなよ。これから戦いだよ？」

「本当はそうしたいですけど、へゆー」が……ほら、どんな風に出るか分からないじやないですか。水浸しになる系とか炎燃え盛りまくり系だったら痛んじやうでしよう？

そういう点では先輩の斬魄刀はまだいいですよ

いつものように笑った彼は、その手を引く気が無いらしかった。澁々京楽が受け取った瞬間、もう何度思い出したか知れない声が聞こえた気がした。

『それに、今度こそ簪を渡してやってくれ……』

『家の外に頼れる人は、貴男しかいないの。だからお願い——』

二人はそう言つて、自分の大事な物を京楽に預けて逝つてしまった。

兄貴のように死を覚悟した顔じゃない。

彼女のようになんか誰かを護ろうとする顔じゃない。

だというのに、何故か寒鴉の所作全てが二人を想起させた。

殆ど反射的に、京楽は渡された懐紙を寒鴉の方へ突き返した。

「寒鴉クン！ やっぱりこれは、君が——」

「あ、男に二言は無いでしょ！ それに先輩が焚きつけたんですから、責任取つてくだ

さい——」

悪戯っぽく笑つた寒鴉は京楽を残して瞬歩で逃げてしまった。

彼の瞬歩によつて舞つた土煙が嫌に長く尾を引いている。

「勘弁してよ……」

滲み出た手汗が懐紙に染みぬよう、京楽は已む無く懐にそれを仕舞つた。

沈んできた陽と共に風が冷たく吹き抜ける。

どこかで、犬の遠吠えが聞こえていた——

## 第十八話 長いヨル・前編

開戦の合図は一つの矢が一人の隊士を貫いて始まった。

あまりに突然で無慈悲なその矢は死神たちを悉く混乱させ、戦況は滅却師の側に傾いている。

それを見ながらため息を吐くものが一人。

「ま、いっちょオレが出るかねえ」

そう言つて「五」の字を負つた男は立ち上がると、斬魄刀を引き抜いた。彼の後ろに控える様に佇んでいた、長い金髪の死神がそれに続く。

「隊長自ら出向かんでも、俺が行けばええんちやいますか」

「ん、どうかなあ……多分爺様じっさまがオレを選んだのはオレの斬魄刀が殲滅戦に向いてるとかそんなんじゃないかねえのかなあ。オレからしたら全然それでもねえけど……」

それを聞いた彼の副官は惣右介達一番隊員を含め周りに居た全ての隊員を下がらせた。最前線で闘う者達も、号令を聞いて左右に捌ける。滅却師たちがそれに追撃しようと動き出したその時――

「お招きしよう、〈幽玄回廊〉」  
ユウゲンカイロウ

低く、そして静かな声が意外なほど辺りに伝わった。この小さな戦場にいる誰もが息を呑んでその男——護廷十三隊五番隊隊長・志波寒鴉に視線を注ぐ。尖兵としてその場に居合わせた滅却師達の霊圧ごと、寒鴉一人の重く深い霊圧が呑み込んでいった。

始解した状態においても、寒鴉の斬魄刀に変化はない。だが数秒もすれば、どんなに鈍い者でも違和感に気付く。というのも寒鴉の足元の影が、普通ではありえない程膨張し、正方形を形作っているのが目に入るからだ。彼が斬魄刀を横薙ぎに振るうと、滅却師が固まっているあたりに、それこそ回廊のように彼の足元から伸びた黒く幅のある道のようなモノが伸びた。

「さてさて、鬼が出るか蛇が出るか？」

喜色ばんだ彼がそうつぶやいた直後、黒い床の空間上に何かが出現した。

「今回は何だろうな？」

後ろに下げられた待機中の隊員の中で、惣右介の隣にいた竜太郎が面白そうに呟いた。質問の意図を掴めなかった惣右介が首を傾げる。

「どういうこと？」

「ああ、惣右介は知らないんだったな。アレが隊長の斬魄刀、〈幽玄回廊〉の能力だ。自身を起点として特定の空間を指定し、其処を支配する」

「支配って、どんな？」

「それがアレの面白いところだ。支配の仕方はいつも違うんだよ。隊長曰く、斬魄刀の気分次第なんだそうだ。オレが見たのは地面がマグマみたいになったのと音が聞こえなくなったのだった。どっちにしる変わってるよな。制御できるのが能力の有効範囲だけなんて」

竜太郎の認識は正確なモノとは言えないのだが、今は割愛させていただきます。

兎も角、寒鴉の斬魄刀は、それが“面白い”だとか“心動いた”というようなものを現実世界に反映することが出来る力を有していた。出てくるモノが何なのか、寒鴉にすら分からないという不便極まりない代物ではあるのだが、敵の整った隊列を掻き乱すには十分な規模の能力でもあった。

そして今回、空間内に出てきたのは……

白、黒、赤、黄……半透明で様々な色を持つ、お椀の様な形。その口の辺りから、レーズヤリボンの様なヒダが下がっている。

「海月<sup>クラゲ</sup>?」

「……紛うこと無き海月だな」

「俺的にはもちつと戦いやすいのにしてほしかつたんだけどなあ……」

夥しい数の海月が、まるでそこが海の中でもあるかのように漂っていた。その種類も様々でどう動いても海月に当たりそうさ。だが外から見ている分には、空中を漂うガ

ラスの様な生き物の群れに心奪われる様な光景だった。

寒鴉の方はというと若干頬を引き攣らせながら、自らの近くに漂ってきたクラゲを斬魄刀で叩き落したり触手を切ったりして様子を見ているらしかった。

呆然と眼前の不思議な光景に目を奪われていた惣右介は、同じく一隊で班を率いている先輩からの伝令で思考を現実に取り戻された。内容に首肯した直後――

「ぎゃあああああ!!」

「一旦さがれ!ここに居てはッ」

「ここに来るなああ!」

向こう側から悲鳴が聞こえた。

どうやらここに漂っている海月も本来のものと同じく毒を持っているものが居るらしい。相当致死性の高いものに触れたのか、数人が倒れたまま動かない。本来の海月であれば、人を殺してしまうようなものはそうそう居ないのであるが、そこは寒鴉の斬魄刀の裁量次第なのだろう。

苦し気に呻くもの、必死に海月を射続けるもの、果てにはこの空間から出ようと海月を避けながら走る者と様々だった。

敵方の隊列が完全に乱れたのを一瞥した寒鴉の副官――同隊副隊長・平子真子が、単身で寒鴉の一番近くに寄った。寒鴉が苦笑しているのを見て真子が溜息を吐いている。

「真子」

「はい、隊長」

「オレはここから動けないっばいから、討ち漏らしを頼む」

「……はいはい」

その時の平子の表情は、敢えて書く必要もあるまい。

そこから先は一方的だった。

動揺して統率の取れなくなつた滅却師は隊長の空間の中で必死に抵抗しながらもその数を確実に減らしていった。やつとのことでも外に出ても、その空間をぐるりと取り囲んでいた真子たちに斬られていく。

殲滅というより、虐殺と言つた方がしっくりきた。

眼前の光景に眉を顰めつつ、それでもなお惣右介は目を逸らさずに沈黙していた。動く気配の無い彼に、班員の一人が後ろから声を掛ける。

「藍染十席、我々も参加しなくてよいのですか」

「構わないよ。平子副隊長には待機と言われているし、あれ以上の戦力が不要なのは明白だからね」

一番隊と五番隊の何名かは離れた位置で周囲の警戒を行いつつ待機していた。一番隊士の何名かは不服そうにしていたが、惣右介からしたら人を斬らずに済んでホッとしたくらいだった。この状況は見るに堪えない。

「正直、オレはこっちに残れてホッとしてるんだ」

うっかり言ってしまったのかと思つて驚いたが、隣に竜太郎の気配を感じてそのせいだと分かった。どうやら彼も待機組だったらしい。待機とはいつでも背後の警戒も兼ねた任務であつたから本来私語は厳禁なのだが、内容が内容だけに彼は苦笑して声の方を向いた。

「兄さん、本音でもそんなこと戦場で言つてはいけないよ」

「ン。……嫌な役回りだな」

「それも駄目だよ」

苦笑して返すと、兄さんは笑った。

しかしその笑みはいつものモノとは全く違い、苦し気だった。

初戦で勝利をおさめ程々に進軍した寒鴉一行は、陽が落ちる前に陣を張る為その歩み



を止めていた。真子に後の事を丸投げしてフラフラと辺りを歩き回っていた寒鴉は、後ろに現れた気配にニンマリと頬を緩めた。

「喜助か！」

「ハイ。お久しぶりっス、寒鴉サン」

寒鴉が振り返ると、伝令役が被る屋根の様な形の笠を頭から外した浦原喜助は片膝をついたまま頭を下げた。

周りで陣を張っている隊員たちがいつの間にか現れたその隠密機動に驚いているのを気にする素振りも無く、二人はニコニコしながら会話を進めた。

「そう畏まるなよ！　ン、元氣そうで何よりだ！　夜一の小娘も来ているのか？」

「はい。とはいっても頭首就任前なんで、伝令なんて危険なことはやってないっスけど。ああ、寒鴉サンは会いに来ないように伝えろと言付かってますし」

「そう言われると行きたくなくなっちまうんだけどなあ……前会つたのっていつだっけ？　千暁の爺様じっさまと新年の挨拶とかで五家集まろうってなつた時だっけ？」

「そっスね。もうあれから五年になる筈っス」

志波乱鴉率いる志波家と四楓院千暁率いる四楓院家は、共に五大貴族と呼ばれる尸魂界で最上位の貴族だ。志波家と四楓院家は、当主の気質からか他の家々より交流が多い。従って寒鴉と喜助、そして四楓院家の姫たる四楓院夜一は顔見知りだった。

寒鴉の言っていた“五家集まろうってなつた時”というのは、寒鴉と夜一が、“新年、毎度毎度当主に挨拶しに行つたりされたりだけでも面倒なのに、それを自分以外の四家それぞれにやるなんて超面倒くさい。一気にやりたい”と言つたのに対し、四楓院家当主が乗つた結果出た案である。結論から言えば却下された。“五家集まつて仮に襲撃でも受けたらどうする?”とのこと。五大貴族の当主が一度に欠ける事態にでもなれば、瀟靈廷内で大変な混乱になると中央四十六室まで出張つてくる騒ぎになつた。結局寒鴉は隊長職に就いてから兄にそう言う事を丸投げしていたから、最近は新年の挨拶回りをスルーしていたのだが……

「やれやれ、警護の都合とかで集まるなどか心配しすぎだよなあ……綱八代とか乱鴉兄は兎も角、俺や千暁の爺様に警護とかいらねえだろ、絶対……」

「否定はしませんけど、過ぎた事を言つても始まりません。今は取り敢えず伝令を聞いて欲しいんですけど、いいっすか?」

「ああ、スマンスマン! 何の伝令だ?」

「ハイ。総隊長より伝令です。“現世戦力に於ける隊長の斬魄刀全面解放を許可する。同時に本日以降、隊長の限定霊印も解除される”——以上です」

近くでその会話を聞いていた隊員が思わずと言つた風に零す。

「え、それだけ?」

「それだけっス」

真剣な表情で返した喜助に、寒鴉もまた顔を顰めた。

殲滅戦が決まった時点で、副隊長以下は現世のみ斬魄刀の全面解放が許可されていた。隊長は時間が限定されていたが、始解ならばこれもまた可能。加えて副隊長にも本来打つ限定霊印が免除されていた。限定霊印とは、一般の死神とは隔絶した霊力を持つ副隊長以上の死神がその力で現世の霊なるものに不要な影響を及ぼさないように、その身に自身の隊花を模した模様を施して霊力を五分の一にまで制限する為のモノだ。そういう面倒くさい御託が並べてあるが、実は単に隊長格がホイホイ現世に行かれると四十六室的に嬉しくないだけなんじゃないかと寒鴉は思っていたりするのだが、今は取り敢えず置いておく。

兎にも角にもそれを現時点で隊長も解放し、斬魄刀の全面解放——斬術に於ける最終奥義・卍解を許可された。意味することは一つだろう。

「つまり山本の爺様は『さっさと片アつけて帰って来い』と言いたいわけだ」  
「……そう取るのが妥当かと」

「あく、ヤダヤダ！ 実質俺一人に言ってるじゃん！ 卍解<sup>ワ</sup>、色んな意味で疲れるから嫌なんだよ！ くっそー……五番隊隊長・志波寒鴉、確かに言付かった。ありがとな、喜助。——ところでよオ、ココ、どう思う？」

ス、と寒鴉の視線が、現在組み立て中の野営地に注がれる。その意味を察した喜助が首を横に振る。

「お察しの通りだと思っつス」

「やっぱそーか。分かった。先手を打たねえとな」

「御武運を」

「らしくないセリフだ。だがありがたく受け取つとく。小娘にもよろしく伝えといてくれ」

「分かりました」

笠を被り直した喜助は一礼すると消えた。

「瞬歩、上手くなつたなあ」

微笑みながら言つた寒鴉の瞳は揺れていた。

### 五番隊野営地

七名ほどの人影が、音も無くそこに降り立って弓を構えた。

(手筈通りに行くぞ)

リーダー格の男が呟いた。

周りの者が同時に頷く。

直後——

「やーやー、こんばんは！ 生憎、客用の茶は無えんだ」

突然の声に全員が振り返る。

片手を挙げ、ニコニコと笑った死神が一人立っていた。

現れた人影が何者かを認識した男は一瞬驚愕し、そして苦々し気に声を絞りだす。

「——志波、寒鴉！」

「お、当ったり〜！ こんな夜更けに俺に会いに来てくれたのか？ 悪いな、滅却師のも

てなし方を知らねえんだ」

「チツ、仕方ない……段階五！」

統制の取れた動きで、滅却師たちが寒鴉を取り囲んだ。数の不利に全く寒鴉が動じる様子を見せない。それどころか、輪から抜け出そうともせず笑みを浮かべている。寒鴉の態度から背筋に悪寒が走った男は、早急に段階五——野営地への急襲後、現れた寒鴉に目晦ましを行って逃げるという作戦——を実行に移した。周りに如何程の敵戦力が分散しているか知れないが、一刻も早くここから立ち去るべきだと彼の勘が告げてい

た。

「構わん、放て！」

「志波式石波法ひやくしち・破輪はりん汨海べつかい——砂になアーれツ！」

靈矢が放たれると同時に寒鴉が地面に手を突いた。

途端、滅却師たちは自身の世界が大きく揺れるのを感じた。

実際の所、揺れていたのは世界の方ではなく——

「しまっ——」

「真子イツ！」

「分かつとります！——縛道の六十三・鎖条鎖縛！」

寒鴉を中心として、円状に蟻地獄が形成された。

野營地をいとも容易く飲み込むほどの規模で展開された其れは、初見の者であれば中八九思考が停止する。もがけばもがくほど足を取られて身体が沈み、掴めるものなど周りには無い。助かる為には、術が発動される前か、その直後に靈子で足場を構成して、地面から離れておくより他にない。現に術を行使した寒鴉は蟻地獄の中心で空に立ち、静かに滅却師達を見降ろしていた。

一瞬で足を取られた滅却師がもがいている隙に、寒鴉と同じく空に立つて隠れていた真子がリーダー格の滅却師を縛道で縛って引き上げる。

「クソツ、退け！ 退いて報告を——」

「もオ手遅れや。諦めえ。あつこまで沈んでもオたら自分で脱出なんか出来るわけあらへんやろ」

真子が捕らえた滅却師の首筋に手刀を入れて昏倒させた。

他の滅却師たちの悲鳴が響く。しかし砂の流れが止まることはなく、その声諸共飲み込んだ。

静寂に包まれた野营地だった場所に、霊子で足場を作つて寒鴉の隣に真子が降り立つ。

「……えげつない技ですわ、ホンマ。これが百以上あるんやから怖いわあ」

「はは、百もねえぞ？」

同じく霊子の足場に立っていた寒鴉が笑う。さも当然のように言い放たれた言葉に、真子は一瞬言葉を失った。

「……は？ いやだつて、隊長さつき“佰漆式”言いはつたやないですか。百七番目なんちゃうんですか？」

「いや、七番目だ。志波式石波法は百一からの番号なんだ」

「ハア!! 何で!!」

「俺が知るかよ。まあ、その方がカッコいいとか威嚇になるとかそんな理由だろ」

「んな、適当な……」と真子が唾然としているのを見ながら、寒鴉が豪快に笑った。前者の推測の方が強ち正鵠を射ているかもしれないと真子は思ったりしたとかしないとか。

そうやって二人がガタガタ騒いでいると、鎖条鎖縛にぶら下げられた滅却師が目を見ましたのか身を振った。

「う……」

「起きたか。おはよーさん」

「……!! 貴様ツ、そうか、これは……」

ギリリと歯ぎしりの音と共に、視線で射殺すかのような勢いで滅却師が寒鴉を睨んだ。

足元からは、いまだにさらさらと蟻地獄が崩れる音が響いている。

「何故ツ……」

「漠然とした問だなあ……生かした理由は尋問するため。あ、それとも何で襲撃が分かったのかって話か？」

眼光が鋭くなったのを見て寒鴉は溜息を吐くと、しゃがみ込んで覗き込むように滅却師を見つめた。

「此処、木もねえし小高い丘になって見晴らしも良い。野営地にはちょうどいい場所



だった。——良すぎるくらいにな。狙撃ポイントの多い森よりこういう所に死神側が陣を張ろうとするのは容易に想像できたはずだ。でも、何も無かった。妨害も、偵察も、何にも。だったら、この場所はもうアンタらの手の内なんだろうなって思ったわけだ。ま、現世自体が滅却師の本来の戦場と言やアそうなんだが……だが、思ってたより少人数だったな。人員不足か？」

滅却師の殺気が膨らむ。同時に霊圧も膨らんだが、寒鴉は眉一つ動かさずに口の端を釣り上げたままだった。

「兵数差など、あの方の前では意味を為さない！」

「はは！ 兵数差は自覚してんだな。で、これは誰の命令だ？ ——つつつても、答えなんて分かりきってるがな」

「知った風な口を「破道の十一・綴雷電！」——ツがあつ」

真子が、手に持った鎖条鎖縛に綴雷電を重ねた。伝つて来た電撃に滅却師が仰け反っている。

「隊長、敵さん興奮させすぎやで。聞き出せるもんも聞き出せんようになるやろ」

「きき……だす……ふつ」

滅却師の口から失笑が漏れる。その声音に寒鴉が眉を顰めた。

「随分と愉快そうだな？ どうかしたのか」

「小生が如き雑兵から、あの方の御深意など分かるものか」

「つまりお前さんは何も知らないと?」

「貴様のその発言は、あの方を知らぬから言えることだ。小生たちですら、何を知つていて何を知らぬのかを知らぬ。全てを動かすのは彼の方だけだ」

「何だ、それ……どういう——」

次の瞬間、真子が真上に引つ張られた。

靈子で足場と流れを作つて体を動かした滅却師が、一気に二人の頭上へ舞い上がる。

身体を捻つた彼が、縛られた手を寒鴉達の方へ向けると——そこには矢を番えた短弓が握られていた。

「手エ放せ、真子ッ」

「くそっ」

鋭い一矢を居合で弾いた真子の態勢が崩れる。足場を踏み外したかのように真つ逆さまだ。そして当然、その下には依然として蟻地獄が口を開いて待ち構えている。

咄嗟に寒鴉が平子の真下へ自身の靈力を集中させた。

「くっ——断空——」

寒鴉が真子の真下に断空を張る隙に、もう一矢が寒鴉へ向かう。避け切れないそれを片手で無理やり弾いた彼は、もう片方の手を滅却師へと向けた。

「破道の四・白雷!!」

一条の光が滅却師の心臓を真つ直ぐに貫いた。

彼の口から夥しい量の血が溢れ出る。

『志波寒鴉に見つかつたら、すぐ撤退してね。ちよこつと向こうの戦力を削れたら嬉しーなーくらいの作戦だから、無理せず退いていーからさー!』

主の指示を思い出しながら、滅却師が重力に招かれる。

『君らも大事な戦力だよ? 早めに戻つて、明日に備えてね』

トツ……

「咲、さま……言いつけ、を、護れず……もうし、わけ、ありません……」

砂の海に落ちた彼は、静かにそうつぶやいて涙しずんでいった――

## 第十九話 長いヨル・後編

天幕張りを中止させられ、惣右介たちは山の麓で待機させられていた。

滅却師の霊子光を探知できるよう、灯も燈さず集まっているが、ざわざわと不気味に木の葉が揺れる音は彼らをひたすらに不安にさせていた。

「待機つて……一休いつまでなんだろうな？」

隣に座りこんでいた竜太郎が、堪え切れなくなったのか呟いた。

「夜襲に備えてるんだと思うよ。此方は地に疎いからね。あんなに野営地に向いた土地は警戒してしかるべき、というのが隊長の御判断なんだよ」

そう惣右介が答えた直後、地面が大きく揺れた。自然発生の地震かと間違うほどののだ。周りの樹は太いせいにか折れそうなものは無かったとはいえ、ギシギシと悲鳴のように低く軋んで一層辺りの不気味さを煽る。

「地震……!!」

「いや、こりゃあ隊長の術だな。何だつけ、せつばほう？ とかつてやつ」

四大貴族には、長い歴史で培ってきた秘術や秘儀というものがあるのだと聞いていた。四楓院家が隠密歩法四楓ノ型、志波家が石波法という術といった風に。石波法と

は、簡単に言えばあらゆるものを砂状に変える術で、使いどころが難しい分嵌れば凄まじい力を発揮するらしい。

大規模に展開されただろうその術に沈む滅却師を想像して、惣右介は顔を顰めた。

「また、死んでしまった……」

「戦なのです。当然のことではありませんか」

窘める様な口調で、後ろに控えていた同じ班の神崎が言った。他のメンバーを振り合えると、各々賛否両論という面持ちだ。

「とはいっても、やはり人間を手に掛けるのはいただけんだらう」

「“人間”と大別するのがいかんだ。奴らは虚を消し去ってしまう異能者だらう?」

「こちらにも酷い怪我を負わされた者が何人もいるわけですしねえ。当然の報いかと」  
「死神に手を出したのは確かに許し難いが、彼らとて自衛のための手段を取りだたされては堪らんかったのだらう。同情の余地は大いにある。————十席はどう思われま  
すか?」

班員の視線が惣右介に集まる。

正直に言えば、惣右介の腹は決まってなど居なかった。

僅か二十日で始まってしまったこの戦いにすぐ割り切れるほど、彼は大人にはなれなかった。

同胞を殺す虚を狩る滅却師を止める権利など、死神には無い。

虚を滅却し、世界の均衡を破る権利など滅却師には無い。

されど死神が滅却師を止めねば世界は壊れる。

虚を滅却さなければ滅却師は仲間を護れない。

この世界のシステムは、こうも火種を孕んでいる。

誰も、傷つきたくない筈なのに。

傷つけたくない筈なのに。

死にたくなど無い筈なのに——

彼は息を一つ吐くと、微笑んだ。

「班長、そして席官という立場上、僕はこの件について安易に意見できないんだ。すまない。されど、どんな意見があれば一度降った命は完遂する。それが僕らが此処に居る理由だ。皆もそれぞれ思う所が有るだろうけれど、今は任務に集中しよう」

“応!!”と皆の声が揃った。

声が大きいと叱られ、五番隊の席官に叱られてしまったのは御愛嬌である。

「隊長！ スンマセン、お怪我は!!」

「あー、火傷くらい？ 真子こそ大丈夫か？」

翻つて五番隊野営地跡。

先程の矢を払つた手を振りながら寒鴉が笑つた。

パツと見ただけでも、結構酷い怪我なのが分かる。相当な熱量を宿した鏃が抉り、焼いたのである。寒鴉の掌は、血が滴つてこそいいものの紅く、黒く染まっていた。いつそ怒つてくれた方が気が楽だなどと柄でもないことを考えて伏し目がちに真子は頭を下げていたが、そう間も無く勢い良く顔を上げて他の隊員達が身を潜めている方へ身を向けた。

「すぐ四番隊のモンを呼んできます。待つとつてください」

「ありがとな。でも気を付けろよ？ さっきの滅却師、ここらの靈子を結構がつつり使つたらしい。足場の靈子が足りねえかもしれねえ」

「ああ、やからさつき俺は……」

言われてみれば、確かに靈子が薄くなっている気がする。自身の観察不足のせいで足場を作り損ね、拳句隊長に怪我をさせたことを自覚して、真子は再び歯を食いしばった。「術も解いとかねえとな。うっかり誰かが落ちたらシャレになんねえ」

笑いながら寒鴉は、無事な方の拳を軽く真子の頭に当てた。

「反省も後悔も、ゆっくりしっぴかりやりやあい。自分で四番隊んところ行ってくるから、落ち着いてから合流しろ。偶には隊長っぽく指揮しておくぜ」

「……スンマセン」

「いいってことよ！」

「まア、本来はそれが在るべき姿なんやけどな」

「ン？ 何か言ったか？ キコエネエナ」

おどけながら瞬歩で消えた隊長の気配が遠退いたのを確認すると、真子は自身の頬を思いつきり叩いた。真つ赤に染まった紅葉が頬を占める。

「取り返すでエ！」

張り上げた声は夜闇に溶けてゆき、やがて静寂が彼の周りを包んだ。

「淡ちゃんたちは？」

「まだ帰還しておりません……」



「……そっか。分かった。帰れない方向で練り直さなきゃね」

「不甲斐無い甥で申し訳もございません、咲様」

拳を握りしめて頭を下げる男性に、咲秋が微笑んだ。

「そんな事無いよ。彼らは十分役目を果たしてくれた。連くんも休んでおいで」

「渾名で呼び合い、部下の不始末に処罰もしない……馴れ合いがお好きなようですねエ」  
戸の方から二人の方を横目に見ている男が立っていた。口元に浮かんだ歪んだ笑みは、二人をあざけるような含みを持って言葉を放った。

それを聞くや否や、反論しようとした咲秋に跪いていた男——連くんこと連蔵——が殺気を放ちながら立ち上がりかける。咲秋が片手を挙げて制止しなければ、殴りかかっていたことだろう。制止を余儀無くされた連蔵が手を握りしめた。

「咲様……」

「連くん、甥っ子がいなくなつて辛いだろう。部屋に戻つていいよ」

「しかしっ!」

「うん、分かつてるさ」

微笑んだままの咲秋が、戸の男の方へ視線をやった。

「ココの主は僕だ。文句があるならはつきり言つてくれるかな」

「此処がどうだろうが知ったことはないですよ。我らの主は佐伯禅治郎様唯御一人。あ

なたに従う気はありませんという事をお伝えしておきます」

「それは、禅ちゃん側に付いてた子たち皆かな？」

「勿論。初日から失敗を犯す足手纏いに従っていては、命が幾らあつても足りませんか  
らねエ？」

「言わせておけばッ！ 咲様は——」

「ふふっ！」

思わず、といった風に笑みを零した咲秋に、二人の視線が集まる。薄く開かれた彼の瞳を見た連蔵が顔を伏せた。その頬に冷や汗が伝っているのに気付かないもう一方の男は、咲秋への挑発的な姿勢を崩さない。

それを意に介さず、笑みを隠すかのように口元に手を添えた咲秋が、ゆっくりと首を傾げた。

「『失敗』？ ——まさか。そんなことだから禅ちゃんの所はいつまで経つても進歩が無いんだよ♪」

「貴様っ」

「目先の勝利にばかり拘って、先が見えてないんだ。戦うために戦う君たちは、生きるために戦わざるを得ない獣より劣る」

「我らを侮辱するか!!」

怒りに任せて部屋に踏み込んだ男の喉元に咲秋の手が添えられる。

彼の動きを目で捉えられなかった男がゴクリと喉を鳴らした。その喉仏のどぼとけを、咲秋は焦らすように、煽るように、或いは愛でるように指でなぞった。一見すると弓を引けるのかと疑問に思うような細く長い指は、その嫺やかな見た目にそぐわず確かな引力を以て男の姿勢を縫い付ける。

「ソレ、態々確認すること〜？ ふふ、あと一つ言っておくとオ——」

咲秋の手に力が籠る。取り込む空気の減少を、男の心臓が訴えている。だが男は歩も動くことが出来なかった。咲秋の視線に射竦められた彼の身体は、一切の行動の自由が小刻みな震えによって奪われてしまっていたのだ。

一方の咲秋はというと、先程から全く崩さぬ笑みを張り付けたまま、その顔を男の耳へ寄せた。

「自分が怒るくらいなら、仲間仲間にそんなことしちやダメだよ♪ 罵られて喜ぶような変態はここには居ないからさ☆ あっ、でもでも、他人の性癖に口を出すのはあまり良くないね。うん、僕の庭で目障りなことしないでってちゃんと言わなきゃだったね〜。ごめんね？ 此処の主人は僕なんだ。他に文句があるなら、此処での決め事を教えてあげる！ ——もう無い？ ならまず、連くんに謝ろっか♪」

一気にそう捲し立てた咲秋が男を軽く突きながら放した。尻餅をついた男が荒く息

をしてている。

「もつ、もうし、わけッ、あり………ません」

それを見降ろした咲秋は、脂汗を流して瞳に恐怖を宿したその男に、微笑みを一層深めて言った。

「分かってくれて嬉しーよ！ ああ、あと、さつき君が言ってたことだけど、別にいーよ？」

「………？」

「禅ちゃん所の軍は、預かつてるけど好きに動いてくれていい。僕は君らに興味ないから」

優しい気な笑みを浮かべる口元から発せられた言葉に、男の背筋が凍りついた。

「つい先程”仲間”などとほざいた貌カオのまま、咲秋はその瞳に、男の事を”兵”としての価値すら見出していない——冷たさすら感じさせない無を荒涼と湛えていた。

—— // 黒崎こ咲秋の男に見捨てられてはならない”

ある種本能的にそれを悟った彼は、咲秋に跪いて頭を垂れた。

「ご、御冗談を。我々は貴方に対する認識を誤っておりました。それが分かった今、反発する理由は在りませんっ！ 我らは貴方の指示に従います！」

「そ。じゃあ十五分後に広間で作戦会議するから来てね。遅れちゃダメだよ？」

逃げる様に部屋から出た男を呆然と見ながら、連蔵が嘆息した。

「彼にあそこまで言わせるとは……流石です、咲様」

「禅ちゃんとは実力行使が一番早いんだよねえ。勝手に動かれると内部崩壊するくらい勢力だつて自覚が無いから困っちゃうよ。まー、そこが扱いやすい所ではあるんだけどさ」

二つの派閥を合わせ、三つに割いても咲秋と宗弦の手勢の半数以上が元々禅治郎に賛同していた者達となつていた。彼らは二人のことを「死神に対して日和つていた腰抜け」と下に見ているものが多く、扱いに困つていたので。

（それが服従を宣言した。ああいう手合いは、一度言つた言葉を絶対に撤回しない。本当に、淡ちゃんはよくやってくれたよ）

平伏している目の前の男の甥のことを思い出して、咲秋は微笑んだ。

今回死神の野営地を襲撃する指揮を執つた淡ちゃんこと淡一たちが失敗すれば、彼らは必ずそれを指摘しに来る。淡一たちが生存して戻らなければ、猶更だ。そこを締めれば、彼らは咲秋の手足も同然となる。

そして、強襲隊がこれほど早く倒されたとなると、こちらへ向かっている部隊は相当

な手練れのようだ。それが分かったのも収穫といえる。いくら閣ハツシユヴァルト下の勅命とはいえ、一方的にやられる事態にはしない方が良好だろう。もうちよつとちやんと作戦を考えないといけない。

——さてさて、どうしたもんかなあ。ああ、そういえば、僕からの贈り物はちやんと届いたのかな？

作戦案のいくつかを頭の中で思い返しながら、咲秋は自室へと足を延ばす。その道中、通信機の呼び鈴が鳴った。相手が誰かを確認することなく、耳元にそれを添える。

「もしもし！ ……うん、ホントにありがとう！ 急にゴメンね。でも助かった！ ……うん。それは明日ね。はいはい」

通信機を耳から離れた咲秋は、深いため息を吐いて再び歩き始めた。

新月近い夜。

闇深い静かな廊下は、彼の思惑も疲労も何もかもを塗りつぶしていった。

「隊長、それ何です？ 花？」

寒鴉の懐から花が一房覗いていた。それを何とも言えない顔で真子が見ている。

「隊長が花で……似合わないア」

「なにおう！ でも何だ？ こんなもの入れてねえぞ」

その花を抜き出して、寒鴉は血相を変えた。

「隊長？」

「この、花は……」

志波家の女中に、りょうという女性がいるのは前述のとおりである。

彼女は花言葉というものが気に入って、日ノ本に自生するモノから海外のものまで、気に入った意味のものをよく覚えていた。

寒鴉は花自体に興味は無かったが、りょうがあまりに面白そうに話すものだからよく聞いて、幾つかは覚えていた。懐の花もその一つだ。

『寒鴉様、寒鴉様！ 御覧下さいまし！ これは“じにあ”と申しまして、花言葉は“不在の友を想う”というのだそうでございます。とても素敵な花言葉でしょう？ しかし、もう一つの意味は——“注意を怠るな”。なんだか、浮気に敏感な新妻が付けたような意味ですねえ』

彼女はそう不敵に笑って、その花を幾つか庭に植えていた。今手元に在るモノと同じ——見紛う筈もない。確かこれは、その辺に自生しているような花ではない。態々入手

し、リスクを冒しながら敢えて寒鴉の懐にこれを潜り込ませた……そうとしか考えられない。

茎を握りしめてそう伝えた寒鴉の手元を覗き込んで、真子が首を捻った。

「なんや意味深な花やなあ。嫌がらせのつもりやろうけど、えらい分かりにくウしてきて……普通知らんやろ」

「ああ。ホント性格悪い相手だぜ……俺が花言葉を知ってるって相手側は知ってるってことだ。気持ちワリいな」

顔を顰めた寒鴉の顔を真子は見つめ直した。言われてみれば、そのような情報を得ているという可能性は大いにある。そして、そんな——言ってしまえば些細な——事実を握られているという事は、それ以外の情報もかなり知られていると考えるべきだろう。

「御忠告、有難く受け取っておくぜ。——ったく、やり難いな……」

野営地候補を潰されて森の中で野宿せねばならぬ今、このメッセージは、ハツタリだろうがそうでなからうが寒鴉達に確実に圧を与えていた。今までで一番長い夜だったと後に真子は語る。



目を開くと其処は、思わず声が出そうになるほど懐かしい場所だった。

「先生の……家……」

何年も通い詰めた木造の家が目の前に佇んでいる。周りを見渡すと、マソラの家だけではない。ご近所も、通日も、道の脇の木まで——何もかも思い出のまま其処に在った。違和感といえ、誰の気配も感じないこと。生き物の居ない道を、風も音も無い静謐さが揺蕩っている。

『そのとーり！ クク、懐かしい？ 帰りたい？』

静けさを引き裂いて、彼の後ろからくぐもった声を通る。

咄嗟に振り返り、そして落胆した。

——帰ってきたわけではなかった……

相も変わらずアベコベな服を着ている惣右介の斬魄刀が、向かいの家の窓からこちらを覗いていた。クスクスと癩に障る笑い声で妖しく肩を揺らす。いつも通りの挑発的なその姿勢には触れず、惣右介は再び目の前の木造建築へ向き直った。

「……ハハハッ」

『寂しいアンタの気休めになればと思つて、アンタの世界を弄つてみたのさ。そうトゲ

トゲしないでおくれよ』

「僕が苛立っているのは君がいるからだ。僕の魂の一部なら、どういふ事が苛々するの  
か分かるだろ」

『それは買ひ被りつてもものだよ！ 現にアンタだつて私の気持ち分からないでしょ？  
お相子さ』

そう言つて再度笑つた斬魄刀を無視して、先生の家を開く。

懐かしい匂い、懐かしい配置、懐かしい――

一歩家に入ろうとして、床が抜けた。

いや、正確に言うなら床は動いていない。

ただ、地面などまるで無いかのように、脚がそこに吸い込まれていく。

「うあッ、あああああああああッ！」

突然の浮遊感に全身が警鐘を鳴らす。

目の端に映つた何かに咄嗟に手を伸ばすと、落下は止まった。

『クツクツク、絶叫とは余裕だね。面白かつたかい？』

伸ばした手の先には斬魄刀が、同じく手を伸ばして惣右介の手を掴んでいた。そつと  
足元を見ると、いつもの絶壁の足場の無い方に自分がある。

“落ちる”と思つた途端、自分の身体が重力に引かれ、斬魄刀の腕が下に下がった。

『つと、危ない危ない。駄目だよ、我が主。此処での主導権はアンタと私で半々なんだ。アンタが落ちると思つたら落ちるし、落ちないと思つたら落ちない。そういう場所なんだ』

そう言いながら斬魄刀は片手で惣右介を持ち上げると、床のある方へ放り投げた。

強かに腰を打つて悶絶していると、斬魄刀は馬乗りになつて惣右介の顎を片手で無理やり仮面の方へ向ける。

『全く……苛々してるのがアンタだけだと思う？ 前、言つたよねえ？ 』急ぎなよ

『つてさ。なのにアンタはチンタラして……』

僅かに力の籠つたその手を顎で払い、惣右介は睨みつけた。

「だから悪戯してやった」、か？ 度が過ぎている。危うく死ぬところだ」

『……ツクツ、ハハハハハッ！ 』精神世界で死ぬ！！ ククツ、愉快な事を言うねえ。

ケツサクだよ！』

言われてみれば、精神世界に入ったまま死んでしまったものなど聞いたことが無い。

卍解の錬磨中に命を落とすという事も（そもそも具象化まで行けるものが少ないという事もあるが）ほんの僅かな例しかないのだ。それも、現実世界にて負つた傷が元なのだから、夢現の状態でどうやったら死ぬのかという斬魄刀の問いは当たらずと言えど遠からずだった。

意識の集合体であるここでの体が完全に喪失してしまえば、精神の死が訪れるのだろうが、惣右介の世界で惣右介が死ぬという事は殆どありえないのだろうと斬魄刀の反応を見て惣右介は思った。

……頬を真っ赤に染めながら。

「くっつ」

『ククツ、もう時間だ。やれやれ、アンタは資格不足だから気が急いでいけない。ヒントはあげたよ。じゃ、〃急いで〃ね』

パチン

掻き消えた惣右介の姿があつた場所を見つめながら、斬魄刀が独り言ちる。

『嗚呼、しまったなア……こんなに愉快だったことは初めてだ。——いけない。いけないよ。私にそんな資格は無いってのに。なア、そうだろう？ 我が主よ——』

惣右介に乗っていた状態から座り込むような姿勢になつていた斬魄刀は、両腕を抱えて俯いた。

『此処は、独りで居るは広すぎる。愉楽の後には猶の事。嗚呼、やはり呼ばねば良かった。お節介など焼かねば良かった……』

そう言いながらも、本心は半分も入ってはいないとソレは自覚している。主を呼んで後悔しているのは本当だ。けれど、お節介を焼かずにはいられなかつたのも事実。才も

靈力も在りながら自分を使うことなく戦いに身を投じる彼の姿は、形容しがたい感情をソレに起こさせた。

——結局、私の覚悟もまだ定まりきっていない……ということか。全く、斬魄刀とその主は、残念なくらいに似てしまう……

自嘲気味に唇の端を釣り上げたソレは、一転して空を仰ぎ見た。

二十日以上続く曇天が視界を覆う。日を追うごとに重く暗い色合いになる雲は、今にもこちらへ落ちてきそうだ。

精神世界における天候とは即ちその世界の主人の深層心理。主人たる惣右介が憂い、迷い、絶望していけば、悪化していくのは自明の理だ。その事実を知っていたソレは、聞こえもしないのに諭す様な口調で言う。

『私は曇天が嫌いじゃないよ。そうやって女々しく悩むところも、アンタの長所さ。だけれど……嫌な予感がするんだ。この雲がうっかり雨を孕みやしないかと気が気じゃない。アンタは、違う……？』  
応えは無い。

当然の事ではあったが、胸に宿った微かな痛みを紛らわせるよう着物の胸のあたりを握りしめた。

地面に付いてしまった長い髪の毛の端が躍る様に持ち上がる。

何処から吹いたのか、肌寒い風がソレを通り過ぎていった——

## 第二十話 錯綜するオモワク

「以上が八番隊、及び十三番隊の被害報告となります」

「はいよ。ご苦労さん」

一礼して去っていった隠密機動を見送ると、寒鴉は溜息を吐きながら振り返って面々を見渡した。

「どこもかしこも、って奴だな……」

顔を擧めた寒鴉は、報告を思い出して再度溜息を吐いた。

昨晚、襲撃が有ったのは寒鴉率いる五番隊だけではなかった。ほぼ同時多発的に、全隊の野営地が襲撃されたのだ。

特に八番隊には、佐伯禅治郎が直々に乗り込んできて、荒らすだけ荒らして退いたらしい。お蔭で食料や医療物資がかなり駄目になってしまったのだとか。

『いやね、夜襲があるカモとは思ってたんだけど、まさか大将が乗り込んでくるとは思わなくてねえ……一本取られちゃったよ。ボクが出た時には奴さんやつこ退いてたしね。手際の良さに拍子抜けしたくらいさ。もしかしたら、彼は結構やり手なのかもしれないねえ』

『うちは五番隊同様、少人数が襲撃してきたただだった。一般隊員には少々きついけど、席官レベルなら対処可能な戦力だったぞ』

京楽と浮竹の言を思い出しながら、寒鴉は腹の底に重く暗い不安が沈殿していくような、気色悪い感覚に包まれていた。

——大前田君の報告では、佐伯つて奴の性格はもつと短絡的、直情的な印象だったんだが……

“短期決戦”——それが京楽の決定だった。

総隊長からの伝令も理由の一つではあるだろうが、持久戦を避けたのは寒鴉と同じく嫌な感じが他二人もしていたからだろう。

珍しく難しい顔のまま、寒鴉は周りにも見えるよう地図を覗き込んだ。

「隠密機動からの報告によると、敵の本丸が此処。俺らから本丸を護る壁になる様につほどの拠点があるらしい。はてさて、どうすつかなあ……」

「半数をその拠点に引き付けて、残りで本丸叩くんが定石ちやいますか？ 兵数的にこっちの優位は変わらへんのやし」

真子の意見に他の班長達が頷く。だが、一人が片手を挙げた。

「……いえ、拠点を先に押さえるのがよろしいかと」

優男でまだ若そうな面差し青年が控えめにそう言った。



一番隊から預かった二班を纏める藍染惣右介だ。

「兵数差が在ろうとも、全軍を包围されると我々の勝率は確実に落ちます。惹きつけていた拠点が万が一こちらの兵を破った場合、囲まれれば全滅も有り得ます」

「しゃーけど京楽隊長の決定は短期決戦やる？ 拠点潰してからやつたらえらい時間かかるかもしれない。それに言うたやろ、兵数差から見てもこつちの優位は変わらない」

「持久戦と比べればどちらも似たようなものです。それに、〃万が一〃を避けるためにも申し上げました。念には念を入れておくに越したことはありません」

〃そこまでする必要はあるか？〃とか、〃いやしかし、藍染十席の言う事にも一理ある〃とか議論が巻き起こる。

黙って聞いていた寒鴉の脳裏には、黄色い花卉が一枚ちらと過った。

〃注意を怠るな〃

誘導されている感はビシビシする。

だが、注意しておくに越したことはないだろう。

「おーし、分かった。作戦はこうだ！」

寒鴉が説明すると、〃そんな雑な……〃みたいな目で一番隊士勢が寒鴉をジト見した。だが詳しく説明して理解してもらえたらしい。

準備に散って行った班長達の瞳は、闘志に満ち満ちていた。

『で、禅ちゃん。何か僕らに言う事有るよねえ?』

通信機から咲秋の笑みとも怒りともとれる声が聞こえる。理由に大方の予想がついていた宗弦は、通信機に拾われぬよう小さく息を吐いた。

『……成果は上げましたし指示通り退きました。文句がありませんか?』  
『僕が一番最初に出してた指示は何だったかな、そーちゃん?』

幾つかあるが、求められているものは一つだろう。

「〃大将は持ち場に待機〃だ」

『そのとーり! そして禅ちゃん、君は今日の子の刻、何処に居たかな?』

『……狩りです』

『ワイルドだねえ、自由だねえ! ——それで?』

通信機越しに、二人の苛立ちが伝わって来るかのようだ。

昨晚遅く、突然咲秋から一報が入った。

曰く、〃死神の陣に夜襲を仕掛ける面子を揃えられたし。されど五、六人で構わない  
〃 というもの。

相手の精神的圧を増す嫌がらせをゲリラ的に行うのかと面子を揃えたあたりで、もう  
一報入った。

〃 十分後に出陣されたし〃

——そこで、大体どういう感じの事になつてゐるのかは察しがついた。

元々、咲秋は夜襲を仕掛けるつもりではいたんだらう。

だが、大将首がそんな中に入るなんてことは普通有り得ない。軍を掻き集めた時点で  
兵数差があるのだから、夜襲を実行する人員がどれだけハイリスクかなど馬鹿でも分か  
る。

そして大将首には大馬鹿者が混じつていた。

禅治郎が飛び出したのだと分かった。

死神の最も大きな本陣に突っ込んだのだらう、と。

彼は猪突猛進タイプだから、引き際など考えていない。そして、咲秋達が説得するの  
にも時間が要るのは容易に想像できる。

だから取り敢えず死神同士の情報を攪乱するために、禅治郎と同じタイミングで敵陣  
に強襲を掛けた。付け焼刃の時間稼ぎ。されど戦略上、この時点で禅治郎が死ぬことで

総大将でないといふのは百害あつて一利なしというものだ。何としてでもそれだけは防がねばならなかつた。

……という事を理解してほしい咲秋と、本能と直感で動く禅治郎。

よくもまあ今まで問題が出なかつたものだと言つて宗弦は苦笑を禁じ得なかつた。

『禅ちゃんさあ、もちつと色々考へて動いた方がいーよ？ 禅ちゃんが戦う事になる』

『京楽春水』は、いつも君が戦つてゐる虚なんかと比べるのも恥ずかしいくらいに死神なんだからね？』

『……………分かつていますよ。留意しています』

『はあ……………これだから戦闘<sup>ク</sup>経験<sup>ソ</sup>の浅い奴<sup>キ</sup>は嫌なんだよ……………』

思はず漏らしたのだらう咲秋の本音に禅治郎が反応するよりも早く、咲秋は続けた。

『死ぬのは勝手だけど、それは今じゃない。どうせなら大舞台で——明日起きる大将同士の死合いで散つてよね』

『なツ!! 黒崎、貴様——』

『明日? 随分と事を急ぐんだな』

終わらない議論が始まりそうだったので宗弦は話を振変えた。

『うん♪ 禅ちゃんのせいで死神側の損害が結構出たからね。向こうは補給し放題だ』

けど、あまり手間取るのを是とはしないだろうから』

「我々にも、か」

『そう考えるべきだね☆』

「じゃ、決戦は明日って事でヨロシク♡」と言って咲秋は唐突に回線を切った。続いて何も言わずに禅治郎が。部下に当たっていいないと良いが……

宗弦は深呼吸して、再び咲秋に回線を繋いだ。

「……………咲秋」

『ヤッホー、そーちゃん♪ 掛けてくると思ってたよ！ な〜に？』

「……………禅治郎にあそこまで言う必要は無かったろう」

僅かに笑う吐息が聞こえる。

『あれでいーんだよ！ あそこまで虚仮にされれば、禅ちゃんは意地でも京楽春水を叩き潰しにかかるだろう。それでこそ時間稼ぎになるってものさ。敵は敵で、禅ちゃんを見極めるために多少ギアを上げながら戦うはず。丁度いいでしょ』

「京楽がそうやって戦うという情報は、事前の資料には無かった筈だが」

『あれ、そーだっけ？ うっかりしてたな〜！ 安心して！ そーちゃんの敵は本当にあれしか情報が無いんだ。なにせ病弱で殆ど出撃しないらしくって』

暗に色々と含ませながら咲秋が話すのを聞きながら、宗弦は苦し気に顔を伏せた。

——やはり、お前は……

咲秋は、“そういう所”のある奴だ。

剽軽に振舞い、部下に分け隔てなく接するが、自分に不要と判断すればあっさり捨てる。禅治郎がいい例だ。この戦いで奴が生き残ろうが、恐らく咲秋は奴を殺すだろう。最早彼は使い捨ての駒に認定されてしまった。

それはもういい。どうせ自分が何を言った所で咲秋に心変わりなどさせられはしない。

悔しいのは、矢張り自分は何処まで行つても“使える駒”でしかないのだと痛感してしまふ事だ。捨てられるのが怖いだなんて言うつもりはない。戦場に於いて取捨選択を行うのは当然の事。自分が死ぬことで百も千も救えるのなら、喜んで捨て駒にもなろう。だが、そうやって切り落とし続ける先に咲秋が何を見るのか——それが不安でたまらない。崖の上で綱渡りをするような幻視をしてしまふ咲秋が、もしふらついた時に支えになるものが手元にあるのか……欲を言えば、自分がその杖になつてやりたかった。切れすぎる頭で、幾度彼は絶望したのだろうか。考え過ぎる頭で、幾度彼は悲しんだのだろうか。他人の気持ちを完全に理解することなどできはしない。けれど少しでも軽く、そして反対の正の気持ちを少しでも増やしてやることくらいは出来る。

“僕は、叶えたいんだ——とつてもとつてもささやかな、僕の一つの願いを”

あの時——死神の宣戦布告を受けた後、奴はそう言った。

「今のそーちゃんには、ここまで」、とも。

私はいつまで待てばいい？

分からない。

分からないんだ。

それを問わず、お前に流されるまま漂った先で、真にお前の救いは有るのか？

『——そーちゃん？ 聞いてる？ おーい』

呆つとしていた宗弦は、咲秋の声で意識を浮上させると顔を上げた。

「……ああ。なあ、咲秋。お前は——何のために戦っている？」

『えく？ 唐突だねえ。うーん、何のために、ねえ……』

数瞬の後、やけに明るい声が通信機から零れた。

『未来の為、かな』

「……未来」

『え、あ、うん。ナニコレ超恥ずかしい……何？ 何でそんな事訊くのさ？ そういう

そーちゃんは？ ……………ねえねえ、聞いてる？ そーちゃん！』

そうか……

ちゃんと未来さきの事を見ているんだな。

「なら、いい」

それさえ知れば、今はいい。

『ふえ？ いや、質問の答えになってないんだけど』

何を見ているかは知れないが、目指すべき何かが咲秋に見えているのならそれでいい。キレ過ぎる刃が宛ても無く彷徨うこと程危ういものはない。

もしそうだったなら、周りにあるものを切り刻み、傷つけて、虚しいだけの結果しか残らない。

「早々に決着を付けよう。こんな無意味な戦い、続ける必要は無い。だろう？」

『おお!! おく。何かよく分かんないけど、善処するよ』

いつもと同じ、何処まで本気なのか分からない答え。

それでもどこか、いつもより穏やかに宗弦は聞き流した。



## 第二十一話 後悔のサキで

「コイツは……」

竜太郎が顔を歪めた。何事かと惣右介もそちらを見ると、丁度自分が拾われた時からの子供が弓を引いていた。その手は震え、おびえているのが分かる。

「惣右介。命令は……」

「分かつてる。分かつてるよ……」

五つに分かれた惣右介たちは、適宜連絡を行いつつそれぞれの拠点を落とすという選択をした。

ただし、余程事態が動かない限りは、攻略済みの部隊は他の部隊に合流せず、敵本陣へ向かうよう指示があった。

『二部隊合流した時点で、他班が各拠点を制圧可能と判断し次第敵本陣へ突入する。卍解で一気に落とすぞ。ただし、一番隊の奴らは知らねえだろうが、俺の卍解は周りを滅茶苦茶巻き込むからな……少数精鋭で行った方が良いんで、突入すんのは俺、真子、後はまあ臨機応変に選ぶかもしれないねえのが数名、そんだけ。んで、周りに待機してる二部

隊で周囲警戒とか攻略中の部隊の応援とか色々臨機応変にやる感じで』

——雑!!

その場に居た一番隊士は皆そう思った。

五番隊士の方を見ると、特に気にもしていない様子で話を進めそうになっていたのを、惣右介の先輩に当たると、一番隊士が全力で止めた。

こんな指示が横行しているのだとぞつとした彼らが、終戦後総隊長に報告せねばと普段の三割増しで溜息を吐いたことは五番隊には秘密である。

兎も角、攻略速度、安全性共に異議は無いという事でその作戦で行くことになった。

『早い者勝ちだ!』という寒鴉の煽りに、柄にもなくその場の皆が乗り気になったのが惣右介には意外だった。志波寒鴉の引力の様なモノの強さを感じた。

そして現在に至るのであるが、拠点に侵入してからというもの、彼は一抹の不安を抱えていた。

——拠点の滅却師が少なすぎる……

二番隊の報告から予測された人員数の半分も無いのではないかと思わされる様な人数としか、惣右介たちは交戦していなかった。此処から考えられる展開は四つ。

一、二番隊の見積もりが甘く、これが今回の拠点の人員数で合っている。

二、今惣右介たちが戦っているのは此処の拠点の上辺に過ぎず、未だ多くの滅却師

が潜んでいる。

三、・本陣に抱える滅却師の数が予想より多く、拠点が手薄になっている。

四、・拠点の人員にばらつきがあり、此処が偶々手薄だった。

戦闘も行っているならば別だが、諜報専門となつている今の二番隊が敵兵数を感知し損なうとは思えない。兵の移動に関しても同様だ。だから二が最有力候補であつてほしい。一なら尚良いが、あまりに希望的観測過ぎるだろう。三、四であつたら、少々マズイ。というか四であつたら最悪も良い所だ。今回の作戦では、各拠点に均等に死神が向かつている。此処の拠点の様な箇所が幾つもあつて、一拠点に敵兵が群居している場合、其の部隊から包圍網的な今回の作戦が一点突破されてもおかしくない。

そうなれば、本陣を攻めるべく集まつた他の部隊が挟み撃ちを喰らう事になる。

——急ぎ志波隊長に合流して、進言せねば。

そう気を急きながら惣右介は動き、効率を優先して少人数ずつに分かれて拠点の制圧に当たつていたのであるが、目の前に震えてこちらを見上げる少年を見て頭が真っ白になつてしまった。

震えながらこちらを見上げるその瞳は、竜太郎たちに拾つてもらつた時の自分に正しく重なつた。

寄る辺の無い不安を

一人で立つ孤独を

戦場の恐怖を

知っている。

知ってしまったている。

死神を拒絶することに決めたのは大人の滅却師だ。子供たちは関係ない！ もう一度共存の道を——もう何十年もやってきたじゃないか！ それでも彼らは拒絶した！ とつくにそんなことは考慮に入ってる！——早く志波隊長に連絡をしなければ。使うなど言われたがやはり伝令心機が速いか——神崎君たちはどうなっている？——周囲を警戒！ 時間を使い過ぎだ——殺めたくない——命令は殲滅だ。一人も逃すな、と——

僕は、どうすれば……

震えながら惣右介が構えたその時、竜太郎が動いた。

「待て、惣右介」

「邪魔しないでくれ、兄さん！」

「もういい、俺がやる。下がってろ」

静かな声音だった。

剽軽ないつもからは想像もつかないような、低く、落ち着いた声。それはまるで青空

に走った一条の雷。遠方で走る竜の如き光は、静謐なれど見る者に鮮烈な恐れを抱かせる。

初めてだった。

惣右介は、竜太郎が“仕事”をすると今まで見たことが無かった。

当たり前と言えば当たり前だ。虚の脅威が殆ど全く無い土地で育ち、護廷十三隊入隊後は離れ離れの職場。されど惣右介が幼いころから彼は死神で、なんなら出会った時点で彼は何十年も戦ってきていたのだ。惣右介が接してきた竜太郎と今の彼は、ソレがいとも通り。普通の事。

だから忘れかけていた。

その目をしていたのが、紛れもなく“死神”であつたことを――

『何かの間違いです！ 惣右介が、そんな……』

『諦めよ。これは掟なのじゃ』

断片的な記憶。

惣右介を苛み続けてきた父母との別れとは違う。

酷く取り乱してはいるが、両親は健在。死神に斬られる記憶よりも前……という事になるだろうか。必死に訴える母を冷たくあしらつた男は、間違いなく自分を斬つた死神。そして男は自分の方を、あの時と同じ――何の感情もない瞳で見つめていた。

——お二人は、あの死神と知り合い……だったのか……？

刹那そちらに気を取られた惣右介は、竜太郎が斬魄刀を構え直した金属音で意識を現実に引き戻した。

再度竜太郎の表情を見、そして惣右介は新たな胸の痛みを知る。

——兄さんだって、辛いんじゃないか……

先程幻視した死神などとは比較にならない、苦しげな顔をした竜太郎がそこには居た。

そういえば以前、竜太郎に訊いたことがあった。『何故、死神になったのか』、と。

『面白くもない話だぜ？』と彼は笑った後、普段の彼からは想像つかない程空虚な瞳で俯いた。

『センセ達に拾われるほんの少し前、オレの無力で、仲間が皆死んじまったのさ。もうそんなのは嫌なんだ。まだまだオレは力が有るなんて言えねえけど、せめて手の届く範囲の大切な奴だけは護れるように——もう、死なせないために、死神になったんだ』

ニカツと笑ってそう言った彼は、『だからお前も護ってやるさ』と話を締めた。

歯を見せていたのに寂しそうだっ表情を思い出し、惣右介は首を振る。

——護られるだけじゃ、ダメなんだ。

——それで彼が傷ついていては意味が無い。

竜太郎へ一步、惣右介が踏み出そうとした時――

「――ごほ」

「え――？」

竜太郎の胸に穴が空いた。

一瞬間を輦めた彼はしかし、意外にも安らかな顔になった。

重力がとてつもなく小さくなったかのように、緩やかに竜太郎が地に伏す。

一転して重そうに頭を擡げた彼は、悪戯に失敗した時と同じ笑顔を惣右介に向けた。

「……………マズった、な。ハハ」

「にいい、さん？」

「そう、すけ、うし、ろ」

高濃度の霊圧を感じて振り返りながら斬魄刀を振るう。

半ば呆然自失の状態で刃を振るいながら、認めたくない唯一つの事柄を必死に頭の隅に追いやった。

斬れた霊圧が凄まじい勢いで地面を抉る。地面から弾かれた大きな瓦礫が先程の子供の頭に当たり、小さな悲鳴と共に倒れた。氣を失ったのか動かないが、駆け寄る余裕は無い。

「おっと、外しちゃったかあ。人情に厚い奴にはこれが一番早いねえ」

ニヤニヤと下品に笑う目の前滅却師は、余裕の笑みで次の矢を番えた。

その瞬間、目の前が真っ赤に染まる。

「人情、だど!! まさか……」

「その通り! ソレは囷だよ。出来損ないでも少しは役に立つだろう?」

聞かなければ良かった。

後悔と共に押し寄せるのは、身を内から焦がす様な圧倒的な熱量。入り雑<sub>ま</sub>じり熱く黒く変質していく感情が、現実——竜太郎が致命傷を負ったという事実に灼け付く様な輪郭を与えて惣右介に曝した。

怒りでどうにかなつてしまふそうだ。

なんて低劣で、下衆な一族なんだ。

何故世界の平衡を護れない?

何故出来損ないだなんだと簡単に斬り捨てられる?

何故兄さんの様なヒトが死なねばならない?

何故?

「貴様っ……!」

「まっ、この程度の奴ら、囷なんて要らなかつたかなあ?」

超高密度の矢が放たれ続ける。



ヤツの余裕は悔しいが確かに実力相応のモノだった。

じりじりと遠距離から削られ続け、こちらの間合いに入れられない。

——早く退いて、竜太郎を四番隊に運ばなければ。

その一心で焦燥がかり立てられるほど惣右介の集中が荒くなり、隙が生まれていく。

“期せずして”、と言うとあまりに皮肉な言い回しになつてしまふだろう。戦場に於いて敵を攻撃するのは至極当然の事。されど滅却師が射抜いた死神は、もう一人の思考を、動きを、止めてしまふには過分に過ぎた。

惣右介は、未だ始解を修得していない。にも拘らず一番隊で十席という高位を任されているのは、偏にその実力が圧倒的だからだ。死神の戦闘法を司る“斬拳走鬼”の内、斬魄刀の能力を駆使する“斬”のみ剣術に留まつているが、模擬戦などの訓練にてそのバランスの取れた高レベルの戦闘センスは、自身より高位な死神とも互角に渡り合うだけの力を示していた。

斬魄刀の始解とは即ち、個々の魂を形にして反映する千差万別の異能。直接攻撃系と呼ばれる攻撃力重視の斬魄刀から軌道系と呼ばれる特殊な能力が付与されたものまで様々有るが、それらと渡り合うためにはあらゆる事態に柔軟に対応することが必須。知略と技術を駆使して戦闘するに当たって重要な事項の一つは、間合いだ。如何に一撃必殺の攻撃を持つていようと、間合いを取られてそれが当たらなければ意味は無い。逆も

然り。攻撃力が低くとも、相手の間合い外から当て続けなければいずれば大きなダメージを与えるに至る。如何に相手の攻撃時に間合いを読み、避け、自身のそれに引き込むか。相手の手数によつて変化する惣右介の技術は、席官の中でも群を抜いていた。

今回の戦いでは、数こそ死神に軍配が上がるものの数日に渡つて戦闘が続いている。これは、滅却師達の間合いの長さに苦戦している点が大きい。幾ら斬魄刀でも、結局は刀をベースにしている。間合いは精々近距離から中距離だ。対して滅却師は遠距離以上。懐に潜りこめば斬るのは容易いが、問題はそこまでである。攻撃に於いて確実に先手を取つてくる相手とどう戦うか。

勿論手段はある。“走鬼”にあたる瞬歩と鬼道だ。間合いを急激に詰める歩法の瞬歩と、遠距離に居る敵への攻撃手段としての破道及び縛道。保有靈力量によつてその能力は変わってくるが、惣右介のそれらは当然一級品だ。

しかし現在、彼にはそれらが使えない。

間隙無く放たれる靈矢は、簡単に放つているように見えて鎌の先端が靈子を巻き込むように回転しているため、滅却師と惣右介の靈力差があらうと直撃すれば唯では済まない。そんなものを放置して間合いを詰めると、もし流れ矢が竜太郎に迫つた時に対処できない。瀕死の彼にこれ以上の怪我を負わせるのは即、死に繋がる。かといつて現状維持してはそれでも死んでしまう。

遠距離攻撃の主軸たる鬼道を用いて反撃すればいい話なのだが、この攻撃方法には一つ問題があった。それは、言霊を靈力に乗せるという作業が必要であることだ。言霊によつて自身の靈力に形を与え攻撃の手段とする戦闘法であるため、それなりに繊細な技術。生来性格的に向いていないものが間々いるのはそのせいだ。

端的に言えば、惣右介は今、圧倒的に精彩に欠いていた。集中力の欠片も無い状態。竜太郎の負傷によつて戦闘どころではない程に動揺していたのである。本来の彼であれば、目の前の滅却師など詠唱破棄の三十番台の鬼道で振じ伏せることもできた。しかし現状では、鬼道など練れる筈はない。それどころか、意識の向き様がムラだらけになっていた。

当然、大きな隙を見せることは戦場で即命取りとなる。

一つ、避け切れない矢が目前に迫った。真つ直ぐに自身の頭に迫るそれは、貫通せずとも脳を抉るには十分な威力。

——しまっ……

着物の裾を引つ張られて、体勢がブレる。

そのおかげで矢を回避した。

足元を見ると、竜太郎が惣右介の裾を掴んでニヤリと笑った。

「あと、まかせ、たぞ」

竜太郎の瞳が光を失うのに、秒と掛からなかった。

「任せるって……勝手だ！ そんな、僕を置いて……父と母が見つかるまで一緒に居てくれるって言ったじゃないか！」

嫌だ、だって、僕がどれだけ兄さんに――

『気が付いた？』

景色が変わる。

いつもの空間。

其処は絶壁で、反対側の地面は見えない。

夢で母さんとの最後の記憶が途絶える場所。

今日は一面白化粧で、深々と雪が舞っていた。防寒などは一切していないのに、寒くもなければ雪が冷たいとも感じない。吐息は白い。不思議な情景だった。

道化の仮面をかぶった、男とも女とも分からない不気味な斬魄刀の本体が正面で斜に構えて立っている。大仰に首を傾げ、手を広げて促すようにこちらに向けていた。不思議と今は、ソイツに対してそれ程感情が動かない。

『ねエ、気が付いた？ アンタの最後の鍵。このままじゃ負けちゃうよ？』

「鍵……」

『そう。私はアンタの魂の一部。アンタが自分を理解してなきや、私を使ってもらえない。アンタは、どんな人物だい？』

「僕は……」

ここで、前と同じ問答をする意味はない。

何故ヤツは今ここに自分を呼んだ？

直前にあつたのは——

一つの答え。

今彼の胸を最も占有しているもの……

「僕は兄さんに、依存……してんだ……」

声が揺れる。

寒いわけでもないのに、唇が上手く動かない。

本当は分かっていた。

母さんも、父さんも、きつともう会うことは出来ない。

それを分かっている、兄さんにも、先生にも言わなかった。

二人は優しいから、困らせると思った。

——そう、思いこもうとしていた。

違うんだ。僕はそんな奴じゃない。純粹に優しい兄さんたちとは違うんだ。

僕は唯、怖かっただけ。

両親を探すという名目が無くなって、二人が離れていってしまったかもしれない。心のどこかでそう思ってしまった。

一緒に探そうとしてくれるその優しさに甘えて、微温湯に浸かっていただけなんだ。

二人はそんな人たちじゃないって分かっている。——いや、分かっていたつもりだった。結局僕は、何もかも喪つてから……

僕は、卑怯で、独りよがりな奴だ。

目の前の斬魄刀が、仮面の奥で表情を動かしたのが分かった。

『大正解イ！ アンタを独り置いていくななんて、なんて酷いオニサンだろうねえ？

お蔭でこおんなにここの天気は影ってしまった！』

「兄さんを悪く言うな!!」

耳を塞いで俯いた惣右介の隣へ、音も無く斬魄刀が立つ。惣右介の右肩に両掌を添えて、淡々と耳元に言葉を置いていく。

『そろそろ正直になりなよ。私はアンタの魂の一部だつて言つてんでしょ？ アンタが思う事、思ったことが私の思想にも繋がってる。確かに彼は酷いよ。同じ状況なら、アンタ以外じゃあ立ち直れなかつた』

「うるさいッ！」

目の前の斬魄刀の首に手を掛ける。細くも太くもない、特徴の無い首だ。だがそこから伝わる生暖かい温もりは、生きているわけでもない斬魄刀のモノだと思ふと妙に気持ち悪かつた。

「良いからサツサと名前を言うんだ！ あの滅却師を殺す力を寄越せ!!」

『ふふ！ いいねエ、いいよオ！ 意志の籠った素晴らしい目だ！ でもちよつと落ちていてよ。私の力は、〃普段の〃アンタにこそ相応しい』

「どういう……意味だ」

『ククッ！ 知れば解るよ、我が主!! なんなら、全ての滅却師だつて滅ぼせる力さ！ 私の名は——』

「誘え、〈鏡花水月〉」

刀身を逆さまにし、敵の眼前に掲げる。

斬魄刀の形状に変化はない。

何も起こらないのを見て、滅却師は嘲笑した。

「手品でもするつもりか？ 大層な度胸だな！ 悪あがきも大概に——」

「そんな程度の低いものじゃない」

「——何？」

「道化は、所詮道化ということだよ」

直後、滅却師の口元から滝のように紅い液体が溢れ出る。

惣右介が自身の左手を前に出すと、其処には心臓が握られていた。

「……………」

「何が起きたかも理解できないまま、地に伏して死して逝くがいい。君の心臓は、ここに

置いていくよ」

ぐちゃ、という音を立ててそれが地面に落ちた。

惣右介の掲げる腕の先に瞳目した滅却師は、その表情のまま地面に伏す。倒れた弾みで滅却師の血が一筋伸びた。惣右介の後方に倒れる影に向かうのを草履で止めた彼の瞳は、凧いだ水面のように静かだった。



『私の名は、〈鏡花水月〉！ 能力は、始解を一度でも目にしたものにアンタが望むままに物事を知覚させる。完全催眠。言ったでしょ、意思が無きや意味がないって。さあ、アンタは私をどう使う？』

今は単純に、蒼火墜で敵の胸に穴をあけた。

滅却師には、掛けた“完全催眠”によつてその事実を偽装し、棒立ち状態の惣右介を見せた後、掲げた右手に心臓が握られているよう錯覚させた。

あの反応を見る限り、〈鏡花水月〉は機能しているらしい。

……自身の胸に穴が空いた感覚さえ、知覚できていなかったのだから。

「——ッ！！」

眩暈がして立ち止まる。

『そおら、開くよ』

シンと静まり返った室内で、頭の内から笑みを含んだ声が響く。

血、滅却師の気配、死神……

『やっとだね。待ちわびたよ！ 記憶の戸が開く——おはよう、我が主!!』  
三つの要素が、彼の記憶を喚び起こした。

## 第二十二話 失つたミライ

耳障りな泣き声がする。

よくよく聞くと、それは自身の声。

自身の生誕を周りに喚き散らす声。

「無事、産まれました！ 男子おのこでございます」

自分を引きずり出した小さく、されど力強い手から新たな手へと引き継がれる。

大きな手に自分の身体が持ち上げられた。

「これまた珠のように可愛い子じやのう！ 名はもう決まっておるのか？」

その手の先には、どこかで見た男が大層嬉しそうに僕を抱えて笑った。

視線の先には滝のように汗を流し、汗に交じって涙を流す女性が横たわっていた。

彼女の顔は、懐かしい——母のものだ。

「はい。『惣右介』、と名付けました」

「いい名じや！ 大切にのう！」

彼の隣に立ったもう一人の男性——惣右介の父——もまた母と同じく涙を流していた。

父が泣いている記憶はこれが最初で最後だ。

「惣右介、産まれてきてくれてありがとう。ああ、初めて何と言おうかあれ程考えていたのに……いざとなると出てこぬものですね」

そう言つて父は惣右介の頭を撫でた。

竜太郎より小さく、けれど優しい手。

あたたかい

『謁見の間、開門!!』

重厚な戸が開いていく。

その様を両親と共に惣右介は見ていた。

二人はひどく興奮しているらしい。

「ああ、惣右介はなんて幸運なのでしょうね、貴方。ここで生を受けるのみならず、霊王様にまで謁見を許されるなんて……」

「ここで生命が生まれるのは初めてなのだそうだよ。当然のことだ!」

二人が惣右介を抱えて嬉しそうに話す。

戸が開くまでは眠たかった惣右介は、部屋の中から感じる気配で再度覚醒した。なんて大きな……

いや、問題はそこじゃない。

この霊圧は——

霊王とやらの前に来た。

その姿を前に、惣右介は——

気が付くと、自分の様子が大分変っている。

「あら、惣右介。どうかしたの？」

さっきまでは赤子だった。

声はおろか、手足の動きまでおぼつかない生き物だった。

それが今は——

「なんでもありません、母さま！」

動ける。

話せる。

恐らくこれは記憶だ。

赤子の時からこの時まで、記憶が無いわけじゃない。思い出そうとすれば昨日の事のように頭を過った。今までの惣右介からは想像できない程明瞭な過去に戸惑いながらも、懸命に思考を巡らせる。

この姿になったということは、そろそろずっと前から見ていた夢に繋がっていくのだろうか。

顔を上げると、不思議そうに母がこちらを見て首を傾げていた。

「そう？ 何かあつたら言いなさいね。特に今日は大事な日なのだから」

「だいいじな日、ですか？ 何かあるのですか？」

「せんぼく占トじやよ」

「和尚様！」

母が驚いている方へ向くと、赤子のころに自分を抱えた男がニカツと笑って惣右介の頭を撫でた。

「お久しぶりです！ えっと、おしようさま！」

頭を下げると、彼は嬉しそうに驚いた。

「何じゃ、お主、農のことを覚えておるのか！」

不思議に思つて母の方を見ると、彼女もまた目を見開いている。

「お主に最後に会ったのはお主が生まれた時じゃ！ そんなころの記憶があるとう。これは将来が楽しみじゃわい！」

「ありがとうございます！ それで、その……「せんぼく」とは何なのですか？」

「占卜とは、要するに占いのことじゃ。ここ霊王宮は本来、霊王様を守護するために選ばれた魂魄が至る場所。その選定には厳正な基準と審査が為される。じゃがお主はちと特別じゃ。何故か分かるか？」

以前父が言っていた。

「ここで生命が誕生するのは初めてのことだ」と。

「わたしがここで生まれたからですか？」

「応！ 聡い子じゃのう、惣右介！ お主はここで初めて、選定無しに存在するモノなのじゃ。其の性を今日見るのじゃよ。なに、気負うことはない。こ奴らの子じゃというだけで殆ど結果は分かつとるようなもんじゃ！」

豪快に笑う彼を見て、母もまたクスクス笑った。

「寧ろ農らは、どんな魂消た結果が出るか心せんとこのう！」

カラカラと笑っていたその顔が一変したのはその数刻後だった。

『詔、降りてまいりました。ごぞいます。』

彼の子、この世に災いを為す物哉。然る後に輪廻の輪へ戻し、魂を清めよとのこと。従つて五日の後、彼の魂を還します』

母の白く美しい肌が蒼白になる。

いつもなら仄かに紅みをさして艶やかな頬は、その血色を完全に悪くした。

震える母を父が必死に支えている。

「何かの間違いです！ 惣右介が、そんな……」

「諦めよ。これは掟なのじゃ」

「しかし、和尚！」

「諄い。この五日間は慈悲じゃ。惣右介と最後の一時を過ごすがいい。じゃが、変な気を起こすでないぞ。その時は即刻儀を執り行うでの。加えて、これによりお主らには瀕霊廷に下つてもらおう。変更はない」

再び惣右介を見た彼の瞳は、背筋の冷えるほど冷徹なものだった。



惣右介のことを厳正に処理されるべき案件としか見ていない目だった。それを見ても、惣右介は泣かなかつた。

存外怖くなかつたし、変に騒いでこの心優しい両親を一層悲しませるようなことをしたくはなかつた。

そんな彼の心を知つてか、二人は惣右介を見て一瞬とても悲しそうな顔をした後優しく笑つた。

「何も怖いことなど無いよ。私たちがずっと傍に居るのだから」

そしてその日はやつて来た。

今までで一番高価な服を纏い、動きにくさにちよつと苛立つ。

母が健気に涙をこらえている。

父もちよつと危ない。

だが何故か、その理由が惣右介が死んでしまうからではないような気がした。

「惣右介、ちよつとここで待っていなさい」

そう告げて、両親は足早に惣右介を一人残して部屋を出た。

僅かな物音がした後、二人は同じように戻って来た。

父が惣右介の両腕を強く掴んだ。

今まで見た事の無いほど激しい動きとその剣幕に気圧される。

「父さま？ なにかあったのですか？」

「惣右介、急いでここから逃げるんだ！ 私は遅れてちゃんと合流する。母様と一緒に走りなさい」

「父さま？」

「男子なら、泣き言を言わず母様を護れるな？ ちゃんと逃げるんだぞ」

そう言つて彼はきつく惣右介を抱きしめた。

嗚呼、彼は死ぬつもりなのだ。

ここで惣右介たちのために足止めをするつもりなのだ。

それが分かったからと言つて、今取れる選択肢は一つしかない。

ほんの少しそのままの姿勢を続けた後、母に手を引かれて惣右介は建物を出た。

父は、笑っていた。

「惣右介、いいですか、これから行く先で名を名乗るよう言われたら、下の名前だけを答えるのです。決して姓を名乗ってははいけませんよ」

「なぜですか？」

「なんでもです。姓はここに捨てていきます」

今ならわかる。

追手に名を知られてはならない。

全く違う名を名乗るよう言わなかったのは、母の不心得のせいなのか、幼い惣右介にそんな器用なことが出来ないと思ったのか、はたまた父との記憶を僅かでも形にして残しておきたかったせいなのかは、今となってはもう分からない。

たった二人の逃亡者を見つけられぬ神兵ではなかった。

あと少して靈王宮から出るという所で、和尚に見つかった。

いや、出口がここしかないのだから、当然と言えば当然だ。

しかし圧倒的な戦力を前にしても母は気丈だった。

「破道の九十、黒——」

「それはいかんのう」

「ツツツ!!」

靈力を乗せた一言を紡ぐ前に和尚の手が母の口を塞いだ。

「忘れておらんぞ。お主は鬼道の達人。いや、そんな言い方は失礼かのう。」

〃こだまのみこと言靈尊〃

——鬼道の開祖じや。そんな者の黒棺なぞ、詠唱破棄とはいえ一体何人殺める気じや  
?」

ぐいと彼は母の身柄を後ろの神兵に引き渡した。

乱暴に押さえつけられても怯む素振りも見せず、唯々惣右介へ叫ぶ。

「惣右介ッ! 走るのです! 速く!」

「母さま!」

「させんぞ」

刀が振り上げられる。

夢の通りだ。

惣右介が斬られると同時に母が自身を捕らえた手を振り切って駆けてくる。

「惣右介ッ!! しっかりなさい!!」

「諦めんか。可哀相にのう、しかしこれも掟じや」

「嫌です! 惣右介、あなたは生きるのです!!」

母の手に力が籠った。

ポソポソと何かを呟く声がする。

よく聞こえないが、何かの詠唱の様にも聞こえる。

それが終わると、彼女は惣右介の顔を正面から見て泣きながら笑顔を作った。

「必ず、生き延びるのですよ。生きていてくれれば、それだけで私たちの喜びなのだから」

「まさか、お主……止めんか！ それは禁術！ そんな事をすればお主まで手に掛けねばならんようになる!!」

「構うものですか。——〈時間停止〉」

「ここで、いつものように記憶は途切れた。

瞬きの後、場面は変わらないままにそこには現在の惣右介と彼の斬魄刀——〈鏡花水月〉の本体が立っていた。一步も無い間合いに立つソレは、態々屈んで様子を窺うようにこちらを見上げている。

『父の愛、母の愛、感動的だねえ!』

「……………この後はどうなったんだ」

『アンタが覚えてないんじゃないよ。でもまあ、両親は殺されてるだろうね』  
〈鏡花水月〉の胸倉を掴む。

その仮面の奥がヘラヘラ笑っているのが分かった。

『何だよ？ 言つたでしょ？ 私の思考はアンタのモンと繋がってる。ふふ、我が主は冷静だ。こんなに沢山受け入れがたい事実が有っても大して動揺してないね。いいねエ、いいよオ！ そうでなくては!!』

そう言うと、彼だか彼女だかは胸倉を掴まれたまま大きく腕を広げた。

『記憶などなくとも想像はつく。でしょう？ きつとこうさー!』

その場所に、さっきの記憶に居た自分以外の面々が現れた。

母の腕の中には小さな人影もある。

それは一瞬間の後、木箱の中に入った。

「生きて」

母はその木箱を外へ放り投げた。

霊王宮の外への通路は、両親が通るために開いていたはずだ。

恐らくそこに投げ込まれた。

鬼道の先駆けを作ったヒトだというのが本当なら、空間転移当たりの術を使ったのか  
もしれない。

兎も角それは一瞬の出来事。

木箱の行く先を和尚が見下ろす。

「落ちた先は——流魂街かのう？　ならば最早何もできまい。せめて、上手く長らえろよ」

「ちよつと無理が有るだろう。流魂街に落ちたつて、瀧霊廷に入る術はある」

現に惣右介は流魂街から霊術院に入り、死神となつて瀧霊廷に入った。

——霊術院？

『……わかつてくれたみたいだね。頭の回転が速くて嬉しいよ！　その通り！　それは現在の話だつてことさ』

マソラは言っていた。

惣右介は二千年以上前に傷を負つた者であると。

そしてその時には霊術院は存在しない。

惣右介の事件があつた後に出来たのが死神統学院——現在の真央霊術院だ。

それができる前の尸魂界は絶対的な格差社会。

貴族でなければ死神になることも、ましてや瀧霊廷に入ることも許されない社会だつ

た。

『統学院ができたての頃は和尚ってヒトも確認してただろうさ。でもまさか、アンタの母さんの術がこれ程の規模のモノだったとは考えが及ばなかった。今更アンタが戻ってくるなんて想像すらつかなかったんじゃないかな』

胸倉の手を放す。

「想像に、過ぎないだろう」

『勿論！ でも、アンタ自身の記憶まで疑うかい？』

自分が霊王宮の出自であったこと。

掟とやらの殺されかけたこと。

両親が命懸けで自分を護ってくれたこと。

そして、霊王に会ったことがあること。

「疑いたくもなるよ……すぐに信じられる訳ないじゃないか」

『嘘つき。アンタの心の中が私に分からないわけないだろう？ アンタの中にあるのは疑念じゃあない。得心いったと落ち着いているくせに。いい加減認めなよ。きつと楽になる!!』

何故自分がこれほどまでに高い霊力を有していたのか。

何故両親は自分を探してくれていなかったのか。



何故瀨靈廷中を探しても家が見つからなかったのか。

何故石田や佐伯の靈庄に既視感があったのか。

「——靈王とは、何なんだ？　虚や死神の様な靈庄も混じっていたが……ベースは滅却師……なのか」

『アンタが感じたままに言うなら、そういう事になるね。ビックリだよねえ！　千年前に死神が殺し合った一族を王と担いで誰もそれに疑問を呈さないなんて』

「問題は過去に死神と敵対していたことじゃない。あんな一族を——いや、あんなものを王と祀っていること自体が問題なんだ」

同族に何の情も抱かない。

自分達の誇りの為なら何をしてもいいと思っている。

そんな一族。

それだけじゃない。

両親が、いや、あの場に居た惣右介以外の者は皆、水晶のようなモノに封じられた、両手両足の無いナニカに平身低頭していた。崇め、剩え語り掛ける。正直言つて、異常な光景だった。まるで自分だけが別の世界からやってきて、頭がおかしくなってしまったみたいだった。

“王”とはそういうものなのか？

そんな筈はない。

王とは、民衆に崇められるだけの偶像であつてはならない。

崇拜とは結果であり、世界を滞りなく回してこそ得られるものではないのか。

こんな世界が正しいとでもいうのか。

決まっていたことだからか？

保守によつて得られた仮初の平穩が生んだ怨嗟に目を瞑るのか？

掟によつて自身を縛つて世界を回し続けている死神もまた、なんと愚昧なことか。

これではだめだ。

こんなの間違つている。

狂っている。

人間に力はない

滅却師に思考はない

虚に理性はない

死神に自由はない  
なら、一体何がこの世を治めればいい？

——何が……？

ふっ

自分でも辛うじて聞こえるほど小さな音で惣右介は自嘲した。

嗚呼、本当に死神には自由がない。

何故その何れかからしか選べないのか。

こんな世界はいらない。

新たな世界を統べるのは、新たな存在であるべきだ。

ナニモノをも超越したものであるべきだ。

僕は、滅却師の様に他の誕生を待ちはしない。

死神のように停滞したりしない。

僕が——いや、私が——この世界を正さなければ。

皮肉なものだな。

占トによつて災いをもたらすと云われた少年は、それそのものによつて災いをもたらすモノになるのだ。

新たな世界には

——  
私が天に立つ

「誘え、〈鏡花水月〉」

全員の視線が惣右介の斬魄刀に集まる。

全員見た。

次の瞬間、混乱状態に陥りながら同士討ちを始めた滅却師を見て自分の班の隊員が声を上げる。

「藍染十席、これは一体……」

「僕の斬魄刀の能力だよ。流水系の斬魄刀で、霧と水流の乱反射により敵を攪乱させ同士討ちにさせる能力を持つんだ。戦闘中の土壇場で始解に成功してね」

「へええ〜！ そんな事が……」

「さあ、五番隊と合流しよう」

舞う血飛沫を片手で払い、彼はにこやかにそう言った。

## 第二十三話 加熱するセンカ

「参つたね、どうも……やっぱり引いちゃくれないかい」

「当り前です。滅却師の誇りを汚すような行為は出来ません」

佐伯邸最深部。

純粹な戦力と戦力をぶつけた戦いは、ゆつくりと、しかし確実に天秤を死神側へ傾けている。別段戦況に変化が無いことを確認した京楽は、部隊を副官に任せて滅却師・佐伯禅治郎の前へと躍り出た。口元に浮かんだ苦笑と共に佐伯を見遣つた彼は、水面のように静かな瞳を湛えている。

「命あつての物種だと思わない？ 死んじやつたら誇りも何も無いでしょ。流儀に酔つて死に急ぐのは三流のやることだよ」

「貴様ツ！」

殺気を隠そうともしない矢が、桃色の羽織——京楽春水に躲された。その事実——死神風情に自分の矢が躲されたことに佐伯は更なる怒りを増幅させる。

彼の燃えるような激情が殺気を満たし、室温が下がったのを感じた京楽は苦笑した。

「あらら、余計に怒らせちゃったかな？ 困つたね、ど——ツ！」

咄嗟に京楽が避けると、先程まで彼の眼球が在った場所に先程の倍以上の力のこもった矢が高速で通過していった。予想以上の一手に、つうと冷や汗を流す。けれど京楽も歴戦の猛者。その胸のさざめきもほんの一瞬のうちに風へと還し、浮かべた笑みを崩さない。

「しゃべってる途中に目を狙うなんて、陰湿なことしてくれるじゃないの」

「“陰湿”？ 可笑しな事を仰る。流儀に酔って戦いに臨むのは三流のすること”ではなかったのですか？」

「言うねえ」

間合いを詰めようと京楽が死神の高速歩法、瞬歩を使うと、全く同じ間合いのまま佐伯も後ろに下がった。

こう言うのと簡単に聞こえるが、百年以上隊長を務めてきた死神である京楽が行う瞬歩は一級品だ。体術に長けた四楓院家の者ほど幾度も繰り返せるわけではない。最強の死神である山本元柳齋重國程一度に長距離を移動できるわけではない。けれどそれは“超一級”と比べた場合であって、一般の死神や、まして人間と比べた時に次元のレベルで速さが違う。当然小手調べの今は全力ではないが、手を抜いているわけでもない。それに平然と付いてくる佐伯に、京楽は静かに感心した。

「！——驚いたね。人間にこんな速力が出せるもんなのかい」

「無知ですな。我々は滅却師。この程度造作ありません」

「謙遜しなさんな。ボクの瞬歩についてこられる飛廉脚なんて何百年ぶりかねえ」

京楽の表情が真剣なものになった瞬間、二人の姿が一瞬消えた。

バチン

何かが弾ける音がして、再び二人が姿を現す。

京楽は二本の斬魄刀を抜き、佐伯は先程と同じく弓を構えたまま立っていた。

「やるねえ。これにも付いて来られちゃうのかい」

先程の一瞬で、京楽は一太刀目に長い斬魄刀で斬りかかった。佐伯はそれに反応し、太い矢を放つ。反応しただけでも大したものだが、それでも京楽の予想通り、

佐伯の手が次発を用意するより早く京楽が脇差を抜いて佐伯を狙ったその時、もう一方の手で弾いている最中だった矢が自ら分裂して脇差を持つ手に飛んできた。

咄嗟に手を引っ込めて事無きを得たが、あのまま佐伯を狙ってれば二度と脇差を握れなくなっていただろう。命中こそしなかったが、掠めた霊矢が浅くはない傷を京楽の手に引いた。

京楽の手から数滴したたつた血を眺め、佐伯が眉を寄せた。手首を落とし損ねたとも思っているのだろう。反応速度、技術、諸々を考えても、今現在背後で闘っている滅却師と佐伯目の前の青年禪治郎は別格だ。京楽の副官でも相手取るのは困難を極めるだろう。



「滅却師の弓矢は己の手足。そう扱えぬ半端者としか戦つてこなかつたのでしよう。同情しますよ、八番隊の長」

事も無げに佐伯は言うが、極々普通に会話を交わせる距離に二人がいるにも拘らず佐伯が距離を取ろうともしない——それだけで、彼の異常性に京楽は冷や汗を一筋垂らした。

弓というのは、間合いが長距離の武器だ。それは性質上、殺傷能力を持つ矢が遠くに飛ぶからだとかいう単純な理由だけではない。それだけであれば、勢いをそのままに中、近距離の敵に対して矢を放てばいいだけの事だ。だが実戦に於いて、弓のリーチには決定的な弱点があった。

矢の再装填時間だ。

「一対一や一対多など戦い方に依らず、余程の実力差が無い限り、一撃決殺などということはあり得ない。初撃を躲された時、距離を取るのか、はたまた追撃するのかは人に依るのだろう。だが最もやってはいけないのは、攻撃直後の隙を敵に付け込まれることだ。」

弓は一撃打つごとに、次の矢を構えるための時間が必要となる武器だ。だからこそそのとの距離は余裕をもって空けなければならぬし、一度の攻撃ごとに場所を変えるなり身を隠すなりせねばならない。城を護るときなど隠れても仕方のない時も無いことは

ないが、今の状況であればそうして京楽の隙を伺うのが定石だ。

流石にそれが分かっているという事はないのだろう。けれど敢えて中距離を保って京楽の正面に身を晒す佐伯には、絶対的な自信があるという事。

則ち今の京楽の攻撃ならば全ていなせる、と。

「参ったね、どうも……山じいからは早急にこの戦いを畳めって言われてるんだ。だから禅治郎クン、ごめんね」

「今謝るとは……余程貴様は我らを侮辱したいらしいッ！　これは我々の狩りですッ！

貴様ら死神を狩る戦いなのですよッ！」

「そお怒りなさんな」

軽く返した京楽に反論しようとした佐伯だったが、一瞬間の後に顔色を変えると口を噤んだ。京楽の纏う霊圧が、雰囲気が高まり昂まる。

「花風紊れて花神啼き　天風紊れて天魔嗤う——〈花天狂骨〉……遊んでおいきよ。時間あまり取ってあげられないけどね」

始解した斬魄刀を両手に持ち、自然体で立った京楽を見て佐伯の表情が微かに動いた。

「青龍刀……？　と言っても、貴方と同じく面倒な刀なのでしょう」

死神の斬魄刀が始解された時、その力は二つに大別される。

殺傷能力に特化した直接攻撃系と、特殊な能力が付与される鬼道系だ。体現する力は死神使手に依存する。

さればこそ佐伯は、京楽の斬魄刀が殺傷能力が上がっただけではないという事を直感した。

「察しが良いねえ！ にしても青龍刀を知ってるなんて、中華系の武術家の知り合いでもあるの、かいっ？」

「?!」

京楽が今迄以上の速さで佐伯の前に屈んで現れた。

同時に佐伯が弓を番える。

振り上げて佐伯を狙うには随分と姿勢の低いことに彼が違和感を覚えた直後、右足に燃えるような痛みが奔った。

「クッ！ ……何です、これは！」

地面から唐突に生えた黒い刃は佐伯の右足を駆け抜ける。足を庇うように彼の態勢が崩れたのを見て、京楽は容赦なく間合いを詰めた。

「艶鬼イロオニ」

京楽が桃色の羽織を脱ぎ、隊長羽織を露わにする。

「——白」

体勢を崩しながらも京楽の突きを寸でのところで佐伯が躲す。避け切れず彼の肩の上が薄く斬られた——筈だった。

ブシツ

それは血が吹きだす音。

佐伯の肩の上の肉が大きく削がれ、吹き出た血が彼の顔の半分を紅く染める。同時に視界の半分を一時的に失った。

この一瞬が命取りになることが分からぬほど佐伯は阿呆ではない。

彼は靈圧知覚を研ぎ澄ませ、一切の視覚情報を捨てて身構えた。

勿論ただの無手で挑むようなことはしない。彼の身体は今、ブルート・ヴェーネ 静血装——滅却師が

自らの血管に靈子を送り込み防御する鎧——を纏っている。

その硬度は、カンツ 候補生と言っただけあって一級品だ。

禅治郎の様子に違和感を感じたのか、それを知らぬ京楽が一步引いた。

「さつすが、若いのに的確な判断だ。何が起きているか分からない状況でこれだけ冷静なタイプには見えなかったんだけどねえ？」

「……何をしたのです？」

「教えると思う？」

「……教えないでしょう——黒崎なら決して手の内など明かさなない。貴方と戦っている

と奴を思い出して腹が立つんですよ！」

そう言うのと佐伯は京楽の周りを回りながら矢を放った。矢が弾かれる前に京楽の真上に新たなる矢が射られ、分裂すると霰の様に彼の上に降り注いだ。後退した佐伯を離さぬため追隨すると、距離はそのまま、佐伯が幾度も幾度も矢を打ち込む。

それを見て京楽は目を細めた。

——これは、様子見かな？ さっきの二回ともボクが接近してから自分に攻撃が加わったから、一旦距離を取った……一回目の影鬼、二回目の艶鬼のルールまではまだ多分分かってない。この子は時間をかけるほどに厄介なことになりそうだねえ。彼には悪いけど……

最接近してきた矢を弾いた流れのまま、身体を振じる。二本の斬魄刀を回転させると、竜巻の様に風が佐伯を襲った。

——早々に命を貰っておくとうしようか。

「不精独楽！」

突然の風に佐伯の動きが一瞬止まった隙に、京楽が彼の真上に移動した。

「嵩鬼」

二振りの斬魄刀を閃かせ、重力を味方につけた京楽が刃を振り下ろす。渦を巻く風が一瞬鋭く光ったのが目の端に映った彼は、その正体を理解してサッと表情を強張らせ

た。

「大氣の戦陣を杯に受けよ——ハイゼン——聖噬！」

滅却師が弓以外の武器を使うことはない。だがそれは武器に関してで、術はその限りではない。

靈力を込めた銀筒は、古くから滅却師の術を発動させる媒体だ。使う術によつて必要な銀筒の数が異なる上、一度使えば再度靈力を籠めない限り使えないというもので、神の鬼道に比べると随分不便な仕様となっている。仕様時も、物理的に銀筒を相手に投げねばならないなど欠点が多いが、一度発動すると大メノスグランデ虚にも対抗しうるほど強力だ。

佐伯はその銀筒を、自身の周囲に吹き荒れる風に乗せて巻き上げた。京楽は上から来るだろうという直感に従つたのだ。

佐伯の詠唱によつて頭上に突然現れた碑石のようなものが、彼の頭を叩き割ろうと斬魄刀を振り下ろしていた京楽に向かつて加速してきた。喰らえば相当なダメージになると一目で分かる威力だ。

「しまっ——」

「遅い」

弾かれて舞い上がった京楽の斬魄刀が地面に刺さった。

「俺が先陣を切る。続けッ！」

突入したは良いものの、人っ子一人いない屋敷内に彼は警戒していた。

広間のような位置に来ると、一人の青年が突っ立っている。

「滅却師かい」

「だったら何だ、死神」

「この屋敷の主人とお話させてほしいんだ。名は——」

「石田宗弦そうけんだ。私に用か、十三番隊隊長・浮竹十四郎」

浮竹十四郎は驚いていた。

総隊長から聞いてはいたが、なんと若い当主なのだろうか。しかしどこかで納得もしていた。彼の——宗弦と名乗る青年の纏う雰囲気は大家の当主の其れに相違なかった。

彼の知志る大家当主被の例乱に洩れず、家を背負う者から発せられるソレはそう簡単に得られるものではない。

「君が……初めまして石田宗弦殿。これは降伏勧告だ。門は俺たち十三番隊の手に落ち

た。これ以降の無為な殺生は本意じゃない。話を聞いてくれないか」

「門が落ちた」、か。それが何だ。『落ちた』のではなく、『落とさせた』のだ」  
そういう割に彼の表情は晴れなかった。

「降伏勧告をすべきはこちらなのだが、生憎その選択肢は我々に無い。だが逃げるものは追わない。好きにするといい」

「何を——」

浮竹が言い終わるより早く、宗弦が弓を引いた。それを瞬歩で躲し、顔を歪める。

「どうしても、駄目なのか？」

「滅却師の誇りに掛けて、ここを落とさせろわけにはいかない」

弓を番えた宗弦を見て浮竹は苦しそうに呻くと、斬魄刀を解放した。

「波悉く我が盾となれ 雷悉く我が刃となれ——」  
〈双魚の理〉

放たれた矢を〈双魚の理〉で吸収し、威力や速さを変えて相手に返す。

これが浮竹の斬魄刀〈双魚の理〉の能力。吸収限界はあるが、単純に敵の能力を反射するだけではないこの能力の本質は、そうそう相手に気取られることはない。自身と類似の能力を持っているのか、同じものを持っているのか、等と相手の一瞬の逡巡で雌雄が決することだってある。

宗弦も同様で、迫りくる青い光に彼の瞳が眼鏡の奥で見開かれた。



激しい爆発音がして、宗弦の立っていた位置が深く抉れ、土煙が上る。警告の為だったのかそれ程強くはない威力の矢であったから、幾ら威力を上げて返したとはいってもそこまでのダメージにはなっていないだろう。

浮竹は油断なく目を細め、煙の奥に視線を投げ掛けた。

彼の警戒とは裏腹に、隊員の一人が駆け寄る。

「隊長！」

「まだだっ！……は俺に任せて——」

指示を出そうと僅かに顔を逸らした一瞬の隙。

完璧なタイミングで隊員の心臓に青い光が突き立てられた。

「加宮！……くっ……」

既に虹彩の緩んだ隊員を見てその死を悟った浮竹は土煙の方を睨んだ。

段々と晴れていく煙は、次の瞬間揺らいだと思ったら光の雨を降らせる。

「総員、俺の後ろに下がれ！早く！」

自身の方に飛んできた僅かな矢を返しながら、彼はその矢の正確な狙いに再び顔を歪めた。浮竹が矢を拾えぬように浮竹の周りのみ狙いを外し、正確に隊員の位置を狙ってくる。

煙が晴れ、宗弦の姿が見えると同時に正面から瞬歩で攻撃を仕掛ける。矢が隊員たち

を狙わぬように……

距離を詰めれば弓での攻撃はし難くなる筈だ。

そう読んで接近すると、宗弦の手が腰のあたりに伸び、何かを掴んだ。

——と思った次の瞬間、青い光が見え、彼と鏝ぜり合う。

「距離を詰めれば勝機があると思つたか？ 短慮だ」

「何だい、これは……」

宗弦が持つていたのは矢でも、ましてや弓でもなかつた。

〃槍〃

そう表現するより他無いモノだった。

白く長い柄には、空色の筋が一つ刻まれている。刃であろう部分は蒼く発光し、靈力を宿していた。滅却師の使う武器である矢を巨大にし、扱いやすくしたような格好だ。

間合いは弓と大きく異なるが、槍のそれと浮竹の（双魚の理）で比べても浮竹の間合いが短く、そして今の状況に——宗弦の懐に潜り込みつつある現状に有利だった。普段宗弦が使っている得物とも大分違うはず。にも拘らず、彼に焦りはない。

「<sup>ゼール</sup>魂を穿つもの<sup>ボーレン</sup>」——滅却師の技術は進歩し続けている。気を付けろ、掠りでもすれば……」

斬魄刀をずらして均衡を破つた浮竹が一步踏み出した直後、宗弦の槍が幾つにも分裂

した。その一つを掴んだ彼は、流れるようにそこから生やした刃を浮竹に突き出す。殺すためでは無く当てるためだけに動いたような違和感を浮竹が感じたが、咄嗟の事で躲しきれず頬を翳めた。

すると思っていた以上に深く抉られ、太い血の筋を作る。

「後は詰めだ」

違和感を感じて浮竹は後ろに飛びのいた。脇差ほどのサイズになった宗弦の刃では届かないリーチ。だが宗弦は最早、一歩たりとも動く気配が無い。

集中すると、頬を中心に細い筋のようになった自身の霊力が宗弦の持つ短刀に繋がっているのが分かる。

——この感じ……霊力を吸い取られてる!!

“魂を穿つもの”は、“魂を切り裂くもの”の前身だ。その本質は高速振動する霊子で相手の霊子結合を弛緩させ、霊子及び霊力を奪うというもの。斬った相手から奪った霊力を一時的に蓄え、それを用いて刃を形成したり術を発動できる。鏃から得た着想である為刃が短いが、槍、短刀と姿を変えることで近距離攻撃も可能にした。(弓矢で闘う事しか考えていない禅治郎の様な者も多いのでまだ公表してはいないのだが……)ただしこの時点ではエネルギー効率が良くないため、扱えるものが少なく短時間しか保たないという欠点もあった。

しかし初見であれば、動揺を誘うには十分だ。浮竹の表情が動いたのを見た宗弦が地面に刃を突き立てた。それに続くように、分裂後捨て置かれていた残りの四本の短刀も自ら地面に突き刺さる。そして宗弦は懐から銀筒を取り出し、その中身である液状の靈子を床に落とした。

液体が落ちた位置を中心に、短刀、そしてその延長へ五方向に青い光が走っていく。それはあつという間に広間の外まで広がった。

「何だ、これは……!!」

「短針よ、頭を垂れよ」  
クルツァ・ハンツ、シユラーヴン —— フルート・バイエル 聖止結界!!」

先程の五筋の青い光が時計回りに回転し、地面が全体的に仄暗くなったところで大きな動きは消えた。同時に——

「なん……だと……!!」

浮竹十四郎は尸魂界の隊長格の中でもかなりの古株だ。曲者ぞろいの護廷十三隊隊長の中、霊術院で正規に教育を受けてその座に就いた初めての隊長の一人。幾百年の長きにわたり死神として戦い続けた彼が、その生涯の中で一度として味わった事無かった衝撃を味わった。

「〈双魚の理〉……? ——返事をしてくれ!!」

それは突然の出来事だった。光が消えたのと同時に彼の斬魄刀は始解を解かれ、本体

と彼との意思の疎通が出来なくなってしまうた。加えて、全身に違和感を感じた。膝の力が抜ける。

肺から血が溢れる。

弓を作り直した宗弦は無感情な目を浮竹に向けた。

「自身の霊圧が感じられなくなっただろう？ この結界内では中に居るものの内部霊圧を完全に遮断する。貴様ら死神に戦う術はない」

宗弦がそう言うや否や、広場を取り囲む様に滅却師が現れて矢を番えた。

「掛かれ」

宗弦の静かな合図の後降り注いだ雨の様な青い矢の群れに、浮竹たちは撤退せざるを得なかった。元々痛み切った身体を自身の霊力で持たせている浮竹は、立つことすらままならなくなってしまうのだ。

加えて斬魄刀の始解も、鬼道も、瞬歩すら使えない中で闘うことは出来なかった。

「おーし！ そんなじゃア突入と行こうか。予定通り少数精鋭で行く。真子、それに惣右

介、俺に続け。後は待機だ」

五番隊と一番隊の合同部隊。

黒崎邸前で集合した各班は、途中の戦闘で欠けているものも何名かいた。しかしそれに敢えて触れることなく五番隊隊長・志波寒鴉は目の前の屋敷に向けて斬魄刀を構えた。

「いいか、霊圧が隊長格に匹敵していない者は決して中に入るなよ。死ぬぞ」

寒鴉はそう言いつけると平子と惣右介の隣に立った。各面々から多少なりとも好奇の目を向けられている惣右介が、バツの悪そうに小声で尋ねる。

「僕で良いのですか」

「お前さん、結構霊圧隠してるだろ？ それなりにあるなら大丈夫だ。もし無理そうなら俺から絶対離れるな」

「……はい」

惣右介の質問に答えた寒鴉は一瞬笑ってすぐに真剣な表情に戻った。

「卍解——」

彼の霊圧が爆発的に高まる。最大十倍ほどにもなると言われる、斬魄刀の最終奥義・卍解。その一つが今、解放された。

「——〈幽玄回廊藏屋敷〉」

目の前に真つ黒な屋敷が現れる。

真子と寒鴉がそれに向かって歩いていく。

惣右介もそれに続いた。

戸の無い壁に触れると、三人はその黒いものに飲み込まれて消えた。

中に入ると、其処は意外にも明るかった。

居間のような部屋だが、照明から畳に至るまで全てが真つ黒だ。

「惣右介、この正解の説明をしておくぞ」

志波寒鴉の正解、〈幽玄回廊蔵屋敷〉は、基本的には始解の時と変わらない。

指定された空間を斬魄刀が支配し、何らかの形で影響を及ぼしてくる。

その相違点は、

一つ・指定される空間は一つではない。

二つ・その空間ごとにこの屋敷を模したモノの部屋になっており、部屋ごとに仕掛け

が違う。

三つ・この屋敷は中に入ったモノの霊圧を奪いながら少しずつ巨大化、複雑化していく。

四つ・ここから出るためには寒鴉を殺すか寒鴉に許可を得なければならぬ。

「これに捕まったら実質俺を倒して外に出るか、霊力切れになるまたは部屋のトラップに引つ掛かって死ぬかのどっちかしかないんだ。んで、霊力の減り具合はどうだ？」

「特に問題ありません」

「ほお！ 無理はしてないみたいだな。おしおし、お前を連れてきて正解だった！ んじゃ、このまま押し通すぞ」

寒鴉の言に頷いた二人を確認した彼は、纏う隊長羽織を翻して一歩大きく踏み出した。



# 人物設定

## 注意

本作二十三話まで読んでいることが条件です。  
原作登場キャラの基本情報は省略しています。

## 登場人物

簡易相関図：

——死神

・藍染惣右介

本作のメインキャラ。一番隊第十席。西流魂街五地区“巫部”にて藍染竜太郎と涅マソラに拾われ、育てられる。多くの面で他の死神から突出した能力を持つ。育ての親を失い、自身のルーツを知ったことでこの世界を嫌悪している。

斬魄刀〈鏡花水月〉／ 解号「誘え／砕けろ」——第一の始解を見た者の五感を催眠状態にし支配する。「砕けろ」により催眠を解く。卍解未収得。

・藍染竜太郎

惣右介育ての親その一。五番隊無席。厳つい見た目に反して心優しい。記憶を失っていた惣右介の拠り所となっていたが、滅却師殲滅戦にて死亡。

・志波寒鴉

五番隊隊長。竜太郎の上司に当たる。五大貴族志波家の次男で、志波海燕の叔父。快活で色々な人柄だが周囲からの人望は篤い。意中の女性であるりょうのことになると真面目になる。

斬魄刀〈幽玄回廊〉／解号「お招きしよう」——指定した空間内を任意の方法で制圧・蹂躪する。自身を起点とした空間指定の為、術者のリスクも高い。

卍解〈幽玄回廊蔵屋敷〉——始解の拡張版で、複数個の指定範囲を繰り出し、敵の中に閉じ込める。内部構造は時間と共に巨大化・複雑化し、その霊力源を内部の人間から徴収する。

・平子真子

五番隊副隊長。上司である寒鴉にいつも振り回されており、仕事に埋もれている。

・京楽春水

八番隊隊長。寒鴉の飲み仲間であり、彼から先輩と呼ばれている。寒鴉の家族や家の者とも親しく、よく遊びに尋ねている。

・浮竹十四郎

十三番隊隊長。京楽同様、寒鴉達とよく接している。

・大前田希ノ進

隠密機動第三分隊檻理隊副部隊長兼二番隊第五席。マソラの一件で惣右介と知り合う。上司の四楓院夜一や部下の浦原喜助のせいで気苦労が絶えない。石田宗弦や黒崎咲秋についてなど、洞察力が高い。

・四楓院夜一／浦原喜助

それぞれ二番隊第四席／七席。貴族間の関係で寒鴉とは長い付き合い。夜一の四楓院家当主就任が近く、家がバタバタしている。

——滅却師

・石田宗弦

石田家当主であり、妻（結）と息子（竜弦）がいる。黒崎咲秋とは付き合いの長い友で、結が彼の妹分である為宗弦の義兄にあたる。“見えざる帝国”では候補生カンゼンの地位に就く。技術開発にその腕を振るう。戦いを嫌うが、咲秋と共に否応無く死神による殲滅戦への指揮を任された。

・黒崎咲秋

黒崎家当主であり、娘（真咲）がいる。妻は既に他界。そのせいか真咲を溺愛している。普段はチャランポランを演じているが、目的の為に容赦なく味方をも斬り捨てる冷酷さを持つ。その頭脳は候補生内でも突出している。

・佐伯禪治郎

佐伯家当主。独身。候補生内で最年少。戦闘力は候補生内でトップクラスだが、頭に血が上りやすい性格でヘマもしやすい。好戦的な質で宗弦と反りが合わず、いつも衝突している。

・蒼都  
ツァン・トゥ

候補生の一人。体術に秀でており、アジア系である故に宗弦や咲秋、禪治郎とそれなりに仲が良い。

——その他

・涅マソラ

惣右介の育ての親その二。西流魂街五地区“巫部”で唯一の女医であり、気難しい性格ながらも町民に頼られていた。回道に秀で、頭脳明晰。息子にマユリがいる。よく診療所である家に竜太郎が訪ねてくるが、彼もまた涅家の拾われ子。マユリが蛆虫の巣に収監されたことで尸魂界から転生して現世に還った。

・志波乱鴉

五大貴族・志波家筆頭。妻一人息子（海燕）一人弟（寒鴉）一人がいる。働きの者で、貴族間の繋がりやその職務に真面目に取り組む。近々もう一人子宝に恵まれる。

・志波海燕

志波家嫡男。まだ幼いながら、寒鴉や京楽に可愛がられている。

・涅マユリ

マソラとその夫の子。蛆虫の巢に送られたため、現在の所属は死神ではない。

・四楓院千暁

夜の父であり、五大貴族・四楓院家当主。隠密機動総司令の地位に就く。大胆不敵に周囲を巻き込むタイプ。

二十三話までの大まかなあらすじ

——時は原作開始より200年前。

護廷十三隊一番隊第十席を冠する死神・藍染惣右介は、自身の秘めた力や不明なルーツ、尸魂界の不条理さに苦しみながらも、義兄・藍染竜太郎や養親・涅マソラに支えられながら、強く、また心優しく成長した。

そんな折、現世にて滅却師・石田宗弦や黒崎咲秋と接触し、悪化していた死神と滅却師間の摩擦を目の当たりにする。滅却師側の思惑——混血統滅却師の選別——と、死神側の憂慮——虚の消滅による各界の魂魄バランス崩壊への懸念——が交錯し、護廷十三隊と滅却師の戦争が開幕する。戦禍の裡で、惣右介は、心の支えであった竜太郎を喪つてしまった。それを契機として、惣右介は、自身のルーツを思い出す。同時に、この世の歪んだ成り立ちを理解し、尸魂界の在り方を是正する決意を固めたのだった。

惣右介の決意と時を同じくして、戦乱の熱は一層激しさを増していく。

護廷十三隊八番隊長・京楽春水は、滅却師・佐伯禅治郎と。

十三番隊長・浮竹十四郎は滅却師・石田宗弦と。

そして五番隊長・志波寒鴉は、滅却師・黒崎咲秋と。

各々における大将格同士の戦いが、或いは滅却師、或いは死神に優勢となりながら進んでいったのだった——

## 第二十四話 歪むキンコウ

弾かれて舞い上がった京楽の斬魄刀が地面に刺さった。

その霊圧を感じて佐伯はそつと右目の血を拭いた。京楽は死んではない筈だ。止めをささなければ。

着地音が聞こえなかったから、身を隠す程度の力は残っている筈。

佐伯が視界を取り戻した直後、悪寒がして一步前に踏み出した。

ヒュ

振り向きながら風切り音を聞く。

肩のあたりが熱い。

斬られたか、と驚きながら視線をそちらにやると、斬られたのは肩などではなかった。

「あれはやばかったねえ」

後ろから京楽の——攻撃を諸に食らったとは思えない程余裕のある声がある。

自分の影からずると昇ってくる京楽へ弓を向け、右手に矢を作ったところで不意に左腕が軽くなった。京楽の背後に舞った佐伯の左手首は、散った霊子の中心で腹立たしいほど緩慢に回転している。躰を駆け抜ける電撃のような痛みに顔を顰める暇も無

く、二撃目が佐伯を襲った。

京楽の斬魄刀は二刀一對。右手に握った青龍刀を斬り上げる事で佐伯の左手を切り離した彼は、右腕の回転を腰に回して左腕をも斬り上げた。

当然佐伯も見えてはいたから体を捻り、致命傷を避ける。だがこの動きが決定打となった。

いや、勝敗は既に決していた。

佐伯が視界を取り戻した直後に見せた一瞬の隙。

狙いすましたあの瞬間、彼が本能に身を任せて一步踏み出していなければ、既に彼の頭は物言わぬ彫像の如く其処らに転がっていただろう。だがそうであつたなら、彼はこの時よりずっと安らかに、あつという間に逝けた筈だ。それが不運かどうかは佐伯にしからぬものではない。

兎も角京楽の一閃を躲したあの瞬間に、事は決していたのだ。

何故なら、腕を伸ばせば触れられるような間合いに於いて、たった一步動いただけで京楽の刃を躲しきることなど不可能だからだ。

あの時、佐伯の喉笛は、片側とはいえ完全に切り裂かれていた。

そして、気管も悲鳴を上げていたのである。

そんな状態で二刃を躲す為は無理をして体を反らせば、どうなるかは想像に難くな



い。

圧に耐えかねた気管の壁は、滔々と溢れ出る血汐を受け入れるほどの穴をあけてしまった。

そうなれば、肺が血の海に沈むのは道理。

昇りくる京楽に対し、佐伯は地に伏した。

「ッ……！」

「御免よ。未来ある若者の、それも才氣溢れる人間の命を奪うのは忍びないけど、これは戦争なんだ。悪く思わないでくれるかい」

地面が紅く染ま<sup>アカ</sup>っていく。

それを冷徹な目で見た京楽は、佐伯に視線を戻した。

佐伯の方は、怒りに目を燃やしながら歯を食いしばっている。片手で溢れ出る体液の元を押さえ、気道に溜まった血を吐き出し吐き出し起き上がろうとしているのか、腕が地面を何度も掴む。けれど支える力の生じぬそれは、生暖かい水たまりに幾度も大小の波を立てるのみ。

京楽はいつの間にか拾いなおした女物の羽織をひらりと羽織り直すと、佐伯に背を向けて座った。

「僕は僕の戦い方が卑怯だ何だと言われようと、勝った者が——生き残った者が正しく、

全てだと思つてる。でも君みたいな——負けて尚、敵ではなく己の無力にそうやって怒れる子は嫌いじゃないよ」

八番隊隊長・京楽春水の斬魄刀〈花天狂骨〉の始解の能力は、〃子供の遊びを現実のものにする〃というもの。〈花天狂骨〉の霊圧領域内にいるものすべてが彼女たちの提示するルールに従わされ、遊びに負ければ死ぬ。

佐伯との戦闘で使つたものは三つ。最初と最後は〃影鬼〃——互いの影に攻撃を加えると、そこから影の主に攻撃を伝えるというもの。最初京楽が佐伯に距離を詰めた時、狙つていたのは佐伯本人ではなく彼の影だつた。影に刃を突き立てることで、その鋒を佐伯に差し向けたのだ。最後は、佐伯の〈聖噬<sup>ハイゼン</sup>〉を躲しきれない事が分かつた瞬間、京楽は碑石の様な術そのものに出て来た影の中に潜つた。そして佐伯が油断するタイミングで彼自身のから出て斬つた。

二つ目は〃艶鬼〃——互いに色を指定し合い、定めた色の身を斬ることが出来るルールだ。自身の適応箇所が広い場合、攻撃力が上乘せされるというオプションが伴う。戦闘時、京楽と佐伯は共に白い服であつたため、先手の京楽は白を指定した。故にあの時、僅かに掠めた刃が大きく佐伯の肉を裂いたわけだ。

三つ目は〃不精独楽<sup>ブシヨウダカラ</sup>〃——独楽のように大きく身体と刃を回転させ、生み出したつむじ風で相手を阻害するもの。

最後は逆に利用されたが、残り二つに対応できなかつたがために佐伯は敗けた。

伏した青年から絶え間なく流れ出続ける紅い液体は、段々とその勢いを弱めながらも京楽の背に乗る羽織に這うように近づいている。

それを一瞥しても、京楽はその場から動こうとはしなかつた。時間にすればほんの数分の後。

——それは、蠟燭の様に。

弱く細く続いていた光が突然消え、残るのは煙に似た独特の匂い。

すぐそこまで来ていた紅は京楽に及ばず、薄く広がった其れは彼が立ち上がったも揺らぐことなくただそこにあつた。虚ろな瞳と共に佐伯だつた遺骸がその中心に坐しており、力尽きたように大の字を描いている。左腕が欠損しているがために、それは欠けた五芒星を連想させた。

後味の悪さに思考を止めていた京楽は、甘さが抜けない自己分析に苦笑しつつ俯く。

「悪いね。僕はやつぱり、死に際に掛ける言葉つて奴がわからないや。最期を看取る役が僕で本当に——御免よ。でも総大将である君が斃れた以上、この戦いはもう終わる。恨みっこなしさ」

「隊長！」

感傷的になりつつあつた雰囲気は、副官である松方凛の慌しい呼び声と共に完全におじゃんになつた。戦闘が続いている以上、指揮に戻らねばならぬのは必至であつたが、凛の取り乱し様に再度苦笑を漏らす。

「や、凛くん！ お疲れさん。ダメダメ、副隊長は落ち着いて行動「止まらないんです！……ヤレヤレ、何がだい？」

咎められはしなかつたが、上官の言葉を切つてしまつた凛はバツが悪そうに顔を強張らせた後、二三息を整えて口を開いた。

「佐伯の霊圧が消えても、滅却師の攻防が止まらないんです！」

「弔い合戦かい？ 嫌だねえ」

ゆつたりと余裕を持つていながら、大きく、確かな重みをもつた足取りで京楽は戦場へと赴いた。佐伯と戦つていた広間から出て滅却師の残党たちを見渡し、彼にしては珍しく眉間に皺を寄せた。凛が何故あれ程動揺していたのかを理解したからである。戦況が芳しくないのだ。数も勢いも勝っており、且つ敵大将を討ち取つた死神勢が押されだしているなど、どう考えても異常。凛が余程のしくじりをしたならまだ納得は出来る。十数年来の副官がした失態であればどれ程マシだったか。しかし数瞬で京楽が見極めた結論は、甘んじて受け入れられる想定とは大きく異なつてしまつた。

「何だい、これは……」

京楽達が乗り込んだ時、彼らは集団で闘うことはせず各個撃破の戦い方を選んでいった。恐らく此処の主である佐伯がそれを好んでいたからだろう。此れと言ったチームワークは無く、味方を犠牲にしようが一人でも多く敵を殺す布陣だ。死を恐れぬ愚者は何よりも厄介。だからこそ京楽は理詰めでじわじわと敵戦力を削るよう凜に指示を出して佐伯と対峙した。

それが今は軍隊の様にきちんと統制され、“個”ではなく“群”としての戦い方をしていた。刻一刻と変わる状況に、的確な攻撃を加えていく。凜が京楽に指示を仰がねばならぬその変容ぶりはまるで、トッブが挿げ変ったかのようなようだ。

「凜クン、この状態になったのっていつ？」

「佐伯の霊圧が極端に落ちてすぐは彼らも動揺してそれどころではなかったんですが、五分もすると現在の様になりました」

「……参ったね、どうも……」

順応が早すぎる。

大将を失つてすぐに全く戦い方を変えられるほど此処にカリスマ性のある指導者がいるのか、もしくは——

「僕らはどうも、思い違いをしてみたいだねえ」

いつもの気の抜けたような雰囲気とは違う気配を纏った京楽に、副隊長が震えた。

「彼は、本当の大將じゃなかったらしい」

——聰明なことだ。

宗弦は撤退していく十三番隊士を見て、油断なく意識をそちらに向けながらそう思った。

人間と侮ることなく、己の実力を冷静に見極め、部下の命と天秤にかけて判断する。あれが禅治郎ならこうできたろうかと思考が飛びかけ、彼は眉を顰めた。こういう時に気を抜いて返り討ちにでもあつては、笑い話も良いところだ。

靈子の乱れを敏感に察知した宗弦はきびきびと陣を手でなぞり結界を補強する。

この結界——聖止結界は、「見えざる帝国」にある靈力の発生を止める機構を彼なりに手を加えて使いやすくしたものだ。使いやすいたは言っても相当なセンスと靈子操作の技術が必要で、今ここで扱えるのは宗弦以外には咲秋と禅治郎くらいのものである。

宗弦はこれを二人には教えていない。理由は二つ。

一つ目はこの機構は扱いが難しい上に維持できる時間が短い。あまり実践的とは言えないシロモノであるという事。

二つ目は、一人でも多く死者を減らすため。こんなものが禅治郎達の様な者に渡れば、彼らは嬉々としてそれを死神の虐殺のために使うだろう。敵となつたとはいえ、彼らが傷つくのは……子供の様な言い回しをするなら、嫌だった。

微かに紙が破れる音がして、宗弦はそつと懐中から二枚の紙を取り出した。

長方形のその紙は真っ白で、一方には「黒崎咲秋」、もう一方には「佐伯禅治郎」と書いてある。

その一枚の上から三分の一程の所が僅かに切れ、赤いインクを零したように滲んでいる。それが暫くすると切れ目から炎を出して燃えると、あつという間に紙を燃やし尽くした。

「佐伯禅治郎」の名が黒ずみ、灰となつてゆく。

「……馬鹿者がッ……」

宗弦は燃える小さな炎を前に顔を伏せた。

この紙は、氏名を書かれた者の霊圧と魂を再現するように作つてある。この反応は――

脳内に湧き上がった一つの答えが文字となる前に、警鐘の如きけたたましい音が室内に響き渡った。音源である通信機の着信音は大して大きくしていかない筈であったが、鋭敏になっていた聴覚故か、はたまた思考を止めたいと脳が情報を偏らせているのか、いつもより無駄に喧しかった。

感傷に浸る暇は無いと己に言い聞かせ、四度目の呼び出し音が鳴る直前に回線を発信元に繋いだ。

『……そーちゃん』

予想通り。聞こえてきたのは咲秋の声だった。無情な現実を共有せねばならぬ暗鬱さが首を擡げるが、それより今は生きているものと言葉を交わせることが僅かながらに有難かった。

「咲秋か」

『ウン。今、禅ちゃんの紙が燃えたよ。そっちは』

「こちらもだ。誤作動ではない。奴は——禅治郎は死んだ」

後悔が無いと言えば嘘になる。警告やサポートが至らなかつた点は数え上げればキリが無い。人騒がせで、短気で、話を聞かない奴だったが、それでも長い付き合いのある——ある種の友人、の様なモノであつたのだろう。理解できないことが多かつたからこそ、理解したかつた。そんな事、今更考えたとこでどうにも為らない事だが。



動揺してこれ以上事態を悪くするのは愚の骨頂だ。大切なのはこれからどうするか。

「咲秋、指示を」

「ン。そつちは今どお？」

「一旦相手を退かせた。程なく二波が来るだろうが、勢いは大方削いだ筈だ。問題は双方殆ど全くと言つていいほど兵を摩耗していないという事だろうな」

「すーい！ どうやったたらそんな風に勝てるの？」

努めて明るい口調。通常運転の、人の神経を逆撫でする様な言い回しの裏には、微かな侮蔑が含まれていることを宗弦は敏感に感じ取っていた。

理由は簡単だ。この戦いに於ける滅却師側の目的——混血統滅却師の取捨。その達成という義務を放棄する戦い方を選んだせいだ。いい加減腹を括れと彼は言っているのだ。加えて、どうせ咲秋はその気になれば宗弦より損害の少ない戦法を十も二十も思いつくんだらう。皮肉が過ぎる。

「臭い芝居は止めろ。そちらはどうだ」

「奴さん正解してきちゃってさ。壊滅状態だよ（；ω；） 禅ちゃん部隊に指示出しながらつてなると結構きついな」

禅治郎が殺られたとなると、佐伯家の軍も壊滅状態と見るべきだろう。となると、残るは降伏か集結の後の最後の抵抗か。咲秋の選択を半ば予想しつつ、宗弦は通信機へと

問う。

「そろそろ幕か？」

『ううん、もちつと粘ろつか。禅ちゃん死なせちやつたからね……そーちゃんは禅ちゃんの部隊を拾ってなるだけ早く僕らのところに集結して。派手にやろうじゃないの』

「……分かった」

『〃混血滅却師を滅らす〃 ことも今回の使命なんだ。そーちゃんには悪いけど、実行させてもらおうよ』

「分かっている。……お前に言われる迄も無い」

『だよねえ♪ じゃあ、待ってるから』

宗弦は顔を伏せると、頬を軽く叩いた。

数瞬でも時間が惜しい。

「片桐はいるか。部隊を動かさずぞ」

滅却師の残党を狩りながら、平子真子は近くにいた藍染惣右介を盗み見た。

——なんや、気に障るやっちゃのう。

先程会ってすぐに感じた違和感。

眉一つ動かさず敵を斬り捨てていくその姿に合点が行った。

——竜太郎が居らんかった。……アイツ、まさか死……

グツと眉に力が籠る。

藍染は確か竜太郎に拾われ、育てられたのではなかっただろうか。

にしては随分と藍染が静かだ。

——他の班と合流しよったて可能性もある。今のままじゃ何とも言えん。……のやけど、何や？ この違和感……

平子が眉を寄せた直後、隊長が急に歩みを止めた。

「！……隊長？ 何かあったんで——」

「伏せろッ！」

その声に反射的に反応して伏せると、自分達の頭が在った辺りに高速の青い光が通り過ぎて行つた。

「その動き……隊長格かな。……あゝ、その白い羽織、もしかして隊長さん？」

飄々とした声の方を見ると一人の青年がゆっくりと歩いてきた。手には真つ白な弓を持つている。彼を見て、藍染が一瞬動揺した。

「……黒崎さん」

「あ、そーすけくん！ やっほー！ 先日ぶりだねえ☆」

「何故貴方がここに？」

「可笑しなこと訊くねえ？ 僕は滅却師、君は死神。この立ち位置に何の不思議が有る？」

「靈力がどんどん奪われていくこの空間内において呑気に会話している二人の異常性に平子は剣幕を厳しくした。それに気付いてか、隊長が右手を遠慮気味に上げた。」

「藍染、知り合いか？」

「はい。私も先日の滅却師との協議に参加させていただいてたんです。その時に。彼の名は黒崎咲秋、共存派とされていた派閥の頭目の一人です」

「あ、そーすけくん！ 僕にもそちらさんをしよーかいしてよお！ 隊長格なんてそうそう見る機会無いからさあ」

ニコニコしながらそう言う彼に藍染が鋭い視線を投げ掛ける。

「それは質問に答えてもらってからです。佐伯は既に死にました。もう貴方に戦う理由はない筈だ」

藍染の視線を受けて黒崎が驚いた顔になる。だがそれもすぐに消え、その顔には満面の笑みが浮かぶ。

「良い目になったね、そーすけくん！ 滅却師が憎くて憎くて仕方ないって顔だ。誰か大事なヒトがこの戦いで傷ついたか、もしかして死んじゃった？」

「話を逸らさないでください。何故まだ貴方は戦ってるんですか」

「……禅ちゃんの死は痛手だったけれど、この戦いを終える理由にはならないからだよ」  
藍染の殺気が膨らんだ。

黒崎の笑みが深まる。

「ふふ、やっぱり聡明だね。さあ、始めようか」

無邪気に笑う黒崎が矢を番えた。

「リヒト・レーゲン  
光の雨」

もう何度目になるとも知れない、文字通り雨のごとく降り注ぐ光の矢を、平子は始解も出来ぬままただ払う事しかできなかつた。そろそろ身体も重い。

「チツ……敵さん元気やなあ。霊力どんだけ有んねん!？」

「僕？ ふふ、僕は出して霊力が高い方じゃないよ」

「アホぬかせ。こんだけガンガン霊力奪われる中ですつずしそんな顔しよって……くそっ」

寒鴉が卍解時に副官を連れて入るのには理由がある。

寒鴉自身の護衛という意味も有るには有るが、最も大きな理由はそこではない。

卍解〈幽玄回廊蔵屋敷〉は中に居る者の靈力を少しづつ喰らって大きくなる。その速度配分は、中にいる寒鴉を除いて最も靈力の高い者が一日で靈力を枯渇させる量なのだ。靈力は生きている限り湧き出続ける為枯渇させるといふ表現はあまり適切ではないかもしれないから、まともな戦闘が出来なくなるまでの量と言った方が良くもしいない。兎も角敵をより早く殲滅しようと思つたら、少しでも靈力の高い者を連れて行くのが手取り早いのだ。

今までに数度寒鴉に付いてこの卍解に入ったが、毎回その中で靈力が最も多いのが平子だったためそこまで靈力を持っていかれずに戦闘が終わっていた。

だが今は、戦闘が長引いているにしても靈力を奪われ過ぎていた。

これが意味することは一つ。

藍染か黒崎かの靈力量が遥かに平子を上回っている。

「靈力がギリギリの状態に慣れているだけだよ♪ まあでもここまで調子が良いのはコレのお陰なのかな」

ス、と黒崎が自身の弓の中央部分をなぞった。そこだけ僅かに厚みが増している。平子と同じようにその部分に視線を向けていた藍染が視線を鋭くした。

「その部分……靈子の収束量が違いますね」

「あ、わかる？ そーちゃん印の装身具はやっぱり性能が桁違いだよね☆」

「隊長が僕らから奪った靈力を更に奪ってます」

「何やて?!」

「流石は滅却師ってことかなつとオ」

棒立ち状態だった黒崎の後ろに回り込んだ寒鴉が斬魄刀を振り下ろした。ノーモーションでそれを黒崎が躲すと、彼が立っていた場所に寒鴉は斬魄刀を突き立てた。

「おい、へゅーよオ、この前聞かせた“かちかち山”、どオだった？」

そう言っただけとしていた寒鴉は顔を上げると笑った。

「笑った！ なあ滅却師の黒崎さんよお、“かちかち山”ってのは知ってるか？」

「……勿論☆」

「そりや良かった」

寒鴉は斬魄刀を引き抜くと、惣右介たちの側に戻って身構えた。

「気を付けろ。オレの斬魄刀のへゅーは、狸が血祭りにあげられる様が好きらしいんだ。巻き添えくわねえようにな」

違和感を感じて平子は自身の唇に触れた。その指は乾燥しきった唇に触れる。いや、乾燥しているのは唇だけではなく、この空間全体が異様なまでに水分を失っていた。

カーン……

カーン……

硬い者同士がぶつかる音と共に何かが降ってくる。

それは先程の青い雨を想い起こさせるような真つ赤な火花の雨だった。

「そうきたか！ 真子、惣右介、この火種に絶対に触れるなよ！ 一瞬で火達磨ンなる！」

黒崎の方も、触れると不味いということが分かったのだろう。火花を矢で弾いて軌道を逸らしていく。

「チツ、刀で払ってちゃキリがねえ。縛道の八十一、断空！」

透明な壁が三人の上空に現れた直後、黒崎が弾いた火種が真つ直ぐ隊長の袖に飛んできた。

「ツ！」

咄嗟に袖を破り捨てると、瞬間に火種が袖の切れ端を焼き尽くした。

それを横目で見ていた黒崎がこちらにウインクする。

「残念♪ 惜しかった！」

「やってくれるじゃねえか……」

寒鴉が冷や汗を拭った直後、火花の雨が止み何処からか地鳴りのような音が聞こえて



くる。

「ツィエルトクリーク・フォン・キーツ・ハルト・フイエルト——〈ゆー〉、お前、俺まで殺す気か?！」

「銀鞭下りて五手石床に墮つ——グリッツ五架縛」

思わずと言った風に寒鴉が叫んだ一瞬の隙に、黒崎が口上を述べて銀色の何かを寒鴉に当てた。途端、出現した帯に寒鴉が拘束される。

「しまっ——」「隊長！」

明確になった音の正体は泥を含んだ水の濁流だった。

拘束された寒鴉とそれを外そうとした平子が反応に遅れてそれに飲み込まれた——

## 第二十五話 戦乱のシヨウシヤ

集めた靈子を足元で固めて眼下に広がる濁流を眺めた咲秋は、ゆつたりとした動作で後ろを振り返った。

「あの一瞬で彼らを切り捨てる判断を下すなんて……やっぱり君は変わったね、そーすけくん」

「……………我々が最優先に対処すべき任務はこの戦線を終わらせることです。隊長の救助じゃない」

「ふふ、それもそうだね。君一人で僕に勝てる？」

「勝てないと判断したら平子副隊長を抱えています」

足元で水が轟々と音を立てる。その中でも不思議とこの静かな会話は成り立った。

淡々と告げる惣右介に対し、何処か楽し気に咲秋が口元を歪ませる。

「そつかあ、そーすけくんに僕はその程度に見えるのか。それはちよつと——」

——僕を嘗めすぎだよ♪

消えるように響いた声を惣右介が追う。一度惣右介から距離を取った咲秋の姿はしかし、意識の外から突然惣右介の隣へと現れる。

滅却師の高等歩法、飛簾脚だ。惣右介がそれを目の当たりにしたのは、今までで二回。宗弦と咲秋それぞれに初めて出会った時であり、いずれも本気で行われたものではない。故に当時、惣右介は彼らの動きを視認できていたし、故に今、彼の咲秋に対する反応は遅れてしまった。隠密機動さえ容易に補足する惣右介の霊圧知覚があれば、集中していれば咲秋の動きを捕捉できたかもしれない。だが油断してしまっていた。視えるのであれば躲す事は可能であり、ましてや遠距離からの弓矢はいなせると。黒崎邸までに闘った滅却師の力量差を鑑みても十二分であると。

スローモーションになった惣右介の視界で咲秋が前のめりに懐へ潜り込む。咲秋が右手を振り上げる格好になっているのに気付いた惣右介は、先手を打たれて動揺した思考のまま防御するために斬魄刀を構えた。青い光が閃き、電撃が奔るような鋭い音と共に一つの影が——惣右介が吹き飛ばされた。

咲秋が振り上げたのは、矢だ。本来は弓に番えて放つものだが、敢えて荒く、手の周りに霊子を収束させて矢を形成することで、相手の力を弾く簡易の防具のようにしたのだ。勢いよく飛ばされたことで惣右介の態勢は整い切っていない。斬魄刀の間合いとは程遠い位置にいる咲秋にとって、惣右介を狙い撃つなど訳無いだろう。

当然、惣右介も黙ってやられるわけにはいかない。

「ッ——破道の三十三・蒼火墜——」

轟音と共に二人の視界が遮られ、何処から生じたのか薄く土煙が舞う。

『へえ、やるのかい？ ククツ、派手に行こうよ！』

「——誘え、〈鏡花水月〉」

「ツ！ 始解！」

勝手に盛り上がる〈鏡花水月〉<sup>斬魄刀</sup>を無視して、惣右介は始解の能力を解放した。砂煙の間隙から互いの視線が交錯する。戦闘中に敵から目を離す愚行を咲秋がする筈もない。さればこそ、彼もまた「完全催眠」の虜だ。念の為瞬歩を用いて咲秋の背後に回り、自身の存在を彼の前方に錯覚させて隙を突く。長く戦う利点は無いと斬魄刀を一蹴し、タイミングを合わせて咲秋に斬りかかった。

そう、確かに咲秋には、惣右介の姿など見えてはいない筈だった。

けれど聞こえたのは肉と骨が断たれる音ではなく、金属音。

懐刀と金属環によって斬魄刀を阻まれていたのだ。

「うんうん、大正解♪ でもねそーすけくん。僕に対しては不正解だよ！」

寒気がする笑みを浮かべて、咲秋は惣右介にそう告げた。

「なん……で……」

「何で？」 簡単な事だよ！ 僕も君がそうすると思っただからさ☆」

思わず距離を取った惣右介を前に、咲秋は依然笑みを絶やさぬまま語りだした。それ

はまるで子供に対する親のように、気味悪い程丁寧な説明だった。

死神の魂を映した刀——斬魄刀。その覚醒前後で鍔や柄に変化が現れることは、真央霊術院の学生でさえ知っている事実である。そして咲秋は、始解習得前の斬魄刀を佩いた惣右介と対面したことがある。従って咲秋は、惣右介が始解を習得したこと、そして特筆した能力を用いていないことから何らかの条件や制約のある能力持ちだということまでは考えていた。

そして咲秋にとつては幸運なことに、彼が認識できる範囲内にて惣右介が始解を解放した。

惣右介の斬魄刀・〈鏡花水月〉

鏡花水月の本来の意味は、〃目に見えながらも手に取れぬモノや、感知できて言い表せぬモノ〃

名は体を表すとはよく言ったもので、個々の斬魄刀の名はその力を表すものも多い。従って咲秋は、惣右介の斬魄刀が幻術と言った知覚に関与するものであるうことには察しがついていた。斬魄刀の形状変化が無いことから、攻撃力が単純に増加する類のものではないという事も。

発動条件は？

対象は？

解除法は？

知るべきことは山ほどあったが、咲秋が真つ先にするべきと結論付けたのは唯一つ。

——そーすけくんの攻撃のタイミングを誘導しよう！

情報元は言わなかったが、惣右介が入隊十数年ほどの新人であること、始解はこの戦い以前には修得していなかった事を咲秋は知っていた。

そして経験の浅い惣右介を誘導した先に——先程の状況があつたわけだ。

「何故……何故僕に〈鏡花水月〉を発動させたんですか。そこまで読めていたなら——」  
 「そうだね。始解を発動させる暇さえ与えずに攻撃し続けるつて手もあつたけど、追い詰めすぎた得物程怖いものは無いし。それにあの場で発動させれば、あとは楽だし♪」

理解が追いつかぬ惣右介に見せびらかすよう、咲秋が先程の金属環を軽く掲げた。

「これね、始解封じの術具なんだ！」

咲秋が見せたのは、宗弦に渡されていた霊具だ。本来卍解対策として死神の霊圧を制限する為のモノであつたが、その構造上始解をも制限できるだろうと咲秋は勘付いていた。

特定の霊圧を巻き込んでその霊子の動きを阻害するならば、卍解でなくてもよいのだろうと。通常であれば、咲秋クラスの滅却師が中位席官クラスの死神の始解に後れを取ることはない。だが現在も展開中である寒鴉の卍解が滅却師側の本来の目的——混血

滅却師を滅らす事——に即していたこと、相手が惣右介であつた事などから使用目的を始解封じに切り替えた。

金属環の最も近くにある靈子を巻き込むという性質上、寒鴉の正解下で惣右介の始解に於ける靈子を得るためには、ギリギリまで近づく必要があつた。だからこそ——咲秋にしてみれば大したことではないのだが——惣右介の〈鏡花水月〉発動時、危険を冒してその背後を惣右介に晒した。

制限率が七割であるとはいへ、現実が七割も見えていれば咲秋には十二分だ。適度に説明を省きつつ、惣右介を煽るように咲秋は金属環を懐に仕舞つた。

対する惣右介は、唯々混乱していた。

渾身の攻撃が全て相手の掌の中であつたことから咲秋の懐へ消えた金属環まで、全てが彼の思考を攪拌する。

——どうすれば斬れる？

——裏をかかねばならない。

——あの金属を切つてしまえば。

——何故態々種を明かした？

——悔しい。

——一旦退くか？

滔々と疑問や其の解が行き来する。

だが確信を持つて言えることは一つ。

〃黒崎咲秋は、危険だ〃

戦鬪を長引かせてはならない。

かといつて考え無しに戦つて適う相手ではない。

正面に斬魄刀を構えたまま出方を窺つていた惣右介に、咲秋はふわりと笑つた。

「まあそう焦らずに♪ 世間話でもしとこうよく！ そうだなあ……外、面白い事になつてゐるみたいだね！」

沈黙を続ける惣右介を気にせず、咲秋が続ける。

「凄いなあ。大乱鬪つて奴？ そーすけくんが仕組んだのかな。ふふ、君はいいね。とても良い！ それでこそ、だよ！」

「僕の何を知つてゐるつて言うんですか!!」

突然声を荒めた惣右介に、咲秋が笑みを苦笑へと変える。

「ごめんごめん、別にそーすけくんらしいとかいう意味で言つたわけじゃないんだ。君なら或いは、僕の願ひ其の二を叶えられるのかなつて思つただけ」

「願ひ……ですか」

「うん。あー、そーすけくんは全然気にしなくて良いことだよ！ 結果的に叶うか



もつて程度の話だからさ！」

「そういう終わるや否や、咲秋へ惣右介が掌を向けた。詠唱破棄したうえで放たれたのは、金色に輝く六つの帯。

「縛道の六十一、六杖光牢！」

「！ 成程成程。でもねえ、この程度の縛道なんて——」

深々と咲秋に突き立てられた光の帯は、急速にその輝きを失った。そう思った次の瞬間には、薄氷の様な儂い音を立てて砕け散る。

「——靈子を奪いたい放題だよ？」

滅却師は周囲の靈子を自身の靈力で形にして弓矢とする一族だ。自身に突き立てられた縛道は、彼らからすれば武器の材料でしかない。正確に言うならば、完成され、靈子の乱れが無い縛道や破道であれば靈子を奪うのは難しい。けれど詠唱済みなら兎も角、完成され切ったとは言えない詠唱破棄の六杖光牢で咲秋を長く繋ぎ止められる筈も無かった。

委細を理解した惣右介は、動揺することなく次の一手に移行した。

「雷鳴の馬車 糸車の間——ッ！」

「甘いなあ。そんな事させると思う？」

急速に接近した咲秋が、右手に大きな矢を形成しつつ振りかぶる。短槍が如き大きさ

の蒼光を斬魄刀で弾き、惣右介はくるりと体を回転させた後、反撃とばかりに斬り上げた。その先には、先程の矢と違い白をベースにした弓が構えられていた。滅却師の弓は、矢と同様の造りになっている。従って正面から刃を受けられない限り、斬撃を受け流す盾にもなり得る。刀身に添うように弓を当てた咲秋は、体勢を崩された惣右介の方へ小さな何かを複数個放った。

「大氣の戦陣を杯に受けよ——聖噬」

細く長い三角柱の結界が真つ直ぐ惣右介の腹へと向かう。躲しきれず、諸に脇腹が扶られ——たかに見えた。

僅かな殺気に咲秋が身を逸らすと、彼の頬に決して浅くはない傷が刻まれる。槍のような矢を番えた彼は、流れるような動作でそれを惣右介の方へ放った。極太であった矢が幾百にも分裂し、距離を取りながら躲す惣右介へ襲い掛かる。幾ヶ所か急所を射抜かれた惣右介の姿は、一瞬の揺らぎの後霧散した。残ったのは、中心に惣右介が来るように放った矢の群れの左寄りに、多くの切り傷を受けた惣右介の姿。見えている情報と手応えの差異から、咲秋は感心したように目を細めた。

「へえ……〈鏡花水月〉でほんの少しだけ自分の位置を誤認させたのか。姿を隠してたのは、曲光……だったっけ？ 鬼道っていうのは本当に便利だねえ！ それでも君の傷は浅くはないよ？」

惣右介は挟られた脇腹を押さえながら、心中で舌打ちする。焼けるような痛みだが、動けないことはない。出血も、見た目ほど酷くはない。そう確認を済ませた時だった。

『……………無様だねえ、我が主よ』

クツクツと肩を揺らしながら、〈鏡花水月〉が姿を表す。上下を反転した状態で空中に浮かびながら、仮面の奥の視線を惣右介に向けている。普段なら嫌悪感しか沸かない一挙手一投足が、今は不思議と心を波立たせなかった。

ふと自身が戦闘中であつたことを思い出すが、咲秋の動きが止まっている。それどころか、眼下に広がる濁流さえも静止し、静謐が空間を満たしていた。

『何を懼れることがある？ 何に氣遣うことがある？ あんたの力はそんなもんじゃあないだろう？ 長きに渡る隠匿で、力の使い方を忘れてしまった？ クク、だとしたら滑稽だねえ』

大仰に両手を広げた〈鏡花水月〉が、流麗な仕草で惣右介の傷を突いた。生じるべき痛みに一瞬身構えたが、まるでそんなものはなかったかのように身体が軽い。其れもその筈。彼の斬魄刀は、始解を一度でも見た者全てを虜にするのだ。自身にも通じぬ道理

は無い。

『ご覧よ、我が主！ ここにはあんたと斬魄刀、そして敵しか居ないじゃあないか！ 好きにだけ暴れて壊していいんだ！ この自由を楽しめばいい！』

そうだろう、とでも言いたげに首を傾げた斬魄刀は、答えを聞く前に再びクツクツと肩を揺らした。

『我が主ながら、つれないねえ。そういうところも嫌いじゃないけどさー！』

「——破道の六十三、雷哮砲」

凜とした声が再び響く。金色の衝撃波が咲秋に飛来した。十席である惣右介の放つそれは、威力・範囲共に優に副隊長クラスを凌駕している。雪崩のように押し寄せる光の奔流を前に、咲秋の手には即座に高密度の矢をつがえられていた。疾ッ、と滅却師独特の掛け声で放たれた霊子矢は、雷哮砲と接触した瞬間に閃光を放つ。轟音——の響き終わる間もなく、爆炎の寸毫の揺らぎに向けて銀青色の輝きが空を割いた。反跳音がした先に、惣右介の姿が躍り出る。雷哮砲の光に紛れて接近していた彼に、咲秋の攻撃が飛来したのである。その距離五<sup>メートル</sup>米——未だ遠距離武器優勢の間合い。

攻撃の構えを採ろうとした咲秋はしかし、違和感に眉を蹙めた。ちらと自身の右腕に視線を向けると、肩から手首にかけてぎっくりと切り傷が刻まれている。認識するや否や激痛が走るが、彼は冷静に状況を理解した。

斬魄刀〈鏡花水月〉は、五感を掌握する斬魄刀だ。認識における感覚に於いて、視覚情報は8割を超える。戦闘中に自身の視覚を奪われる、それだけでも実力差など容易にひっくり返るほどの能力だ。そして現在咲秋が掌握されていたのは、戦場にて際立つ感覚の一つ、痛覚——延いては触覚である。触覚は通常であれば1%強程度の割合しかない。しかし戦闘による負傷という異常事態に於いて、脳はその不快感に膨大な容量を割かれることになる。

負ったわけではない傷だと理解している。宗弦から渡された金属環によって〈鏡花水月〉の効力も制限されているため、痛みも本来のものからは程遠いのだろう。それでもなお、咲秋には大きな隙ができた。

「痛ツたた……もー、酷いよ、そーすけくん」

「……………**風**」

破道の五十八、**風**。斬魄刀を回転させ、回転軸を中心として竜巻を発生させる鬼道である。極至近距離から発せられた猛風に咲秋が飲み込まれるのを確認しながら、惣右介はじつとその風を見つめる。不意に、鈍い輝きがその中に紛れているのが目に入り、

彼は瞬歩でその付近に移動した。

間違いない。咲秋が持っていた金属環である。惣右介の霊子を巻き込んで作動するという特性からか、風の中にいても周囲の鬼道が揺らいでいる。鬼道で破壊するのは少々骨だろう。後の事を考えると、これはすぐにでも破壊、回収しておきたい。惣右介は斬魄刀を掲げると、迷いなく金属環へ振り下ろした。耳障りな金属音がして、割れた、と思つた次の瞬間、惣右介は悪寒がして大きく後方へ飛びのいた。その判断が正解だったことは誰の目にも明らかである。

金属環から、高密度の霊子が一気に解き放たれたからだ。先ほどの雷哮砲の比ではない熱量が、発破のように炸裂した。

「そーちゃんは抜かりない男でねえ」

咲秋の声が風の風の中から聞こえたと思うや否や、鬼道が掻き消される。

同時に彼が、足元に刺さった自身の霊矢に銀筒内の霊子を零すところが見えた。

「そーちゃんの『作品』が敵の手に渡つたらどうなるか、よく分かつてはいるからさ。もしもの時に備えて、その抹消機構も備わっているわけ。そーすけくんにはあげられないんだ。ごめんね！」

霊子で構成した地面に、咲秋の霊矢が刺さったままになっている。その霊矢同士が、惣右介を中心として五角形に結ばれていく。仕舞いには中心に霊子が線を結び、

クインシー・アイヒェン

滅却 印を描いた。

惣右介が息を呑む。

「そろそろ、御終いにしよつか!」

微笑んだ咲秋が手を一つ叩いた。同時に、五辺を膨大な霊子の壁が囲う。それは焦らす様に、しかし決して遅くはない速度で惣右介へと進行した。破芒陣——シヨブレンガイ 霊矢で陣を描き、霊子を加えることで陣内に爆発を起こす術だ。戦闘の不得手を自称する咲秋だが、仮にも候補生の術式である。隊長格でも無事では済まない。

内側から放つ鬼道は、恐らく逆効果だと惣右介は直感的に思った。斬魄刀で斬つてどうにかなる規模でもない。しかし不思議と、彼に焦りは無かった。

「死神の戦いは、霊圧の戦いだ」

惣右介はゆつくりと瞬きをした。

「滲み出す混濁の紋章、不遜なる狂気の器、湧きあがり・否定し 痺れ・瞬き、眠りを妨げる」

つい先日習得したばかりの鬼道だ。

斬魄刀に乗せられたようで癩だが、全力を出すには丁度いい。

「爬行する鉄の王女、絶えず自壊する泥の人形、結合せよ 反発せよ 地に満ち己の無力を知れ」

今まで押し隠してきた靈圧を、解き放つ。

「破道の九十——黒棺」

惣右介を縛める光の五角柱をさらに囲う様に、黒色の筐体が出現した。

重力と靈圧の奔流が、中にあるものを蹂躪する。それは名の如く、被術者の棺となるにふさわしい暴力の権化。

時間にすればほんの数秒。崩れた黒棺の隙間からは、圧倒的な靈圧に押し潰された破芒陣の残滓と、無傷の惣右介が現れる。こぼれ出た靈圧に——隊長格とすら比する事の出来ない力に、絶望的なまでの能力差に——対面した咲秋は恍惚とした笑みを浮かべていた。

「嗚呼……すごい……凄いよ、そーすげくん！ 君ならば！ 或いはユーハバツハを殺せるかもしれない!!」

「誰の事です?」

「ふふふ、滅却師ほくちの始祖だよ。解かってて訊いてるでしょう」

「可笑しなことを。忠誠ではなく叛意をお持ちで?」

「なら君は、山本元柳斎重國や、五大貴族や、靈王に忠誠を誓っているの?」

惣右介の視線が咲秋に向かう。咲秋は、最早何の抵抗をするつもりもないらしくかつた。真実の笑顔を浮かべたまま、靈弓を降ろしている。



「六杖光牢」

鬼道が咲秋を捕らえた。数瞬驚いたように眼を瞬かせた咲秋は、惣右介が靈圧を抑えたのを感じ取って再び笑みを浮かべる。

「そうだね。それがいい。能ある鷹は爪を隠すべきだ。ふふ、君にも信頼できる仲間ができるの良いね！」

咲秋は、和しずかに黒い瞳を背後へと向ける。そして目を閉じ、囁くように一つの詠唱を謳った。

「銀鞭下りて五手石床に墮つ——ツイエルトクリック・フォン・キーツ・ハルト・ファイエルト 五架縛グリッツ」

生じるのは、寒鴉を捕らえたのと同じ五角形の拘束術。金属質な輝きの内に、咲秋が包まれていく。この状況を見れば、普通は自身を縛るなどというのは愚策に映るだろう。しかしそれを否定するかのように、咲秋の後方にあつた部屋の扉が開いた。

激戦の繰り広げられた此処は、卍解の胎の中。なおも膨張を続ける気分屋な屋敷の、濁流広がる一部屋である。

上段の構えから袈裟懸けに斬魄刀を振り下ろす乱入者の名は——

「おらあああああああつツ!!」

——五番隊長長・志波寒鴉だった。

己を縛る縛道と五架縛が消えていく。

灼ける様な背中の痛みに脂汗が止まらない。

「貴方の負けです、黒崎さん」

彼の声だ。

「そー……すげくん……ふふ、完敗……だね……」

片膝を突き、荒い息で彼を見上げると、苦々し気に彼は眉を寄せていた。

志波寒鴉が五架縛を早々に解いた事は分かっていた。丁度彼が始解の能力を解放したあたりか。寒鴉が副官を抱えて別の部屋へと移ったのを察知した時から、自身の結末は大方こうなるだろうと察しはついていた。斬撃から身を護る為に五架縛を使つたが、隊長格相手には強度が足りなかつたらしい。大きな誤算と言えるのは予想よりこの部屋へ寒鴉達が来るのが遅かつたことくらいか。だが都合が良かった。時間稼ぎはこれで十分だろう。

咲秋は息を整えると、いつもより幾分か皮肉めいた笑みを浮かべて立ち上がった。立っているのがやつとだと知れているからか、彼が斬魄刀を構え直す気配はない。

「ふふふ、楽しみだなあ！君は何処まで進めるのか。自分の目で見られないのが残念極まりないよ！！」

そう叫んだ咲秋は、惣右介に手を伸ばした。此方に来いとも言うように掌を操りながら、その身体がゆつくりと後方へ傾いていく。未だに勢いの留まらぬ下の濁流が舌を伸ばすように水を跳ねあがらせ――

どぶん

――咲秋の躰を呑み込んだ。